岩 波 文 庫

33-311-1

碧巖錄

岩 波 書 店

凡例

一、本書の底本には、元の大徳四年(一三〇〇)に張煒(字は明遠)が刊行した、いわゆる張本を祖本とする通行本で最も普及したとされる瑞龍寺版(宮内庁書陵部蔵)を用いた。

一、底本は本則および頌の部分を一格下げ、著語をやや小字にするのみで一巻一〇則を連続させているが、読みやすくするために一則ごとに改頁とし、【本則】【頌】〔評唱〕を明示し、著語は〔 〕で囲んだ。各則の標題は大智実統『碧巌録種電鈔』(一七三九刊)によった。

一、垂示・本則・頌の部分はそれぞれ一つの段落とし、評唱は適当な段落に分けた。

一、上段に新字体による原文(ただし必要に応じて旧字体も使う)を、下段に現代仮名づかいによる訓読文を配し、原文には句読点および中黒点を施し、訓読文においては引用文は「 」で括り、簡単な説明や補足は( )で補うなどして見やすくした。また、底本で二行割注の箇所は〈 〉で括った。

一、原文の脇には校異の所在を示す*と注番号を、訓読文の難解な漢字や旧来の読みくせには振りがなを付けた。校異および注は段落ごとにまとめた。

一、校異については岐陽方秀『不二鈔』(一六五〇刊)により参考程度にとどめ、諸本との異同は

特に必要な場合に限って注の中で言及することとした。

一、注はこれまで誤読されてきた俗語・口語の語義や語法についての説明を詳しくし、固有名詞(人名・地名)や仏教語などの説明は簡略にした。

一、訓読文はそれを読むだけで意味が取れるように工夫を加え、特に口語の語彙には原語に即して思いきった訓みをつけた。そもそも文語の漢文の読解のために編み出された訓読法には限界があり、特に本書のように口語を多用する文を訓み下すには無理がある。そこで、可能な限りの調和を図り、訓読しただけでは理解しにくいところは注で補うようにした。なお、本書で示した訓みは私どもの解釈による試案であり、それぞれの文脈を勘案して定めた。

目　次

巻第五

巻第六

巻第七

仏果圜悟禅師碧巌録

（中）

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第四

第三一則　麻谷振錫遶床

垂示云、[一]動則影現、覚則氷生。其或不動不覚、不免入野狐窟裏。[二]透得徹、信得及、無糸毫障翳、如龍得水、似虎靠山。[三]放行也瓦礫生光、[四]把定也真金失色。古人公案、[五]未免周遮。且道、評論什麼辺事。試挙看。

一 心を水面に喩える。心が動けば影が現われ、悟りの意識を起こすと氷結して動きがとれなくなる。『伝灯録』八・水老章に「問、如何是沙門行。師云、動則影現、覚則氷生」と。 二 第二五則・本則の評唱に「見得徹、信得及」(上・三二八頁)と。 三 当人のやりたいようにさせておく。 四 規範に従わせる。 五 まわりくどい。

【本則】　挙。[一]麻谷持錫到[二]章敬。遶禅

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第四

第三一則　麻谷、錫を振い床を遶る

垂示に云く、動ずれば則ち影現れ、覚すれば則ち氷生ず。其れ或は動ぜず覚せざるも、野狐の窟裏に入るを免れず。透得徹し信得及って、糸毫の障翳も無きときは、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。放行するや瓦礫も光を生じ、把定するや真金も色を失す。古人の公案、未だ周遮なるを免れず。且道、什麼なる辺の事をか評論する。試みに挙し看ん。

【本則】　挙す。麻谷、錫を持して章敬に到る。禅床を

床三匝、振錫一下、卓然而立。〔曹渓様子、一模脱出。直得驚天動地。〕敬云、是是。〔泥裏洗土塊。賺殺一船人。是什麼語話。繫驢橛子。〕雪竇著語云、錯。〔放過則不可。猶較一著在。〕麻谷又到南泉。遶禅床三匝、振錫一下、卓然而立。〔依前泥裏洗土塊。再運前来。鰕跳不出斗。〕泉云、不是不是。〔何不承当。殺人不眨眼。是什麼語話。〕雪竇著語云、錯。〔放過不可。〕麻谷当時云、章敬道是、和尚為什麼道不是。〔主人公在什麼処。這漢元来取人舌頭。漏逗了也。〕泉云、章敬即是、是汝不是。〔也好殺人須見血、為人須為徹。瞞却多少人来。〕此是風力所転、終成敗壊。〔果然被他籠罩。争奈自

遶ること三匝、錫を振うこと一下して、卓然として立つ。〔曹渓の様子、一模より脱出す。直得に天を驚かし地を動かす。〕敬云く、「是なり、是なり」。〔泥裏に土塊を洗う。一船の人を賺殺す。是れ什麼たる語話ぞ。繫驢橛子。〕雪竇著語して云く、「錯てり」。〔放過せば則ち不可。猶お一著を較う在。〕麻谷、又た南泉に到る。禅床を遶ること三匝、錫を振うこと一下して、卓然として立つ。〔依前として泥裏に土塊を洗う。再び運りて前み来たる。鰕は斗を跳び出でず。〕泉云く、「不是、不是」。〔何ぞ承当わざる。人を殺すに眨眼もせず。是れ什麼たる語話ぞ。〕雪竇著語して云く、「錯てり」。〔放過せば不可。〕麻谷、当時云く、「章敬は是なりと道えり、和尚は為什麼にか不是と道う」。〔主人公什麼処にか在る。這の漢元来人の舌頭を取る。漏逗し了れり。〕泉云く、「章敬は即ち是なり、是れ汝は不是。〔也た好し人を殺しては須らく血を見るべし、人の為にせんには須らく為に徹すべし。多少の人を瞞却し来

己何。〕

たる。〕此れは是れ風力の転ずる所、終に敗壊を成すなり」。〔果然して他に籠罩めらる。自己を争奈何せん。〕

＊依前～出斗〔一六字〕　福本は「依然弄泥団、鰕跳不出斗」。　＊＊放過不可　福本は「放過不可、放過両著」。

一 麻谷山の僧。『伝灯録』七・章敬章では「有一僧来」とし、麻谷の名は見えない。以下、第二〇則・本則の評唱(上・二六九頁)に既出。 二 章敬懐惲(七五七—八一八)。 三 永嘉が曹渓の慧能にしたことと同じことをしている。評唱を参照。 四 乗り合わせた人をみなだましている。満天下の人を馬鹿にした。 五 繋驢橛(第一則・本則の著語に既出)に同じ。「子」は名詞接尾語。 六 まだ一手足りないぞ。 七 南泉普願(七四八—八三四)。 八 また同じ手を使っている。 九 人のことばを鵜呑みにする。 一〇 いけないのはほかでもない君自身だ。是汝の「是」は汝を強く規定する語。 一一「此」は卓然として立ったところを指す。しかし、それは四大の風の力によるものであり、結局は消滅するほかない。

〔評唱〕古人行脚、偏歴叢林、直以此事為念、要辨他曲録木床上老和尚、具眼不具眼。古人一言相契即住、一言不契即去。看他麻谷到章敬、遶禅床三匝、振錫一下、卓然而立。章敬云、是是。殺人刀、活人剣、須是本分作家。雪竇云、錯。落在両辺。你

〔評唱〕古人の行脚は、叢林を偏歴して、直に此の事を以て念と為し、他の曲録木床上の老和尚の、具眼か具眼ならざるかを辨ぜんことを要す。古人は一言に相契わば即ち住り、一言に契わざれば即ち去る。看よ他の麻谷は章敬に到って禅床を遶ること三匝、錫を振うこと一下して、卓然として立つ。章敬云く、「是なり、是なり」と。これ殺人刀、活人剣なり、須是らく

若去両辺会、不見雪竇意。佗卓然而立。且道、佗為什麼事。雪竇為什麼却道錯。什麼処是他錯処。章敬道、是。什麼処是是処。雪竇如坐読判語。

一 修禅の道場。二 此の一大事、本分事。三 説法などのときにすわる椅子。四 五洩霊黙(七四七—八一八)が石頭希遷(七〇〇—七九〇)に謁したときの語に「一言相契即住、不契即去」(『会元』三・五洩霊黙章)と。五 相対の世界に落ち込んでしまう。六 判決文。

麻谷担箇是字、便去見南泉。依前遶禅床三匝、振錫一下、卓然而立。泉云、不是不是。殺人刀、活人剣、須是本分宗師。雪竇云、錯。章敬道、是是、南泉云、不是不是、為復是同是別。前頭道是、為什麼也錯。後頭道不是、為什麼也錯。若向章敬句下薦得、自救也不了。若向南泉句下薦

本分の作家なるべし。雪竇云く、「錯てり」と。両辺に落在す。你若し両辺に去いて会せば、雪竇の意を見ず。佗卓然として立つ。且道、佗什麼なる事の為ぞ。雪竇為什麼にか却って「錯てり」と道う。什麼処か是れ他の錯てる処。章敬道く、「是なり」と。什麼処か是れ是なる処。雪竇は坐して判語を読むが如し。

麻谷箇の「是」の字を担い、便ち去きて南泉に見ゆ。依前として禅床を遶ること三匝、錫を振うこと一下して、卓然として立つ。泉云く「不是、不是」と。これ殺人刀、活人剣なり、須是らく本分の宗師なるべし。雪竇云く、「錯てり」と。章敬「是なり、是なり」と道い、南泉「不是、不是」と云う、為復是れ同じか是れ別か。前頭に是と道うは、為什麼にか也た錯てる。後頭に不是と道うは、為什麼にか也た錯てる。若し章

得、可与祖仏為師。雖然恁麼、衲僧家須是自肯始得。莫一向取人口辯。

一口まねをする。

他問既一般、為什麼一箇道是、一箇道不是。若是通方作者、得大解脱底人、必須別有生涯。若是機境不忘底、決定滞在這両頭。若要明辨古今、坐断天下人舌頭、須是明取這両錯始得。及至後頭、雪竇頌也只頌這両錯。雪竇要提活鱍鱍処、所以如此。若是皮下有血底漢、自然不向言句中作解会、不向繋驢橛上作道理。有者道、雪竇代麻谷下這両錯。有什麼交渉。殊不知、古人著語、鎖断要関。這辺

敬の句下に向いて薦得むれば、自救也不了。若し南泉の句下に向いて薦得むれば、祖仏の与に師と為るべし。恁麼なりと雖然も、衲僧家は須是らく自ら肯って始めて得し。一向に人の口辯を取ること莫れ。

他の問既に一般なるに、為什麼にか一箇は是と道い、一箇は不是と道う。若是通方の作者にして、大解脱を得たる底の人ならば、必須ずや別に生涯有るべし。若是機境忘ぜざる底ならば、決定ずや這の両頭に滞在らん。若し古今を明辨し、天下の人の舌頭を坐断せんと要せば、須是らく這の両錯を明取して始めて得し。後頭に至るに及んで、雪竇の頌も也た只だ這の両錯を頌す。雪竇は活鱍鱍の処を提げんと要す、所以に此の如し。若是皮下に血有る底の漢ならば、自然から言句中に向いて解会を作さず、繋驢橛上に向いて道理を作さじ。有る者は道う、「雪竇は麻谷に代って這の両錯を

也是、那辺也是、畢竟不在這両頭。

七慶蔵主道、持錫遶禅床、是与不是倶錯。其実亦不在此。你不見、永嘉八到曹渓、見六祖。遶禅床三匝、振錫一下、卓然而立。祖云、夫沙門者、具三千威儀、八万細行。大徳従何方而来、生大我慢九。為什麼六祖却道、他生大我慢。此箇也不説是、也不説不是。是与不是都是繋驢橛。唯有雪竇下両錯、猶較些子。

下す」と。什麼の交渉か有らん。殊に知らず、古人の著語は要関を鎖断することを。這辺も也た是、那辺も也た是、畢竟這の両頭に在らず。

慶蔵主道く、「錫を持して禅床を遶る、是と不是と倶に錯てり。其の実は亦た此に在らず」と。你見ずや、永嘉、曹渓に到って六祖に見ゆ。禅床を遶ること三匝、錫を振うこと一下して、卓然として立つ。祖云く、「夫れ沙門は、三千の威儀、八万の細行を具す。大徳何方より来たりて、大我慢を生ずや」と。為什麼にか六祖却って道う、「他は大我慢を生ず」と。此箇也た是と説わず、也た不是と説わず。是と不是と、都て是れ繋驢橛。唯だ雪竇のみ両錯を下す有るも、猶お些子く較えり。

一 方便に通じた練達の禅匠。　二 格別の主体をかけた人生がある。　三 心機や外境に拘われている者。　四 是・不是の相対世界。　五 頭だけで理解すること。　六 要衝の関門を閉鎖する。凡見を寄せ付けないこと。　七 圜悟の同学。蔵主は経蔵を管理する役。　八 永嘉玄覚（六七五―七一三）。曹渓（広東省曲江県）の六祖慧能（六三八―七一三）に見えた。　九 自我への執着による慢心。

麻谷云、章敬道是、和尚為什麼道不是。這老漢不惜眉毛、漏逗不少。南泉道、章敬則是、是汝不是。南泉可謂[一]見兎放鷹。慶蔵主云、南泉忒煞[二]郎当、不是便休、更[三]与佗出過道、此是風力所転、終成敗壊。[四]円覚経云、我今此身、四大和合。所謂髪毛爪歯、皮肉筋骨、髄脳垢色、皆帰於地。唾涕膿血、皆帰於水。暖気帰火、動転帰風。四大各離、今者妄身、当在何処。佗麻谷持錫遶禅床。既是風力所転、終成敗壊。且道、畢竟発明[五]心宗底事、在什麼処。到這裏、也須是[六]生鉄鋳就底箇漢始得。

麻谷云く、「章敬は是と道う、和尚為什麼にか不是と道う」と。這の老漢眉毛を惜しまず、漏逗少なからず。南泉道く、「章敬は則ち是なり、是れ汝は不是」と。南泉は兎を見て鷹を放てりと謂うべし。慶蔵主云く、「南泉忒煞だ郎当、不是ならば便ち休めんに、更に佗の与に出過して道う、『此れは是れ風力の転ずる所、終に敗壊を成す』」と。『円覚経』に云く、「我今此の身、四大和合す。所謂髪毛爪歯、皮肉筋骨、髄脳垢色は、皆な地に帰し、唾涕膿血は、皆な水に帰し、暖気は火に帰し、動転は風に帰す。四大各離るれば、今者の妄身、当た何処にか在らん」と。佗の麻谷、錫を持して禅床を遶る。既に是れ風力の転ずる所、終に敗壊を成すなり。且道、畢竟心宗を発明する底の事、什麼処にか在る。這裏に到らば、也た須是らく生鉄鋳就す底の箇の漢にして始めて得し。

一 機会をぴたりと把えた対応をする。第二七則の垂示にも。二 だらしのないさま。三 ヒントを与える(?)。一夜本には「出過」の二字が無い。四『大方広円覚修多羅了義経』一巻。仏陀多羅訳と伝え

られるが、七世紀末ごろ中国で撰述された偽経。五　心の根本。六　鉄の鋳物のように堅固な。

豈不見張拙秀才、参西堂蔵禅師。問云、山河大地是有是無、三世諸仏、是有是無。蔵云、有。張拙秀才云、錯。蔵云、先輩曾参見什麼人来。拙云、参見径山和尚来。某甲凡有所問話、径山皆言無。蔵云、先輩有什麼眷属。拙云、有一山妻、両箇痴頑。又却問、径山有甚眷属。拙云、径山古仏。和尚莫謗渠好。蔵云、待先輩得似径山時、一切言無。張拙俛首而已。大凡作家宗師、要与人解粘去縛、抽釘抜楔。不可只守一辺。左撥右転、右撥左転。

豈に見ずや、張拙秀才、西堂の蔵禅師に参ず。問うて云く、「山河大地、是れ有か是れ無か。三世の諸仏、是れ有か是れ無か」。蔵云く、「有」。張拙秀才云く、「錯」。蔵云く、「先輩曾て什麼なる人にか参見し来たる」。拙云く、「径山和尚に参見し来たる。某甲凡そ問話する所有れば、径山は皆な『無』と言う」。蔵云く、「先輩什麼なる眷属か有る」。拙云く、「一の山妻、両箇の痴頑有り」。又た却って問う、「径山甚なる眷属か有る」。拙云く、「径山は古仏なり。和尚渠を謗ること莫くんば好し」。蔵云く、「先輩径山の似くなるを得る時を待って、一切『無』と言わん」と。張拙俛首く而已。大凡そ作家の宗師は人の与に粘を解き縛を去り、釘を抽き楔を抜かんと要す。只だ一辺を守るべからず。左撥右転し、右撥左転す。

＊張拙秀才　福本は「一官員」。

一『祖堂集』一五・西堂章では「有一秀才」、『伝灯録』七・西堂章では「有一俗士」とし、張拙の名

は見えない。二 西堂智蔵(七三八―八一七)。三 径山法欽(七一四―七九二)。四 古則公案を取り上げての問答。五「待～時」で、～となったなら。六 縦横無尽にコントロールする。

但看仰山[一]到中邑[二]処謝戒[三]。邑見来、於禅床上拍手云、和尚[四]。仰山即東辺立、又西辺立、又於中心立、然後謝戒了、却退後立。邑云、什麼処得此[五]三昧来。仰山云、於曹渓印子[六]上脱将来。邑云、汝道、曹渓用此三昧接什麼人。仰云、接一宿覚[七]。仰山又復問中邑云、和尚什麼処得此三昧来。邑云、我於馬祖処得此三昧来。似恁麼説話、豈不是挙一明三、見本逐末*底漢。

但だ看よ仰山、中邑の処に到って謝戒す。邑来たるを見て、禅床の上に於て手を拍って云く、「和尚」と。仰山即ち東辺に立ち、又た西辺に立ち、又た中心に於て立ち、然る後に謝戒し了り、却退いて後ろに立つ。邑云く、「什麼処よりか此の三昧を得来たる」。仰山云く、「曹渓の印子上より脱ぎ将ち来たる」。邑云く、「汝道え、曹渓此の三昧を用いて什麼なる人をか接す」。仰云く、「一宿覚を接す」。仰山又復中邑に問うて云く、「和尚什麼処よりか此の三昧を得来たる」。邑云く、「我は馬祖の処に於て此の三昧を得来たる」と。恁麼に説話が似きは、豈に是れ挙一明三、本を見て末を逐う底の漢にあらずや。

＊逐末　蜀本は「遂末」。

一 仰山慧寂(八〇七―八八三)。二 中邑洪恩。仰山に授戒した。三 受戒のお礼をする。四『伝灯録』六では「和和」。五 悟りの心の表現。六 曹渓の六祖慧能の印可証明からそのまま出てきたものです。

「脱将来」は、型からそのまま抜き出される。　七 永嘉玄覚のこと。　八 馬祖道一（七〇九―七八八）。

[一]龍牙示衆道、夫参学人、須透過祖仏始得。[二]新豊和尚道、見祖仏言教、[三]如生冤家、始有参学分。若透不得、即被祖仏瞞去。時有僧問、祖仏還有瞞人之心也無。牙云、汝道、[四]江湖還有碍人之心也無。又云、江湖雖無碍人之心、自是時人[五]過不得、所以江湖却成碍人去。不得道江湖不碍人。祖仏雖無瞞人之心、自是時人透不得、祖仏却成瞞人去。也不得道祖仏不瞞人。若透得祖仏過、此人即[六]過却祖仏。也須是体得祖仏意、方与向上古人同。如未透得、儻学仏学祖、則万劫無有得期。又問、如何得不被祖仏瞞去。牙云、直須自悟去。到這裏、須是如此始得。何故。為人須徹、殺人須

龍牙、衆に示して道く、「夫れ参学の人は、須らく祖仏を透過して始めて得し。新豊和尚道く、『祖仏の言教を見ること、生冤家の如くにして、始めて参学の分有り。若し透り得ざれば、即ち祖仏に瞞し去らる』と」。時に僧有り、問う、「祖仏に還た人を瞞すの心有り也無」。牙云く、「汝道え、江湖還た人を碍ぐる心有り也無」。又た云く、「江湖に人を碍ぐるの心無しと雖も、自是より時人過り得ず、所以に江湖却って人を碍ぐるを成し去る。江湖人を碍げずと道うを得ず。祖仏に人を瞞すの心無しと雖も、自是より時人透り得ず、祖仏却って人を瞞すを成し去る。也た祖仏人を瞞さずと道うを得ず。若し祖仏を透得し過ぐれば、此の人即ち祖仏を過却ぐ。也た須是らく祖仏の意を体得して、方めて向上の古人と同じなり。如し未だ透得せずして、儻し仏を学び祖を学ばば、則ち万劫にも得期有ること無し」。又た問う、「如何なれば祖仏に瞞されざ

見血。南泉・雪竇是這般人、方敢拈[七]弄。頌云、

一 龍牙居遁(こどん)（八三五―九二三）。二 洞山良价（八〇七―八六九）。新豊山に住したことによる。龍牙の師。三「生冤家」は恨みがまだ生々しいかたき。かたきになったばかりのものを恨むように、ひたむきに一事に没頭すること。四 世間。五 いまどきの人びと。世人。六 乗り越える。「却」は強め。七 古則や公案を取り上げて弁じ立てること。

【頌】 此錯彼錯、〔[一]惜取眉毛。拠令而行。天上天下、唯我独尊。〕[二]切忌拈却。〔両箇無孔鉄鎚。直饒[三]千手大悲、也提不起。或若拈去、[四]闍黎喫三十棒。〕[五]四海浪平、〔天下人不敢動著。東西南北、一等家風。近日多雨水。〕[六]百川潮落。〔[七]浄躶躶、赤洒洒。且得

ることを得去らん」。牙云く、「直(ただ)に須らく自ら悟り去るべし」と。這裏(ここ)に到らば、須是らく此(かく)の如くにして始めて得(よ)し。何故ぞ。人の為にせんには須らく為に徹すべし、人を殺さんには須らく血を見るべし。南泉・雪竇は是れ這般(かか)る人にして、方(はじ)めて敢て拈弄(ねんろう)す。頌に云く、

【頌】 此(こ)の錯彼(か)の錯、〔眉毛を惜取せよ。令に拠(よ)って行う。天上天下、唯我独尊。〕切に忌む拈却することを。〔両箇の無孔(むく)の鉄鎚(てっつい)。直饒(たとい)千手大悲(せんじゅだいひ)なるも也(ま)た提(も)ち起(あ)げられず。或若(もし)拈じ去らば、闍黎(そなた)に三十棒を喫せしめん。〕四海浪平らかに、〔天下の人敢て動著(さわ)がず。東西南北一等(おなじ)き家風。近日、雨水多し。〕百川潮落つ。〔浄躶躶(じょうらら)、赤洒洒(しゃくしゃしゃ)。且(まず)は得たり自家安穏なることを。

自家安穏。直得海晏河清。〕古策風高十二門、〔何似這箇。〕＊杖頭無眼。切忌向拄杖頭上作活計。〕門門有路空蕭索。〔一物也無。賺你平生。覷著即瞎。〕非蕭索。〔果然。頼有転身処。已瞎了也。便打。〕作者好求無病薬。〔一死更不再活。〕十二時中、為什麼瞌睡。撈天摸地作什麼。〕

直に得たり海晏河清なることを。〕古策風高し十二門、〔這箇に何似ぞ。杖頭に眼無し。切に忌む、拄杖頭上に向いて活計を作すことを。〕門門路あるも空しく蕭索たり。〔一物も也た無し。你が平生を賺す。覷著れば即ち瞎せん。〕蕭索に非ず。〔果然して。頼に転身の処有り。已に瞎し了れり。便ち打つ。〕作者好し求めよ無病の薬を。〔一たび死すれば更に再活せず。〕十二時中、為什麼にか瞌睡する。天を撈り地を摸りて什麼か作ん。〕

＊杖頭無眼　福本に無し。　＊＊作活計　福本は更に「棒頭有眼明如日、要識真金火裏看」の二句が有る。

一 誤った法を説くと眉が抜け落ちてしまうぞ。二 決して取り除いてはいけない。三 千手観音。四 雪竇を指す。五 四海がおさまった。六 百川の潮が引いた。七 丸はだかに、きれいさっぱり。八 策は錫杖を指す。風は錫杖が起す風。十二門については、評唱に見えるほか、諸説がある。九「これ」とくらべてどうだ。これの方がましだの含み。一〇 どの門も路はついているが、がらんとしてその路を入ってゆく人がいない。一一 麻谷に向って言う。無病薬は無病の人にこそ効く薬（『伝灯録』三〇・一鉢歌）。

〔評唱〕　這一箇頌、似徳山見潙山公

〔評唱〕　這の一箇の頌、徳山、潙山に見ゆるの公案の

案相似。先将公案著両転語、穿作一串、然後頌出。此錯彼錯、切忌拈却、雪竇意云、此処一錯、彼処一錯、切忌拈却。拈却即乖。須是如此、著這両錯。直得四海浪平、百川潮落。可煞清風明月。你若向這両錯下会得、更没一星事。山是山、水是水。長者自長、短者自短。五日一風、十日一雨。所以道、四海浪平、百川潮落。

似くに相似たり。先ず公案を将て両転語を著け、穿って一串と作して、然る後に頌出す。「此の錯彼の錯、切に忌む拈却することを」とは、雪竇の意に云く、「此処の一錯、彼処の一錯、切に忌む拈却することを。拈却せば即ち乖く」と。須是らく此の如く、這の両錯を著くべし。直に得たり「四海浪平かに、百川潮落つ」ることを。可煞だ清風明月。你若し這の両錯下に向いて会得せば、更に一星事も没けん。山は是れ山、水は是れ水。長き者は自ら長く、短き者は自ら短し。五日一風、十日一雨。所以に道う、「四海浪平かに、百川潮落つ」と。

一 第四則を参照。 二 ひっそりと澄みきった境地の喩え。第六則・本則に「誰家無明月清風」(上・一〇四頁)と。 三 気候の順調なこと。五風十雨。

後面頌麻谷持錫云、古策風高十二門、古人以鞭為策、衲僧家以拄杖為策。〈祖庭事苑中、古策挙錫杖経。〉西王母瑤池上、有十二朱門。古策即

後面は麻谷の錫を持するを頌して云く、「古策風高し十二門」と。古人は鞭を以て策と為し、衲僧家は拄杖を以て策と為す。〈『祖庭事苑』の中、古策につき、『錫杖経』を挙ぐ。〉西王母が瑤池の上に、十二の朱

是拄杖。頭上清風、高於十二朱門。天子及帝釈所居之処、亦各有十二朱門。若是会得這両錯、拄杖頭上生光、古策也用不著。[三]古人道、識得拄杖子、一生参学事畢。又道、[四]不是標形虚事褫、如来宝杖親蹤跡。此之類也。到這裏、[五]七顚八倒、於一切時中得大自在。門門有路空蕭索、雖有路、只是空蕭索。雪竇到此、自覚漏逗、更与你打破。然雖如是、也有非蕭索処。任是作者無病時、也須是先討些薬喫始得。

門有り。「古策」は即ち是れ拄杖。頭上の清風、十二の朱門よりも高し。天子及び帝釈(たいしゃく)居る所の処、亦た各(おのおの)十二の朱門有り。若是(もし)這の両錯を会得せば、拄杖頭上に光を生ぜん。古策も也(ま)た用い著(き)れず。古人道(いわ)く、「拄杖子を識得せば、一生参学の事畢(おわ)れり」。又た道く、「是れ形を標して虚しく事褫(じち)するにあらず、如来(にょらい)の宝杖親しく跡を蹤(ふ)む」と。此の類なり。這裏(ここ)に到って、七顚八倒、一切時中に大自在を得たり。「門門路有り空しく蕭索たり」とは、路有りと雖も、只だ是れ空しく蕭索たり。雪竇此に到って、自ら漏逗するを覚え、更に你が与(ため)に打破す。是(かく)の如くなりと然雖(いえど)も、也(ま)た蕭索に非ざる処有り。任是(たと)い作者(てだれ)の無病なる時も、也た須是らく先ず些(いささか)の薬を討(さが)して喫(の)みて、始めて得(よ)し。

一『祖庭事苑』二の十二門の解説に『錫杖経』を引く。二 伝説上の仙女。三 長慶慧稜（八五四―九三二）。語は第一八則・本則の評唱に既出。四『証道歌』に「降龍鉢、解虎錫、両股金鐶鳴歴歴、不是標形虚事持、如来宝杖親蹤跡」と。事褫は事持と同じく、保持すること。褫は持と同音通用。五 こは、自由自在に動き回ること。

第三二則　臨済仏法大意

垂示云、十方坐断、千眼頓開、[一]一句截流、万機寝削。還有同死同生底麼。見成公案、[二]打畳不下、古人葛藤、試請挙看。

一　一言の下にあらゆる意識の流れが断ち切られて、全ての作用が消えてしまった（第三八則・本則の評唱を参照）。　二　処理できない。処置なし。

【本則】挙。[一]定上座問[二]臨済、如何是仏法大意。〔多少人、到此茫然。[三]猶有這箇在。[四]訝郎当作什麼。〕済下禅床、[五]擒住与一掌、便托開。〔今日[六]捉敗。老婆心切。天下衲僧跳不出。〕定[七]佇立。〔已落鬼窟裏。蹉過了也。〕傍僧云、定上座、何不礼拝。〔[八]冷地裏有人覷破。[九]全得

第三二則　臨済の仏法大意

垂示に云く、十方坐断して、千眼頓に開き、一句流れを截ちて、万機寝削す。還た同死同生する底有りや。見成公案、打畳不下ならば、古人の葛藤、試みに請う挙し看ん。

【本則】挙す。定上座、臨済に問う、「如何なるか是れ仏法の大意」。〔多少の人、此に到って茫然たり。猶お這箇の在る有り。訝郎当して什麼か作ん。〕済、禅床を下り、擒住んで一掌を与え便ち托開す。〔今日捉敗す。老婆心切。天下の衲僧跳け出せず。〕定、佇立す。〔已に鬼窟裏に落つ。蹉過い了れり。未だ免れず鼻孔を失却うことを。〕傍の僧云く、「定上座、何ぞ礼拝せざる」。〔冷地裏に人有って覷破す。全く他の力を

他力。東家人死、西家人助哀。〕定方礼拝、〔将勤補拙。〕忽然大悟。〔如暗得灯、如貧得宝。将錯就錯。且道、定上座見箇什麼、便礼拝。〕

得たり。東家の人死して、西家の人哀を助く。〕定、礼拝するに方って、〔勤を将て拙を補う。〕忽然と大悟す。〔暗に灯を得るが如く、貧の宝を得るが如し。錯を将て錯を就す。且道、定上座は箇の什麼を見てか便ち礼拝する。〕

一 のちの臨済の法嗣。『臨済録』(岩波文庫一六九頁)参照。 二 臨済義玄(?―八六七)。 三 まだ「これ」がふっ切れずに残っている。絶対なるものへ向けての価値意識の痕跡がまだシミのように残存している。 四 だらしのないさま。 五 ひっつかんで平手打ちをくらわせて突きはなした。 六 つかまえた。 七 棒立ちになった。 八 陰で見破った者が居る。 九 まるまるそのお蔭をこうむっている。 一〇 東隣の家の不幸に西隣の人が悔みを述べる。 一一 勤勉によって不才を補う。 一二 『法華経』薬王菩薩本事品に見える句。 一三 自分のあやまちを逆手に取って生かす。

〔評唱〕 看他恁麼直出直入、直往直来、乃是臨済正宗、有恁麼作用。若透得去、便可翻天作地、自得受用。定上座是這般漢、被臨済一掌、礼拝起来、便知落処。他是向北人、最朴直。既得之後、更不出世。後来全用

〔評唱〕 看よ他の恁麼に直出直入、直往直来するは、乃ち是れ臨済の正宗、恁麼の作用有ればなり。若し透得し去らば、便ち天を翻し地と作して、自ら受用するを得べし。定上座は是れ這般る漢なれば、臨済に一掌せられ、礼拝起来するや、便ち落処を知る。他は是れ向北の人、最も朴直なり。既に得たる後、更に出世せ

臨済機、也不妨穎脱。

ず。後来に全く臨済の機を用いて也た不妨に穎脱たり。

一「起来」は(ひれ伏した地面から)立ち上がる。二「向」は接頭語。『伝灯録』一八・長慶章に「師却問、汝是什麼処人。曰、向北人」と。三住持となること。

一日、路逢巌頭[一]・雪峰[二]・欽山[三]三人。巌頭乃問、甚処来。定云、臨済。頭云、和尚万福[四]。定云、已順世[五]了也。頭云、某等三人、特去礼拝、福縁浅薄、又値帰寂[六]。未審和尚在日、有何言句。請上座挙一両則[七]看。定遂挙。臨済、一日示衆云、赤肉団上有一無[八]位真人、常従汝諸人面門[九]出入。未証拠者看看。時有僧出問、如何是無位真人。済便擒住云、道道。僧擬議。済便托開云、無位真人、是什麼[一〇]乾屎橛。便帰方丈。巌頭不覚吐[一一]舌。欽山云、何不道、非無位真人。被定擒住云、無位真人与非無位真人相去多少、

一日、路に巌頭・雪峰・欽山の三人に逢う。巌頭乃ち問う、「甚処よりか来たる」。定云く、「臨済」。頭云く、「和尚万福」。定云く、「已に順世し了れり」。頭云く、「某等三人、特に去きて礼拝せんとせしも、福縁浅薄にして、又た帰寂に値う。未審、和尚在りし日、何なる言句か有りし。請う上座、一両則を挙し看よ」。定、遂に挙す。「臨済、一日、衆に示して云く、『赤肉団上に、一無位の真人有り、常に汝諸人の面門より出入す。未だ証拠せざる者は看よ看よ』。時に僧有り、出でて問う、『如何なるか是れ無位の真人』。済、便ち擒住んで云く、『道え道え』。僧擬議く。済便ち托開して、『無位の真人、是れ什麼たる乾屎橛ぞ』と云って、便ち方丈に帰る」と。巌頭覚えず舌を吐く。欽山云く、「何ぞ無位の真人に非ずと道わざる」。定に擒住まれ、

速道、速道。山無語。直得面黄[一一]面青[一二]。巌頭・雪峰、近前礼拝云、這新戒[一三]不識好悪、触[一四]忤上座。望慈悲且放過。定云、若不是這両箇老漢、掜[一五]殺這尿[一六]床鬼子。

「無位の真人と無位の真人に非ざると相去ること多少ぞ。速やかに道え速やかに道え」と云われて、山は語無し。直得に面黄面青なり。巌頭・雪峰、近前て礼拝して云く、「這の新戒好悪を識らず、上座に触忤えり。望むらくは慈悲もて且は放過されんことを」。定云く、「若し是れ這の両箇の老漢にあらずんば、這の尿床の鬼子を掜殺せんに」と。

一 巌頭全豁(八二八—八八七)。二 雪峰義存(八二二—九〇八)。三 欽山文邃。四 ご機嫌いかがですか。挨拶のことば。五 僧が亡くなること。示寂、遷化。六 寂静の本元に帰る意。人の死亡すること。七 生身の身体。また、心臓のこと。以下、『臨済録』(岩波文庫二〇頁)参照。八 いかなる枠にもはまらず、一切の範疇を超えた自由人。臨済禅の代名詞。九 全感官(六門・六根)の集約としての顔面。一〇 乾いた棒状の糞。無位真人を絶対化することへの拒否。一一 感じ入った時、恐れ入った時の顔つき。一二 青ざめること。一三 僧となったばかりの新参者。一四 さからう、たてつく。一五 圧し殺す。一六 寝小便たれ小僧。「鬼子」は愛称としても用いられる。

又在[一]鎮州斎。回到橋上歇、逢三人[二]座主。一人問、如何是禅河深処須窮底。定擒住、擬抛向橋下。時二座主連忙救云、休休。是伊触忤上座、且

又た鎮州に在りて斎す。橋上に回到りて歇うに、三人の座主に逢う。一人問う、「如何なるか是れ『禅河深き処、須らく底を窮むべし』とは」。定、擒住んで橋下に抛向さんと擬す。時に二座主、連忙て救いて云

望慈悲。定云、若不是二座主、従他窮到底去。看他恁麼手段、全是臨済作用。更看雪竇頌出。云、

【頌】断際全機継後蹤、〔黄河従源頭濁了也。子承父業。〕持来何必在従容。〔在什麼処。＊争奈有如此人。無脚手人、還得他也無。〕巨霊擡手無多子、〔嚇殺人。少売弄。打一払子。更不再勘。〕分破華山千万重。〔乾坤大地、一時露出、堕也。〕

く、「休みね休みね。是れ伊、上座に触忤えり、且は望むらくは慈悲せよ」と。定云く、「若し是れ二座主にあらずんば、他の底に窮め到り去くに従せんに」と。看よ他の恁麼の手段、全く是れ臨済の作用なることを。更に雪竇の頌出するを看よ。云く、

【頌】断際の全機後蹤に継がる、〔黄河は源頭より濁り了れり。子は父の業を承く。〕持ち来たること何ぞ必ずしも従容に在らん。〔什麼処にか在る。争奈せん此の如き人の有ることを。脚手無き人、還た他を得ん也無。〕巨霊手を擡ぐるに多子無し、〔人を嚇殺す。売弄すこと少れ。打つこと一払子。更に再勘せじ。〕分破す華山の千万重。〔乾坤大地、一時に露出するも、堕れたり。〕

一 現在の河北省西南の正定県を中心とする地域。臨済の住処。 二 禅家の方から教家の人を指して言う。

＊争奈～也無〔一五字〕 福本・蜀本は「争奈有此人、還得也無」。

一 黄檗ゆずりの気象をまるまるうけついで。「断際」は黄檗希運の諡号。 二 臨済のやり口がゆったり

としたものであろうはずがない。三 臨済を指す。四 臨済のような手腕がない人は、いったい全機を得られるだろうか。五 巨霊は何の造作もなく手をふりあげて、千万の峰のとりまく華山をまっぷたつにぶち割った。「巨霊」は河神の名。巨霊が華山を二つにひきさき、黄河の水を通したという伝説(『文選』二の張衡(七八—一三九)「西京賦」の薛綜注に引く「古語」に見える)による。華山は、陝西省華陰県の南にあり、泰華、太華、西嶽とも。六 払子で一打ち。七 もう詮議はやめよう。八 定上座は大悟によって別天地を見いだしたが、それも崩れ去った。

〔評唱〕雪竇頌、断際全機継後蹤、持来何必在従容。黄檗大機大用、唯臨済独継其蹤。拈得将来、不容擬議。或若躊躇、便落陰界。楞厳経云、如我按指、海印発光。汝暫挙心、塵労先起。巨霊擡手無多子、分破華山千万重、巨霊神有大神力、以手擘開太華、放水流入黄河。定上座疑情、如山堆岳積、被臨済一掌、直得瓦解氷消。

〔評唱〕雪竇頌す、「断際の全機後蹤に継がる、持ち来たること何ぞ必ずしも従容に在らん」と。黄檗(おうばく)の大機大用、唯だ臨済独り其の蹤を継ぐ。拈得し将(も)ち来たりて擬議を容れず。或若(もし)躊躇せば、便ち陰界(おんかい)に落ちん。『楞厳経(りょうごんきょう)』に云く、「我が指を按ずるが如きは、海印(かいいん)光を発す。汝暫(わず)かに心を挙(こ)すれば、塵労(じんろう)先ず起る」と。「巨霊手を擡ぐるに多子無し、分破す華山の千万重」とは、巨霊神に大神力有り、手を以て太華(たいか)を擘開(きりひら)き、水を放って黄河に流入せしむ。定上座の疑情、山の堆(うずたか)く岳の積(つも)れるが如きも、臨済に一掌せられて、直(つ)得(い)に瓦解氷消せり。

一 妄想、迷いの世界。 二 第四巻。 三 海が万象をうつすように、一切の法を顕現する仏の智慧。 四 心を疲れさせるもの、煩悩。

第三三則　陳尚書看資福

垂示云、東西不辨、南北不分、従朝至暮、従暮至朝。還道伊瞌睡麼。有時眼似流星。還道伊惺惺麼。有時呼南作北。且道、是有心、是無心、是道人、是常人。若向箇裏透得、始知落処、方知古人恁麼不恁麼。且道、是什麼時節。試挙看。

＊恁麼不恁麼　福本は「恁麼却不恁麼、不恁麼却恁麼」。

【本則】挙。[一]陳操尚書看資[二]福。福見来、便画[三]一円相。〔是精識精、是賊識賊。若不蘊[四]藉、争識這漢。還見金[五]剛圏麼。〕操云、[六]弟子恁麼来、早是

第三三則　陳尚書、資福に看ゆ

垂示に云く、東西辨ぜず、南北分たずして、朝より暮に至り、暮より朝に至る。還た伊瞌睡すと道わんや。有る時は眼流星に似たり。還た伊惺惺と道わんや。有る時は南を呼んで北と作す。且道、是れ有心か是れ無心か、是れ道人か是れ常人か。若し箇裏に向いて透得し、始めて落処を知らば、方に古人の恁麼なると恁麼ならざるとを知らん。且道、是れ什麼なる時節ぞ。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。陳操尚書、資福に看ゆ。福、来たるを見て、便ち一円相を画く。〔是れ精、精を識り、是れ賊、賊を識る。若し蘊藉ならずんば争か這の漢を識らん。還た金剛圏を見るや。〕操云く、「弟子、恁麼に来

不著便、何況更画一円相。〔今日撞著箇瞌睡漢。這老賊。〕福便掩却方丈門。〔賊不打貧児家。已入它圏繢了也。〕雪竇云、陳操只具一隻眼。〔雪竇頂門具眼。且道、他意在什麼処。也好与一円相。灼然龍頭蛇尾。当時好与一拶、教伊進亦無門、退亦無路。且道、更与他什麼一拶。〕

たるすら、早是に便を著ざるに、何ぞ況んや更に一円相を画くとは」。〔今日箇の瞌睡せる漢に撞著す。這の老賊。〕福、便ち方丈の門を掩却す。〔賊は貧児の家を打わず。已に它の圏繢に入り了れり。〕雪竇云く、「陳操は只だ一隻眼を具す」と。〔雪竇頂門に眼を具す。且道、他の意什麼処にか在る。也た好し一円相を与うるに。灼然に龍頭蛇尾。当時好し一拶を与えて伊をして進むにも亦た門無く、退くにも亦た路無からしめんには。且道、更に他に什麼なる一拶を与えん。〕

一 睦州道蹤（七八〇?―八七七?）を嗣ぐ居士。 二 資福如宝。 三 手で円を描く。 四 蘊蓄がある。度量が広い。 五 堅固なまるい檻。一円相を指す。 六 謙遜の自称。 七 手も足も出せない。 八 泥棒は貧乏人の家には入らない。

【評唱】 陳操尚書、与裴休・李翶同時。凡見一僧来、先請斎、襯銭三百、須是勘辨。一日雲門到。相看便問、儒書中即不問、三乗十二分教、自有座主、作麼生是衲僧家行脚事。雲門

【評唱】 陳操尚書は、裴休・李翶と同時なり。凡そ一僧の来たるを見れば、先ず斎に請き、銭三百を襯して、須是ず勘辨す。一日、雲門到る。相看うや便ち問う、「儒書の中は即ち問わず、三乗十二分教は、自ずから座主有り、作麼生か是れ衲僧家行脚の事」。雲門云く、

云、尚書曾問幾人来。操云、即今問上座。門云、即今且置、作麼生是教意。操云、黄巻赤軸。門云、這箇是文字語言、作麼生是教意。操云、口欲談而辞喪、心欲縁而慮亡。門云、口欲談而辞喪、為対有言。心欲縁而慮亡、為対妄想。作麼生是教意。操無語。門云、見説尚書看法華経、是否。操云、是。門云、経中道、一切治生産業、皆与実相不相違背。且道、非非想天、即今有幾人退位。操又無語。門云、尚書且莫草草。師僧家拋却三経五論、来入叢林、十年二十年、尚自不奈何。尚書又争得会。操礼拝云、某甲罪過。

「尚書曾て幾人にか問い来たる」。操云く、「即今、上座に問う」。門云く、「即今は且て置く、作麼生か是れ教の意」。操云く、「黄巻赤軸」。門云く、「這箇は是れ文字語言、作麼生か是れ教の意」。操云く、「口は談らんと欲するも辞喪い、心は縁らんと欲するも慮亡ぶ」。門云く、「口は談らんと欲するも辞喪うは、有言に対するが為なり。心は縁らんと欲するも慮亡ぶは、妄想に対するが為なり。作麼生か是れ教の意」。操、語無し。門云く、「見説く尚書『法華経』を看むと、是なり否」。操云く、「是なり」。門云く、「経中に道う、『一切の治生産業、皆な実相と相違背せず』と。且道、非非想天より、即今幾人退位する有るや」。操又た語無し。門云く、「尚書且は草草なること莫れ。師僧家、三経五論を拋却ち、来たりて叢林に入り、十年二十年なるも、尚自奈何ともせず。尚書又た争か会するを得ん」。操、礼拝して云く、「某甲、罪過せり」と。

一（七九一―八六四）。宗密や黄檗らの多くの僧と親交のあった居士。　二 唐代の儒者、居士。　三 禅僧

が互いに問答して相手の見地の浅深邪正を探査すること。四 雲門文偃(八六四—九四九)。五 黄色の紙に赤色の軸の巻子本。仏典のこと。六 〜といわれている。七『法華経』法師功徳品に「諸所説法、随其義趣、皆与実相不相違背。若説俗間経書、治世語言、資生業等、皆順正法」とあるのに拠ったもの。八 意識も無意識もない境地。非想非非想天。九 大ざっぱなやり方、いい加減な措置。一〇 一人まえの僧。一一 さまざまな仏の教説やその注釈書。一二 わびる言葉。

又一日与衆官登楼次、望見数僧来。一官人云、来者総是禅僧。操云、不是。官云、焉知不是。操云、待近来、与你勘過。僧至楼前、操驀召云、上座。僧挙頭。書謂衆官云、不信道。唯有雲門一人、他勘不得。他参見睦州来。一日去参資福。福見来、便画一円相。資福乃潙山・仰山下尊宿、尋常愛以境致接人。見陳操尚書、便画一円相。争奈操却是作家、不受人瞞、解自点検云、弟子恁麼来、早是不著便。那堪更画一円相。福掩却門。

又た一日、衆官と楼に登りし次、数僧の来たるを望見す。一官人云く、「来たる者は総て是れ禅僧ならん」。操云く、「不是」。官云く、「焉んぞ不是るを知らん」。操云く、「近く来たるを待って、你が与に勘過せん」。僧、楼前に至るや、操驀ち召して云く、「上座」と。僧、頭を挙ぐ。書、衆官に謂って云く、「信道ぜずや」と。唯だ雲門一人のみ有って他は勘することを得ず。他、睦州に参見し来たれり。一日去きて資福に参ず。福、来たるを見て、便ち一円相を画く。資福は乃ち潙山・仰山下の尊宿なり。尋常愛んで境致を以て人を接す。陳操尚書を見て、便ち一円相を画く。争奈せん操却って是れ作家、人の瞞を受けず、解く自ら点検

這般公案、謂之言中辨的、句裏蔵機。雪竇道、陳操只具一隻眼。雪竇可謂頂門具眼。且道、意在什麼処。也好与一円相。若総[七]恁麼地、衲僧家如何為人。我且問你、当時若是諸人作陳操時、堪下得箇什麼語、免得雪竇道、他只具一隻眼。所以雪竇[八]踏翻頌云、

【頌】[一]団団珠遶玉珊珊、〔[二]三尺杖子攪黄河、[三]須是碧眼胡僧始得。生鉄鋳就。〕[四]馬載驢駝上鉄船。〔用許多作什

一 吟味する。二 まっこうから。いきなり。三 修行者の首位に坐る役職。首座。僧に対する敬意を込めた呼びかけ。四 信じる。「道」は意味の無い接尾語。五 潙山霊祐（七七一―八五三）・仰山慧寂（八〇七―八八三）の門下。六 具体的な呈示によって教導すること。ここは、一円相を指す。七 そのように。「地」は副詞語尾。八 「一円相」をひっくりかえす。

して云く、「弟子、恁麼に来たるは早是に便を著ず、那ぞ更に一円相を画くに堪えん」と。福、門を掩却す。這般る公案、之を言中に的を辨じ、句裏に機を蔵すと謂う。雪竇道く、「陳操は只だ一隻眼を具す」と。雪竇は頂門に眼を具すと謂うべし。且道、意什麼処にか在る。也た好し一円相を与えんに。若し総じて恁麼地ならば、衲僧家如何に人の為にせん。我且は你に問う、当時若是諸人、陳操と作らん時、箇の什麼なる語を下し得てか、雪竇に「他は只だ一隻眼を具す」と道わるるを免れ得るに堪えん。所以に雪竇踏翻し頌して云く、

【頌】団団として珠は遶り玉は珊珊たり、〔三尺の杖子もて黄河を攪くは、須是らく碧眼の胡僧にして始めて得し。生鉄鋳就す。〕馬載驢駝、鉄船に上す。〔許多

麼。有*什麼限。且与闍黎看。〕分付海[五]山無事客、〔有人不要。若是無事客、也不消得。**須是無事始得。〕釣[六]鼇時下一圏攣。〔恁麼来、恁麼去。一時出不得。若是蝦[七]蟆、堪作什麼。蝦[八]蜆螺蚌、怎生奈何。須是釣鼇始得。〕雪竇復云、天下衲僧跳不出。〔兼[九]身在内。一坑埋却。闍黎、還跳得出麼。〕

を用て什麼か作ん。什麼の限りか有らん。且は闍黎の与に看せしめん。〕分付す海山無事の客、〔人の要せざる有り。若是無事の客ならば也た消得いず。須是らく無事にして始めて得し。〕鼇を釣るに時に下す一圏攣。〔恁麼にし来たり、恁麼にし去る。一時に出不得。若是蝦蟆ならば堪く什麼をか作さん。蝦蜆螺蚌、怎生奈何せん。須是らく鼇を釣って始めて得し。〕雪竇復た云く、「天下の衲僧、跳け出せず」。〔身を兼ねて内に在り。一坑に埋却めん。闍黎、還た跳得出せるや。〕

*有什麼限且与闍黎看　福本は「是他闍黎却有什麼限」。　**須是無事始得　福本に無し。

一 真珠がまわりをとりかこみ、玉は音を出して鳴る。資福の画いた円相の見事さ。「珊珊」は、玉の鳴る音。二 小さな杖で大きな黄河を掻き回す。けた外れの力量の喩え。三 達磨をいう。四 大量の珠玉を鉄の船に運び込む。五 海上にそびえる仙山。別次元の世界。「無事」は人為を超えた境位。六「鼇」は想像上のおおうみがめ。「圏攣」は、大きな釣針の形容。七 蛙。八 魚の餌にしかならないようなつまらぬもの。九 お前も同類。

〔評唱〕団団珠遶玉珊珊、馬載驢駞上鉄船、雪竇当頭頌出、只頌箇円相。

〔評唱〕「団団として珠は遶り玉は珊珊たり、馬載驢駞、鉄船に上す」と、雪竇当頭に頌出するは、只だ箇

若会得去、如虎戴角相似。這箇些子、[一]須是桶底脱、機関尽、得失是非、一時放却。更不要作道理会、也不得作玄妙会。畢竟作麼生会。這箇、須是馬載驢駞上鉄船、這裏看始得。別処則不可分付、須是将去分付海山無事底客。你若肚裏有些子事、即承当不得。這裏須是有事無事、違情順境、[二]若仏若祖、奈何他不得底人、方可承当。若有禅可参、有凡聖情量、[三]決定承当他底不得。承当得了、作麼生会他道、釣鼇時下一圏攣。[四]釣鼇須是圏攣始得。所以風穴云、慣釣鯨鯢澄巨浸、却嗟蛙歩碾泥沙。[五]又云、巨鼇莫載三山去、吾欲蓬莱頂上行。雪竇復云、天下衲僧跳不出。若是巨鼇、終不作衲僧見解。若是衲僧、終不作巨

の円相を頌す。若し会得し去らば、虎、角を戴くが如くに相似ん。這箇の些子、須是らく桶底脱し、機関尽き、得失是非、一時に放却すべし。更に道理の会を作すことを要せず、也た玄妙の会を作すこと不得れ。畢竟作麼生か会せん。這箇は須是らく「馬載驢駞、鉄船に上す」という這裏に看て始めて得し。別処には則ち分付すべからず、須是らく将ち去きて海山無事底の客に分付すべし。你若し肚裏に些子の事有らば、即ち承当い得じ。這裏は須是らく有事無事、違情順境、若しくは仏若しくは祖、他を奈何ともし得ざる底の人にして、方めて承当うべし。若し禅の参ずべき有り、凡聖の情量有らば、決定ずや他底を承当い得ず。承当得い了るも、作麼生か他の「鼇を釣るに時に一圏攣を下す」と道うを会せん。鼇を釣ることは須是らく圏攣にして始めて得し。所以に風穴云く、「鯨鯢を釣りて巨浸を澄ましむるに慣れて、却って蛙歩の泥沙に碾ぶを嗟く」。又た云く、「巨鼇三山を載せて去ること莫れ、

鼇見解。

吾蓬萊の頂上に行かんと欲す」と。雪竇復た云く、「天下の衲僧跳け出せず」と。若是巨鼇ならば、終に衲僧の見解を作さず。若是衲僧ならば、終に巨鼇の見解を作さず。

一 このちょっとした勘どころ。二 順逆いかなる情況であれ。三 価値判断。四 風穴延沼（八九六―九七三）。語は第三八則・本則に見える。五 李白（七〇一―七六二）の「懐仙歌」の句。『列子』湯問の伝説による。「三山」は東海に浮かぶ方壺・瀛洲・蓬萊の三仙山。

第三四則　仰山問甚処来

【本則】挙。仰山問僧、[一]近離甚処。[二]〔天下人一般、也要問過。*因風吹火。**[三]不可不作常程。〕僧云、廬山。[四]〔実頭人難得。〕山云、曾遊五老峰麼。[五]***[六]〔因行不妨掉臂。何曾蹉過。[七]〕僧云、不曾到。〔移一歩。[八]面赤不如語直。也似忘前失後。[九]〕山云、闍黎不曾遊山。[一〇]〔太多事生。[一一]惜取眉毛好。這老漢著甚死急。[一二]〕雲門云、此語皆為慈悲之故、有落草之談。[一三]〔殺人刀、活人剣。[一四]両箇三箇。[一五]要知山上路、須是去来人。[一六]〕

* 因風吹火　福本に無し。　** 不可不作常程　福本は「不可作常程」。　*** 因行〜蹉過〔一〇字〕　福本は「何曾蹉過、因風吹火」。

第三四則　仰山、甚処より来たるかを問う

【本則】挙す。仰山、僧に問う、「近ごろ甚処を離れしや」。〔天下の人一般、也た問過せんと要す。風に因って火を吹く。常の程と作すべからず。〕僧云く、「廬山」。〔実頭な人は得難し。〕山云く、「曾て五老峰に遊ぶや」。〔行くに因りて不妨に臂を掉る。何ぞ曾て蹉過わん。〕僧云く、「曾て到らず」。〔一歩を移す。面の赤きは語の直きに如かず。也た忘前失後するに似たり。〕山云く、「闍黎は、曾て遊山せず」。〔太だ多事生。眉毛を惜取まば好し。這の老漢、甚の死急を著たる。〕雲門云く、「此の語、皆な慈悲の為の故に、落草の談あり」。〔殺人刀、活人剣。両箇三箇。山上の路を知らんと要せば、須是らく去来の人なるべし。〕

一 仰山慧寂(八〇七—八八三)。 二 どこから来た。 三 (こんな問いかたは)手本にはならぬ。福本に従う。 四 江西省の北部にある。古くから山岳信仰の対象であり、名山として知られる。 五 廬山の名所の一つ。 六 なかなか威勢のいい歩きようだな。 七 一歩進んだ。 八 嘘をついて赤面するより正直に言う方がよい。 九 おのれを見失う。 一〇 きみ、それじゃ廬山へ行ったことにはならん。 一一 おせっかいが過ぎるぞ。 一二 何をムキになっているのか。 一三 雲門文偃(八六四—九四九)。 一四 低い次元に下り立った語りかたをする。 一五 仰山のみならず、雲門も雪竇もその両刀を使っている。 一六 高次の世界の道案内は、その道のベテランに限る。

〔評唱〕[1]験人端的処、下口便知音。[2]古人道、没量大人、向語脈裏転却。若是頂門具眼、挙著便知落処。看他一問一答、歴歴分明。雲門為什麼却道、此語皆為慈悲之故、有落草之談。古人到這裏、如明鏡当台、明珠在掌。胡来胡現、漢来漢現。一箇蠅子、也過他鑑不得。且道、作麼生是慈悲之故、有落草之談。也不妨険峻。到這田地、也須是箇漢始可提掇。[3]□□□[4]□、這僧親従廬山来。因什麼却道、

〔評唱〕 人を端的の処に験すれば、口を下すや便ち知音(ちいん)なり。古人道(いわ)く、「没量(もつりょう)の大人も、語脈裏に向(お)いて転却す」と。若是(もし)頂門に眼を具せば、挙著するや便ち落処を知らん。看よ他(か)の一問一答、歴歴分明なり。雲門為什麼(なにゆえ)にか却って道(い)う、「此の語、皆な慈悲の為の故に、落草の談有り」と。古人這裏(ここ)に到って、明鏡の台に当り、明珠の掌に在るが如し。胡来たれば胡現じ、漢来たれば漢現ず。一箇(いっぴき)の蠅子(はえ)も也(ま)た他(そ)の鑑(かがみ)を過ぐることを得ず。且(さて)道、作麼生(いかに)か是れ慈悲の故に、落草の談有る。也た不妨(なかなか)に険峻なり。這(こ)の田地(きょうち)に到っては、也(ま)た須是(すべか)らく箇の漢にして始めて可(よ)く提掇(ていてつ)すべし。這(こ)

闍黎不曾遊山。

の僧親しく廬山より来たる。什麼に因ってか却って道う、「闍黎は曾て遊山せず」と。

一 人を端的のところでテストすれば、ひとこと言ったとたんに値打ちが分かる。 二 雲門文偃。語は第二九則・本則の著語に既出。 三 手の上にものを載せて重さを計る。値ぶみすること。 四 四字分空格。「雲門拈云」とするテキストもあるが採らない。

潙山一日問仰山云、諸方若有僧来、汝将什麼験他。仰山云、某甲有験処。潙山云、子試挙看。仰云、某甲尋常見僧来、只挙払子、向伊道、諸方還有這箇麼。待伊有語、只向伊道、這箇即且置、那箇如何。潙山云、此是向上人牙爪。

潙山、一日、仰山に問うて云く、「諸方、若し僧の来たる有らば、汝什麼を将てか他を験さん」。仰山云く、「某甲験処有り」。潙山云く、「子試みに挙し看よ」。仰云く、「某甲尋常僧の来たるを見れば、只だ払子を挙して伊に道う、『諸方還た這箇有りや』。伊が語有らんを待って、只だ伊に道わん。『這箇は即ち且て置く、那箇は如何』と」。潙山云く、「此れは是れ向上の人の牙爪なり」と。

一 最高の境地に在る人の奥の手。

豈不見馬祖問百丈、什麼処来。丈云、山下来。祖云、路上還逢著一人

豈に見ずや馬祖、百丈に問う、「什麼処よりか来たる」。丈云く、「山下より来たる」。祖云く、「路上還た

麼。丈云、不曾。祖云、為什麼不曾逢著。丈云、若逢著、即挙似和尚。祖云、那裏得這消息来。丈云、某甲罪過。祖云、却是老僧罪過。仰山問僧、正相類此。

一 入矢義高編『馬祖の語録』(禅文化研究所、一九八四)、一七二頁を参照。 二 自己の主人公。

当時待他道、曾到五老峰麼、這僧若是箇漢、但云禍事、却道不曾到。這僧既不作家、仰山何不拠令而行、免見後面許多葛藤、却云、闍黎不曾遊山。所以雲門道、此語皆為慈悲之故、有落草之談。若是出草之談、則不恁麼。

一 一大事だ！ 大変だ！

一人に逢著いしや」。丈云く、「曾てせず」。祖云く、「為什麼にか曾て逢著わざる」。丈云く、「若し逢著わば、即ち和尚に挙似さん」。祖云く、「那裏よりか這の消息を得来たる」。丈云く、「某甲の罪過なり」。祖云く、「却って是れ老僧の罪過」と。仰山の僧に問うは、正に此れに相類す。

当時他の「曾て五老峰に到るや」と道うを待って、這の僧若是箇の漢ならば、但だ「禍事」と云わんに、却って道う「曾て到らず」と。這の僧既に作家ならず、仰山何ぞ令に拠って行い、後面の許多しき葛藤を見るを免れんとせずして却って云う、「闍黎は曾て遊山せず」と。所以に雲門道く、「此の語皆な慈悲の為の故に、落草の談有り」と。若是出草の談ならば、則ち恁麼ならず。

【頌】一出草入草、〔頭上漫漫、脚下漫漫。二半開半合。他也恁麼、我也恁麼。〕誰解尋討。〔頂門具一隻眼。四闍黎不解尋討。三〕白雲重重、〔千重百匝。頭上安頭。〕五紅日杲杲。〔破也。瞎。六挙眼即錯。〕左顧無暇*、〔瞎漢。依前無事。你作許多伎倆、作什麼。〕七右盼已老。〔八一念万年。過。〕君不見寒九山子、〔癩児牽伴。〕一〇行太早。〔也不早。〕十年帰不得、〔即今在什麼処。一一灼然。〕一二忘却来時道。一三〔渠儂得自由。放過一著。便打。莫做這忘前失後好。〕

【頌】出草し入草するを、〔頭上漫漫、脚下漫漫。半開半合。他も也た恁麼、我も也た恁麼。〕誰か解く尋討する。〔頂門に一隻眼を具す。闍黎、解く尋討せず。〕白雲重重、〔千重百匝。頭の上に頭を安く。〕紅日杲杲。〔破れり。瞎。眼を挙ぐれば即ち錯。〕左顧するに暇無く、〔瞎漢。依前として無事。你許多の伎倆を作して什麼か作ん。〕右盼すれば已に老ゆ。〔一念万年。過ぎされり。〕君見ずや寒山子の、〔癩児伴を牽く。〕行くこと太だ早きを。〔也た早からず。〕十年帰り得ず、〔即今什麼処にか在る。灼然たり。〕来時の道を忘却せり。〔渠儂は自由を得たり。一著を放過す。便ち打つ。這の忘前失後と做ること莫くんば好し。〕

*暇　底本は「瑕」に作るが、『雪竇頌古』に従って「暇」に改める。

一 雲門の「落草」を「入草」におきかえている。二 思わせぶりな呈示。三 仰山の対応が落草であるかどうかだれが決められよう。四 雪竇を指す。五 白雲の間から太陽があかあかと輝き出している。六 目がくらんだ。七 右を向いてみれば、もう老いぼれてしまっている。「盼」は「眄」「盻」とも。

一老」は五老峰に掛ける。八『信心銘』に「宗非促延、一念万年」と。九 唐代の伝説的隠者。確実な伝記は不明。三百余首の詩を残し、九世紀末から禅僧の間で愛好された。一〇 とっくに山に入ってしまった。一一（出草入草どころか）来た時の道さえ忘れてしまっている。一二 以下は寒山への警告。

〔評唱〕 出草入草、誰解尋討、雪竇却知他落処。到這裏、一手擡[一]、一手搦。白雲重重、紅日杲杲、大似草茸[二]茸、煙冪冪。到這裏、無一糸毫属凡、無一糸毫属聖。[三]遍界不曾蔵、一一蓋覆不得。所謂無心境界。[*]寒不聞寒、熱不聞熱。都盧是箇大解脱門、左顧無暇、右盻已老。

〔評唱〕「出草し入草するを、誰か解く尋討する」とは、雪竇却って他の落処を知る。這裏に到らば、一手には擡げ、一手には搦う。「白雲重重、紅日杲杲」とは、大いに「草は茸茸、煙は冪冪」というに似たり。這裏に到らば、一糸毫も凡に属する無く、一糸毫も聖に属する無し。遍界曾て蔵さず、一一蓋覆し得ず。所謂無心の境界なり。寒すれども寒を聞かず、熱すれども熱を聞かず。都盧て是れ箇の大解脱門、「左顧するに暇無く、右盻すれば已に老ゆ」なり。

＊寒不聞寒熱不聞熱　福本・蜀本は「寒不同寒熱不同熱」。

一 一方でもちあげ、一方で抑える。自由無礙な指導ぶり。二 第六則・頌の句。三 世界中あまねくかつて隠しだてしたことはない。常に堂々とあらわれ出ている。石霜慶諸（八〇七―八八八）の語（『伝灯録』一五）。

[一]懶瓚和尚、隠居[二]衡山石室中。唐粛[三]

懶瓚和尚、衡山の石室の中に隠居す。唐の粛宗、其

宗聞其名、遣使召之。使者至其室宣言、天子有詔、尊者当起謝恩。瓚方撥牛糞火、尋煨芋而食、寒涕垂頤、未嘗答。使者笑曰、且勧尊者拭涕。瓚曰、我豈有工夫為俗人拭涕耶。竟不起。使回奏。粛宗甚[四]欽嘆之。似這般[五]清寥寥、白的的、不受人処分、直是把得定、如[六]生鉄鋳就相似。

一 名は明瓚。脱俗怠惰なさまから懶瓚（怠け者の明瓚）と呼ばれた。嵩山普寂（六五一—七三九）の法嗣。
二 湖南省にある。五岳の一つ、南岳。 三 （七一一—七六二、在位七五六—七六二）。 四 ほめたたえる。
五 人物の澄明高潔なさま。 六 鉄の鋳物のように堅固。

只如善道和尚[一]、遭沙汰[二]後、更不復作僧。人呼為石室行者。毎踏碓[三]、忘移歩。僧問臨済、石室行者忘移歩、意旨如何。済云、没溺深坑[四]。法眼[五]円成実性頌[六]云、理極忘情謂[七]、如何有喩

の名を聞き、使を遣して之を召す。使者其の室に至って宣言す、「天子詔有り、尊者当に起って恩を謝すべし」。瓚方に牛糞の火を撥て、煨芋を尋りて食すに、寒涕、頤に垂れて、未だ嘗て答えず。使者笑って曰く、「且は勧む、尊者涕を拭え」。瓚曰く、「我豈に俗人の為に涕を拭う工夫有らん」と。竟に起たず。使回って奏す。粛宗甚だ之を欽嘆す。這般に清寥寥、白的的なるが似くならば、人の処分を受けず、直是に把得定りて、生鉄鋳就すが如くに相似ん。

只だ善道和尚の如きは、沙汰に遭いて後、更に復た僧と作らず。人呼んで石室行者と為す。碓を踏む毎に歩を移すことを忘る。僧、臨済に問う、「石室行者、歩を移すことを忘る、意旨如何」。済云く、「深坑に没溺す」と。法眼の『円成実性の頌』に云く、「理極ま

斉。到頭霜夜月、任運落前渓。菓熟兼猿重、山長似路迷。挙頭残照在、元是住居西。

りて情謂を忘る、如何ぞ喩斉有らん。到頭霜夜の月、任運として前渓に落つ。菓熟して猿の重きを兼ね、山長くして路迷うに似たり。頭を挙ぐれば残照在り、元是れ住居の西」と。

一 石室善道。長髭曠より受戒し、石頭希遷(七〇〇—七九〇)に参じた。二 唐の武宗の会昌五年(八四五)の廃仏。三 足踏み式の碓を使うのに、足踏みを忘れる。四 抜け出ようのない深い穴におぼれてしまっている。『臨済録』には「没溺深泉」(岩波文庫一二五頁)と。五 法眼文益(八八五—九五八)。六 第九〇則にも見える。七 思量分別。八 つまるところ、ひっきょう。九 自然の運行のままに。

雪竇道、君不見寒山子、行太早。十年帰不得、忘却来時道。寒山子詩云、欲得安身処、寒山可長保。微風吹幽松、近聴声愈好。下有班白人、嘮嘮読黄老。十年帰不得、忘却来時道。永嘉又道、心是根、法是塵、両種猶如鏡上痕。痕垢尽時光始現、心法双忘性即真。到這裏、如痴似兀、方見此公案。若不到這田地、只在語

雪竇道く、「君見ずや寒山子の、行くこと太だ早きを。十年帰り得ず、来時の道を忘却せり」と。寒山子の詩に云く、「安身の処を得んと欲せば、寒山長しえに保つべし。微風幽松を吹き、近く聴けば声愈いよ好し。下に班白の人有り、嘮嘮と黄老を読む。十年帰り得ず、来時の道を忘却せり」と。永嘉又た道く、「心は是れ根、法は是れ塵、両種猶お鏡上の痕の如し。痕垢尽くる時光始めて現ず、心法双び忘じて性即ち真なり」と。這裏に到って、痴の如く兀の似くにして方め

言中走、有甚了日。

て此の公案を見らん。若し這の田地に到らずして、只だ語言の中を走かば、甚の了日か有らん。

一 身を落ちつける。 二 ごま塩あたま。斑白。 三 むにゃむにゃ。本を読むさま。『寒山詩』では「喃喃」とする。「黄老」は道家の書物。 四 永嘉玄覚(六七五—七一三)述とされる『証道歌』の一節。 五『証道歌』では「尽除」とする。 六『証道歌』では「双亡」とする。

第三五則　文殊前三三

垂示云、定龍蛇、分玉石、別緇素、決猶豫、若不是頂門上有眼、肘臂下有符、往往当頭蹉過。只如今見聞不昧、声色純真、且道、是皂是白、是曲是直。到這裏、作麼生辨。

一 疑惑、疑情を解決する。 二 常人を超えた眼力を具え、魔よけの護符を身に着ける。第三則・頌の評唱に「頂門具眼、肘後有符」と。 三 面と向っていながらすれちがってしまう。「当面蹉過」(第二則・本則の評唱など)に同じ。 四 知覚が明澄で、一切の事象がありのままに見て取られる。

【本則】挙。文殊問無著、近離什麼処。〔不可不借問。也有這箇消息。〕無著云、南方。〔草窠裏出頭。何必搭向眉毛上。大方無外、為什麼却有南方。〕殊云、南方仏法、如何住持。〔若問別人則禍生。猶掛唇歯在。〕著

第三五則　文殊の前三三

垂示に云く、龍蛇を定め、玉石を分ち、緇素を別ち、猶豫を決するに、若し是れ頂門上に眼あり、肘臂下に符あるにあらずんば、往往に当頭に蹉過わん。只だ如今見聞不昧、声色純真ならば、且道、是れ皂か是れ白か、是れ曲か是れ直か。這裏に到って作麼生か辨ぜん。

【本則】挙す。文殊、無著に問う、「近ごろ什麼処を離れしや」。〔借問ねずんばあるべからず。也た這箇の消息有り。〕無著云く、「南方」。〔草窠裏より出頭す。何ぞ必ずしも眉毛の上に搭向せん。大方に外無し、為什麼にか却って南方有る。〕殊云く、「南方の仏法、如何にか住持する」。〔若し別人に問わば則ち禍生ぜん。

云、末法比丘、少奉戒律。〔実頭人難得。〕殊云、多少衆。〔当時便与一喝、一摻摻倒了也。〕著云、或三百、或五百。〔尽是野狐精、果然漏逗。〕無著問文殊、此間如何住持。〔摻著。便回転鎗頭来也。〕殊云、凡聖同居、龍蛇混雑。〔敗欠不少。直得脚忙手乱。〕著云、多少衆。〔還我話頭来。也不得放過。〕殊云、前三三、後三三。〔顚言倒語。且道、是多少。千手大悲数不足。〕

猶お唇歯に掛くる在。〕著云く、「末法の比丘、戒律を奉ずるもの少なり」。〔実頭な人は得難し。〕殊云く、「多少の衆ぞ」。〔当時に便ち一喝を与えて、一摻に摻倒し了らん。〕著云く、「或は三百、或は五百」。〔尽く是れ野狐精、果然して漏逗す。〕無著、文殊に問う、「此間にては如何にか住持する」。〔摻著。便ち鎗頭を回転し来たれり。〕殊云く、「凡聖同居、龍蛇混雑す」。〔敗欠少なからず。直得に脚忙しく手乱る。〕著云く、「多少の衆ぞ」。〔我に話頭を還し来たれ。也た放過むること不得れ。〕殊云く、「前三三、後三三」。〔顚言倒語。且道、是れ多少ぞ。千手大悲も数え足れず。〕

一 文殊菩薩。五台山に化現したと伝えられる。 二 華厳寺無著（『宋高僧伝』二〇）。大暦二年（七六七）に五台山で文殊菩薩と問答したという。ただし、評唱は無著禅師・龍泉院文喜（八二一―九〇〇）と混同している。 三 江南。 四 草ぶかい窠窟（ねぐら）。 五 大宇宙には枠外など無い。 六 仏法を保持し、実践すること。 七 まだまだベチャクチャやるつもりでいる。「在」は強調の助字。 八 ここ。五台山を指す。 九 ひどく打ち負かされたものだ。 一〇 慌てふためく。うろたえる。「手忙脚乱」（第二八則・本則の著語）に同じ。 一一 話題、問題点。 一二 僧坊は南に六棟、北に六棟です。「前六後六」（『玄沙広録』中・道麟上座との問答）と同義であろう。 一三 ああも言いこうも言う。理路が通じない。支離滅

裂な言葉。

【評唱】無著遊五台。至中路荒僻処、文殊化一寺、接他宿。遂問、近離甚処。著云、南方。殊云、南方仏法、如何住持。著云、末法比丘、少奉戒律。殊云、多少衆。著云、或三百、或五百。無著却問文殊、此間如何住持。殊云、凡聖同居、龍蛇混雑。著云、多少衆。殊云、前三三、後三三。却喫茶、文殊挙起玻璃盞子云、南方還有這箇麼。著云、無。殊云、尋常将什麼喫茶。著無語。遂辞去。文殊令均提童子送出門首。無著問童子云、適来道、前三三、後三三。是多少。童子云、大徳。著応喏。童子云、是多少。又問、此是何寺。童子指金剛

【評唱】無著、五台に遊ぶ。中路荒僻たる処に至り、文殊、一寺を化して他を接えて宿せしむ。遂に問う、「近ごろ甚処を離れしや」。著云く、「南方」。殊云く、「南方の仏法、如何にか住持する」。著云く、「末法の比丘、戒律を奉ずるもの少なり」。殊云く、「多少の衆ぞ」。著云く、「或は三百、或は五百」。無著却って文殊に問う、「此間にては如何にか住持する」。殊云く、「凡聖同居、龍蛇混雑す」。著云く、「多少の衆ぞ」。殊云く、「前三三、後三三」と。却に茶を喫するに、文殊、玻璃の盞子を挙起げて云く、「南方に還た這箇有りや」。著云く、「無し」。殊云く、「尋常什麼を将てか茶を喫す」。著、語無し。遂に辞し去る。文殊、均提童子をして送り門首に出でしむ。無著、童子に問うて云く、「適来に道う『前三三、後三三』と。是れ多少ぞ」。童子云く、「大徳」と。著、応喏す。童子云く、

後面。著回首、化寺童子悉隠不見、只是空谷。彼処後来謂之金剛窟。

「是れ多少ぞ」と。又た問う、「此れは是れ何なる寺ぞ」。童子、金剛の後面を指す。著、首を回すや、化寺と童子と悉く隠れて見えず、只だ是れ空谷なり。彼処をば後来に之を金剛窟と謂う。

一 山西省の五台山。文殊菩薩の住地とされる清涼山にあたると信じられた。以下、『会元』九・無著文喜章にほぼ同文が見える。二 ガラスの杯。三 未詳。四 仁王門の金剛力士。

後有僧問風穴、如何是清涼山中主。穴云、一句不遑無著問、迄今猶作野盤僧。若要参透、平平実実、脚踏実地、向無著言下薦得。自然居鑊湯炉炭中、亦不聞熱、居寒氷上、亦不聞冷。若要参透、使孤危峭峻、如金剛王宝剣、向文殊言下薦取。自然水灑不著、風吹不入。

後に僧有り、風穴に問う、「如何なるか是れ清涼山中の主」。穴云く、「一句だに無著の問うに遑あらず、今に迄るまで猶お野盤の僧と作る」と。若し参透して平平実実にして、脚実地を踏まんと要せば、無著の言下に向いて薦得せよ。自然に鑊湯炉炭の中に居るも亦た熱を聞かず、寒氷の上に居るも亦た冷を聞かず。若し参透して孤危峭峻にして、金剛王宝剣の如くならしめんと要せば、文殊の言下に向いて薦取せよ。自然に水も灑ぎ著めず、風も吹き入れず。

一 風穴延沼（八九六―九七三）。二 五台山を『華厳経』に説くインドの名山になぞらえたもの。三 「野盤」は、野宿する。住すべき寺を持たぬ僧。文殊を指す。四 至極まっとうに。五 しかと地に足を着

ける。六 主体的に把握する。七 ひとり屹立して他を寄せつけない。八 一切のものを自在に断ち切る宝剣。九 積極的に我がものとする。一〇 第五九則・頌の句。一分のすきもなく、誰も入りこめない世界が現成する。

不見[一]漳州[二]地蔵問僧、近離甚処。僧云、南方。蔵云、彼中仏法如何。僧云、[三]商量浩浩地。蔵云、[四]争似我這裏種田博飯喫。且道、与文殊答処、是同是別。有底道、無著答処不是。文殊答処、也有龍有蛇、有凡有聖。有[五]什麼交渉。還辨明得前三三、後三三麼。前箭猶軽後箭深。且道、是多少。若向這裏透得、千句万句、只是一句。若向此一句下、[六]截得断、把得住、[七]相次間到這境界。

見ずや漳州の地蔵、僧に問う、「近ごろ甚処を離れしや」。僧云く、「南方」。蔵云く、「彼中の仏法如何」。僧云く、「商量浩浩地なり」。蔵云く、「争でか我が這裏に田を種え飯を博て喫するに似かん」と。且道、文殊の答処と是れ同じか是れ別か。有る底は道う、「無著の答処は、不是。文殊の答処は、也た龍有り蛇有り、凡有り聖有り」と。什麼の交渉か有らん。還た「前三三、後三三」を辨明得たるや。前の箭は猶お軽きも後の箭は深し。且道、是れ多少ぞ。若し這裏に向いて透得せば、千句万句も只だ是れ一句。若し此の一句下に向いて、截得断り把得住らば、相次の間に這の境界に到らん。

一 福建省の地。二 羅漢桂琛(八六七—九二八)。羅漢院に住する以前に、地蔵精舎で説法をした。三 盛んに問答をしております。四 (直前に述べたことを受けて)それよりもくするに越したことはない。

しには及ばない。五 第九三則・頌の一句。ここでは前箭は「凡聖同居、龍蛇混雑」、後箭は「前三三、後三三」を指す。六 きっぱりと断ち切って、しかとつかみ取る。七 間もなく。

【頌】千峰盤屈色如藍[一]、〔還見文殊麼。〕誰謂文殊是対談。〔設使普賢、也不顧。蹉過了也。〕堪笑[二]清涼多少衆、〔且道、笑什麼。已在言前[三]。〕前三三与後三三。〔試請、脚下辨看。爛泥裏有刺[四]。碗子落地、楪子成七片[五]。〕

【頌】千峰盤屈して色藍の如し、〔還た文殊を見るや。〕誰か謂う文殊是に対談すと。〔設使普賢なりとも也た顧みず。蹉過い了れり。〕笑う堪し清涼多少の衆、〔且道、什麼をか笑う。已に言前に在り。〕前三三と後三三と。〔試みに請う、脚下に辨じ看よ。爛泥裏に刺有り。碗子地に落ちて、楪子七片と成る。〕

一 五台山の絶景のさま。二 笑止の沙汰は、清涼山にどれほどの比丘がいるかときいたやつの方だ。三 言葉以前の以心伝心の自得。四 思いもよらぬ伏兵がひそむ。五 碗を落としたら、皿までもばらばらに割れた。第一八則・頌の著語にも。

〔評唱〕千峰盤屈色如藍、誰謂文殊是対談、有者道、雪竇只是重拈一偏、不曾頌著。只如僧[一]問法眼、如何是曹源一滴水。眼云、是曹源一滴水。又僧[二]問瑯琊覚[三]和尚、清浄本然、云何忽

〔評唱〕「千峰盤屈して色藍の如し、誰か謂う文殊是に対談すと」というに、有る者は道う、「雪竇は只だ是れ重ねて拈ぐること一偏するのみにして、曾て頌著せず」と。只如ば僧、法眼に問う、「如何なるか是れ曹源の一滴水」と。眼云く、「是れ曹源の一滴水」。又

生山河大地。覚云、清浄本然、云何忽生山河大地。不可也喚作重拈一徧。

[一] 第七則・本則の評唱に既出。 [二] 長水子璿(?―一〇三八)。以下、『会元』一二に見える。 [三] 瑯琊慧覚。汾陽善昭(九四七―一〇二四)の法嗣。雪竇重顕と時を同じくし、並び称された。問いの二句は『楞厳経』四の句。

[一]明招独眼龍、亦頌其意、有蓋天蓋地之機。道、[二]廓周沙界勝伽藍、[三]満目文殊是対談。言下不知開仏眼、回頭只見翠山巌。廓周沙界勝伽藍、此指草窟化寺。所謂有権実双行之機。満目文殊是対談、言下不知開仏眼、回頭只見翠山巌、正当恁麼時、喚作文殊・普賢・観音境界得麼。要且不是這箇道理。雪竇只改明招底用、却有[四]針線。千峰盤屈色如藍、更不傷鋒犯

た僧、瑯琊の覚和尚に問う、「清浄本然なるに、云何にして忽ち山河大地を生ずるや」。覚云く、「清浄本然なるに、云何にして忽ち山河大地を生ずるや」と。也た喚んで重ねて拈ぐること一徧すと作すべからず。

明招の独眼龍も亦た其の意を頌して、天を蓋い地を蓋うの機有り。道く、「沙界に廓周す勝伽藍、満目の文殊是に対談す。言下に仏眼を開くことを知らず、頭を回して只だ見る翠山巌」と。「沙界に廓周す勝伽藍」とは、此れ草窟の化寺を指す。所謂権実双行の機有り。「満目の文殊是に対談す。言下に仏眼を開くことを知らず、頭を回して只だ見る翠山巌」と、正当恁麼なる時、文殊・普賢・観音の境界と喚び作すこと得しきや。要且に是れ這箇の道理にあらず。雪竇只だ明招底を改め用い、却って針線有り。「千峰盤屈して

手、句中有権有実、有理有事。誰謂文殊是対談、一夜対談、不知是文殊。

色藍の如し」と、更に鋒に傷つき手を犯すということなく、句中に権有り実有り、理有り事有り。誰か謂う文殊是に対談すと、一夜対談して、是れ文殊なることに知かず。

一 明招徳謙。 二 無数無辺の世界をぐるりと囲む見事な伽藍。 三 見渡す限り。 四 問題の在りかに通じる筋みち。

後来、無著在五台山作典座。文殊毎於粥鍋上現、被無著拈攪粥篦便打。雖然如是、也是賊過後張弓。当時等他道、南方仏法如何住持、劈脊便棒、猶較些子。堪笑清涼多少衆、雪竇笑中有刀。若会得這笑処、便見他道、前三三与後三三。

後来に無著、五台山に在って典座と作る。文殊、粥鍋の上に現るる毎に無著に攪粥篦を拈って便ち打たる。是の如くなりと雖然も、也た是れ賊過ぎし後に弓を張るなり。当時他の「南方の仏法、如何にか住持する」と道うを等って、劈脊に便ち棒せば、猶お些子く較わん。「笑う堪し清涼多少の衆」とは、雪竇の笑いの中に刀有り。若し這の笑う処を会得せば、便ち他の「前三三と後三三」と道うを見らん。

一『会元』九によれば、無著文喜は五台山に駐錫の後、咸通三年(八六二)に洪州(江西省南昌県)の観音院で仰山に参じ、典座(食事を司る役職)となった。 二『会元』九では「文殊嘗現於粥鑊上、師以攪粥篦便打」とする。 三 粥をかきまぜる大杓子。

第三六則　長沙一日遊山

【本則】挙。長沙一日遊山、帰至門首。〔今日一日、只管落草。前頭也是落草、後頭也是落草。〕首座問、和尚什麼処去来。〔也要勘過這老漢、箭過新羅。〕沙云、遊山来。〔不可落草。敗欠不少。草裏漢。〕首座云、到什麼処来。〔掇。若有所至、未免落草。相牽入火坑。〕沙云、始随芳草去、又逐落花回。〔漏逗不少。元来只在荊棘林裏坐。〕座云、大似春意。〔相随来也。将錯就錯。一手擡、一手搦。〕沙云、也勝秋露滴芙蕖。〔土上加泥。前箭猶軽後箭深。有什麼了期。〕雪竇著語云、謝答話。〔一

第三六則　長沙、一日遊山す

【本則】挙す。長沙、一日遊山して、帰って門首に至る。〔今日一日、只管に落草。前頭も也た是れ落草、後頭も也た是れ落草。〕首座問う、「和尚什麼処にか去き来たれる」。〔也た這の老漢を勘過せんと要するも、箭新羅を過ぐ。〕沙云く、「遊山し来たる」。〔落草すべからず。敗欠少なからず。草裏の漢。〕首座云く、「什麼処にか到り来たれる」。〔掇。若し至る所有れば、未だ落草を免れず。相い牽いて火坑に入る。〕沙云く、「始めは芳草に随って去き、又た落花を逐って回る」。〔漏逗少なからず。元来、只だ荊棘の林の裏に坐す。〕座云く、「大いに春意に似たり」。〔相随い来たる。錯を将て錯を就す。一手には擡げ、一手には搦う。〕沙云く、「也た秋露の芙蕖に滴るに勝れり」。〔土上に泥を加う。前の箭は猶お軽きも後の箭は深し。什麼の了

火弄泥団漢。三箇一状領過。〕

期か有らん。〕雪竇著語して云く、「答話を謝す」。〔一火の泥団を弄する漢。三箇、一状に領過せん。〕

一 長沙景岑。 二 禅堂の指導者。 三 吟味を加える、調べ上げる。 四 一緒に地獄行きだ。「火坑」は地獄の入り口。 五 相手に調子を合わせている。 六 一方ではもち上げ、一方では抑える。 七 開いた蓮の花瓣。 八 ひとかたまりの集団。一伙。ここは、長沙・首座・雪竇の三人。 九 泥のかたまりをいじくるやから。

〔評唱〕長沙鹿苑招賢大師、法嗣南泉、与趙州・紫胡輩同時。機鋒敏捷、有人問教、便与説教、要頌、便与頌。你若要作家相見、便与你作家相見。

〔評唱〕長沙鹿苑の招賢大師は、法を南泉より嗣ぎ、趙州・紫胡の輩と同時なり。機鋒敏捷にして、人の教えを問う有れば、便ち与に教えを説き、頌を要むれば、便ち与に頌す。你若し作家相見せんと要すれば、便ち你の与に作家相見す。

一 初め長沙(湖南省)鹿苑寺に住し、招賢大師と号された。 二 南泉普願(七四八―八三四)。 三 趙州従諗(七七八―八九七)。 四 紫胡利蹤(八〇〇―八八〇)。

仰山尋常機鋒、最為第一。一日、同長沙翫月次、仰山指月云、人人尽有這箇、只是用不得。沙云、恰是、便倩你用那。仰山云、你試用看。沙

仰山は尋常の機鋒最も第一たり。一日、長沙と同に月を翫でし次、仰山、月を指して云く、「人人尽く這箇有り、只だ是れ用い得ず」。沙云く、「恰も是り、便ち你に倩みて用いん那」。仰山云く、「你試みに用い看

一踏踏倒。仰山起云、師叔一似箇大虫。後来人号為岑大虫。

一 仰山慧寂(八〇七—八八三)。二 なるほど、いかにも。三 わたしの代りにお前がやってくれ。「那」は軽くなじるような語気。四 法系上の叔父。

因一日遊山帰、首座亦是他会下人、便問、和尚什麼処去来。沙云、遊山来。座云、到什麼処去来。沙云、始随芳草去、又逐落花回。須是坐断十方底人始得。古人出人、未嘗不以此事為念。看他賓主互換、当機直截、各不相饒。既是遊山、為什麼却問道、到什麼処去来。若是如今禅和子便道、到夾山亭来。看他古人無糸毫道理計較、亦無住著処。所以道、始随芳草去、又逐落花回。首座便随他意向他道、大似春意。沙云、也勝秋露滴芙蕖。雪竇云、謝答話、代末後語也。

よ」。沙一踏に踏倒す。仰山起って云く、「師叔は一に箇の大虫に似たり」と。後来に人号して岑大虫と為す。

(長沙)因に一日遊山して帰るに、首座も亦た是れ他の会下の人なれば、便ち問う、「和尚什麼処にか去き来たれる」。沙云く、「遊山し来たる」。座云く、「什麼処に到か去き来たれる」。沙云く、「始めは芳草に随って去き、又た落花を逐って回る」と。須是らく十方を坐断する底の人にして始めて得し。古人は出人にも未だ嘗て此の事を以て念と為ずんばあらず。看よ他の賓主互換、当機直截して、各おの相い饒さざるを。既是に遊山なれば、為什麼にか却って問うて道う、「什麼処に到か去き来たれる」と。若是如今の禅和子ならば、便ち道わん、「夾山亭に到り来たる」と。看よ他の古人は糸毫の道理計較無く、亦た住著の処無し。所以に道う、「始めは芳草に随って去き、又た落花を逐って

也落両辺、畢竟不在這両辺。

回る」と。首座、便ち他の意に随って他に道う、「大いに春意に似たり」。沙云く、「也た秋露の芙蕖に滴るに勝れり」と。雪竇云く、「答話を謝す」とは、末後の語を代れり。也た両辺に落つるも、畢竟這の両辺に在らず。

一 日常の去来出入。二 禅の極則を指す。三 主客たがいにその位置を取りかえる禅問答。四 圜悟の寺に在ったか。五 究極の境地に腰をすえる。六 最後の句に答えられなかった首座に代わって言った。七 主客二様。

昔有張拙秀才、看千仏名経、乃問、百千諸仏、但聞其名。未審居何国土。還化物也無。沙云、黄鶴楼崔顥題詩後、秀才曾題也未。拙云、未曾題。沙云、得閑題取一篇也好。岑大虫平生為人、直得珠回玉転、要人当面便会。頌云、

昔張拙秀才有り、『千仏名経』を看て乃ち問う、「百千の諸仏、但だ其の名を聞くのみ。未審、何れの国土に居るや。還た物を化する也無」。沙云く、「黄鶴楼に崔顥、詩を題して後、秀才曾て題する也未」。拙云く、「未だ曾て題せず」。沙云く、「閑を得て一篇を題取せば也た好し」と。岑大虫の平生、人の為にすること、直得ら珠回玉転するは、人の当面に便ち会せんことを要すればなり。頌に云く、

一 石霜慶諸(八〇七—八八八)門下の居士。二 『三千仏名経』。三 崔顥(七〇四—七五四)。「黄鶴楼」

の詩に李白を感嘆させ、筆を取るのをやめさせたという。四「取」は接尾語で、意図的かつ積極的に行う気分を示す。五 真珠や玉が転がるように円滑なこと。

【頌】大地絶[一]繊埃、〔豁[二]開戸牖、当軒者誰。尽少這箇不得。天下太平。〕何人眼不開。〔頂門上放大光明始得。撒土撒沙作什麼。〕始随芳草去、〔漏逗不少。不是一回落草、頼値前頭已道了。〕又逐落花回。〔処処[三]全真。且喜帰来。脚下泥深三尺。〕[四]羸鶴翹寒木、〔[五]左之右之添一句、更有[六]許多閑事在。〕[七]狂猿嘯古台。〔[八]却因親著力。[九]添一句也不得、減一句也不得。〕長沙無限意。〔便打。末後一句、道什麼。一坑埋却。堕在[一〇]鬼窟裏。〕咄。〔草裏漢。賊過後張弓。更不可放過。〕

【頌】大地繊埃を絶す、〔戸牖を豁開き、軒に当つ者は誰ぞ。尽く這箇を少くことを得ず。天下太平。〕何人か眼開かざる。〔頂門上に大光明を放って始めて得し。土を撒き沙を撒いて什麼か作ん。〕始めは芳草に随って去き、〔漏逗少なからず。是れ一回落草するにあらず、頼に前頭に已に道い了るに値う。〕又た落花を逐って回る。〔処処全真。且喜たくも帰り来たる。脚下泥深きこと三尺。〕羸鶴寒木に翹き、〔左之右之して一句を添う、更に許多くの閑事有る在。〕狂猿古台に嘯く。〔却って親ら力を著くるに因る。一句を添うるも也た得からず、一句を減ずるも也た得からず。〕長沙限り無きの意。〔便ち打つ。末後の一句、什麼をか道う。一坑に埋却めん。鬼窟裏に堕在つ。〕咄。〔草裏漢。賊過ぎし後に弓を張る。更に放過すべからず。〕

一 塵ひとつ無い。第九則・頌には「爍迦羅眼絶繊埃」と。二『伝灯録』一七・羅山道閑章に見える定

慧上座の問い。 三 どこでも真実まるごとの顕現。 四 以下二句、蕭条とした秋冬の景への反転。「羸鶴」は痩せてうらぶれた鶴。 五 周辺をうろつくばかり。 六 どうでもよいこと、つまらぬこと。 七 廃墟の丘。 八 自分で意気ごんでしまったからだ。 九 長沙の遊山の興の涯も知らぬ広がりかた。 一〇 幽鬼のすみか。迷妄の心境。

〔評唱〕且道、這公案、与仰山問僧、近離甚処。僧云、廬山。仰云、曾到五老峰麼。僧云、不曾到。仰云、闍黎不曾遊山。辨緇素看。是同是別。到這裏、須是機関尽、意識忘、山河大地、草芥人畜、無些子滲漏。若不如此、古人謂之猶在勝妙境界。

〔評唱〕且道、這の公案と「仰山、僧に問う、『近ごろ甚処を離れしや』。僧云く、『廬山』。仰云く、『曾て五老峰に到るや』。僧云く、『曾て到らず』。仰云く、『闍黎は曾て遊山せず』という」と緇素を辨じ看よ。是れ同じか是れ別か。這裏に到って、須是らく機関尽き、意識忘じ、山河大地にも草芥人畜にも些子の滲漏も無かるべし。若し此の如くならざれば、古人は之を「猶お勝妙の境界に在り」と謂えり。

一 第三四則・本則を参照。 二 ほんのわずかなしみ。意識の痕跡。 三 まだおめでたい境地に腰をすえたままだ。

不見雲門道、直得山河大地無繊毫過患、猶為転句。不見一色、始是半提。更須知有全提時節、向上一竅、

見ずや、雲門道く、「直得い山河大地に繊毫の過患無きも、猶お転句と為す。一色を見ざれば、始めて是れ半提。更に須らく全提の時節、向上の一竅有るを知

始解穏坐[7]。若透得、依旧山是山、水是水。各住自位、各当本体、如[8]大拍盲人相似。

って、始めて穏坐するを解べし」と。若し透得せば、依旧として山は是れ山、水は是れ水。各おの自位に住し、各おの本体に当って、大拍盲の人の如くに相似ん。

一 雲門文偃(八六四―九四九)。『雲門広録』中では「直得乾坤大地無繊毫過患、猶是転句。不見一色、始是半提。直得如此、更須知有全提時節」と。二 対象によって左右された捉え方。三 あらゆる物質的存在の同一性。四 半分だけの指摘。五 全面的な把握が提起される時。六 人の身体に九つあるとされる竅よりもさらにもう一つ上で機能する竅。第三の眼。七 ゆるぎなく腰が落ち着く。八 色界を超越した人。「拍盲」は、そこひ。

[1]趙州道、鶏鳴丑、愁見起来還漏逗。[2]裙子褊衫箇也無、袈裟形相[4]些些有。[3]裩無襠、袴無口、頭上青灰三五斗。本為修行利済人、誰知翻成[5]不喞嚠。若得真実、到這境界、何人眼不開。一任七顛八倒。一切処都是這境界、都是這時節、[6]十方無壁落、四面亦無門。

趙州道く、「鶏鳴の丑のこく、愁い見る起き来たって還た漏逗するを。裙子褊衫箇つ也無く、袈裟の形相のみ些些に有り。裩に襠無く袴に口無し、頭上に青灰三五斗。本と修行して人を利済わんが為なりしも、誰か知らん翻って不喞嚠と成らんとは」と。若し真実を得て這の境界に到らば、何人か眼開かざらん。七顛八倒するに一任す。一切処都て是れ這の境界、都て是れ這の時節ならば、十方壁落無く、四面亦た門無し。

一 趙州従諗。以下、「十二時歌」の一節。ただし「襠」を「腰」、「本為」を「比望」、「翻成」を「変

作」とする（『古尊宿語要』一・趙州語録下）。二 腰衣と袈裟の下着。三 ももひき（のようなもの）にマチ（股の部分）が無く、足をとおす穴も無い。四 黒い灰。けがれた俗塵。五 冴えない、だらしない。六『雲門広録』下に引く灌渓和尚の語。「壁落」は窓のことか。

所以道、始随芳草去、又逐落花回。雪竇不妨巧。只去他左辺貼一句、右辺貼一句。一似一首詩相似。羸鶴翹寒木、狂猿嘯古台。雪竇引到這裏、自覚漏逗驀云、長沙無限意、咄。如作夢却醒相似。雪竇雖下一喝、[一]未得勦絶。若是山僧即不然。長沙無限意、掘地更深埋。

所以に道う、「始めは芳草に随って去き、又た落花を逐って回る」と。雪竇不妨に巧なり。只だ他の左辺に去いて一句を貼け、右辺にて一句を貼く。一に一首の詩の似くに相似たり。「羸鶴寒木に翹き、狂猿古台に嘯く」と。雪竇引いて這裏に到り、自ら漏逗したるに覚きて驀に云く、「長沙限り無きの意、咄」と。夢を作て却って醒むるが如くに相似たり。雪竇一喝を下すと雖も、未だ勦絶し得ず。若是山僧ならば即ち然らず。長沙限り無きの意、地を掘って更に深く埋めん。

一 徹底した始末をつけていない。

第三七則　盤山三界無法

垂示云、掣電之機[一]、徒労佇思、当[二]空霹靂、掩耳難諧。脳門[三]上播紅旗、耳背後輪双剣。若[四]不是眼辨手親、争能搆得。有般底低頭佇思、意[五]根下卜度、殊不知髑[六]髏前見鬼無数。且道、不落意根、不拘得失、忽有箇恁麼挙[七]覚、作麼生祇対。試挙看。

第三七則　盤山の三界無法

垂示に云く、掣電の機は徒らに佇思を労し、空に当るの霹靂は耳を掩うに諧い難し。脳門の上に紅旗を播かせ、耳の背後に双剣を輪す。若し是れ眼辨じ手親しきにあらずんば、争か能く搆り得ん。有般底は低頭佇思、意根下に卜度り、殊に知らず髑髏の前に鬼を見ること無数なるを。且道、意根に落ちず、得失に拘れず、忽し箇の恁麼に挙覚するもの有らば、作麼生か祇対せん。試みに挙し看ん。

一 稲妻のような働きを摑まえようとしても、思案に暮れるばかりだ。二 空に突然とどろく雷鳴にあったら、耳を掩っても間に合わない。三 大将軍が戦いを挑んで威風堂堂と陣頭に進み出てきたさま。大上段に正法を振りかざして法戦を挑むさまに喩える。四 それと見て取るなり手もピタリと対応する。五 分別によってあれこれ推しはかる。六 枯れたドクロの周りに無数の幽鬼(妄想)が幻出する。『伝灯録』一六・九峰道虔の語。七 啓発・触発される。

【本則】挙。盤山[一]垂語云、三界無法、

【本則】挙す。盤山垂語して云く、「三界無法、〔箭、

〔箭既離弦、無返回勢。月明照見夜行人。中也。識法者懼。好和声便打。〕何処求心。〔莫瞞人好。不労重挙。自点検看。便打云、是什麼。〕

一 盤山宝積。 二 矢が弓弦を離れたからにはもとにもどりようはない。ただこの一筋の道を行くのみ。 三 夜行の禁を犯して堂々と月光のもとを歩くしたたかな「無法」もの。 四 その矢はこの人に命中した。 五 法を心得ている者は自らを慎むものだ。 六 人をコケにしてもらっては困る。 七 かさねて問題にしてくれるまでもない。

〔評唱〕 向北幽州盤山宝積和尚、乃馬祖下尊宿。後出普化一人。師臨遷化、謂衆云、還有人邈得吾真麼。衆皆写真呈師。師皆叱之。普化出云、某甲邈得。師云、何不呈似老僧。普化便打筋斗而出。師云、這漢向後、如風狂接人去在。

既に弦を離るれば、返回る勢無し。月明るく照らし見る夜行の人。中れり。法を識る者は懼る。好し声和に便ち打たん。〕何処にか心を求めん」。〔人を瞞すこと莫くんば好し。重ねて挙するを労せず。自ら点検し看よ。便ち打って云く、是れ什麼ぞ。〕

〔評唱〕 向北の幽州の盤山宝積和尚は、乃ち馬祖下の尊宿なり。後に普化一人を出だす。師、遷化に臨んで衆に謂って云く、「還た人か吾が真を邈き得るもの有りや」。衆、皆な真を写して師に呈す。師、皆な之を叱る。普化出でて云く、「某甲邈き得たり」。師云く、「何ぞ老僧に呈似さざる」。普化便ち筋斗を打して出づ。師云く、「這の漢は向後風狂の如くに人を接し去かん在」と。

一向」は意味の無い接頭語。 二 河北省の地。 三 馬祖道一(七〇九―七八八)。 四 臨済義玄(?―八七六)と交わりのあった型破りの奇僧として知られる。『臨済録』勘弁(岩波文庫一五二頁以下)を参照。 五 肖像画。 六 とんぼ返りをする。

一日示衆云、三界無法、何処求心。四大本空、仏依何住。璿璣不動、寂止無痕。覿面相呈、更無餘事。雪竇拈両句来頌、直是渾金璞玉。不見道、痊病不仮驢駝薬。山僧為什麼道、和声便打。只為佗担枷過状。古人道、聞称声外句、莫向意中求。且道、他意作麼生。直得奔流度刃、電転星飛。若擬議尋思、千仏出世、也摸索他不著。若是深入閫奥、徹骨徹髄、見得透底、盤山一場敗欠。若承言会宗、左転右転底、盤山只得一橛。若是拖泥帯水、声色堆裏転、未夢見盤山在。

一日、衆に示して云く、「三界無法、何処にか心を求めん。四大本と空、仏は何に依ってか住せん。璿璣動かず、寂止として痕無し。覿面に相呈す、更に餘事無し」と。雪竇、両句を拈げ来たり頌すは、直に是れ渾金璞玉なり。見道ずや、「病を痊すには驢駝の薬を仮らず」と。山僧為什麼にか道う、「声和に便ち打たん」と。只だ佗の担枷過状せるが為なり。古人道く、「声外の句を称するを聞いて、意中に求むること莫れ」と。且道、他の意作麼生。直得には奔流度刃、電転じ星飛ぶ。若し擬議尋思せば、千仏出世すとも也た他を摸索り著てられず。若是深く閫奥に入りて、徹骨徹髄、見得透せる底ならば、盤山は一場の敗欠なり。若し言を承けて宗を会し、左転右転する底ならば、盤山は只だ一橛を得たり。若是拖泥帯水し、声色堆裏に

転ぜば、未だ夢にも盤山を見ざる在。

＊若承〜一橛〔一六字〕　福本・蜀本に無し。

一 北斗七星。 二『伝灯録』七・盤山宝積章では「寂爾無言」に作る。 三 まだ精錬してない金と彫琢してない玉。飾りけのない本来の美しさをいう。 四 病気を治すのに驢馬の背に満載するほど多量の薬は必要ない。 五 自分で首枷をはめた上に罪状書きを提出する。 六 未詳。 七「声前一句」(第七則の垂示)に同じ。 八 すばやい動きや判断の喩え。 九 へやの奥。転じて、仏法の奥義。 一〇 ベトベトの泥まみれ。ここは、論理を使ってあれやこれやと説くこと。 一一 現象の世界に終始する。

[一]五祖先師道、透過那辺、方有自由分。不見[二]三祖道、[三]執之失度、必入邪路。放之自然、体無去住。若向這裏道、無仏無法、又打入鬼窟裏去。古人謂之[四]解脱深坑。本是善因而招悪果。所以道、[五]無為無事人、猶遭金鎖難。也須是窮到底始得。若向無言処言得、行不得処行得、謂之[六]転身処。三界無法、何処求心、[七]你若作情解、只在他言下死却。雪竇見処、[八]七穿八穴、所

五祖先師道く、「那辺を透過して、方めて自由の分有り」と。見ずや三祖道く、「之に執すれば度を失し、必ず邪路に入る。之を放てば自然にして、体に去住無し」と。若し這裏に向いて「無仏無法」と道うも、又た鬼窟裏に打入し去る。古人之を「解脱の深坑」と謂う。本と是れ善因なれども悪果を招く。所以に道う、「無為無事の人も、猶お金鎖の難に遭う」と。也た須是らく底まで窮め到りて始めて得し。若し無言の処に向いて言い得、行い得ざる処に行い得ば、之を転身の処と謂う。「三界無法、何処にか心を求めん」という

以頌出。

に、你若し情解を作さば、只だ他の言下に在いて死却せん。雪竇の見処は七穿八穴、所以に頌出す。

一 圜悟の師、五祖法演(?—一一〇四)。 二 僧璨(?—六〇六)。 三『信心銘』の句。物にとらわれると尺度を失い、きっと間違った路に入りこむ。手をはなせば本来自然で、道自体は行くことも住まることもない。 四 解脱することに執われることが一層深い迷いの穴に落ちこむこととなる。もと『大集経』一三の「堕解脱坑、不能自利及以利他」に基づく。 五 無為無事の人も、その境位に安住することで金のくさりに縛られる。盤山の語。ただし「遭」を「是」に作る(『伝灯録』七)。 六 高次の世界への脱皮。 七 本質的につかんだもの。これだと見究めたもの。 八 (そのような情解を)どこもかしこも完膚なきまで突き破る。

【頌】 三界無法、〔言猶在耳。〕何処求心。〔不労重挙。自点検看。打云、是什麼。〕白雲為蓋、〔[一]頭上安頭。千重万重。〕流泉作琴。〔聞麼。[二]相随来也。一聴一堪悲。〕一曲両曲無人会、〔[三]不落宮商、非干角徴。[四]借路経過、五音六律尽分明。*自領出去。聴則聾。〕雨過夜塘秋水深。〔[五]迅雷不及掩耳。直得拖泥帯水。在什麼処。便

【頌】 三界無法、〔言猶お耳に在り。〕何処にか心を求めん。〔重ねて挙するを労せず。自ら点検し看よ。打って云く、是れ什麼ぞ。〕白雲を蓋と為し、〔頭の上に頭を安く。千重万重。〕流泉を琴と作す。〔聞くや。相随い来たる。一たび聴けば一たび悲しむに堪えたり。〕一曲両曲人の会する無く、〔宮商に落ちず、角徴に干わるに非ず。路を借りて経過すれば、五音六律尽く分明。自ら領して出で去れ。聴けば則ち聾す。〕雨過ぎし夜塘に秋水深し。〔迅雷耳を掩うに及ばず。直得は拖泥

打。」

帯水。什麼処にか在る。便ち打つ。」

＊自領〜則聾〔七字〕　福本・蜀本に無し。

一 重ね重ねに余計なことをしている。 二 調子を合わせてきた。 三 いかなる音階にもはまらぬ調べ。
四 人が作ってくれた道（雪竇が暗示する道）を通らせてもらう。 五 迅雷は耳を掩うにいとまもない。

〔評唱〕　三界無法、何処求心、雪竇頌得、一似華厳境界[一]。有者道、雪竇無中唱出。若是[二]眼皮綻底、終不恁麼会。雪竇去他傍辺貼両句道、白雲為蓋、流泉作琴。蘇内翰[三]見照覚[四]有頌[五]云、渓声便是広長舌[六]、山色豈非清浄身。夜来八万四千偈、他日如何挙似人。雪竇借流泉作一片長舌頭。

〔評唱〕「三界無法、何処にか心を求めん」と、雪竇頌し得て、一に華厳の境界に似たり。有る者は道う、「雪竇は無中より唱い出だす」と。若是眼皮綻ぶる底ならば、終に恁麼には会せず。雪竇他の傍辺に去いて両句を貼けて道く、「白雲を蓋と為し、流泉を琴と作す」と。蘇内翰、照覚に見えて頌有り、云く、「渓声は便ち是れ広長舌、山色豈に清浄身に非ざらんや。夜来八万四千の偈、他日如何に人に挙似さん」と。雪竇は「流泉」を借りて一片の長舌頭と作す。

一『華厳経』の三界唯心（一切世界は心の顕現である）の境地。 二 まぶたを開いた人、具眼の者。 三 蘇軾（一〇三六―一一〇一）。 四 照覚禅師、東林常総（一〇二五―一〇九一）。 五『会元』一七・内翰蘇軾居士章に見える。 六 仏の説法。

所以道、一曲両曲無人会。不見九[一]

所以に道う、「一曲両曲人の会する無し」と。見ず

峰虔和尚道、[二]還識得命麼。流泉是命、[三]湛寂是身。千波競起是文殊家風、[四]一亙晴空是普賢境界。流泉作琴、一曲両曲無人会、這般曲調、也須是知音始得。若非其人、徒労側耳。[五]古人道、[六]聾人也唱胡家曲、好悪高低総不聞。[七]雲門道、挙不顧、即差互。擬思量、何劫悟。挙是体、顧是用。未挙已前、朕兆未分已前見得、[八]坐断要津。若朕兆纔分見得、便有照用。若朕兆分後見得、[九]落在意根。

や九峰の虔和尚道く、「還た命を識得するや。流泉は是れ命、湛寂は是れ身。千波競い起るは、是れ文殊の家風。一亙の晴空は、是れ普賢の境界」と。「流泉を琴と作す、一曲両曲人の会する無し」と、這般る曲調、也た須是らく知音にして始めて得し。若し其の人に非ずんば、徒らに耳を側つるを労するのみ。古人道く、「聾人も也た胡家の曲を唱うも、好悪高低総て聞かず」と。雲門道く、「挙するに顧みざれば即ち差互う。思量せんと擬せば何劫にか悟らん」と。「挙」は是れ体、「顧」は是れ用。未だ挙せざる已前、朕兆未だ分れざる已前に見得せば、要津を坐断せん。若し朕兆分るるや纔やに見得せば、便ち照用有らん。若し朕兆分れし後に見得せば、意根に落在ん。

一 九峰道虔。石霜慶諸(八〇七―八八八)の法嗣。 二 『伝灯録』一六・九峰道虔章には「諸兄弟還識得命麼。欲知命、流泉是命、湛寂是身。千波競涌是文殊境界、一亙晴空是普賢牀榻」と。 三 静かなよどみ。 四 満天の青空。 五 道場如訥。 六 聾者でも胡家(胡笳)の曲を歌うには歌うが、好悪高低はさっぱり聞こえていない。自分の言っていることの意味がわかっていないことの喩え。『伝灯録』一

五・如訥章では「聾人也唱胡笳調、好悪高低自不聞」と。七 雲門文偃（八六四—九四九）。八 問題の勘どころを押さえ込む。九 分別に堕する。

雪竇忒煞慈悲、更向你道、却似雨過夜塘秋水深。此一頌、曾有人論量、美雪竇有翰林之才。雨過夜塘秋水深、也須是急著眼看。更若遅疑、即討不見。

雪竇忒だ慈悲にして、更に你に道う、「却って雨過ぎし夜塘に秋水深きに似たり」と。此の一頌、曾て人の論量する有り、雪竇に翰林の才有りと美む。「雨過ぎし夜塘に秋水深し」とは、也た須是らく急と眼を著けて看るべし。更に若し遅疑せば、即ち討ぬるも見えず。

一 一説に蘇軾という。二 是非・長短をあげつらう。三 第一級の文筆の才。四 咄嗟に反応できずもたもたする。

第三八則　風穴鉄牛機

垂示云、若論漸也[一]、返常合道、鬧市[二]裏七縦八横。若論頓也[三]、不留朕迹、千聖亦摸索不著。儻或不立頓漸、又作麼生。快人一言[四]、快馬一鞭、正恁麼時、誰是作者。試挙看。

第三八則　風穴の鉄牛の機

垂示に云く、若し漸を論ぜば、常に返いて道に合す、鬧市裏に七縦八横。若し頓を論ぜば、朕迹を留めず、千聖も亦た摸索不著。儻或し頓漸を立てずんば、又た作麼生。快人は一言、快馬は一鞭、正に恁麼なる時、誰か是れ作者なる。試みに挙し看ん。

一「漸」は漸次に導く、方便の教え。それは常識に反しながら道に合するもの。法華全挙の上堂に「語漸也返常合道、論頓也不留朕迹。直饒論其頓返其常、也是抑而為之」(『古尊宿語要』三)。二 世俗に在りながら自由自在。三「頓」は究極の真理を一挙に示すこと。「朕迹」は痕迹。四 聡い人間は一言いっただけで全てを悟り、駿馬は一鞭で全力疾走する。『大智度論』三六に「若利根者、一説二説便悟、不須種種重説、譬如快馬下一鞭便走、駑馬多鞭乃去」と。

【本則】挙。風穴[一]在郢州[二]衙内[三]、上堂云、〔倚[四]公説禅。道什麼。〕祖師心印[五]、状[六]似鉄牛之機[七]。〔千人万人撼不動。〕諸訛[八]節角、在什麼処。三要印開[九]、不

【本則】挙す。風穴、郢州の衙内に在って上堂して云く、〔公に倚って禅を説く。什麼を道うぞ。〕「祖師の心印、鉄牛の機に状似たり。〔千人万人撼かせども動かず。〕諸訛節角、什麼処にか在る。三要印開して鋒鋩

犯鋒鋩。〕[10]去即印住、[11]〔正令当行。
錯。〕[12]住即印破。[13]〔再犯不容。看取令
行時。摻、便打。〕只如不去不住、
〔看無頓置処。多少誵訛。〕印即是、
不印即是。[14]〔天下人、頭出頭没有分。
[15]文彩已彰。但請掀倒禅床、喝散大
衆。〕時有[16]盧陂長老、出問、某甲有
鉄牛之機、〔釣得一箇[17]暗暁得。不妨
奇特。〕請師[18]不搭印。〔好箇話頭、争
奈誵訛。〕穴云、[19]慣釣鯨鯢澄巨浸、
却嗟蛙歩驟泥沙。〔似鶻捉鳩。[20]宝網
漫空。[21]神駒千里。〕陂佇思。〔可惜許。
也有[22]出身処。可惜放過。〕穴喝云、
長老何不進語。〔[23]攙旗奪鼓。[24]炒鬧来
也。〕陂擬議。〔三回死了。両重公
案。〕穴打一払子。〔好打。這箇令、
須是恁麼人行、始得。〕穴云、還記

を犯さず。〕去れば即ち印は住し、〔正令当に行ぜらる。
錯てり。〕住すれば即ち印は破す。〔再犯容さず。令の
行ぜらる時を看取せよ。摻。便ち打つ。〕只だ去らず
住せざるが如きは、〔頓置く処無きを看る。多少の誵
訛。〕印するが即ち是か、印せざるが即ち是か」。〔天
下の人、頭出頭没するに分有り。文彩已に彰らかなり。
但だ請う禅床を掀倒し、大衆を喝散せんことを。〕時
に盧陂長老なるものあり、出でて問う、「某甲、鉄牛
の機あり、〔一箇の暗暁得を釣り得たり。不妨に奇特
なり。〕請う師、印を搭せざれ」。〔好箇き話頭なるも、
誵訛なるを争奈せん。〕穴云く、「鯨鯢を釣って巨浸を
澄ましむるに慣れて、却って嗟く蛙歩の泥沙に驟ぶこ
とを」。〔鶻の鳩を捉うるが似し。宝網、空に漫たり。
神駒千里。〕陂、佇思す。〔可惜許。也た出身の処有り。
惜しむべし放過するを。〕穴、喝して云く、「長老、何
ぞ進語せざる」。〔旗を攙り鼓を奪う。炒鬧し来たれ
り。〕陂、擬議す。〔三回死し了る。両重の公案。〕穴、

得[25]話頭麼。試挙看。〔何必雪上加霜。〕陂擬開口。〔一死更不再活。這漢[26]鈍置殺人。遭他毒手。〕穴又打一払子。[27]牧主云、仏法与王法一般。〔灼然、却被傍人覰破。〕穴云、見箇什麼道理。〔也好与一拶。却回鎗頭来也。〕牧主云、[28]当断不断、返招其乱。〔似則似、是則未是。須知傍人有眼。[29]東家人死、西家人助哀。〕穴便下座。〔将錯就錯。見機而変。且得参学事畢。〕

打つこと一払子。〔好く打て。這箇の令、須是らく恁麼なる人の行じて始めて得し。〕穴云く、「還た話頭を記得すや。試みに挙し看よ」。〔何ぞ必ずしも雪上に霜を加えん。〕陂、口を開かんと擬す。〔一たび死せば更に再活せず。這の漢、人を鈍置殺す。他の毒手に遭う。〕穴又た打つこと一払子。牧主云く、「仏法と王法と一般なり」。〔灼然、却って傍人に覰破さる。〕穴云く、「箇の什麼の道理をか見る」。〔也た一拶を与うるに好し。却って鎗頭を回し来たれり。〕牧主云く、「当に断ずべくして断ぜず、返って其の乱を招く」。〔似たることは則ち似たるも、是なることは則ち未だ是ならず。須らく知るべし傍人に眼有ることを。東家の人死して、西家の人哀を助く。〕穴、便ち下座す。〔錯を将て錯を就す。機を見て変ず。且は参学の事畢るを得たり。〕

一 風穴延沼(八九六—九七三)。 二 今の河南省信陽県。 三 州の役所。 四 役所お声がかりの禅談義。
五 禅の精神の伝統を印に喩える。 六 「状似」で「似る」という意。 七 凄まじい動きを秘めた、てこ

でも動かぬという働き。八 ことさらに難しげなところ。九「三要」の印を捺して印を持ちあげる。一〇 心印から離れようとすると、心印はそこに定着する。一一 天子が定めた法令が目の当たりに実施された。一二 心印が定着してしまうと、心印は自ら壊れることになる。一三 過を知って改めない者を断罪する語。一四（この問いを投げかけられては）人はみなアップアップすることは必定だ。一五 すでに痕跡が表に出ている。一六 如何なる人かは不明。一七 独善的な悟りに安住するやから。一八 私を印可しないでくれ。一九 いつも大くじらを釣り上げて大海を澄みわたらせているものだから、泥の中をはいずりまわる蛙を見ると何とも哀れだ。二〇 多くの宝を結んだ網が空一面に張り巡らされた。何ものをも取り逃さない態勢。二一 駿馬は一気に千里を駆ける。すぐれた禅匠の機用の喩え。二二 束縛から脱出した境地。二三 敵軍の旗と鼓とをひったくって動きがとれなくする。二四 かまびすしいことだ。二五 問答の主題。二六 人をとことんコケにしてくれた。二七 郢州の刺史。二八 処断すべきところをそうしないと、逆に反乱を招いてしまう。『史記』斉悼恵王世家などに道家の言として見える。二九 義理を立てた応対。第三二則・本則の著語に既出。

〔評唱〕風穴乃臨済下尊宿。臨済当[一]初在黄檗会下栽松次、檗云、深山裏栽許多松作什麼。済云、一与山門作境致、二与後人作標榜。道了便钁地一下。檗云、雖然如是、子已喫二十棒了也。済又打地一下云、嘘嘘[二]。檗云、吾宗到汝、大興於世。潙山喆云、

〔評唱〕風穴は乃ち臨済下の尊宿なり。臨済の当初黄檗の会下に在って松を栽うる次、檗云く、「深山裏に許多の松を栽えて什麼か作ん」。済云く、「一には山門の与に境致と作し、二には後人の与に標榜と作さん」と。道い了って便ち地を钁すこと一下。檗云く、「是の如くなりと雖然も、子已に二十棒を喫し了れり」。済又た地を打つこと一下して云く、「嘘嘘」と。檗云

臨済恁麼、大似平地喫交[四]。雖然如是、臨危不変、始称真丈夫。檗云、吾宗到汝大興於世、大似憐[五]児不覚醜。後来潙[六]山問仰[七]山、黄檗当時只嘱付臨済一人、別更有在。仰山云、有。只是年代深遠、不欲挙似和尚。潙山云、雖然如是、吾亦要知。但挙看。仰山云、一人指[八]南、呉越令行、遇大風即止。此乃讖風穴也。

く、「吾が宗、汝に到って大いに世に興らん」と。潙山の喆云く、「臨済の恁麼なるは、平地に喫交するに大いに似たり。是の如くなりと雖然も、危きに臨んで変ぜずして、始めて真の丈夫と称す。檗の『吾が宗は汝に到って大いに世に興らん』と云うは、児を憐んで醜きを覚えざるに大いに似たり」と。後来に潙山、仰山に問う、「黄檗は当時只だ臨済一人に嘱付するか、別に更に在る有りや」。仰山云く、「有り。只だ是れ年代深遠なり、和尚に挙似するを欲せず」。潙山云く、「是の如くなりと雖然も、吾れ亦た知らんと要す。但だ挙し看よ」。仰山云く、「一人南を指して、呉越に令行ぜん、大風に遇わば即ち止まん」と。此れ乃ち風穴を讖するなり。

一 以下、『臨済録』行録（岩波文庫一八五頁〜）を参照。 二 喉の奥から息を長く吐きながら鋭い音を出す。「ひゅう」という長嘯。 三 大潙慕喆（?—一〇九五）。 四 平らなところでばったり蹴つまずく。 五 可愛さのあまり我が子の醜さも分からない。 六 潙山霊祐（七七一—八五三）。 七 仰山慧寂（八〇七—八八三）。 八 予言する。

穴初参雪峰五年、因請益臨済入堂、両堂首座、斉下一喝。僧問臨済、還有賓主也無。済云、賓主歴然。穴云、未審意旨如何。峰云、吾昔与巌頭・欽山去見臨済、在途中、聞已遷化。若要会他賓主話、須是参他宗派下尊宿。穴後又見、瑞巌常自喚主人公、自云、喏、復云、惺惺著。他後莫受人瞞却。穴云、自拈自弄、有什麼難。後在襄州鹿門、与廓侍者過夏。廓指他来参南院。穴云、入門須辨主、端的請師分。一日遂見南院、挙前話云、某甲特来親覲。南院云、雪峰古仏。

穴、初め雪峰に参ずること五年、因みに「臨済、堂に入るや、両堂の首座、斉しく一喝を下す。僧、臨済に問う、『還た賓主有り也無』。済云く、『賓主歴然たり』」というを請益す。穴云く、「未審、意旨如何」。峰云く、「吾れ昔、巌頭・欽山と去きて臨済に見えんとするも、途中に在って已に遷化するを聞く。若し他の賓主の話を会せんと要せば、須是らく他の宗派下の尊宿に参ずべし」と。穴、後に又た瑞巌の常に自ら「主人公」と喚んで、自ら「喏」と云い、復た「惺惺著。他後、人の瞞却を受くること莫れ」と云うを見て、穴云く、「自ら拈じ自ら弄するに、什麼の難きことか有らん」と。後に襄州の鹿門に在って、廓侍者と与に夏を過す。廓、他を指し来たり南院に参ぜしむ。穴云く、「門を入れば須らく主を辨ずべし、端的は師の分つを請う」と。一日、遂に南院に見えて前話を挙して云く、「某甲特に来たりて親しく覲ゆ」。南院云く、「雪峰は古仏なり」と。

＊又見〜一日遂(六九字)　福本・蜀本に無し。

一 雪峰義存(八二二―九〇八)。 二 岩波文庫『臨済録』上堂四(二二頁)を参照。 三 巌頭全豁(八二八―八八七)。 四 欽山文邃(ぶんすい)。 五 瑞巌師彦(しげん)。巌頭の法嗣。以下、文脈が通じ難い。錯簡か。 六 目を醒ませ。 七 本当のところを隠して相手をバカにする。 八 湖北省襄陽県、鹿門山の華厳院。 九 名は守廓。興化存奨(八三〇―八八八)の法嗣。 一〇 南院慧顒(えぎょう)(八六〇―九三〇?)。

一日見鏡清。清問、近離甚処。穴云、自離東来。清云、還過小江否。穴云、大舸独飄空、小江無可済。清云、鏡水図山、鳥飛不渡。子莫盗聴遺言。穴云、滄溟尚怯蒙輪勢、列漢飛帆渡五湖。清竪起払子云、争奈這箇何。穴云、這箇是什麼。清云、果然不識。穴云、出没巻舒、与師同用。清云、杓卜聴虚声、熟睡饒譫語。穴云、沢広蔵山、理能伏豹。清云、赦罪放愆、速須出去。穴云、出即失。乃便出、至法堂上自謂言、大丈夫公

一日(あるひ)、鏡清(きょうしょう)に見(まみ)ゆ。清問う、「近ごろ甚処(いずこ)を離れしや」。穴云く、「自ら東を離れ来たる」。清云く、「還た小江を過ぐる否(や)」。穴云く、「大舸(たいか)独り空に飄(ひるがえ)り、小江済(わた)るべき無し」。清云く、「鏡水図山、鳥飛んで渡らず。子(なんじ)遺言を盗聴すること莫れ」。穴云く、「滄溟(うなばら)も尚お怯る蒙輪の勢い、列漢(おおぞら)に帆を飛ばして五湖を渡る」。清、払子(ほっす)を竪起(た)てて云く、「這箇(これ)を争奈何(いかん)せん」。穴云く、「這箇(これ)とは是れ什麼(なん)ぞ」。清云く、「果然(はた)して識らず」。穴云く、「出没巻舒、師と同用なり」。清云く、「杓卜(しゃくぼく)して虚声(こだま)を聴き、熟睡して譫語(たわごと)饒(おお)し」。穴云く、「沢広くして山を蔵し、理(り)能にして豹を伏す」。清云く、「罪を赦(ゆる)し愆(とが)を放(ゆる)す、速やかに須らく出で去るべ

案未了、豈可便休。[一六]却回再入方丈。清坐次便問、某適来、輙[一七]呈駭見、冒瀆尊顔、伏蒙和尚慈悲、未賜罪責。清云、適来従東来、豈不是[一八]翠巌来。穴云、雪竇親棲宝蓋東。清云、不逐亡羊狂解息、却来這裏念詩篇。穴云、路逢剣客須呈剣、不是詩人莫献詩。清云、詩速秘却、略借剣看。穴云、[一九]県首餌人携剣去。清云、不独[二〇]触風化、亦自[二一]顕顢頇。穴云、若不触風化、焉明古仏心。清云、何名古仏心。穴云、[二二]再許允容、師今何有。清云、東来衲子、[二三]菽麦不分。[二四]穴云、[二五]只聞不以而以、何得抑以而以。[二六]清云、巨浪湧千尋、澄波不離水。清云、[二七]一句截流、万機寝削。穴便礼拝。[二八]清以払子点三点云、俊哉、[二九]且坐喫茶。

し」。穴云く、「出づれば即ち失せん」。乃便ち出でて法堂上に至り、自ら謂いて言く、「大丈夫、公案未だ了ぜず、豈に便ち休むべけんや」と。却回して再び方丈に入る。清、坐する次に便ち問う、「某適来は輙ち駭見を呈して尊顔を冒瀆し、伏して和尚の慈悲を蒙るも、未だ罪責を賜らず」。清云く、「適来東より来たるは、豈に是れ翠巌より来たるにあらずや」。穴云く、「雪竇親しく棲む宝蓋の東」。清云く、「亡羊を逐わずして狂解息みしに、却って這裏に来たりて詩篇を念ず」。穴云く、「路に剣客に逢わば須らく剣を呈すべし、是れ詩人にあらずんば詩を献ずること莫れ」。清云く、「詩は速やかに秘却せよ、略か剣を借り看ん」。穴云く、「首を県ぬる餌人剣を携えて去れり」。清云く、「独り風化に触るるのみにあらず、亦た自ら顢頇を顕わす」。穴云く、「若し風化に触れずんば、焉ぞ古仏の心を明めん」。清云く、「何をか古仏の心と名づく」。穴云く、「再び許め允容す、師は今何か有る」。清云く、

一東来の衲子、菽麦をも分たず」。穴云く、「只だ以まずして以むことを聞く、何ぞ抑て以めて以むことを得ん」。清云く、「巨浪湧くこと千尋なるも、澄波水を離れず」。清云く、「一句流れを截ちて、万機寝削す」と。穴便ち礼拝す。清、払子を以て点ずること三点して云く、「俊なる哉、且は坐して茶を喫せよ」と。

一 この一段、『会元』一一・風穴延沼章に見える。それによると、風穴が二五歳のときのこと。二 鏡清道怤(八六八―九三七)。三 越州の曹娥江。四『会元』は「也無」に作る。五 大きな船。六 鏡に映った川、絵に描きとめられた山。観念で想い描いた世界に喩えるが、しかし実はそれが現実のそれ以上の実在性を具えるという含み。『会元』は「鏡水秦山」に作る。七『会元』は「道聴途言」に作る。八 戦艦。九 太湖のことか。一〇 隠顕・進退の自在なはたらき。その手の内は同じ。一一 杓を用いた占い。ここは、根拠の無い俗信をいう。一二 熟睡している者が言うのはたわごとばかり。一三 沢も広いと山を隠し、山猫も能があれば豹を屈伏させる。一四『会元』は「捨罪放愆」に作る。一五『会元』は「夫行脚人、因縁未尽其善、不可便休去」に作る。一六 以下一一字、『会元』は「却回曰」に作る。一七 以下三字、『会元』は「陳小駮」に作る。ともに、バカなことを言うの意。一八 翠巌山。以下に見える雪竇、宝蓋とともに明州(浙江省寧波)の名勝。一九 干将・莫邪の子、眉間尺が父のかたき楚王を討とうとしたとき、甑山の人と名のる男がその役を買って出たので、眉間尺は己れの首と名剣とを与え、男は去って楚王の首をはねたという。第一〇〇則・頌の評唱を参照。二〇 教化のために差し障りとなる。二一 自らがピンボケであることを暴露する。二二 再び方丈に入って請益することを

お認め下さいましたが、さて……。二三 まめと麦の区別がつかない。非常に愚かなこと(『左伝』成公一八年)。二四 二字衍字。『会元』に無し。二五 『会元』は「祇聞不已而已、何得抑已而已」に作る。二六 「穴云」の誤り。『会元』は「師曰」に作る。二七 その一言であらゆる意識の流れが断ち切られ、すべての作用が消えてしまった。二八 以下、『会元』は「清曰、衲子俊哉、衲子俊哉」に作る。二九 まあ坐って茶など一服召し上がれ。

風穴初到南院、入門不礼拜。院云、入門須辨主。穴云、端的請師分。院左手拍膝一下。穴便喝。院右手拍膝一下。穴亦喝。院挙左手云、這箇即從闍黎。又挙右手云、這箇又作麼生。穴云、瞎。院遂拈拄杖。穴云、作什麼。某甲奪却拄杖、打著和尚。莫言不道。院便擲下拄杖云、今日被這黄面浙子鈍置一上。穴云、和尚大似持鉢不得、詐道不飢。院云、闍黎莫曾到此間麼。穴云、是何言歟。院云、好好借問。穴云、也不得放過。院云、

風穴初めて南院に到り、門に入るも礼拝せず。院云く、「門に入れば須らく主を辨ずべし」。穴云く、「端的は師の分つを請う」。院、左手もて膝を拍つこと一下。穴、便ち喝す。院、右手もて膝を拍つこと一下。穴亦た喝す。院、左手を挙げて云く、「這箇は即ち闍黎に従す」。又た右手を挙げて云く、「這箇は又た作麼生」。穴云く、「瞎」。院、遂に拄杖を拈る。穴云く、「什麼をか作す。某甲拄杖を奪却って、和尚を打著たん。道わずと言う莫れ」と。院、便ち拄杖を擲下って云く、「今日這の黄面の浙子に鈍置一上せらる」。穴云く、「和尚、持鉢し得ざるに、詐って飢えずと道うに大いに似たり」。院云く、「闍黎は曾て此間に到ること莫き

且坐喫茶。你看、俊流自是機鋒峭峻。南院亦未辨得他。至次日、南院只作平常問云、今夏在什麼処。穴云、鹿門与廓侍者同過夏。院云、元来親見作家来。又云、佗向你道什麼。穴云、始終只教某甲一向作主。院便打推出方丈云、這般納敗欠底漢、有什麼用処。穴自此服膺、在南院会下作園頭[四]。一日院到園裏問云、南方一棒[五]、作麼生商量[六]。穴云、作奇特商量。穴云、和尚此間作麼生商量。院拈棒起云、棒下無生忍[七]、臨機不譲師。穴於是豁然大悟。

や」。穴云く、「是れ何の言ぞや」。院云く、「好く好く借問よ」。穴云く、「也た放過すること不得れ」。院云く、「且は坐して茶を喫せよ」と。你看よ、俊流は自ら是れ機鋒峭峻なるを。南院も亦た未だ他を辨得せず。次の日に至り、南院只だ平常の問いを作して云く、「今夏什麼処にか在りし」。穴云く、「鹿門にて廓侍者と同に夏を過せり」。院云く、「元来、親しく作家に見え来たる」。又た云く、「佗は你に什麼とか道いし」。穴云く、「始終只だ某甲をして一向に主と作らしむ」。院、便ち打って、方丈より推し出だして云く、「這般る敗欠を納るる底の漢、什麼の用処か有らん」と。穴、此れより服膺して、南院の会下に在って園頭と作る。一日、院、園裏に到り問うて云く、「南方の一棒、作麼生か商量する」。穴云く、「奇特の商量を作す」。穴云く、「和尚此間にて作麼生か商量する」。院、棒を拈り起げて云く、「棒下の無生忍、機に臨んでは師にも譲らず」と。穴、是に於て豁然として大悟す。

一「黄面」は、元来はインド人のこと。「黄頭」とも言い、禅録では釈尊を指す。ここは、嘴が黄色い、青二才のということか。「浙子」は、風穴が浙（いまの浙江省）出身であることによる。二 頭が上がらなくさせる、コケにする。「一上」は「一下」「一場」に同じ。三 しっかり、きちんと。四 菜園の管理者。園主。五 鏡清の指導法を指す。六 修行者に対応する。七 真理を悟った者は、たとい師の棒を受けても引き下がりはしない。「無生忍」は無生法忍。一切のものが生滅変化を超えているという真理を体得すること。

是時五代離乱。郢州牧主、請師度夏。是時臨済一宗大盛。他凡是問答垂示、不妨語句尖新、攢花簇錦、字字皆有下落。一日牧主請師上堂。示衆云、祖師心印、状似鉄牛之機。去*即印住、住即印破。只如不去不住、印即是、不印即是。何故不似石人木馬之機、直下似鉄牛之機。無你撼動処。你才去、即印住、你才住、即印破、教你百雑砕。只如不去不住、印即是、不印即是。看他恁麼垂示、可

是の時、五代離乱す。郢州の牧主、師を請きて夏を度さしむ。是の時、臨済の一宗大いに盛んなり。他凡是そ問答垂示するや、不妨に語句尖新にして、花を攢め錦を簇めて、字字皆な下落有り。一日、牧主、師を請きて上堂せしむ。衆に示して云く、「祖師の心印、鉄牛の機に状似たり。去れば即ち印は住し、住すれば即ち印は破す。只だ去らず住せざるが如きは、印するが即ち是か、印せざるが即ち是か」と。何故ぞ、石人木馬の機に似ずして、直下に鉄牛の機に似たるや。你が撼動かす処無し。你が去るや才や即ち印は住し、你が住するや才や即ち印は破して、你をして百雑砕なら

謂鉤頭有餌。

しむ。「只だ去らず住せざるが如きは、印するが即ち是か、印せざるが即ち是か」と。看よ他恁麼に垂示するは、「鉤頭に餌有り」と謂うべし。

＊去即〜不印即是〔二一字〕　福本・蜀本に無し。

一 後梁・後唐・後晋・後漢・後周の五朝（九〇七—九六〇）。 二 言辞の秀麗さの喩え。 三 落ち着くところ。決着。 四 こっぱみじん。

是時座下有盧陂長老、亦是臨済下尊宿。敢出頭来、与他対機、便転他話頭、致箇問端。不妨奇特。道、某甲有鉄牛之機、請師不搭印。争奈風穴是作家、便答他道、慣釣鯨鯢澄巨浸、却嗟蛙歩驪泥沙。也是言中有響。雲門云、垂鉤四海、只釣獰龍。格外玄機、為尋知己。巨浸、乃十二頭水牯牛為鉤餌、却只釣得一蛙出来。此語且無玄妙、亦無道理計較。古人道、若向事上覰則易、若向意根下卜度、

是の時、座下に盧陂長老なるもの有り、亦た是れ臨済下の尊宿なり。敢て出頭し来たり、他の与に機に対して、便ち他の話頭を転じて、箇の問端を致す。不妨に奇特なり。道く、「某甲鉄牛の機有り。請う師、印を搭せざれ」と。争奈せん風穴は是れ作家なり、便ち他に答えて道く、「鯨鯢を釣って巨浸を澄ましむるに慣れて、却って嗟く蛙歩の泥沙に驪ぶことを」と。也た是れ言中に響有り。雲門云く、「鉤を四海に垂れて、只だ獰龍を釣る。格外の玄機は、知己を尋ねんが為なり」と。巨浸に乃ち十二頭の水牯牛を鉤餌と為して、却って只だ一蛙を釣り得て出だし来たれり。此の語且

則没交渉。盧陂佇思、見之不取、千載難逢。可惜許。所以道、直饒講得千経論、一句臨機下口難。其実盧陂要討好語対他、不欲行令、被風穴一向用攙旗奪鼓底機鋒、一向逼将去、只得没奈何。俗諺云、陣敗不禁苕帚掃。当初更要討鎗法敵他、等你討得来、即頭落地也。牧主亦久参風穴、解道、仏法与王法一般。穴云、你見箇什麼。牧主云、当断不断、返招其乱。風穴渾是一団精神、如水上葫蘆子相似。捺著便転、按著便動、解随機説法。若不随機、翻成妄語。穴便下座。

は玄妙無く、亦た道理計較無し。古人道く、「若し事上に向いて覰れば則ち易きも、若し意根下に向いて卜度れば、則ち没交渉」と。盧陂佇思す、之を見て取らずんば、千載にも逢い難し。可惜許。所以に道う、「直饒千の経論を講得するも、一句、機に臨んで口を下すこと難し」と。其の実は盧陂、好語を討めて他に対えんと要して、令を行ぜんとは欲せざれば、風穴に一向に旗を攙り鼓を奪う底の機鋒を用て、一向に逼め将ち去られて、只だ奈何ともすること没きに得れり。俗諺に云く、「陣敗れて苕帚もて掃くに禁えず」と。当初に更に鎗法を討めて他に敵せんと要するも、你が討め得来たりし等には、即ち頭地に落ちん。牧主も亦た久しく風穴に参じ、「仏法と王法と一般なり」と解く道えり。穴云く、「你、箇の什麼をか見る」。牧主云く、「当に断ずべくして断ぜず、返って其の乱を招く」と。風穴は渾て是れ一団の精神にして、水上の葫蘆子の如くに相似たり。捺著くれば便ち転じ、按著うれば

便ち動じて、解く機に随って説法す。若し機に随わずんば、翻って妄語と成らん。穴、便ち下座す。

一 こだまとなって響きわたる見事な発言。名文句をほめるときの常套語。二 梁山縁観の誤り。語は第三則、一二則に既出。なお、三交智嵩の上堂にも「垂鉤四海、祇釣獰龍。格外玄談、為求知識」と。三『荘子』外物に「任公子為大鉤・巨緇、五十犗以為餌……」と、五〇頭の牛を餌にして大魚を釣る話が見える。四 龍牙居遁(八三五—九二三)。五 龍牙の頌の句。『伝灯録』二九は「直饒」を「饒君」とし、『祖堂集』八では「直饒講」を「時人尽」とする。六 その場を牛耳る。七 敗軍の兵が掃いて捨てきれぬほどになる。八 押さえつけるとするりと向きを変える。

*只如臨済有四賓主話[一]、夫参学之人、大須子細。如賓主相見、有語論賓主往来。或応物見形、全体作用[二]、或把機権喜怒、或現半身、或乗獅子、或乗象王。如有真正学人、便喝先拈出一箇膠盆子[三]。善知識不辨是境、便上他境上、作模作様。便学人又喝。前人不肯放下。此是膏肓之病、不堪医治。喚作賓看主。或是善知識不拈出

只だ臨済に四賓主の話有るが如きは、夫れ参学の人、大いに須らく子細にすべし。賓主相見するが如きは、語論賓主往来有り。或は物に応じて形を見し、全体作用し、或は機権を把って喜怒し、或は半身を現じ、或は獅子に乗り、或は象王に乗る。如し真正の学人有らば、便ち喝して、先ず一箇の膠盆子を拈り出す。善知識は是れ境なることを辨ぜず、便ち他の境上に上って、模を作し様を作す。便ち学人又た喝す。前人肯えて放下さず。此れは是れ膏肓の病、医治する堪わず。喚ん

物、随学人問処便奪。学人被奪、抵死不放。此是主看賓。或有学人、応一箇清浄境、出善知識前。知識辨得是境、把他抛向坑裏。学人言、大好善知識。知識即云、咄哉、不識好悪。学人礼拝。此喚作主看主。或有学人、四披枷帯鎖、出善知識前。知識更与他安一重枷鎖。学人歓喜、彼此不辨。呼為賓看賓。大徳、山僧所挙、皆是辨魔揀異、知其邪正。

で、賓、主を看ると作す。或是は善知識、物を拈り出さず、学人の問処に随って便ち奪う。学人奪わるるも、死に抵るまで放たず。此れは是れ主、賓を看る。或は学人有って、一箇の清浄境に応じて、善知識の前に出づ。知識は是れ境なることを辨得し、他を把って坑裏に抛向つ。学人言う、「大いに好し善知識」と。知識即ち云く、「咄哉、好悪を識らず」と。学人礼拝す。此れは喚んで、主、主を看ると作す。或は学人有って、枷を披け鎖を帯びて、善知識の前に出づ。知識更に他の与に一重の枷鎖を安く。学人歓喜して、彼此辨ぜず。呼んで、賓、賓を看ると為す。大徳、山僧の挙する所は、皆な是れ魔を辨じ異を揀んで、其の邪正を知らしむるなり。

＊只如〜邪正(一五一字)　この一段、福本・蜀本に無し。
一 以下、『臨済録』示衆(岩波文庫一〇五頁〜)を参照。　二 まるまる本質を打ち出した躍動のはたらき。
三 膠を入れた盆。べたべたつきまとう始末のわるい器。　四 教条主義に縛られていることの喩え。

不見僧問慈明、一喝分賓主、照用

見ずや、僧、慈明に問う、「一喝、賓主を分ち、照

一時行時如何。慈明便喝。又雲居弘覚禅師示衆云、譬如獅子捉象亦全其力、捉兎亦全其力。時有僧問、未審全什麼力。雲居云、不欺之力。看佗雪竇頌出。

一 石霜楚円（九八六—一〇三九）。慈明禅師と称された。 二 雲居道膺（?—九〇二）。弘覚は諡号。 三 老宿の語として、『伝灯録』二七・諸方雑挙徴拈代別語の中に見える。

【頌】 擒得盧陂跨鉄牛、〔千人万人中、也要呈巧芸。敗軍之将不再斬。〕三玄戈甲未軽酬。〔当局者迷。受災如受福、受降如受敵。〕楚王城畔朝宗水、〔説什麼朝宗水。浩浩充塞天地。任是四海、也須倒流。〕喝下曾令却倒流。〔不是這一喝、截却你舌頭。咄。驚走陝府鉄牛、嚇殺嘉州大象。〕

用一時に行ずる時如何」。慈明、便ち喝す。又た雲居の弘覚禅師、衆に示して云く、「譬えば獅子の象を捉うるにも亦た其の力を全うし、兎を捉うるにも亦た其の力を全うするが如し」と。時に僧有り問う、「未審、什麼なる力をか全うする」。雲居云く、「欺らざるの力」と。看よ佗の雪竇の頌出するを。

【頌】 盧陂を擒得えて鉄牛に跨がらせ、〔千人万人の中、也た巧芸を呈せんと要す。敗軍の将は再び斬らず。〕三玄の戈甲未だ軽しく酬いず。〔局に当る者は迷う。災を受くること福を受くるが如くし、降を受くること敵を受くるが如くす。〕楚王城畔朝宗の水、〔什麼の朝宗の水とか説わん。浩浩として天地に充塞す。任是い四海なるも、也た須らく倒流すべし。〕喝下に曾て却って倒流せしむ。〔是れ這の一喝、你が舌頭を截却るにあらず。咄。陝府の鉄牛を驚走せしめ、嘉州の

大象を嚇殺せり。」

一 ひっつかまえる。「擒住」に同じ。 二 千人万人の中で盧陂だけがよいかっこうをしようとした。 三 しくじった者に追い打ちはかけない。 四「三玄」という戈(ほこ)と鎧、臨済門下の奥の手はまだ見せぬ。 五 当事者はなかなか的確な判断が下せないものだ。「当局者迷、旁観者清」(岡目八目)という諺による。 六 災難に出会っても幸福にめぐり合ったように対応し、降伏した相手に対しても敵に対するように行動する。じっくりとしたたかな構えをいう。 七 古の楚の都、つまり郢州。「朝宗」は、諸侯が天子に謁見するように、多くの川が集まり海に流れこむこと(『尚書』禹貢・『毛詩』沔水)。 八 世界中の海の水さえ、きっと逆流するだろう。 九 風穴の一喝は、それを逆流させた。 一〇 陝府(河南省に属す)にある黄河の守護神である大鉄牛を驚かして走らせ、嘉州(四川省楽山県)の弥勒大仏をもびっくりさせる。

【評唱】 雪竇知風穴有這般宗風、便頌道、擒得盧陂跨鉄牛、三玄戈甲未軽酬。臨済下有三玄三要。凡一句中[一]須具三玄、一玄中須具三要。僧問臨済、如何是第一句。済云、三要印開朱点窄[二]、未容擬議[三]主賓分。如何是第二句。済云、妙辨豈容無著問[四]、漚和[五]不負截流機[六]。如何是第三句。済云、

【評唱】 雪竇、風穴(ふけつ)に這般(かか)る宗風有ることを知り、便ち頌して道(い)わく、「盧陂を擒(と)得えて鉄牛に跨がらせ、三玄の戈甲(かこう)未だ軽しく酬いず」と。臨済下に三玄三要有り。凡そ一句の中に須らく三玄を具すべく、一玄の中に須らく三要を具すべし。僧、臨済に問う、「如何なるか是れ第一句」。済云く、「三要印開して朱点窄(せま)し、未だ擬議を容れずして主賓分かる」。「如何なるか是れ第二句」。済云く、「妙辨豈に無著の問いを容れんや、

但看棚頭弄傀儡、抽牽全藉裏頭人。風穴一句中、便具三玄戈甲、七事随身、不軽酬他。若不如此、争奈盧陂何。後面雪竇要出臨済下機鋒。莫道是盧陂、仮饒楚王城畔、洪波浩渺、白浪滔天、尽去朝宗、只消一喝、也須教倒流。

漚和、截流の機に負かず」。「如何なるか是れ第三句」。済云く、「但だ看よ棚頭に傀儡を弄するを、抽牽全て裏頭の人に藉る」と。風穴、一句の中に便ち三玄の戈甲を具す、七事身に随って、軽しく他に酬いず。若し此の如くならずんば、盧陂を争奈何せん。後面に雪竇、臨済下の機鋒を出さんと要す。是れ盧陂は莫道り、仮饒い楚王城畔に、洪波浩渺、白浪滔天にして、尽く去きて朝宗するも、只だ一喝を消って也た須らく倒流せしむべし。

一 以下、『臨済録』上堂(岩波文庫二八頁〜)を参照。二『臨済録』では「側」に作る。三 文殊の玄妙な弁舌。『臨済録』では「妙解」とする。四 第三五則に既出。五 梵語のウパーヤの訳。仮に応用する方便。六『臨済録』では「不負」を「争負」とする。七「棚頭」は舞台。舞台の人形がいろいろの演技をするのは、みな舞台裏であやつる人がいるのだ。さまざまな方便の顕現は、実は真実そのもののはたらき出た姿にほかならぬということ。『臨済録』では「看取棚頭弄傀儡、抽牽都来裏有人」とする。八「七事」は僧侶が常に所持すべきもの。それで完全武装して。九 頌の後半を指す。

第三九則　雲門金毛獅子

垂示云、途中受用底[一]、似虎靠山。世諦流布底[二]、如猿在檻。欲知仏性義[三]、当観時節因縁。欲煆百錬精金、須是作家炉鞴[四]。且道、大用現前底[五]、将什麼試験。

第三九則　雲門の金毛の獅子

垂示に云く、途中受用底は、虎の山に靠るに似たり。世諦流布底は、猿の檻に在るが如し。仏性の義を知らんと欲せば、当に時節因縁を観るべし。百錬の精金を煆えんと欲せば、須是らく作家の炉鞴なるべし。且道、大用現前底は、什麼を将てか試験せん。

一 悟りに至るまでの修行段階で自在の境地を体得している人。 二 世俗的価値観に流される人。 三 仏性がどういうものであるかを見て取るには、そのための時機が熟したかどうかが自ら感得できねばならない。第四八則・本則の評唱を参照。 四 ふいご。修行僧を鍛える師家の手段の喩え。 五 (仏法の)大いなるはたらきが顕現している人。

【本則】挙。僧問雲門[一]、如何是清浄[二]法身。〔墻圾[三]堆頭、見丈六金身、斑[四]斑駁駁、是什麼。〕門云、花薬欄[五]。〔問処[六]不真、答来鹵莽。堲著[七]磕著、曲[八]不蔵直。〕僧云、便[九]恁麼去時如何。

【本則】挙す。僧、雲門に問う、「如何なるか是れ清浄法身」。〔墻圾堆頭に丈六の金身の斑斑駁駁なるものを見る、是れ什麼ぞ。〕門云く、「花薬欄」。〔問処真ならずして、答え来たること鹵莽なり。堲著磕著、曲は直を蔵さず。〕僧云く、「便ち恁麼にし去る時、如

〔渾崙呑箇棗。放憨作麼。〕門云、金毛獅子。〔也褒也貶。両采一賽。将錯就錯。是什麼心行。〕

何」。〔渾崙に箇の棗を呑む。放憨して作麼。〕門云く、「金毛の獅子」。〔也た褒也た貶。両采一賽。錯を将て錯を就す。是れ什麼たる心行ぞ。〕

一 雲門文偃（八六四—九四九）。二 煩悩の穢れを離れた真理そのものとしての仏。三 ごみの山。四 まだら模様の形容。五 柵で囲った満開の芍薬の花。六 質問が本物でないので答えがおおまか。七 突いたり叩いたりして、いじくりまわす。八 曲ったものはまっすぐなものをあらわにする。九『雲門広録』では「便恁麼会時」とする。一〇 鵜呑みにすること。一一 愚をさらしてどうするのだ。一二 獲物をねらう金色に輝く毛並の獅子。一三 褒めてもおり、貶してもおり。一四 一つの勝負に二つの勝ち目。一方に決めなければならないのに、どちらにもよい目を出している、という批判的コメント。一五 いったいどういうつもりなのだ。

〔評唱〕諸人還知這僧問処与雲門答処麼。若知得、両口同無一舌。若不知、未免顢頇。僧問玄沙、如何是清浄法身。沙云、膿滴滴地。具金剛眼、試請辨看。雲門不同別人。有時把定、壁立万仞、無你湊泊処、有時与你開一線道、同死同生。雲門三寸甚密。有者道、是信彩答去。若恁麼会、且

〔評唱〕諸人還た這の僧の問処と雲門の答処とを知るや。若し知得せば、両口同じく一舌無し。若し知らずんば、未だ顢頇を免れず。僧、玄沙に問う、「如何なるか是れ清浄法身」。沙云く、「膿滴滴地」と。金剛眼を具し、試みに請う、辨じ看よ。雲門は別人に同じからず。有る時は把定して壁立万仞、你が湊泊する処なく、有る時は你が与に一線の道を開いて、同死同生す。雲門の三寸甚だ密なり。有る者は道う、「是れ彩に信

道、雲門落在什麼処。

せて答え去る」と。若し恁麼に会せば、且道、雲門什麼処にか落在す。

一 二人の問答は、ことばの上には無い。言語表現を超えたところ。 二 頌の「莫顢頇」をふまえる。
三 玄沙師備（八三五―九〇八）。大慧『正法眼蔵』に「僧問、如何是堅固法身。沙云、膿滴滴地」と。
四 膿がたらたら。 五 勘どころ・つぼをつかめない。 六 ひとすじルートをつける。それとなくヒントを与える。 七 弁舌が洗練されていて隙がない。 八 サイコロの目の出るにまかせて。思慮をめぐらせることなく自在に。

這箇是屋裏事、莫向外卜度。所以百丈道、森羅万象、一切語言、皆転帰自己、令転轆轆地。向活潑潑処便道、若擬議尋思、便落第二句了也。永嘉道、法身覚了無一物、本源自性天真仏。雲門験這僧。其僧亦是他屋裏人、自是久参。知他屋裏事、進云、便恁麼去時如何。門云、金毛獅子。且道、是肯他、是不肯他。是褒他、是貶他。巌頭道、若論戦也、箇箇立

這箇は是れ屋裏の事なり、外に向いて卜度ること莫れ。所以に百丈道く、「森羅万象、一切語言、皆な転じて自己に帰して、転轆轆地ならしむ」と。活潑潑の処に向いて便ち道う、「若し擬議尋思せば、便ち第二句に落ち了れり」と。永嘉道く、「法身を覚し了らば一物無し、本源の自性天真の仏」と。雲門、這の僧を験す。其の僧も亦た是れ他の屋裏の人にして、自ら是れ久参なり。他の屋裏の事を知り、進んで云く、「便ち恁麼にし去る時、如何」。門云く、「金毛の獅子」と。且道、是れ他を肯うか、是れ他を肯わざるか。是れ他

在転処。又道、[八]他参活句、不参死句。活句下薦得、永劫不忘。死句下薦得、自救不了。

を褒するか、是れ他を貶するか。巌頭道く、「若し論戦せば、箇箇転処に立在たん」。又た道く、「他活句に参じて、死句に参ぜず。活句下に薦得すれば、永劫にも忘れず。死句下に薦得すれば、自らを救い了れず」と。

一 おのれ一心(一身)中のことがら。自分自身の問題。 二 百丈懐海(七四九―八一四)。上・六六頁参照。 三 石臼をごろごろ挽くように。あらゆるものを自在に転化するさま。 四 第二義。 五 永嘉玄覚(六七五―七一三)。 六『証道歌』の句。 七 巌頭全奯(八二八―八八七)。語は第一〇則の垂示に既出。 八 徳山縁密の語。第二〇則・本則の評唱(上・二七二頁)に既出。首句の「他」は「須」の誤りか。

又僧問雲門、仏法如水中月、是否。門云、[一]清波無透路。進云、和尚従何而得。門云、再問復何来。僧云、正恁麼去時如何。門云、[二]重畳関山路。須知此事不在言句上。如撃石火、似閃電光。搆得搆不得、未免喪身失命。雪竇是[三]其中人、便当頭頌出。

又た僧、雲門に問う、「仏法は水中の月の如しと、是なり否」。門云く、「清波に透路無し」。進んで云く、「和尚、何よりか得たる」。門云く、「再び問うは復た何よりか来たる」。僧云く、「正に恁麼にし去る時、如何」。門云く、「重畳たり関山の路」と。須らく知るべし、此の事は言句の上に在らず。撃石火の如く、閃電光の似し。搆り得るも搆り得ざるも、未だ免れず喪身失命するを。雪竇は是れ其中の人なれば、便ち当頭に

頌出す。

一 どこまでも清波が続き、突き抜ける手だてが無い。二 幾重にも厳重な関所の続く路。容易には通り抜けられない。三「其中」はそこ、このところ。禅では究極のもの、本来的なものを意味させることが多い。「本来の家郷」の住人。

【頌】花薬欄、〔言猶在耳。〕莫顢[一]頇。〔如麻似粟。也有些子。自領出去。〕星[二]在秤兮不在盤。〔太[三]葛藤。各[四]自向衣単下返観。不[五]免説道理。〕便恁麼、〔渾崙呑箇棗。〕太無端。〔自領出去。灼然。莫錯怪他雲門好。〕金毛獅子大家看。〔放出一[六]箇半箇、也是箇狗子。雲門也是普[七]州人送賊。〕

【頌】花薬欄、〔言猶お耳に在り。〕顢頇すること莫れ。〔麻の如く粟の似し。也た些子有り。自ら領して出で去れ。〕星は秤に在りて盤に在らず。〔太だ葛藤す。各自に衣単の下に向いて返観せよ。道理を説くことを免れず。〕便ち恁麼にするは、〔渾崙に箇の棗を呑む。〕太だ端無し。〔自ら領して出で去れ。灼然たり。錯って他の雲門を怪むること莫くんば好し。〕金毛の獅子、大家看よ。〔一箇半箇を放出つも、也た是れ箇の狗子。雲門も也た是れ普州の人賊を送る。〕

一 花に見とれてうつつを抜かすな。二 ことばにとらわれてポイントを見誤るな。三 説明が過ぎるぞ。四 それぞれ坐禅して自己をかえりみよ。五 これでは理屈を捏ねることになるぞ。六「金毛の獅子」を承けて、得難い人物をいう。七 普州は賊の多い所とされる。賊が賊を護送する。

〔評唱〕雪竇相[一]席打令、動[二]絃別曲、

〔評唱〕雪竇は席を相て令を打し、絃を動くや曲を別

一句一句判将去。此一頌、不異拈古[三]之格。花薬欄、便道、莫顢頇。人皆道、雲門信彩答将去。総作[四]情解会佗底。所以雪竇下本分草料、便道、莫顢頇。蓋雲門意、不在花薬欄処。所以雪竇道、星在秤兮不在盤。這一句忒煞漏逗。水中元無月、月在青天。如星在秤不在於盤、且道、那箇是秤。若辨明得出、不辜負雪竇。

け、一句一句に判じ将ち去く。此の一頌、拈古の格に異ならず。「花薬欄」というに、便ち道う、「顢頇すること莫れ」。人皆な道う、「雲門は彩に信せて答え将ち去く」と。総て情解を作して佗底を会す。所以に雪竇は本分の草料を下して便ち道う、「顢頇すること莫れ」と。蓋し雲門の意は、花薬欄の処に在らず。所以に雪竇道く、「星は秤に在りて盤に在らず」と。這の一句忒煞だ漏逗せり。水中に元より月無く、月は青天に在り。如し星は秤に在りて盤に在らざれば、且道、那箇か是れ秤。若し辨明得出せば、雪竇に辜負かず。

一　宴席の雰囲気を見て酒令(酒席での遊戯)を行う。臨機応変。　二　弾き手が絃を動かしたとたんに曲名がわかる。　三　古則や公案を取り上げて弁じ立てること。　四　分別によって雲門のことばを理解する。

古人到這裏、也不妨慈悲。分明向你道、不在這裏、在那辺去[一]。且道、那辺是什麼処。此頌頭辺一句了、後面頌這僧道、便恁麼去時如何。雪竇道、這僧也太無端。且道、是[二]明頭合、

古人這裏に到り、也た不妨に慈悲なり。分明と你に向って道う、「這裏に在らず、那辺に在り」と。且道、那辺とは是れ什麼処ぞ。此れ頭辺の一句を頌し了り、後面に這の僧の「便ち恁麼にし去る時、如何」と道うを頌す。雪竇道く、「這の僧也た太だ端無し」と。且

暗頭合。会来恁麼道、不会来恁麼道。
金毛獅子大家看。還見金毛獅子麼。
瞎。

道て、是れ明頭に合するや、暗頭に合するや。会し来たりて恁麼(さよう)に道(い)うか、会し来たらずして恁麼に道うか。
「金毛の獅子、大家看よ」と。還(は)た金毛の獅子を見るや。瞎(かつ)。

一 一夜本には無い。これに従う。 二 明がぴったりなのか、暗がぴったりなのか。明は判断できるもの(ことばで言えるもの)、暗は判断を超えたもの。

第四〇則　南泉如夢相似

垂示云、休去歇去、鉄樹開花。有麼有麼、黠児落節。直饒七縦八横、不免穿他鼻孔。且道、誵訛在什麼処。試挙看。

一 九峰道虔の語に「先師(石霜)道、休去、歇去……」と(『会元』六)。「休歇」は、けりをつける。二 鉄の木に花が咲く。常識を超えた奇跡。三「休歇」している者がいるか。四 切れものがしくじる。

【本則】挙。陸亘大夫与南泉語話次、陸云、肇法師道、天地与我同根、万物与我一体、也甚奇怪。〔鬼窟裏作活計。画餅不可充飢。也是草裏商量。〕南泉指庭前花、〔道什麼。咄。経有経師、論有論師。不干山僧事。咄。大丈夫当時下得一転語、不唯截断南泉、亦乃与天下衲僧出気。〕召

第四〇則　南泉、夢の如くに相似たり

垂示に云く、休し去り歇し去れば、鉄樹花を開く。有りや有りや、黠児落節す。直饒七縦八横なるも、他の鼻孔を穿つを免れず。且道、誵訛什麼処にか在る。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。陸亘大夫、南泉と語話せし次、陸云く、「肇法師道く、『天地は我と同根、万物は我と一体』と。也た甚だ奇怪なり」。〔鬼窟裏に活計を作す。画餅は飢を充たすべからず。也た是れ草裏に商量す。〕南泉、庭前の花を指して、〔什麼をか道う。咄。経には経師有り、論には論師有り。山僧の事には干らず。咄。大丈夫、当時に一転語を下し得ば、唯だ南泉を截断するのみならず、亦乃た天下の衲僧の与に気を出ださ

大夫云、時人見此一株花、如夢相似。〔鴛鴦綉了従君看、莫把金針度与人。莫寐語。引得黄鶯下柳条。〕

ん。」大夫を召して云く、「時人、此の一株の花を見ること、夢の如くに相似たり」。〔鴛鴦を綉し了って君の看るに従すも、金針を把って人に度与すこと莫し。寐語いう莫れ。黄鶯を引き得て柳条より下らしむ。〕

一 陸亘(七六四―八三四)。二 南泉普願(七四八―八三四)。三 僧肇(三八四―四一四?)。四「涅槃無名論」に見える。『荘子』斉物論の「天地与我並生、而万物与我為一」と同類。なお、『伝灯録』八は「肇法師甚奇怪、道万物同根、是非一体」とする。五 なんとも不思議な。六 低次の思案というもの。七 経典の解釈は経師の専門、論部の解釈は論師の専門。禅師にはおのずから別の役割がある。八 うっぷんを晴らす。九『伝灯録』八では「師指庭前牡丹花云『大夫、時人見此一株花、如夢相似』。陸罔測」とする。一〇 おしどりを刺繍した巧みさはどうぞご覧なさい、しかし黄金の刺繍針は差しあげません。手並は見せられてもコツは教えようがない。一一 うぐいすが(その花の美しさに)引かれて柳の枝から下りてきた。

〔評唱〕陸亘大夫、久参南泉。尋常留心於理性中、游泳肇論。一日坐次、遂拈此両句、以為奇特問云、肇法師道、天地与我同根、万物与我一体、也甚奇怪。肇法師、乃晋時高僧、与生・融・叡同在羅什門下。謂之四哲。

〔評唱〕陸亘大夫は久しく南泉に参ず。尋常、心を理性の中に留めて、『肇論』に游泳す。一日、坐せし次、遂に此の両句を拈げて、以て奇特と為して問うて云く、「肇法師道く、『天地は我と同根、万物は我と一体』と。也た甚だ奇怪なり」と。肇法師は、乃ち晋の時の高僧にして、生・融・叡と同じく羅什門下に在り。之

幼年好読荘老。後因写古維摩経有悟処、方知荘老猶未尽善。故綜諸経、乃造四論。荘老意謂、天地形之大也、我形亦爾也、同生於虚無之中。荘生大意、只論斉物。肇公大意、論性皆帰自己。不見他論中道、夫至人空洞無象、而万物無非我造。会万物為自己者、其唯聖人乎。雖有神有人、有賢有聖、各別而皆同一性一体。

を四哲と謂う。幼年より好んで荘老を読む。後に『古維摩経』を写し悟る処有るに因って、方めて荘老の猶お未だ善を尽さざるを知る。故に諸経を綜めて乃ち四論を造る。荘老の意に謂く、「天地は形の大なり、我が形も亦た爾り、同じく虚無の中に生ず」と。荘生が大意は、只だ斉物を論ず。肇公の大意は、性は皆な自己に帰することを論ず。見ずや他の論中に道く、「夫れ至人は空洞として象無し、而して万物は我が造に非ざる無し。万物を会して自己と為す者、其れ唯だ聖人乎」と。神有り人有り、賢有り聖有りと雖も、各おの別にして而も皆な同じく一性一体なり。

一 現象世界を貫通する不変の実性。理の世界。 二 ひたる。読み耽る。 三 物不遷論・不真空論・般若無知論・涅槃無名論の四論と劉遺民との往復書簡をまとめた僧肇の著作。 四 道生(?—四三四)・道融・道叡。 五 鳩摩羅什(三四四—四一三)。 六『荘子』と『老子』。 七 支謙訳三巻を指すか。 八『肇論』のこと。 九 涅槃無名論。ただし「為自己」を「以成己」とする。

古人道、尽乾坤大地、只是一箇自己。寒則普天普地寒、熱則普天普地

古人道く、「尽乾坤大地、只だ是れ一箇の自己。寒きときは則ち普天普地寒く、熱きときは則ち普天普地

熱。有則普天普地有、無則普天普地無。是則普天普地是、非則普天普地非。法眼云、渠渠渠、我我我、南北東西皆可可、不可可、但唯我、無不可。所以道、天上天下、唯我独尊。石頭因看肇論、至此会万物為自己処、豁然大悟。後作一本参同契、亦不出此意。看他恁麼問。且道、同什麼根、同那箇体。到這裏、也不妨奇特。豈同他常人、不知天之高、地之厚。豈有恁麼事。陸亘大夫恁麼問、奇則甚奇、只是不出教意。若道教意是極則、世尊何故更拈花、祖師更西来作麼。南泉答処、用衲僧巴鼻、与佗拈出痛処、破他窠窟。遂指庭前花、召大夫云、時人見此一株花、如夢相似。如引人向万丈懸崖上打一推、令他命断。

熱し。有なるときは則ち普天普地有、無なるときは則ち普天普地無。是なるときは則ち普天普地是、非なるときは則ち普天普地非なり」と。法眼云く、「渠渠渠、我我我、南北東西皆な可可、不可可、但だ我のみ可ならざる無し」と。所以に道う、「天上天下、唯我独尊」と。石頭因に『肇論』を看るに、此の「万物を会して自己と為す」という処に至って、豁然として大悟す。後に一本の『参同契』を作るも亦た此の意を出でず。看よ他の恁麼に問うことを。且道、什麼の根にか同じく、那箇の体にか同じき。這裏に到って也た不妨に奇特なり。豈に他の常人の、天の高く地の厚きことを知らざるに同じからんや。豈に恁麼の事有らんや。陸亘大夫恁麼に問うは、奇なることは則ち甚だ奇なるも、只だ是れ教意を出でず。若し教意是れ極則と道わば、世尊は何故に更に花を拈り、祖師は更に西来して作麼かせん。南泉の答処は、衲僧の巴鼻を用て、佗の与に痛処を拈出し、他の窠窟を破る。遂に庭前の花を

你若平地上推倒、弥勒仏下生、也只不解命断、亦如人在夢、欲覚不覚、被人喚醒相似。南泉若是眼目不正、必定被他搽糊将去。看他恁麼説話、也不妨難会。若是眼目定動活底、聞得如醍醐上味。若是死底、聞得翻成毒薬。古人道、若於事上見、堕在常情。若向意根下卜度、卒摸索不著。巌頭道、此是向上人活計、只露目前些子、如同電払。南泉大意如此。有擒虎兕定龍蛇底手脚。到這裏、也須是自会始得。不見道、向上一路、千聖不伝。学者労形、如猿捉影。看他雪竇頌出。

指し、大夫を召して云く、「時人、此の一株の花を見ること、夢の如くに相似たり」と。人を万丈の懸崖上に引きて打一推しし、他をして命断たしむるが如し。你若し平地上に推し倒せば、弥勒仏下生にも、也た只だ命断つことを解ず。亦た人の夢に在りて、覚めんと欲して覚めざるを人に喚び醒さるるが如くに相似たり。南泉若是眼目正しからずんば、必定ずや他に搽糊将去れん。看よ他の恁麼の説話、也た不妨に会し難し。若是眼目定動して活底ならば、聞き得て醍醐上味の如くならん。若是死底ならば、聞き得て翻って毒薬と成らん。古人道く、「若し事上に於て見ば、常情に堕在ちん。若し意根下に向いて卜度らば、卒に摸索不著」と。巌頭道く、「此れは是れ向上の人の活計、只だ目前の些子を露して、電の払るが如同し」と。南泉の大意は此の如し。虎兕を擒え龍蛇を定むる底の手脚有り。這裏に到り、也た須是らく自ら会して始めて得し。見道ずや、「向上の一路は千聖すら伝えず。学ぶ者の形

を労すること、猿の影を捉えんとするが如し」と。看よ他の雪竇の頌出するを。

一 徳山縁密。二 法眼文益(八八五—九五八)。三 石頭希遷(七〇〇—七九〇)。四 経典に説かれた規準的な教えの枠。五 弥勒は釈尊の滅後五六億七千万年の後にこの世に現れるとされる。六 ぎらりと眼光のきらめくもの。七 最高の美味。八 未詳。九 常識的な考え。一〇 巌頭全豁(八二八—八八七)。
一一 盤山宝積の語。第三則・本則の評唱に既出。

【頌】聞見覚知非一一、〔森羅万象、無有一法。〕七花八裂。眼耳鼻舌身意、一時是箇無孔鉄鎚。〕山河不在鏡中観。〔我這裏無這箇消息。長者自長、短者自短、青是青、黄是黄。你向什麼処観。〕霜天月落夜将半、〔引你入草了也。〕偏界不曾蔵。切忌向鬼窟裏坐。〕誰共澄潭照影寒。〔有麼有麼。若不同床睡、焉知被底穿。愁人莫向愁人説、説向愁人愁殺人。〕

【頌】聞見覚知、一一に非ず、〔森羅万象に一法有ること無し。〕七花八裂。眼耳鼻舌身意、一時に是れ箇の無孔の鉄鎚。〕山河は鏡中の観に在らず。〔我が這裏に這箇の消息無し。長き者は自ら長く、短き者は自ら短く、青は是れ青、黄は是れ黄。你什麼処に向いてか観ん。〕霜天月落ちて夜将に半ばならんとす、〔你を引いて草に入らしめ了れり。〕偏界曾て蔵さず。切に忌む鬼窟裏に向いて坐するを。〕誰か共に澄潭に影を照して寒き。〔有りや、有りや。若し同床に睡らざれば、焉んぞ被底の穿たれたるを知らん。愁人、愁人に向って説うこと莫れ、愁人に説向わば人を愁殺す。〕

一 見たり聞いたり感じたり知ったりするものが、すべて別々のことではない。二 バラバラ、個個別別だ。三 六根がいっぺんに機能しなくなった。四 山や河は鏡に映して見られるものとは何の関係もない。五「草」は無明煩悩に喩える。六 石霜慶諸（八〇七―八八八）の語（『伝灯録』一五）。第三四則・頌の評唱に既出。七 澄みきった沼に（月と）ともに己れの姿を映して冴えかえるのはいったい何者であろうか。圜悟は「誰と共にか澄潭に影を照して寒き」と解している。八 その人の寝床で共に眠らなければ、どうして掛布団のうらが破れていること（その人の愁絶の境涯）が分ろうか。

〔評唱〕　南泉は小睡語、雪竇は大睡語。夢を作ると雖然も、却って箇の好夢を作得たり。前頭には一体と説い、這裏には不同と説う。「聞見覚知、一一に非ず、山河は鏡中の観に在らず」と。若し鏡中の観に在りて、然る後方めて暁了ると道わば、則ち鏡処を離れず。山河大地、草木叢林、鏡を将て鑑すこと莫れ。若し鏡を将て鑑せば便ち両段と為らん。但只だ山は是れ山、水は是れ水、法法、法位に住して、世間の相も常住なるべし。「山河は鏡中の観に在らず」とせば、且道、什麼処に向いてか観ん。還た会すや。這裏に到って「霜天月落ちて夜将に半ばならんとする」に向いてす。這

〔評唱〕　南泉小睡語、雪竇大睡語。雖然作夢、却作得箇好夢。前頭説一体、這裏説不同。聞見覚知非一一、山河不在鏡中観。若道在鏡中観、然後方暁了、則不離鏡処。山河大地、草木叢林、莫将鏡鑑。若将鏡鑑、便為両段。但只可山是山、水是水、[一]法住法位、世間相常住。山河不在鏡中観、且道、向什麼処観。還会麼。到這裏、向霜天月落夜将半。這辺与[二]你打併了也、那辺你自相度。還知雪

竇以本分事為人麼。誰共澄潭照影寒、為復自照、為復共人照。須是絶機絶解、方到這境界。即今也不要澄潭、也不待霜天月落。即今作麼生。

辺は你が与に打併し了れり、那辺は你自ら相度れ。還た雪竇は本分事を以て人の為にするを知るや。「誰か共に澄潭に影を照して寒き」とは、為復自ら照すや、為復人と共に照すや。須是らく機を絶し解を絶して、方めて這の境界に到るべし。即今也た澄潭を要めず、也た霜天月の落つるを待たず。即今作麼生。

一 あらゆる物はしかるべき位置に在り、一切の現象は法爾として常住である。『法華経』方便品の偈にもとづく(岩波文庫『法華経』上・一二〇頁)。 二 始末する。

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第四

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第四

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第五

第四一則　趙州大死底人

垂示云、是非[一]交結処、聖亦不能知。逆順縦横時、仏祖不能辨。為絶世超倫之士、顕逸群大士之能。向[二]氷凌上行、剣刃上走、直下如麒[三]麟頭角、似火裏蓮華。宛見超方、始知同道。誰是好手者。試挙看。

【本則】挙。趙[一]州問投子[二]、大[三]死底人、却活時如何。〔有恁麼事。賊[四]不打貧児家。慣[五]曾作客方憐客。〕投子云、不[六]許夜行、投明須到。〔看[七]楼打楼。

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第五

第四一則　趙州大死底の人

垂示に云く、是非交結の処は、聖も亦た知る能わず。逆順縦横の時は、仏祖も辨ずる能わず。絶世超倫の士と為り、逸群大士の能を顕す。氷凌の上を行き、剣刃の上を走くは、直下に麒麟の頭角の如く、火の裏の蓮華の似し。宛も超方なるを見て、始めて同道なるを知る。誰か是れ好手の者ぞ。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。趙州、投子に問う、「大死底の人、却って活する時如何」。〔恁麼の事有り。賊は貧児の家を打わず。曾て客と作るに慣れて方めて客を憐む。〕投子云く、「夜行を許さず、明に投じて須らく到るべし」。

一『証道歌』に「或是或非人不識、逆行順行天莫測」と。　二 危険きわまりない状況を自在に切り抜けることの喩え。　三 めったにないものの喩え。

是賊識賊。若不同床臥、焉知被底穿。〕

〔楼を看て楼を打す。是れ賊、賊を識る。若し同床に臥するにあらずんば、焉んぞ被底の穿たれたるを知らん。〕

一 趙州従諗(七七八―八九七)。 二 投子大同(八一九―九一四)。 三 死にきった人。大死一番の人。 四 第三三則・本則の著語に既出。ここは、賊すなわち趙州は投子を富児なりと見てこそかく切り込んだのだ、ということ。 五 しばしば旅で苦労したからこそ旅人の心がわかる。 六 夜中に行くことは禁ずる。しかし、夜明けには到着していなければならない。 七 相手の出方を見て自分の出方を決める。臨機応変。「看箭打箭」(出来あいのざるを手本にしてざるを作る)と同義か。 八 苦労を共にした者同士でなければ相手の機微(内実)はつかめない。第四〇則・頌の著語に既出。

〔評唱〕 趙州問投子、大死底人、却活時如何。投子対他道、不許夜行、投明須到。且道、是什麼時節。無孔笛撞著氈拍版。此謂之験主問、亦謂之心行問。投子・趙州、諸方皆美之得逸群之辯。二老雖承嗣不同、看他機鋒相投一般。投子一日為趙州置茶筵相待。自過蒸餠与趙州。州不管。

〔評唱〕 趙州、投子に問う、「大死底の人、却って活する時如何」。投子、他に対して道う、「夜行を許さず、明に投じて須らく到るべし」と。且道、是れ什麼なる時節ぞ。無孔笛、氈拍版に撞著る。此れ之を験主問と謂い、亦た之を心行問と謂う。投子・趙州、諸方皆な之を逸群の辯を得たりと美む。二老は承嗣同じからずと雖も、看よ他の機鋒相投じて一般なるを。投子一日、趙州の為に茶筵を置いて相待す。自ら蒸餠を過して趙

投子令行者[三]過胡餅[四]与趙州。州礼行者三拝。且道、他意是如何。看他尽是向根本上、提此本分事為人。有僧問、如何是道。答云、道。如何是仏。答云、仏。又問、金鎖未開時如何。答云、開。金鶏未鳴時如何。答云、無這箇音響。鳴後如何。答云、各自知時。投子平生問答総如此。

州に与えんとするも、州管わず。投子、行者をして胡餅を過して趙州に与えしむ。州、行者を礼すること三拝す。且道、他の意是れ如何。看よ他尽く是れ根本の上に向いて、此の本分事を提げて人の為にすることを。僧有り問う、「如何なるか是れ道」。答えて云く、「道」。「如何なるか是れ仏」。答えて云く、「仏」。又た問う、「金鎖未だ開かざる時如何」。答えて云く、「開けり」。「金鶏未だ鳴かざる時如何」。答えて云く、「這箇の音響無し」。「鳴いて後如何」。答えて云く、「各自に時を知る」と。投子の平生の問答は総て此の如し。

看趙州問、大死底人、却活時如何。他便道、不許夜行、投明須到。直下如撃石火、似閃電光。還他向上人始得。大死底人、都無仏法道理、玄妙得失、是非長短、到這裏、只恁麼休

看よ趙州問う、「大死底の人、却って活する時如何」。他便ち道う、「夜行を許さず、明に投じて須らく到るべし」と。直下に撃石火の如く、閃電光に似たり。他の向上の人に還して始めて得し。大死底の人、仏法の道理も玄妙得失も是非長短も都て無く、這裏に到って、

一 穴なしの笛とフェルト製のカスタネットとの出会い。 二 せいろうで蒸した小麦粉製のパン。 三 僧の下で働く修行中の侍者。 四 小麦粉を練って発酵させ、胡麻をまぶして焼き上げたもの。

去。[1]古人謂之[2]平地上死人無数、過得荊棘林是好手。也須是透過那辺始得。雖然如是、如今人到這般田地、早是難得。或若有依倚、有解会、則没交渉。[3]喆和尚謂之見不浄潔、[4]五祖先師謂之命根不断。須是大死一番、却活始得。浙中[5]永光和尚道、[6]言鋒若差、郷関万里。直須懸崖撒手、自肯[7]承当。絶後再甦、欺君不得。非常之旨、人焉廋哉。趙州問意如此。投子是作家、亦不辜負他所問、只是絶情絶迹、不妨難会、只露面前些子。所以[8]古人道、欲得親切、莫将問来問。問在答処、答在問処。若非投子、被趙州一問、也大難酬対。只為他是作家漢、挙著便知落処。頌云、

只だ恁麼に休め去る。古人之を「平地上に死人無数、荊棘の林を過得れば是れ好手」と謂う。也た須是らく那辺を透過して始めて得し。是の如しと雖然も、如今の人這般る田地に到ることすら早是に得難し。或若依倚有り解会有らば、則ち没交渉。喆和尚は之を「見、浄潔ならず」と謂い、五祖先師は之を「命根断たれず」と謂う。須是らく大死一番し、却って活して始めて得し。浙中の永光和尚道く、「言鋒若し差わば、郷関万里。直だ須らく懸崖より手を撒して、自ら肯って承当すべし。絶後に再び甦らば、君を欺ることを得ず。非常の旨、人焉んぞ廋さんや」と。趙州の問意は此の如し。投子は是れ作家なれば、亦た他の所問に辜負かず、只だ是れ情を絶し迹を絶して、不妨に会し難く、只だ面前の些子を露すのみ。所以に古人道く、「親切ならんと欲得せば、問を将ち来たりて問うこと莫れ。問は答処に在り、答は問処に在り」と。若し投子に非ずんば、趙州に一問せられて、也た大いに酬対

し難からん。只だ他は是れ作家の漢なるが為に、挙著するや便ち落処を知る。頌に云く、

一 雲門文偃（八六四—九四九）。二 平坦な大道を歩む安易さのゆえにかえって足を取られて立ち枯れに終る者は数え切れない。困難ないばらの林を踏み越えてこそやり手というものだ。三 大潙慕喆（？—一〇九五）。四 五祖法演（？—一一〇四）。五 雲居道膺（？—九〇二）の法嗣、永光真。語は『伝灯録』二〇に見える。六 ことばのポイントがすれちがえば、故郷は万里のかなたに遠ざかる。崖っぷちにつかまっていた手を放し、己れの事として引き受けよ。七『論語』為政の句。八 首山省念（九二六—九九三）。語は第一四則・頌の評唱に既出。

【頌】 活中有眼還同死、〔両不相知、翻来覆去。若不蘊藉、争辨得這漢緇素。〕薬忌何須鑑作家。〔若不験過、争辨端的。遇著試与一鑑、又且何妨、也要問過。〕古仏尚言曾未到、〔頼是有伴。千聖也不伝、山僧亦不知。〕不知誰解撒塵沙。〔即今也不少。開眼也著、合眼也著。闍黎恁麼挙、落在什麼処。〕

【頌】 活中に眼有れば還た死に同じ、〔両ながら相知らず、翻来覆去。若し蘊藉なるにあらずんば、争でか這漢の緇素を辨得せん。〕薬忌何ぞ須いん作家を鑑するを。〔若し験過さずんば、争でか端的を辨ぜん。遇著わば、試みに与に一鑑せよ、又且何ぞ妨げん、也た問過を要す。〕古仏すら尚お言う曾て未だ到らずと、〔頼是に伴有り。千聖も也た伝えず、山僧も亦た知らず。〕知らず誰か解く塵沙を撒く。〔即今也た少なからず。眼を開くも也た著し、眼を合るも也た著し。闍黎

恁麼に挙して、什麼処にか落在する。」

一 生の根底に徹すれば大死と同じ。 二 活も死も無い。 三 死活反転自在。 四 人間的に深みのある。 五 のみ合わせてはならぬ薬をのませて練達の禅者(投子)をためすことはあるまい。 六 問いつめる、調べあげる。 七 (投子は「投明須到」と言うが)古仏さえそんなことはできない。釈迦は、私は曾て悟ったことはないと言っている。 八「向上一路」に沙をまき散らす。既定の価値に安住することの否定。 九 沙をまき散らす、そういう手合いが多い。 一〇 目をあけてもつぶっても、ぴたりと見て取る。第一〇則・頌の評唱に既出。 一一 雪竇を指す。

〔評唱〕 活中有眼還同死、雪竇是知有底人、所以敢頌。古人道、他参活句、不参死句。雪竇道、活中有眼、還同於死漢相似。何曾死、死中具眼、如同活人。古人道、殺尽死人、方見活人。活尽死人、方見死人。趙州是活底人、故作死問、験取投子。如薬性所忌之物、故将去試験相似。所以雪竇道、薬忌何須鑑作家。此頌趙州問処。後面頌投子、古仏尚言曾未到。

〔評唱〕「活中に眼有れば還た死に同じ」と、雪竇は是れ有を知る底の人、所以に敢て頌す。古人道く、「他活句に参じて、死句に参ぜず」と。雪竇道く、「活中に眼有れば、還た死漢に同じく相似たり」と。何ぞ曾て死せん、死中に眼を具せば、活人に如同じ。古人道く、「死人を殺し尽して、方めて活人を見、死人を活し尽して、方めて死人を見る」と。趙州は是れ活底の人、故に死問を作して、投子を験取す。薬性の忌む所の物を、故に将ち去きて試験するが如くに相似たり。所以に雪竇道く、「薬忌何ぞ須いん作家を鑑す

只這大死底人却活処、古仏亦不曾到、天下老和尚亦不曾到。任是釈迦老子、[三]碧眼胡僧、也須再参始得。所以道、[四]只許老胡知、不許老胡会。雪竇道、不知誰解撒塵沙。不見僧問[五]長慶、[六]如何是善知識眼。慶云、有願不撒沙。[七]保福云、不可更撒也。天下老和尚、拠曲彔木床上、行棒行喝、竪払敲床、現神通作主宰、尽是撒沙。且道、如何免得。

るを」と。此れ趙州の問処を頌す、後面は投子を頌す、「古仏すら尚お言う曾て未だ到らず」と。只だ這の大死底の人却って活する処、古仏も亦た曾て到らず、天下の老和尚も亦た曾て到らず。任是い釈迦老子、碧眼の胡僧なるも、也た須らく再参して始めて得し。所以に道う、「只だ老胡の知るを許むるも、老胡の会するを許めず」と。雪竇道く、「知らず誰か解く塵沙を撒く」と。見ずや僧、長慶に問う、「如何なるか是れ善知識の眼」。慶云く、「願有りて沙を撒かず」。保福云く、「更に撒くべからず」と。天下の老和尚、曲彔木床上に拠りて、棒を行じ喝を行じ、払を竪て床を敲き、神通を現じ主宰と作るも、尽く是れ沙を撒くなり。且道、如何に免れ得ん。

一 雲門の法嗣、徳山縁密。語は第三九則・本則の評唱に既出。二 雲門文偃。三 達磨を指す。四 第一則・頌の評唱に既出。五 長慶慧稜(八五四―九三二)。六『会元』七では「如何是正法眼」とする。七 保福従展(?―九二八)。

第四二則　龐居士好雪片片

垂示云、単提独弄[一]、帯水拖泥[二]。敲唱倶行[三]、銀山鉄壁[四]。擬議即髑髏前見鬼[五]、尋思則黒山下打坐[六]。明明杲日麗天、颯颯清風匝地。且道、古人還有誵訛処麼。試挙看。

一 方便によらず直接に提示する。 二「拖泥帯水」(第二則の垂示に既出)に同じ。べとべとの泥まみれ。 三「敲」は質問、「唱」は答え。問答という方便を用いる。 四 堅固にそそり立つさま。 五 第三七則の垂示に既出。 六 迷妄の心境を悟境ととりちがえて安住する。「黒山」は幽鬼のすみか、「鬼窟」と同じ。第二〇則・頌の著語(上・二七七頁)に「打入黒山下坐」と。

【本則】挙。龐居士[一]辞薬山[二]。〔這老漢作怪[三]也。〕山命十人[四]禅客相送至門首。〔也不軽他。是什麼境界。也須是識端倪底衲僧始得。〕居士指空中[六]雪云、好雪[五]、片片不落別処。〔無風

第四二則　龐居士の好雪片片

垂示に云く、単提独弄するは、帯水拖泥。敲唱倶に行うは、銀山鉄壁。擬議すれば即ち髑髏の前に鬼を見、尋思すれば則ち黒山の下に打坐す。明明たる杲日天に麗き、颯颯たる清風地を匝る。且道、古人還た誵訛たる処有りや。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。龐居士、薬山を辞す。〔這の老漢、怪を作さん。〕山、十人の禅客に命じて相送りて門首に至らしむ。〔也た他を軽んぜず。是れ什麼の境界ぞ。也た須是らく端倪を識る底の衲僧にして始めて得し。〕居士、空中の雪を指さして云く、「好雪、片片別

起浪。指頭有眼。這老漢言中有響。〕時有全禅客云、落在什麼処。〔中也。相随来也。果然上鉤来。〕士打一掌。〔著。果然勾賊破家。〕全云、居士也不得草草。〔棺木裏瞠眼。〕士云、汝恁麼称禅客、閻老子未放汝在。〔第二杓悪水潑了。何止閻老子、山僧這裏也不放過。〕全云、居士作麼生。〔龐心不改、又是要喫棒。這僧従頭到尾不著便。〕士又打一掌。〔果然雪上加霜。喫棒了呈款。〕云、眼見如盲、口説如啞。〔更有断和句。又与他読判語。〕雪竇別云、初問処但握雪団便打。〔是則是、賊過後張弓。也漏逗不少。雖然如是、要見箭鋒相拄、争奈落在鬼窟裏了也。〕

処に落ちず」。〔風無きに浪を起す。指頭に眼有り。這の老漢、言中に響有り。〕時に全禅客有り、云く、「什麼処にか落在する」。〔中れり。相随い来たる。果然して鉤に上り来たる。〕士打つこと一掌。〔著れり。果然して賊に勾りて家を破らる。〕全云く、「居士也た草草なることを得ざれ」。〔棺木裏に瞠眼す。〕士云く、「汝恁麼に禅客と称すれば、閻老子未だ汝を放さざる在」。〔第二杓の悪水潑し了れり。何ぞ止だ閻老子のみならん、山僧這裏も也た放過さじ。〕全云く、「居士は作麼生」。〔龐心改めず、又た是れ棒を喫せんと要するか。這の僧頭より尾に到るまで便を著ず。〕士又た打つこと一掌。〔果然して雪上に霜を加う。棒を喫し了りて款を呈す。〕云く、「眼は見るも盲の如く、口は説うも啞の如し」。〔更に断和の句有り。又た他の与に判語を読む。〕雪竇別して云く、「初問の処に但だ雪団を握って便ち打たん」。〔是なることは則ち是なるも、賊過ぎし後に弓を張る。也た漏逗少なからず。是の如しと雖

然(ど)も、箭鋒相拄(せんぽうあいあた)るを見んと要(ほっ)して、争奈(いかん)せん鬼窟裏に落在し了ることを。」

一 馬祖道一(七〇九—七八八)門下の居士・龐蘊(?—八〇八)。以下、入矢義高『龐居士語録』(筑摩書房・禅の語録七)を参照。 二 薬山惟儼(七五一?—八三四?)。 三 何かやらかすぞ。 四 雲水。「客」はプロ(専門家)というニュアンス。 五 みごとな雪だ。ひとひらひとひらが別の所には落ちない。落ち着くべき所に落ちている。「好雪」は感嘆の語。 六 第四則・本則の著語に既出。 七 その指示がポイントを射ている。 八 ことばがこだまとなって響く。 九 第三六則・本則の著語に既出。調子を合わせて来おった。 一〇 仕かけに引っ掛かる。 一一 してやった！ 一二 泥棒を引き込んで家財をごっそりやられる。『臨済録』勘弁一(岩波文庫一五〇頁)参照。 一三 往生ぎわが悪い。第二則・頌の著語に既出。 一四 (禅僧たる資格がないのに禅僧だなどと称すれば)地獄で閻魔に徹底的に懲罰を加えられるぞ。「在」は強い断定の語気を表す。 一五 二杓目の汚れ水をぶちまけた。 一六 あいかわらず粗忽だ。 一七 ツイていない。 一八 罰棒を喰ってから泥を吐いた。 一九 未詳。判決理由の文言か。 二〇 判決文。 二一 別にコメントを付けて。 二二 たっぷりとボロを出した。 二三 弓の名人どうしが相対して射合った二本の矢が空中で正面衝突したという故事(『列子』湯問)による。見事な互角の名人芸。

〔評唱〕 龐居士参[一]馬祖・[二]石頭両処有頌。初見石頭便問、[三]不与万法為侶、是什麼人。声未断、被石頭掩却口、有箇省処。作頌道、[四]日用事無別、唯吾自偶諧。[五]頭頭非取捨、処処没張乖。[六]

〔評唱〕 龐居士、馬祖(ばそ)・石頭(せきとう)の両処に参じて頌有り。初め石頭に見(まみ)えて便ち問う、「万法と侶(ともた)為らざる、是れ什麼(いか)なる人ぞ」と。声未だ断えざるに、石頭に口を掩却(ふさ)がれて、箇(こ)の省(さと)る処有り。頌を作って道(い)わく、「日用の事は別無し、唯だ吾れ自ら偶諧(かな)うのみ。頭頭取捨

朱[7]紫誰為号、青[8]山絶点埃。神[9]通并妙用、運水及搬柴。後参馬祖、又問、不与万法為侶、是什麼人。祖云、待你一口吸尽西江水、即向汝道。士豁然大悟、作頌云、十方同聚会、箇箇学無為。此是選仏場、心空及第帰。為佗是作家、後列[10]刹相望、所至競誉。到薬山、槃[11]桓既久、遂辞薬山、山至重佗、命十人禅客相送。是時値雪下、居士指雪云、好雪、片片不落別処。全禅客云、落在什麼処。士便掌。全禅客既不能[12]行令、居士令行[13]一半。令雖行、全禅客恁麼酬対、也不是佗不知落処、各有機鋒、巻舒不同。然有不到居士処、所以[14]落他架下、難出他彀中。居士打了、更与説道理云、眼見如盲、口説如唖。雪竇別前語云、

に非ず、処処張乖没し。朱紫誰か号を為す、青山点埃を絶す。神通并に妙用、水を運び及た柴を搬ぶ」と。後に馬祖に参じて、又た問う、「万法と侶為らざる、是れ什麼なる人ぞ」。祖云く、「你が一口に西江の水を吸い尽すを待って、即ち汝に道わん」と。士豁然として大悟し、頌を作って云く、「十方同に聚会し、箇箇無為を学ぶ。此は是れ選仏場、心空じ及第して帰る」と。佗は是れ作家なるが為に、後に列刹相望んで、至る所競い誉む。薬山に到りて槃桓すること既に久しくし、遂に薬山を辞すに、山佗を至めて重んじ、十人の禅客に命じて相送らしむ。是の時雪の下るに値い、居士雪を指さして云く、「好雪、片片別処に落ちず」。全禅客云く、「什麼処にか落在つる」と。士便ち掌す。全禅客既に令を行うこと能わざれば、居士令一半を行う。令行うと雖も、全禅客恁麼に酬対するは、也た是れ佗は落処を知らざるにあらず、各おの機鋒有りて、巻舒同じからざればなり。然れども居士の処に到らざ

初問処但握雪団便打。雪竇恁麼要不辜他問端、只是機遅。[15]慶蔵主道、居士機如掣電。等你握雪団、到幾時。和声便応、和声打、方始勦絶。雪竇自頌佗打処云、

る有り、所以に他の架下に落ちて、他の彀中を出で難し。居士打ち了り、更に与に道理を説いて云く、「眼は見るも盲の如く、口は説うも唖の如し」と。雪竇は前語に別して云く、「初問の処に但だ雪団を握って便ち打たん」と。雪竇恁麼に他の問端に辜かざらんと要するも、只だ是れ機遅し。慶蔵主道く、「居士の機掣電の如し。你が雪団を握るを等たば幾時にか到らん。声和に便ち応じ、声和に打って、方始めて勦絶せん」と。雪竇自ら佗の打処を頌して云く、

一 以下に見える問答については入矢義高編『馬祖の語録』(八五頁～)および『龐居士語録』(一二頁～二一頁)を参照。二 石頭希遷(七〇〇—七九〇)。三 一切の存在と同じ次元にはいない者。四 ふだんにやっていることは格別のこともない。五 一つ一つのことがら。六 一種の俗信における凶事。乖張。七 朝廷から与えられる朱衣や紫衣などおれは関知しない。八 わが生は青山のごとくいささかの埃もない。九 水を汲み薪を運ぶという日常の営みそのものが、この私の至妙な神通の働きにほかならぬ。一〇 諸方の禅刹。一一 逗留する。一二 主人公としてふるまう。一三 半分だけ。一四 (龐居士の)仕掛けにはまって、わなから脱け出せない。一五 圜悟の同学。

【頌】雪団打、雪団打。〔争奈落在第二機。不労拈出。頭上漫漫、脚下

【頌】雪団もて打て、雪団もて打て。〔争奈せん第二機に落在することを。拈出するを労せず。頭上漫漫、

漫漫。〕[三]龐老機関没可把。〔往往有人不知、只恐不恁麼。〕[四]天上人間不自知、〔是什麼消息。雪竇還知麼。〕[五]眼裏耳裏絶瀟灑。〔箭鋒相拄。眼見如盲、口説如唖。〕瀟灑絶、〔作麼生。向什麼処、見龐老与雪竇。〕碧眼胡僧難辨別。〔達磨出来、向你道什麼。打云、闍黎道什麼。一坑埋却。〕

【評唱】雪団打、雪団打、龐老機関没可把、雪竇要在居士頭上行。古人以雪明[一]一色辺事、雪竇意道、当時若握雪団打時、居士縦有如何機関、亦難搆得。雪竇自誇他打処、殊不知有[二]落節処。天上人間不自知、眼裏耳裏

脚下漫漫。〕龐老の機関、把うべき没し。〔往往人の知らざる有るも、只だ恐らくは恁麼ならず。〕天上人間、自ずから知らず。〔是れ什麼たる消息ぞ。雪竇還た知るや。〕眼裏耳裏、瀟灑を絶す。〔箭鋒相拄る。眼は見るも盲の如く、口は説うも唖の如し。〕瀟灑絶して、〔作麼生。什麼処に向いてか龐老と雪竇とに見わん。〕碧眼の胡僧も辨別し難し。〔達磨出で来たりて、你に向って什麼と道いしぞ。打って云く、闍黎は什麼と道いしぞ。一坑に埋め却まん。〕

【評唱】「雪団もて打て、雪団もて打て、龐老の機関、把うべき没し」と、雪竇は居士の頭上に行かんと要す。古人は雪を以て一色辺の事を明すも、雪竇の意に道く、「当時若し雪団を握って打つ時、居士に縦い如何なる機関有るも、亦た搆り得難からん」と。雪竇自ら他の打処を誇るも、殊に知らず落節の処有ることを。「天

一 とりあげるまでもない。 二 頭上も足下も一面の雪。 三 龐おやじの手だてはとらえようがない。 四 天上にも人の世にも彼のその心を知るものはいない。 五 眼にも耳にも、えもいわれぬ爽やかさ。

絶瀟灑、眼裏也是雪、耳裏也是雪、正住在一色辺。亦謂之普賢境界一色辺事、亦謂之打成一片。雲門道、直得尽乾坤大地無繊毫過患、猶為転句。不見一色、始是半提。若要全提、須知有向上一路始得。到這裏、須是大用現前、針劄不入、不聴他人処分。所以道、他参活句、不参死句。古人道、一句合頭語、万劫繋驢橛。有什麼用処。雪竇到此頌殺了、復転機道、只此瀟灑絶、直饒是碧眼胡僧、也難辨別。碧眼胡僧尚難辨別、更教山僧説箇什麼。

上人間、自ずから知らず、眼裏耳裏、瀟灑を絶す」とは、眼裏も也た是れ雪、耳裏も也た是れ雪、正に一色辺に住在す。亦た之を普賢の境界一色辺の事と謂い、亦た之を打成一片と謂う。雲門道く、「直得い尽乾坤大地に繊毫の過患無きも、猶お転句と為す。一色を見ざれば、始めて是れ半提。若し全提するを要せば、須らく向上の一路有るを知って、始めて得し」と。這裏に到り、須是らく大用現前、針劄不入にして、他人の処分を聴かざるべし。所以に道う、「他活句に参じて死句に参ぜず」と。古人道く、「一句合頭の語、万劫の繋驢橛」と。什麼の用処か有らん。雪竇此に到って頌殺し了り、復た機を転じて道う、「只だ此の瀟灑絶、直饒是れ碧眼の胡僧なるも、也た辨別し難し」と。碧眼の胡僧すら尚お辨別し難し、更に山僧をして箇の什麼をか説わしめん。

一 一切平等の世界。 二 しくじり。 三 「普賢境界」は平等の世界をいう。第三七則・頌の評唱に「一互晴空是普賢境界」と。 四 ひとつに溶け合って一体となる。 五 雲門文偃（八六四―九四九）。語は第

三六則・頌の評唱に既出。六 針も刺し通せない。七 薬山の法嗣、船子徳誠。八 ぴたりとツボを押さえた名句は、人を永久に金縛りにする。

第四三則　洞山寒暑廻避

垂示云、[1]定乾坤句、万世共遵、[2]擒虎兕機、千聖莫辨。直下更無纖翳、全機随処斉彰。[3]要明向上鉗鎚、須是作家炉鞴。且道、従上来還有恁麼家風也無。試挙看。

第四三則　洞山の寒暑廻避

垂示に云く、乾坤を定むるの句は、万世共に遵い、虎兕を擒うるの機は、千聖も辨ずる莫し。直下に更に纖翳なく、全機随処に斉しく彰る。向上の鉗鎚を明めんと要せば、作家の炉鞴を須是つべし。且道、従上来還た恁麼なる家風あり也無。試みに挙し看ん。

一『虚堂録』一に「定乾坤句、今古共遵、擒虎兕機、聖凡莫辨」と。二 野牛に似た一角獣という。猛獣の代表。三 向上の世界の厳しいはたらきを明らかにするには、すぐれた指導者による鍛練が必要である。「鉗鎚」は、やっとこと金づち。「炉鞴」は、ふいご。ともに鍛冶の道具。

【本則】挙。僧問洞山、[1]寒暑到来、如何廻避。〔不是這箇時節。[2]劈頭劈面、在什麼処。〕山云、何不向無寒暑処去。〔天下人尋不得。[3]蔵身露影。[4]蕭何売却仮銀城。〕僧云、如何是無寒暑処。〔[5]賺殺一船人。随他転也、

【本則】挙す。僧、洞山に問う、「寒暑到来せば、如何か廻避せん」。〔是れ這箇の時節にあらず。劈頭劈面、什麼処にか在る。〕山云く、「何ぞ寒暑無き処に去かざる」。〔天下の人尋ね得ず。身を蔵して影を露す。蕭何売却す仮銀城。〕僧云く、「如何なるか是れ寒暑無き処」。〔一船の人を賺殺す。他に随いて転るや、一釣に

[六]一釣便上。」山云、[七]寒時寒殺闍黎、熱時熱殺闍黎。[八]〔真不掩偽、曲不蔵直。臨崖看虎兕、[九]特地一場愁。掀翻大海、踢倒須弥。且道、洞山在什麼処。」

して便ち上る。」山云く、「寒き時は闍黎を寒殺し、熱き時は闍黎を熱殺す」。〔真は偽を掩わず、曲は直を蔵さず。崖に臨んで虎兕を看るは特地なる一場の愁い。大海を掀翻し、須弥を踢倒す。且道、洞山は什麼処にか在る。」

一 洞山良价(八〇七—八六九)。 二 真正面から来ても、暑さ寒さはどこにも無い。 三 その正体をただほのめかすだけ。無いものを有るかのように言う。 四 漢の蕭何(?—前一九三)は銀城を売ろうと言って匈奴を欺いたという。 五 天下の人をコケにした。 六 (洞山が)ちょっと垂らした糸にたちまち引っ掛かった。 七 寒い時はとことん自らを冷え込ませ、暑い時はとことん自らをうだらせよ。 八 真実は虚偽を明らかにし、曲ったものは真直ぐなものを顕す。 九 とりわけがっくりとくる情景。

〔評唱〕 [一]黄龍新和尚拈云、洞山[二]袖頭打領、腋下剜襟。争奈這僧[三]不甘。如今有箇出来問黄龍、且道、如何支遣。良久云、[四]安禅不必須山水、滅却心頭火自涼。諸人且道、洞山圏繢落在什麼処。若明辨得、始知洞山下[五]五位[六]回互正偏接人、不妨奇特。到這向上境

〔評唱〕 黄龍の新和尚拈じて云く、「洞山は袖頭に領を打け、腋下に襟を剜る」と。争奈せん這の僧甘んぜず。如今箇の出で来たりて黄龍に問うもの有らば、且道、如何か支遣わん。良久して云く、「安禅は必ずしも山水を須めず、心頭を滅却すれば火も自ずから涼し」と。諸人且道、洞山の圏繢、什麼処にか落在する。若し明辨得せば、始めて洞山下の五位の正偏を回互して

界、方能如此、不消[七]安排、自然恰好。所以道、正中偏[八]、三更初夜月明前、莫怪相逢不相識、隠隠[九]猶懐旧日嫌。[一〇]偏中正、失暁老婆逢古鏡、分明覿面更無真、休更[一一]迷頭還認影。正中来[一二]、無中有路出塵埃、但能[一三]不触当今諱、也勝前朝断舌才。偏中至[一四]、両刃交鋒不須避、好手還同火裏蓮、宛然自有衝天気。兼中到[一五]、不落[一六]有無誰敢和、人人尽欲出常流、折合還帰炭裏坐。

人を接すること、不妨に奇特たるを知らん。這の向上の境界に到って、方めて能く此の如く、安排を消いずして自然に恰好なり。所以に道く、「正中偏、三更初夜月明の前、怪しむ莫れ相逢って相識らず、隠隠として猶お旧日の嫌を懐く。偏中正、失暁の老婆古鏡に逢う、分明覿面なるも更に真無し、更に頭に迷い還た影を認むることを休めよ。正中来、無中に路有り塵埃を出づ、但だ能く当今の諱に触れずんば、也た前朝の断舌の才に勝れり。偏中至、両刃鋒を交えて避くるを須いず、好手還って火の裏の蓮に同じ、宛然として自ずから衝天の気有り。兼中到、有無に落ちず誰か敢て和せん、人人尽く常流を出でんと欲す、折合して炭裏に還り帰して坐す」と。

一 黄龍悟新(一〇四三―一一一四)。 二 固定観念を転換してみせることの喩え。 三 納得しなかった。 四 心静かに坐禅するには山水が必要なわけではない、分別心を亡じてしまえば火すらもともと涼しいものだ。もとは杜荀鶴(八四六?―九〇四?)の詩「夏日題悟空上人院」(『唐風集』下)の句。 五 三・七・七・七の四句を五回くりかえす形式によって仏法の大意を示したもの。以下、柳田聖山訳『洞山

録』(中公バックス、世界の名著・『禅語録』所収)を参照。六 正(平等)と偏(差別)とを相互に転換運動させる。正とは本体、体・君・空・真・理・黒など。偏とは現象、用・臣・色・俗・事・白など。七 割りふる。八 本体の内に包みこまれた現象は、真夜中の月のさす前。九 隠然となじみの顔がかくれている。「隠隠」は、見えないけれどもはっきり存在するさま。「嫌」は流布本では「妍」。一〇 現象の中に潜む本体は、寝すぎた老女が古渡りの明鏡に対するところ。一一 鏡に映った頭の影を自分の頭と取り違えるな。「迷頭認影」は第一五則・頌の著語に既出。一二 本体がずばりと現われると、無の中から現実世界を超え出た通路が開かれる。一三 今上の御名に抵触しなければ、舌を切られた隋朝の文豪を超える天才といえよう。一四 本体と現象とが出会って白刃の斬り合いになった時、命を惜しんで回避してはならぬ。一五 本体と現象とがともに行き着くところ、有でも無でもないものを誰がお相手できようか。一六 結局は。

一 浮山遠録公以此公案為五位之格。若会得一則、餘者自然易会。二 巌頭道、三 如水上胡蘆子相似。捺著便転、殊不消糸毫気力。

曾有僧問洞山、四 文殊普賢来参時如何。山云、趕向水牯牛群裏去。僧云、和尚入地獄如箭。山云、全得佗力。洞山道、何不向無寒暑処去、此是偏

浮山の遠録公、此の公案を以て、五位の格を為る。若し一則を会得せば、餘は自然に会し易し。巌頭道く、「水上の胡蘆子の如くに相似たり」と。捺著うるや便ち転じ、殊に糸毫の気力も消いず。

曾て僧有り、洞山に問う、「文殊・普賢来参の時如何」。山云く、「水牯牛の群の裏へ趕向み去らん」。僧云く、「和尚は地獄に入ること箭の如し」。山云く、「全く佗の力を得たり」と。洞山道く、「何ぞ寒暑無き処

中正。僧云、如何是無寒暑処。山云、寒時寒殺闍黎、熱時熱殺闍黎。此是正中偏。雖正却偏、雖偏却円。曹洞録中、備載子細。若是臨済下、無許多事、這般公案、直下便会。

有者道、大好無寒暑。有什麼巴鼻。[5]古人道、若向剣刃上走則快、若向情識上見則遅。

不見[6]僧問翠微、如何是祖師西来意。微云、待無人来、向你道。遂入園中行。僧云、此間無人、請和尚道。微指竹云、這一竿[7]竹得恁麼長、那一竿竹得恁麼短。其僧忽然大悟。

又[8]曹山問僧、恁麼熱、向什麼処廻避。僧云、鑊湯炉炭裏廻避。山云、

に去かざる」と。此れは是れ偏中正。僧云く、「如何なるか是れ寒暑無き処」。山云く、「寒き時は闍黎を寒殺し、熱き時は闍黎を熱殺す」と。此れは是れ正中偏。正なりと雖も却って偏、偏なりと雖も却って円なり。『曹洞録』中に備に子細を載す。若是臨済下ならば、許多しき事無く、這般る公案は直下に便ち会す。

有る者は道く、「大いに好し寒暑無し」と。什麼の巴鼻か有らん。古人道く、「若し剣刃上を走かば則ち快く、若し情識の上に向いて見れば則ち遅し」と。

見ずや僧、翠微に問う、「如何なるか是れ祖師西来意」。微云く、「人の来たる無きを待って、你に道わん」と。遂に園中に入りて行く。僧云く、「此間人無し、請う和尚道え」。微、竹を指して云く、「這の一竿の竹は恁麼に長きを得たり、那の一竿の竹は恁麼に短きを得たり」と。其の僧忽然と大悟す。

又た曹山、僧に問う、「恁麼に熱ければ、什麼処にか廻避せん」。僧云く、「鑊湯炉炭裏に廻避せよ」。山

鑊湯炉炭裏如何廻避。僧云、衆苦不能到。看他家裏人、自然会他家裏人説話。雪竇用他家裏事頌出。

云く、「鑊湯炉炭裏如何に廻避せん」。僧云く、「衆苦到ること能わず」と。看よ他の家裏の人、自然に他の家裏の人の説話を会するを。雪竇は他の家裏の事を用て頌出す。

一 浮山法遠(九九一—一〇六七)。二 巌頭全豁(八二八—八八七)。三 第三八則・本則の評唱に既出。四 以下の問答は『会元』一五・洞山守初章に見える。五 未詳。六 翠微無学の法嗣、清平令遵(八四五—九一九)。七『伝灯録』一五・清平令遵章では「雖領其微言、猶未徹其玄旨」と。八 曹山本寂(八四〇—九〇一)の法嗣、曹山慧霞。『伝灯録』二〇では、その答えを「黙置す」(取り合わなかった)とある。

【頌】垂手還同万仞崖、〔不是作家、誰能辨得。何処不円融。王勅既行、諸侯避道。〕正偏何必在安排。〔若是安排、何処有今日。作麼生両頭不渉。〕琉璃古殿照明月、〔円陀陀地。切忌認影、且莫当頭。〕忍俊韓獹空上階。〔不是這回。蹉過了也。逐塊作什麼。打云、你与

【頌】垂手還って万仞の崖に同じ、〔是れ作家にあらずんば誰か能く辨得さん。何処か円融ならざらん。王勅既に行われて、諸侯道を避く。〕正偏何ぞ必ずしも安排に在らん。〔若し是安排せば、何処にか今日有らん。作麼生か両頭渉らざる。〕琉璃の古殿に明月照き、〔円陀陀地。切に忌む影を認むることを。且は当頭すること莫れ。〕忍俊たる韓獹も空しく階に上る。〔是れ這回のみにあらず。

這僧同参。」

蹉過い了れり。塊を逐って什麼か作ん。打って云く、你は這の僧と同参なり。」

一 手を垂れて人を教化することは万仞の断崖さながらの険峻さ。二 天子の命令が施行されると、諸侯も使者のために道を避ける。三 正と偏とに割りふる必要はない。四 正と偏とが関わりあわないことがあろうか。五 洞山が開示した寒暑なき世界のめでたさ。六 まんまるい。七 どっこい、その円い月影にまどわされまいぞ。それをモロに受け取ってはならぬ。八 かの名犬の韓獹も自分を抑えきれずに明月を目指して階段をかけ上ってしまう。九 今回だけのことではない。

【評唱】　曹洞下有出世不出世、有垂手不垂手。若不出世、目視雲霄。若出世、便灰頭土面。目視雲霄、即是万仞峰頭。灰頭土面、即是垂手辺事。有時灰頭土面、即在万仞峰頭。有時万仞峰頭、即是灰頭上面。其実入鄽垂手、与孤峰独立一般。帰源了性、与差別智無異。切忌作両橛会。所以道、垂手還同万仞崖。直是無你湊泊処。正偏何必在安排、若到用時、自

【評唱】　曹洞下に出世と不出世有り、垂手と不垂手有り。若し不出世なれば、目に雲霄を視ん。若し出世なれば、便ち灰頭土面。目に雲霄を視るは、即ち是れ万仞峰頭。灰頭土面は、即ち是れ垂手辺の事なり。有る時は灰頭土面にして、即ち万仞峰頭に在り。有る時は万仞峰頭にして、即ち是れ灰頭土面。其の実は鄽に入りて手を垂るると、孤峰に独り立つとは一般なり。帰源了性と差別智とは異なること無し。切に忌む両橛の会を作すことを。所以に道う、「垂手還って万仞の崖に同じ」と。直是に你が湊泊く処無し。「正偏何ぞ

然如此、不在安排也。此頌洞山答処。後面道、琉璃古殿照明月、忍俊韓獹空上階。此正頌這僧逐言語走。洞下有此石女・木馬・無底籃・夜明珠・死蛇等十八般。大綱只明正位。如月照琉璃古殿、似有円影。洞山答道、何不向無寒暑処去。其僧一似韓獹逐塊、連忙上階、捉其月影相似。又問、如何是無寒暑処。山云、寒時寒殺闍黎、熱時熱殺闍黎。如韓獹逐塊、走到階上、又却不見月影。韓獹乃出戦国策。云、韓氏之獹、駿狗也。中山之兎、狡兎也。是其獹方能尋其兎。雪竇引以喩這僧也。只如諸人、還識洞山為人処麼。良久云、討甚兎子。

必ずしも安排に在らん」とは、若し用うる時に到らば、自然に此の如く、安排に在らず。此れは洞山の答処を頌す。後面に道う、「琉璃の古殿に明月照き、忍俊たる韓獹空しく階に上る」と。此れは正に這の僧、言語を逐って走くを頌す。洞下に此の石女・木馬・無底籃・夜明珠・死蛇等の十八般有り。大綱只だ正位を明す。月の琉璃古殿を照すが如きは、円影有るに似たり。洞山答えて道く、「何ぞ寒暑無き処に去かざる」と。其の僧は一に韓獹の塊を逐って、連忙て階に上り、其の月影を捉えんとするが似くに相似たり。又た問う、「如何なるか是れ寒暑無き処」。山云く、「寒き時は闍黎を寒殺し、熱き時は闍黎を熱殺す」と。韓獹の塊を逐い、走って階上に到るも、又た却って月影を見ざるが如し。韓獹は乃ち『戦国策』に出づ。云く、「韓氏の獹は駿狗なり。中山の兎は狡兎なり」と。是れ其の獹にして方めて能く其の兎を尋ぬ。雪竇引いて以て這の僧に喩う。只だ諸人の如きは、還た洞山の為人の処

を識るや。良久して云く、甚の兎子をか討めん。

＊戦国策　福本は「晋書」。

一世間に出て教化するのとしないのと。出世は垂手、不出世は不垂手。二遥かに高い空を見る。孤高を持するさま。三頭は灰だらけ、顔は泥だらけ。汚濁にまみれての「為人」のさま。四孤高の立場。五為人の立場。六雑踏に入って教化すること。七本源に帰って本性を悟ること。八多様な対象を識別する心のはたらき。分別智。九『戦国策』斉三に「韓子盧者、天下之疾犬也。東郭逡者、海内之狡兎也」と。

第四四則　禾山解打鼓

【本則】挙。禾山垂語云、習学謂之聞、絶学謂之隣。〔天下衲僧跳不出。無孔鉄鎚。一箇鉄橛子。〕過此二者、是為真過。〔頂門上具一隻眼作什麼。〕僧出問、如何是真過。〔道什麼。一筆勾下。有一箇鉄橛子。〕山云、解打鼓。〔鉄橛。鉄蒺藜。確確。〕又問、如何是真諦。〔道什麼。両重公案。又有一箇鉄橛子。〕山云、解打鼓。〔鉄橛。鉄蒺藜。確確。〕又問、即心即仏即不問、如何是非心非仏。〔道什麼。這箇垃圾堆。三段不同。又一箇鉄蒺藜子。〕山云、解打鼓。〔鉄橛。鉄蒺藜。確確。〕又問、向上

第四四則　禾山、解く鼓を打つ

【本則】挙す。禾山垂語して云く、「習学、之を聞と謂い、絶学、之を隣と謂う。〔天下の衲僧跳け出せず。無孔の鉄鎚。一箇の鉄橛子。〕此の二つを過ぐる者、是を真過と為す」。〔頂門上に一隻眼を具して什麼をか作す。〕僧出でて問う、「如何なるか是れ真過」。〔什麼を道うぞ。一筆に勾下す。一箇の鉄橛子有り。〕山云く、「解く鼓を打つ」。〔鉄橛。鉄蒺藜。確確。〕又た問う、「如何なるか是れ真諦」。〔什麼を道うぞ。両重の公案。又た一箇の鉄橛子有り。〕山云く、「解く鼓を打つ」。〔鉄橛。鉄蒺藜。確確。〕又た問う、「即心即仏は即ち問わず、如何なるか是れ非心非仏」。〔什麼を道うぞ。這箇の垃圾堆。三段同じからず。又た一箇の鉄蒺藜子。〕山云く、「解く鼓を打つ」。〔鉄橛。鉄蒺藜。確確。〕又た問う、「向上の人来たる時、如何にか接す

人来時、如何接。〔道什麼。遭他第四杓悪水来也。又有一箇鉄橛子。〕山云、解打鼓。〔鉄橛。鉄蒺藜。確確。且道、落在什麼処。朝到西天、暮帰東土。〕

る」。〔什麼を道うぞ。他の第四杓の悪水に遭い来たれり。又た一箇の鉄橛子有り。〕山云く、「解く鼓を打つ」。〔鉄橛。鉄蒺藜。確確。且道、什麼処にか落在する。朝に西天に到り、暮に東土に帰る。〕

＊頂門〜什麼〔一〇字〕　福本は「作什麼頂門上具一隻眼」。　一 禾山無殷(八八四—九六〇)。　二『宝蔵論』による句。「隣」は究極の境地の一歩手前。　三 柄をつける穴のない鉄鎚。手にあまるしろもの。　四 一本の鉄棒。死命を制する一物。　五 習学も絶学も越えた境地。　六 頭のてっぺんに第三の目(人間の次元を超えた眼力)を持って何になるというのだ。　七 サッと一筆に線を引いて抹殺する。　八 太鼓がうまい。「解」は、〜ができる。　九 鉄菱。撒布して敵の侵入を防ぐための菱の実形の武器。近寄りがたい難問だ。　一〇 ばっちり、ばっちり。　一一 最高の究極的真理。聖諦第一義。　一二 この心こそが仏にほかならない。　一三「即心即仏」の裏返し。心・仏への執着を払う。　一四 ごみ・がらくたの山。　一五『種電鈔』では「又有一箇鉄橛子」。　一六「仏向上事」(仏の先へ踏み超えた世界)の人。超仏越祖の消息を体得した人。　一七 朝インドに着いたかと思うと、もう夕べには中国に帰っている。凄腕の禅匠の手なみ。

【評唱】　禾山垂示云、習学謂之聞、絶学謂之隣。過此二者、是為真過。此一則語、出宝蔵論。学至無学、謂

【評唱】　禾山垂示して云く、「習学、之を聞と謂い、絶学、之を隣と謂う。此の二つを過ぐる者、是を真過と為す」と。此の一則の語は、『宝蔵論』に出でたり。

之絶学。所以道、浅聞深悟、深聞不悟、謂之絶学。一宿覚道、吾早年来積学問、亦曾討疏尋経論。習学既尽、謂之絶学無為閑道人。及至絶学、方始与道相近。直得過此二学、是謂真過。其僧也不妨明敏、便拈此語問禾山。山云、解打鼓。所謂言無味、語無味。欲明這箇公案、須是向上人、方能見此語不渉理性、亦無議論処。直下便会、如桶底脱相似、方是衲僧安穏処、始契得祖師西来意。所以雲門道、雪峰輥毬、禾山打鼓、国師水碗、趙州喫茶、尽是向上拈提。

学の無学に至る、之を絶学と謂う。所以に道う、浅く聞いて深く悟る、深く聞いて悟らず、之を絶学と謂うと。一宿覚道く、「吾早年より来た学問を積み、亦た曾て疏を討ね経論を尋ぬ」と。習学既に尽く、之を絶学無為の閑道人と謂う。絶学に至るに及んで、方始めて道と相近し。直得に此の二学を過ぐる、是を真過と謂う。其の僧也た不妨に明敏にして、便ち此の語を拈げて禾山に問う。山云く、「解く鼓を打つ」と。所謂言無味、語無味なり。這箇の公案を明めんと欲せば、須是らく向上の人にして、方めて能く此の語理性に渉らず、亦た議論の処無きことを見るべし。直下に便ち会して、桶底の脱するが如くに相似たらば、方めて是れ衲僧安穏の処、始めて祖師西来意に契得わん。所以に雲門道く、「雪峰の輥毬・禾山の打鼓・国師の水碗・趙州の喫茶、尽く是れ向上の拈提なり」と。

一 僧肇（三八四―四一四？）の著とされる。唐代中期に仮託されたもの。　二 言葉の表面からでも深く悟り、言葉の奥まで分け入ってしかも悟りに定着しない。圜悟の上堂に「浅聞深悟底、錦上鋪花。深

聞不悟底、生鉄鋳就」と。三 永嘉玄覚（六七五―七一三）。以下の語は『証道歌』に「遊江海、渉山川、尋師訪道為参禅」とある意を取ったものか。四「閑」とは、修むべき道もなく、証すべき法もなく、無為無事であること。『証道歌』の句。五〈理法〉的な体質。六 禅僧として確かでゆるぎないあり方。七 第一七則・本則に見える。八 雲門文偃（八六四―九四九）。以下の語は『雲門広録』中による。九 頌の評唱に見える。一〇 第四八則・本則の評唱を参照。一一 第二二則・本則の評唱を参照。一二 一段上へ突き抜けた問題提起。

又問、如何是真諦。山云、解打鼓。真諦更不立一法。若是俗諦、万物倶*備。真俗無二、是聖諦第一義。又問、即心即仏即不問、如何是非心非仏。山云、解打鼓。即心即仏即易求、若到非心非仏即難、少有人到。又問、向上人来時如何接。山云、解打鼓。向上人即是透脱灑落底人。此四句語、諸方以為宗旨、謂之禾山四打鼓。

又た問う、「如何なるか是れ真諦（しんたい）」。山云く、「解く鼓を打つ」と。真諦は更に一法を立てず。若（も）し是俗諦ならば、万物倶に備る。真俗無二、是れ聖諦第一義。又た問う、「即心即仏は即ち問わず、如何なるか是れ非心非仏」。山云く、「解く鼓を打つ」と。即心即仏は即ち求め易し、若し非心非仏に到らば即ち難くして、人の到る有ること少（まれ）なり。又た問う、「向上の人来たる時如何にか接せん」。山云く、「解く鼓を打つ」と。向上の人は即ち是れ透脱灑落底の人なり。此の四句の語、諸方以て宗旨と為し、之を禾山の四打鼓（しだく）と謂う。

＊万物〜一義〔一四字〕　福本は「万法倶備、真俗不二、是第一義」。

只如僧問鏡清[一]、新年頭還有仏法也無。清云、有。僧云、如何是新年頭仏法。清云、元正啓祚[二]、万物咸新。僧云、謝師答話。清云、老僧今日失[三]利。似此答話、有十八[四]般失利。

一 鏡清道怤(どうふ)(八六八―九三七)。二 年の始め福運がひらけ、万物みなあらたまる。明けましておめでとう。新年の挨拶用語。三（古くさい紋切型を言わされて）しくじった。四「十八」は「六」の誤りか。『会元』七・鏡清章には六失利を挙げる。

又僧問浄果大師[一]、鶴立孤松時如何。果云、脚[二]底下一場懡㦬。又問、雪覆千山時如何。果云、日出後[三]一場懡㦬。又問[四]、会昌沙汰時、護法神向什麼処去。果[五]云、三門外両箇漢一場懡㦬。諸方謂之三懡㦬。

一 護国守澄。二 足から下の方がゾクッと気恥ずかしい。三（一色平等があからさまになって）照れくさい。四 会昌五年(八四五)、唐の武宗による廃仏。五 仁王門の金剛力士像。

又保福[一]問僧、殿裏是什麼仏。僧云、

只如(たと)えば僧、鏡清(きょうしょう)に問う、「新年頭に還(は)た仏法有りや無」。清云く、「有り」。僧云く、「如何なるか是れ新年頭の仏法」。清云く、「元正 祚(さいわい)を啓(ひら)き、万物 咸(ことごと)く新たなり」。僧云く、「師の答話を謝す」。清云く、「老僧今日失利す」と。此の答話の似(ごと)きは十八般の失利有り。

又た僧、浄果(じょうか)大師に問う、「鶴、孤松に立つ時は如何」。果云く、「脚底下、一場の懡㦬(はずかしさ)」。又た問う、「雪、千山を覆う時は如何」。果云く、「日出でて後、一場の懡㦬」。又た問う、「会昌沙汰(さた)の時、護法神什麼処(いずこ)にか去る」。果云く、「三門外の両箇(ふたり)の漢、一場の懡㦬」と。諸方之を三懡㦬(さんもら)と謂(い)う。

又た保福(ほふく)、僧に問う、「殿裏は是れ什麼(なん)の仏ぞ」。僧

和尚定当看。福云、釈迦老子。僧云、莫瞞人好。福云、却是你瞞我。又問僧云、你名什麼。僧云、咸沢。福云、或遇枯涸時如何。僧云、誰是枯涸者。福云、我。僧云、和尚莫瞞人好。福云、却是你瞞我。又問僧、你作什麼業、喫得恁麼大。僧云、和尚也不小。福作蹲身勢。僧云、和尚莫瞞人好。福云、却是你瞞我。又問浴主、浴鍋闊多少。主云、請和尚量看。福作量勢。主云、和尚莫瞞人好。福云、却是你瞞我。諸方謂之保福四瞞人。

云く、「和尚定当し看よ」。福云く、「釈迦老子」。僧云く、「人を瞞すこと莫くんば好し」。福云く、「却って是れ你、我を瞞す」。又た僧に問うて云く、「你の名は什麼ぞ」。僧云く、「咸沢」。福云く、「或し遇たま枯涸る時は如何」。僧云く、「誰か是れ枯涸らす者ぞ」。福云く、「我」。僧云く、「和尚、人を瞞すこと莫くんば好し」。福云く、「却って是れ你、我を瞞す」。又た僧に問う、「你什麼の業を作してか、喫し得て恁麼も大いなる」。僧云く、「和尚も也た小さからず」。福、身を蹲る勢を作す。僧云く、「和尚人を瞞すこと莫くんば好し」。福云く、「却って是れ你、我を瞞す」。又た浴主に問う、「浴鍋闊きこと多少ぞ」。主云く、「請う和尚量り看よ」。福、量る勢を作す。主云く、「和尚、人を瞞すこと莫くんば好し」。福云く、「却って是れ你、我を瞞す」と。諸方之を保福の四瞞人と謂う。

一 保福従展(?—九二八)。 二 ピタリと規定する。「的当」とも。 三 どんな手立てによって、こんな大きな身になったのか。 四 禅院の入浴のことを司る役。知浴。『伝灯録』一九では「師門飯頭、鑊闊

多少」と。

又如雪峰[一]四漆桶、皆是従上宗師、各出深妙之旨、接人之機。雪竇後面引一落索[二]、依雲門示衆、頌出此公案。

又た雪峰の四漆桶の如き、皆な是れ従上の宗師、各おの深妙の旨を出して、人を接するの機なり。雪竇後面に一落索を引き、雲門の示衆に依って、此の公案を頌出す。

一 雪峰義存（八二二—九〇八）と投子大同（八一九—九一四）との問答。「投子の四漆桶」とも。 二 ひとくさりの談義。一絡索。

【頌】一拽石、〔寰中天子勅[一]。癩児牽伴[二]。向上人恁麼来。〕二般土。〔塞外将軍令[三]。両箇一状領過[四]。同病相憐。〕発機須是千鈞弩[五]。〔若是千鈞、也透不得。不可軽酬。豈為死蝦蟆。〕象骨老師曾輥毬[六]、〔也有人曾恁麼来。有箇無孔鉄鎚。阿誰不知。〕争似禾山解打鼓。〔鉄橛子。須還這老漢始得。一子親得[七]。〕報君知、〔雪竇也未夢見在[八]。雪上加霜。你還知

【頌】一に石を拽き、〔寰中には天子の勅。癩児伴を牽く。向上の人恁麼に来たる。〕二に土を般ぶ。〔塞外には将軍の令。両箇一状に領過す。同病相憐む。〕機を発するは須是らく千鈞の弩なるべし。〔若是千鈞なるも也た透け得ず。軽しく酬うべからず。豈に死蝦蟆の為にせんや。〕象骨老師曾て毬を輥すも、〔也た人有って曾て恁麼にし来たる。箇の無孔の鉄鎚有り。阿誰か知らざる。〕争か似かん禾山の解く鼓を打つに。〔鉄橛子。須らく這の老漢に還して始めて得し。一子親しく得たり。〕君に報じて知らしめん、〔雪竇も也た未だ

麼。〕莫莽鹵。〔也有些子。儱儱侗。〕甜者甜兮苦者苦。〔謝答話。錯下注脚。好与三十棒。喫棒得也未。便打。依旧黒漫漫。〕

夢にも見ざる在。雪上に霜を加う。你還た知るや。〕莽鹵なること莫れ。〔也た些子有り。儱儱侗侗。〕甜き者は甜く、苦き者は苦し。〔答話を謝す。錯って注脚を下す。好し三十棒を与うるに。棒を喫すること得きや末。便ち打つ。依旧として黒漫漫。〕

一 国の内では天子の勅命。確固不動の至上命令。二「同病相憐」と同意。三 辺境では将軍の威令。「寰中天子勅」とは別箇の法体制。四「拽石」の帰宗・「般土」の木平は一括送検だ。評唱を参照。五 引きがねを引くからには、千鈞の強弩でなくてはならぬ。六 象骨老師(雪峰義存)は毬をころがしたことがあるが。「象骨」は第二二則・頌に既出。「輥」は滾・衮(ころがす)と同じ。七 一人の子(禾山)だけがそれをものにしている。八 むだなことだ。九 ちゃらんぽらんではいかん。一〇 ぼんやり、もっさり。一一 これら四人のそれぞれに独自な持ち味。一二 三十棒を喰らわせたいところだ。

〔評唱〕帰宗一日、普請拽石。宗問維那、什麼処去。維那云、拽石去。宗云、石且従汝拽、即不得動著中心樹子。木平凡有新到至、先令般三転土。木平有頌、示衆云、東山路窄西山低、新到莫辞三転泥。嗟汝在途経

〔評唱〕帰宗は一日、普請して石を拽く。宗、維那に問う、「什麼処にか去く」。維那云く、「石を拽きに去く」。宗云く、「石は且ず汝が拽くに従す。即ち中心の樹子を動著すこと不得れ」と。木平は凡そ新到の至る有れば、先ず三転の土を般ばしむ。木平に頌有り、衆に示して云く、「東山は路窄く西山は低し、新到三転

日久、明明不暁却成迷。後来有僧問云、三転内即不問、三転外事作麼生。平云、鉄輪天子寰中勅。僧無語。平便打。所以道、一拽石、二般土、発機須是千鈞弩。雪竇以千鈞之弩喩此話、要見他為人処。三十斤為一鈞、一千鈞則三万斤。若是獰龍虎狼猛獣、方用此弩。若是鷦鷯小可之物、必不可軽発。所以千鈞之弩、不為鼷鼠而発機。

の泥を辞すること莫れ。嗟、汝は途に在って日を経ること久しきに、明明たるを暁らず却って迷を成す」と。後来に僧有り、問うて云く、「三転の内は即ち問わず、三転の外の事作麼生」。平云く、「鉄輪天子、寰中の勅」と。僧、語無し。平便ち打つ。所以に道う、「一に石を拽き、二に土を般ぶ、機を発するは、須是らく千鈞の弩なるべし」と。雪竇は千鈞の弩を以て此の話に喩えて、他の為人の処を見せしめんと要す。三十斤を一鈞と為す、一千鈞は則ち三万斤なり。若是獰龍虎狼の猛獣ならば、方めて此の弩を用う。若是鷦鷯小可の物ならば、必ず軽しく発すべからず。所以に「千鈞の弩は、鼷鼠の為に機を発せず」と。

一 帰宗智常。 二 修行僧を集めて作業をすること。 三 石うすか。 四 僧たちの綱紀を担当する役の僧。 五 木平善道。 六 新参の僧。 七 往復三回土を運ばせた。 八 以下の問答は木平ではなく青林師虔（?—九〇四）のもの（『伝灯録』一七）。 九 天下を支配する帝王の勅命。至上命令。「鉄輪天子」は転輪聖王（統治の輪を転ずる帝王）の一人、鉄輪王。 一〇 みそさざいのようなちっぽけな生き物。「小可」は「軽可」（けちくさい）と同義。 一一 もとは三国・魏の杜襲の語。「鼷鼠」は小形のねずみ。

象骨老師曾輥毬、即雪峰一日見玄[一]沙来、三箇木毬一斉輥、玄沙便作斫[二]牌勢、雪峰深肯之。雖然総是全機大用処、倶不如禾山解打鼓。多少径截[三]、只是難会。所以雪竇道、争似禾山解打鼓。又恐人只在話頭上作活計、不知来由、莽莽鹵鹵[四]。所以道、報君知、莫莽鹵。也須是実到這般田地始得。雪竇若要不莽鹵、甜者甜兮苦者苦。雖然如是拈弄、畢竟也[五]跳不出。

「象骨老師曾て毬を輥す」とは、即ち雪峰一日玄沙の来たるを見て、三箇の木毬を一斉に輥すや、玄沙便ち牌を斫る勢を作し、雪峰深く之を肯う。総て是れ全機大用の処なりと雖然も、倶に禾山の解く鼓を打つに如かず。多少に径截なるも、只だ是れ会し難し。所以に雪竇道く、「争か似かん禾山の解く鼓を打つに」と。又た人の只だ話頭上に活計を作して、来由も知らず、莽莽鹵鹵たらんことを恐る。所以に道く、「君に報じて知らしむ、莽鹵なること莫れ」と。也た須是らく実に這般る田地に到って始めて得し。若し莽鹵ならざらんと要せば、「甜き者は甜く苦き者は苦く」あれ。雪竇は是の如く拈弄すと雖然も、畢竟也た跳け出せず。

一 玄沙師備(八三五―九〇八)。二 牌を造るしぐさをした。「牌」は捶丸(ホッケーに似た競技)に使う点数棒で、勝った側がその度に相手から奪う。ここでは雪峰の木毬を取り込んだ玄沙が勝ちを宣するための牌を自ら造るしぐさをして、雪峰に有無を言わせぬ活作略を示した。『玄沙広録』中(四五頁)参照。三 単刀直入。四 でたらめな(まねごと)。五 禾山の枠組みを超え出られぬ。

第四五則　趙州万法帰一

垂示云、要道便道、挙世無双、当行即行、全機不譲。如撃石火、似閃電光。疾焔過風、奔流度刃。拈起向上鉗鎚、未免亡鋒結舌。放一線道、試挙看。

一 対応の厳しさ、鋭さの喩え。『会元』一二・姜山方章に「奔流度刃、疾焔過風、未審姜山門下還許借借也無」と。 二 （趙州に）高次元の鉗鎚を振りかざされて、（我々は）気勢を殺がれて沈黙するしかない。 三 さりげないヒントを与えてやる。

【本則】挙。僧問趙州、万法帰一、一帰何処。〔拶著這老漢。堆山積嶽。切忌向鬼窟裏作活計。〕州云、我在青州作一領布衫、重七斤。〔果然七縦八横。拽却漫天網。還見趙州麼。納僧鼻孔曾拈得。還知趙州落処麼。

第四五則　趙州の万法帰一

垂示に云く、道わんと要すれば便ち道いて、世を挙げて双び無く、行ずべきには即ち行じて、全機譲らず。撃石火の如く、閃電光に似たり。疾焔過風、奔流度刃。向上の鉗鎚を拈起げられて、未だ免れず鋒を亡い舌を結ぶことを。一線の道を放って、試みに挙し看ん。

【本則】挙す。僧、趙州に問う、「万法は一に帰す、一は何処にか帰する」。〔這の老漢に拶著む。堆山積嶽。切に忌む鬼窟裏に向いて活計を作すことを。〕州云く、「我青州に在りて、一領の布衫を作る。重きこと七斤」。〔果然して七縦八横。漫天の網を拽却す。還た趙州を見るや。納僧の鼻孔曾て拈得る。還た趙州の落処

若這裏見得、便乃天上天下、唯我独尊。水到渠成、風行草偃。苟或未然、九老僧在伱脚跟下。」

一 趙州従諗(七七八―八九七)。二 森羅万象は一つの根源的な原理に帰着するという、その原理はどこに落ち着くのか。三 万重の山々(のように越すに越されぬ大難関)。四 山東省臨淄県。趙州の生地。五 ひとえの長い麻布の上衣一着。六 縦横無尽、自由自在な対応。七 満天の網を引きめぐらした。全てをからめとろうとする構え。八 第三〇則・頌の句。九 わしはお前さんの足下にひれふす。とてもお前さんにはかなわん。

〔評唱〕 一若向一撃便行処会去、天下老和尚鼻孔一時穿却、不奈伱何、自然水到渠成。苟或躊躇、老僧在伱脚跟下。二仏法省要処、言不在多、語不在繁。只如這僧問趙州、万法帰一、一帰何処。他却答道、我在青州作一領布衫、重七斤。若向語句上辨、錯認定盤星。不向語句上辨、争奈却恁麼道。這箇公案、雖難見却易会、雖

を知るや。若し這裏に見得せば、便乃ち天上天下、唯我独尊。水到れば渠成り、風行けば草偃す。苟或未だ然らずんば、老僧は伱の脚跟下に在り。」

〔評唱〕 若し一撃に便ち行く処に向いて会し去らば、天下の老和尚も鼻孔を一時に穿却たれ、伱を奈何ともせず、自然に水到り渠成る。苟或躊躇せば、老僧は伱が脚跟下に在らん。仏法省要の処、言多きに在らず、語繁きに在らず。只如えば、這の僧、趙州に問う、「万法は一に帰す、一は何処にか帰する」。他却って答えて道く、「我青州に在りて、一領の布衫を作る。重きこと七斤」と。若し語句上に向いて辨ぜば、定盤星を錯り認む。語句上に向いて辨ぜずんば、争奈せん

易会却難見。難則銀山鉄壁、易則直[三]下惺惺、無你計較是非処。此話与普[四]化道、来日大悲院裏有斎話、更無両般。

一 打てば響くような応酬を会得できれば。 二 そのものずばりのかなめのところ。 三 すぱりとはっきりわかる。 四 盤山宝積の法嗣。『臨済録』勘弁七(岩波文庫一五八頁)を参照。

一日僧問趙州、如何是祖師西来意。州云、庭前柏樹子。僧云、和尚莫将境示人。州云*、老僧不曾将境示人。看他恁麼[一]向極則転不得処転得、自然蓋天蓋地。若転不得、触途[二]成滞。且道、他有[三]仏法商量也無。若道他有仏法、他又何曾説心説性、説玄説妙。若道他無仏法旨趣、他又不曾辜負你問頭。

却って恁麼(さよう)に道(い)う。這箇(こ)の公案、見難しと雖も却って会(え)し易く、会し易しと雖も却って見難し。難きときは則ち銀山鉄壁、易きときは則ち直下惺惺、你が計較(けきょう)是非する処無し。此の話、普化(ふけ)の「来日大悲院裏に斎(とき)有り」と道(い)う話と、更に両般(ことなること)無し。

一日(あるひ)、僧、趙州に問う、「如何なるか是れ祖師西来意」。州云く、「庭前の柏樹子」。僧云く、「和尚、境を将(もっ)て人に示すこと莫(なか)れ」。州云く、「老僧曾て境を将て人に示さず」と。看よ、他(かれ)は恁麼(さよう)に極則(ごくそく)転じ得ざる処に向(お)いて転じ得て、自然に天を蓋(おお)い地を蓋う。若(も)し転じ得ざれば、触途(いたるところ)に滞を成さん。且道(さて)、他(かれ)に仏法の商量有り也(や)無。若し他(かれ)に仏法有りと道(い)わば、他(かれ)又た何ぞ曾て心を説き性を説き、玄を説き妙を説けるや。若し他に仏法の旨趣無しと道(い)わば、他又た曾て你の問頭(とい)に辜負(そむ)かざりき。

＊老僧〻示人　蜀本はこの下に「僧云、如何是祖師西来意。州曰、庭前柏樹子」と。

一 不変の定理を座標転換する。 二 どこに行っても立ち往生する。 三 〈仏法〉的意味づけ。

豈不見、僧問木平和尚、如何是仏法大意。平云、這箇冬瓜如許大。又僧問古徳、深山懸崖迥絶無人処、還有仏法也無。古徳云、有。僧云、如何是深山裏仏法。古徳云、石頭大底大、小底小。看這般公案、誵訛在什麼処。雪竇知他落処、故打開義路、与你頌出。

豈に見ずや、僧、木平和尚に問う、「如何なるか是れ仏法の大意」。平云く、「這箇の冬瓜如許大いなり」と。又た僧、古徳に問う、「深山懸崖、迥絶無人の処、還た仏法有り也無」。古徳云く、「有り」。僧云く、「如何なるか是れ深山裏の仏法」。古徳云く、「石頭の大いなる底は大きく、小さき底は小さし」と。看よ這般る公案、誵訛什麼処にか在る。雪竇は他の落処を知り、故に義路を打開して、你が与に頌出す。

一 木平善道。 二 九峰道詮(九三〇—九八五)。『伝灯録』二四。 三 解釈のすじ道をつけて。

【頌】 編辟曾挨老古錐、〔何必撈著這老漢。挨撈向什麼処去。〕七斤衫重幾人知。〔再来不直半文銭。直得口似匾担。又却被他贏得一籌。〕如今抛擲西湖裏、〔還雪竇手脚始得。

【頌】 編辟曾て挨く老古錐、〔何ぞ必ずしも這の老漢を撈著めん。挨撈して什麼処に向ってか去く。〕七斤の衫の重さを幾人か知る。〔再来するは半文銭にも直いせず。直得くは口匾担に似たり。又た却って他に一籌を贏ち得らる。〕如今、西湖の裏に抛擲す、〔雪竇に

山僧也不要。〕下載清風付与誰。〔自古自今。且道、雪竇与他酬唱、与他下注脚。一子親得。〕

手脚を還して始めて得し。山僧は也た要せず。〕清風を下載して誰にか付与えん。〔自古自今。且道、雪竇は他と酬唱せるか、他の与に注脚を下せるか。一子のみ親しく得たり。〕

一 たたみかけて問いつめる。二 先端がまるくなった錐。趙州の枯れ切った老成ぶり。三 鋭く切り込む。四 趙州に一本とられただけだ。五 七斤の衫を西湖に放りこむ。六 雪竇本来の力量を発揮させよ。七「下載」は荷を下ろす。「清風」は、趙州の応答ぶり(宗風)を風に見立てる。趙州から背負わされたその荷物を下ろして、さて誰にやったものか。八 昔からも今からも変わらぬものだ。第三〇則・頌に見える。九 雪竇だけがそれをものにしている。

〔評唱〕十八問中、此謂之編辟問。雪竇道、編辟曾挨老古錐。編辟万法、教帰一致。這僧要挨拶他趙州、州也不妨作家、向転不得処、有出身之路。敢開大口便道、我在青州作一領布衫、重七斤。雪竇道、這箇七斤布衫、能有幾人知。如今拋擲西湖裏、万法帰一。一亦不要、七斤布衫亦不要、一

〔評唱〕十八問の中、此れ之を編辟問と謂う。雪竇道く、「編辟曾て挨く老古錐」と。万法を編辟して、一致に帰せしむ。這の僧他の趙州に挨拶まんと要するも、州も也た不妨に作家なり、転じ得ざる処に向いて出身の路有り。敢て大口を開いて便ち道う、「我青州に在りて、一領の布衫を作る。重きこと七斤」と。雪竇道く、「這箇の七斤の布衫、能く幾人か知るもの有らん。如今西湖の裏に拋擲し、万法一に帰す」と。一も亦た

時抛在西湖裏。雪竇*住洞庭翠峰、有西湖也。

＊雪竇〜湖也〔一一字〕　後人による注の攙入か。

一　汾陽の十八問。　＝　束縛から超出した行路。

下載清風付与誰、此是趙州示衆、你若向北来、与你上載。你若向南来、与你下載。你若従雪峰・雲居来、也是箇担板漢。雪竇道、如此清風、堪付阿誰。上載者、与你説心説性、説玄説妙、種種方便。若是下載、更無許多義理玄妙。有底担一担禅、到趙州処、一点也使不著、一時与他打畳、教灑灑落落、無一星事。謂之悟了還同未悟時。如今人尽作無事会。有底道、無迷無悟、不要更求。只如仏未出世時、達磨未来此土時、不可不恁麼也。用仏出世作什麼、祖師更西来

要せず、七斤の布衫も亦た要せず、一時に西湖の裏に抛在つ。雪竇は洞庭の翠峰に住し、西湖有り。

「清風を下載して誰にか付与えん」と、此れは是れ趙州、衆に示す、「你若し向北より来たらば、你が与に上載せん。你若し向南より来たらば、你が与に下載せん。你若し雪峰・雲居より来たらば、也た是れ箇の担板漢」と。雪竇道く、「此の如き清風、阿誰にか堪く付えん」と。上載するとは你が与に心を説き性を説き、玄を説き妙を説く、種種の方便なり。若是下載ならば、更に許多の義理玄妙も無し。有る底は一担の禅を担いて、趙州の処に到るも、一点也使い著ず、(趙州は)一時に他の与に打畳して、灑灑落落として、一星事も無からしむ。之を「悟り了れば還って未だ悟らざる時に同じ」と謂う。如今の人尽く無事の会を作す。有る底は道う、「迷無く悟無し、更に求むるを要せず。

作什麼。総如此、有什麼干渉。也須是大徹大悟了、依旧山是山、水是水、乃至一切万法、悉皆成現、方始作箇[五]無事底人。

只如えば、仏未だ世に出でざる時、達磨未だ此土に来たらざる時は、恁麼ならざるべからず。仏の世に出づるを用めて什麼か作ん、祖師更に西来して什麼か作ん」と。総て此の如くならば、什麼の干渉か有らん。也た須是らく大徹大悟し了って、依旧として山は是れ山、水は是れ水、乃至一切万法、悉く皆な成現して、方始めて箇の無事底の人と作るべし。

一 雪峰義存(八二二—九〇八)や雲居道膺(?—九〇二)。ともに南方禅。二 ワンパターンで融通のきかない輩。三『伝灯録』一・第五祖提多迦章に「悟了同未悟、無心亦無法」と。四 仏法とは修むべきなく証すべきなしとして、何もしなくてよいと収まりかえっていること。五 作為を超えてあるがままに生きる人。

[一]不見龍牙道、[二]学道先須有悟由、還如曾闘快龍舟。雖然旧閣閑田地、一度贏来方始休。只如趙州這箇七斤布衫話子、看他古人恁麼道、如金如玉。山僧恁麼説、諸人恁麼聴、総是上載。且道、作麼生是下載、[三]三条椽下看取。

見ずや龍牙道く、「学道は先ず須らく悟由有るべし、還た曾て快龍舟を闘わしむるが如し。旧閑田地に閣くと雖然も、一度贏ち来たりて方始めて休む」と。只だ趙州の這箇の七斤の布衫の話子の如きは、看よ他の古人の恁麼に道うこと、金の如く玉の如くなるを。山僧は恁麼に説き、諸人恁麼に聴く、総て是れ上載なり。

且道（さて）、作麼生（いかなる）か是れ下載、三条椽下（さんじょうてんか）に看取せよ。

一 龍牙居遁（こどん）（八三五―九二三）。 二 真の求道者は先ず開悟を目指し、競漕に使われる龍舟のように、もとは静かな格納庫に置かれてはいても、競漕に一度勝ってこそ「無事」の境地に安らげるのだ。「快龍舟」は端午節に行われる競漕の舟。 三 僧堂内の単（坐床）で自得せよ。

第四六則　鏡清雨滴声

＊垂示云、一槌便成、超凡越聖。片言可折、去縛解粘。如氷凌上行、剣刃上走。声色堆裏坐、声色頭上行。縦横妙用則且置、刹那便去時如何。試挙看。

＊垂示〜　福本ではここに垂示は無く、第四八則にこの垂示の文が有る。

一　ハンマーの一打ちで仕上がる。犀利な機根をいう。　二　一言で判決を下す。『論語』顔淵の語にもとづく。　三「声色」は認識の対象となる事物、一切の現象。

【本則】挙。鏡清問僧、門外是什麼声。〔等閑垂一釣。不患聾、問什麼。〕僧云、雨滴声。〔不妨実頭。也好箇消息。〕清云、衆生顛倒、迷己逐物。〔事生也。慣得其便。鏡鉤搭索、還他本分手脚。〕僧云、和尚作

第四六則　鏡清の雨滴の声

垂示に云く、一槌にして便ち成り、凡を超え聖を越ゆ。片言もて折むべく、縛を去り粘を解く。氷凌の上を行き、剣刃の上を走くが如し。声色堆裏に坐し、声色頭上を行く。縦横の妙用は則ち且て置く、刹那に便ち去る時は如何。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。鏡清、僧に問う、「門外是れ什麼の声ぞ」。〔等閑と一釣を垂る。聾を患わざるに什麼をか問う。〕僧云く、「雨滴の声」。〔不妨に実頭なり。也た好箇消息なり。〕清云く、「衆生は顛倒して、己を迷い物を逐う」。〔事生ぜり。其の便を得るに慣れたり。鏡鉤搭索もて、他に本分の手脚を還せ。〕僧云く、「和尚

麼生。〔果然納敗欠。転槍来也、不妨難当、却把槍頭倒刺人。〕清云、[七]泊不迷己。〔咄。直得分疎不下。〕僧云、泊不迷己、意旨如何。〔拶著這老漢。逼殺人。前箭猶軽、後箭深。〕清云、[八]出身猶可易、脱体道応難。〔[九]養子之縁。雖然如是、[一〇]徳山・臨済向什麼処去。不喚作雨滴声、喚作什麼声。直得分疎不下。〕

は作麼生」。〔果然して敗欠に納る。槍を転じ来たって、不妨に当り難きも、却って槍頭を把って倒に人を刺す。〕清云く、「泊じて己を迷わず」。〔咄。直得に分疎不下。〕僧云く、「泊じて己を迷わざるの意旨如何」。〔這の老漢に拶著む。人を逼殺たり。前の箭は猶お軽きも後の箭は深し。〕清云く、「出身は猶お易かるべきも、脱体に道うは応に難かるべし」。〔子を養むの縁なり。是の如しと雖然も、徳山・臨済は什麼処にか去る。喚んで雨滴の声と作さずんば、喚んで什麼の声とか作ん。直得に分疎不下。〕

一 鏡清道怤（八六八—九三七）。以下、入矢義高「雨垂れの音」（『求道と悦楽』岩波書店、一九八三、所収）参照。 二 衆生は本末を取りちがえて、他物を追い廻して自己を見失ってしまう。上の句は『楞厳経』巻七、下の句は巻二「迷己為物」による。 三 さあ問題が持ち上がった。 四 機に乗ずるのはお手のものだ。 五 熊手と火叩き。火消しの道具。「鐃」は「撓」の誤り。 六 鏡清に本領を発揮させよ。 七 （私も）すんでに自分を見失ってしまうところだった。 八 悟境に達するのはむしろやさしい、それをずばりと言いとめることが実は難しい。「応」は『祖堂集』では「還」とあり、その方がよい。 九 ここまで答えさせた子（僧）が生まれたのは、ほかならぬこの親（鏡清）のおかげだ。 一〇 徳山や臨済なら、もっとましな対応をしただろうに。

〔評唱〕只這裏也[一]好薦取。古人垂示一機一境要接人。一日鏡清問僧、門外是什麼声。僧云、*雨滴声。清云、衆生顛倒、迷己逐物。又問、門外什麼声。僧云、[二]鵓鴣声。清云、[三]欲得不招無間業、莫謗如来正法輪。又問、門外什麼声。僧云、蛇咬蝦蟆声。清云、[四]将謂衆生苦、更有苦衆生。此語与前頭公案、更無両般。衲僧家於這裏透得去、於声色堆裏不妨自由。若透不得、便被声色所拘。這般公案、諸方謂之[五]煆煉語。若是煆煉、只成[六]心行、不見他古人[七]為人処。亦喚作透声色、一明道眼、二明声色、三明[八]心宗、四明[九]忘情、五明[一〇]展演。然不妨子細、争奈有[一一]窠臼在。

〔評唱〕只這裏也た好し薦取するに。古人は一機一境を垂示して人を接せんと要す。一日、鏡清、僧に問う、「門外是れ什麼の声ぞ」。僧云く、「雨滴の声」。清云く、「衆生は顛倒して、己を迷い物を逐う」と。又た問う、「門外什麼の声ぞ」。僧云く、「鵓鴣の声」。清云く、「無間の業を招かざらんと欲得せば、如来の正法輪を謗ること莫れ」と。又た問う、「門外什麼の声ぞ」。僧云く、「蛇、蝦蟆を咬む声」。清云く、「衆生苦しむと将謂いしに、更に苦しむ衆生有り」と。此の語前頭の公案と更に両般無し。衲僧家這裏を透得け去らば、声色堆裏に於て、不妨に自由なり。若し透け得ざれば、便ち声色に拘えられん。這般る公案、諸方之を煆煉の語と謂う。若是煆煉ならば、只だ心行と成り、他の古人の為人の処を見ず。亦た喚んで「声色を透く」と作す、(即ち)一に道眼を明め、二に声色を明め、三に心宗を明め、四に忘情を明め、五に展演を明むるなり。不妨に子細なりと然も、争奈せん窠臼有り。

＊僧云〜麼声〔二一字〕　蜀本に無し。

一 ひとつ主体的に取り組んでみたいところだ。 二 鳩の一種。 三『証道歌』の句。「無間業」は無間地獄に堕ちる悪業。 四 衆生は苦しむものと思っていたが、なんと苦を看板にしている衆生がいる。 五 修行者を鍛えることば。 六 思量分別の痕跡を残す言行。 七 仏法の真実を見てとる眼。 八 禅の宗旨。 九 無心の境。 一〇 仏法の完全な説き方。 一一 教条的な紋切り型。

鏡清恁麼問、門外什麼声。僧云、雨滴声。清却道、衆生顛倒、迷己逐物。人皆錯会、喚作故意転人。且得没交渉。殊不知、鏡清有為人底手脚、胆大不拘一機一境、忒煞不惜眉毛。鏡清豈不知是雨滴声。何消更問。須知古人以探竿影草、要験這僧。這僧也善挨拶便道、和尚又作麼生。直得鏡清人泥入水向他道、洎不迷己。其僧迷己逐物則故是、鏡清為什麼也迷己。須知験他句中、便有出身処。這僧太懞懂、要勦絶此話、更問道、只

鏡清恁麼に問う、「門外什麼の声ぞ」。僧云く、「雨滴の声」。清却って道く、「衆生は顛倒して、己を迷い物を逐う」と。人皆な錯り会し、喚んで故意に人を転ずと作す。且得没交渉。殊に知らず、鏡清に為人底手脚有り、胆大にして一機一境に拘われず、忒煞だ眉毛を惜まざることを。鏡清豈に是れ雨滴の声なるを知らざらんや。何ぞ更に問うを消いん。須らく知るべし古人は探竿影草を以て、這の僧を験せんと要す。這の僧也た善く挨拶して便ち道う、「和尚又た作麼生」と。直得に鏡清は泥に入り水に入り他に向って道う、「洎じて己を迷わず」と。其の僧の己を迷い物を逐うは則ち故より是なるも、鏡清為什麼にか也た己を迷う。須らく

箇洎不迷己、意旨如何。若是徳山・臨済門下、棒喝已行。鏡清通一線道、随他打葛藤、更向他道、出身猶可易、脱体道応難。雖然恁麼、[六]古人道、相続也大難。他鏡清只一句、便与這僧明[七]脚跟下大事。雪竇頌云、

知るべし、他を験する句中に、便ち出身の処有り。這の僧太だ懞憧、此の話を勦絶せんと要して、更に問うて道く、「只だ箇の洎じて己を迷わざるの意旨如何」と。若是徳山・臨済の門下ならば、棒喝已に行ぜられん。鏡清は一線の道を通じて、他に随って葛藤を打いて、更に他に道う、「出身は猶お易かるべきも、脱体に道うは応に難かるべし」と。恁麼なりと雖然も、古人道く、「相続くるは也た大いに難し」と。他の鏡清は只だ一句もて便ち這の僧の与に脚跟下の大事を明せり。雪竇の頌に云く、

一 視点を転換させる。 二 魚をさそい寄せるしかけ。問いかけて相手に探りを入れる喩え。 三 切り込む。鋭く追及する。 四 愚鈍、ぼんやり。 五 抜本的に始末する。第二〇則・頌に既出。 六 洞山良价（八〇七―八六九）。語は第四則・頌の評唱に既出。 七 足もとの重大事。自己が倚って立つ根本。

【頌】[一]虚堂雨滴声、〔従来無間断。大家在這裏。〕[二]作者難酬対。〔果然不知。山僧従来不是作者。有権有実、[三]有放有収、殺活擒縦。〕若謂曾入流、

【頌】虚堂の雨滴の声、〔従来間断無し。大家這裏に在り。〕作者も酬対し難し。〔果然して知らず。山僧従来是れ作者にあらず。権有り実有り、放有り収有り、殺活擒縦あり。〕若し曾て流れに入ると謂わば、〔頭を

〔[四]刺頭入膠盆。不喚作雨滴声、喚作什麼声。〕依前還不会。〔[五]山僧幾曾問你来。〕這漆桶、還我無孔鉄鎚来。〕会不会、〔[六]両頭坐断。[七]両処不分、不在這両辺。〕[八]南山北山転雱霈。〔頭上脚下。若喚作雨声則瞎、不喚作雨声、喚作什麼声。到這裏、須是脚踏実地始得。〕

刺きて膠盆に入る。喚んで雨滴の声と作さずんば、喚んで什麼の声とか作さん。〕依前として還お会せず。〔山僧幾ぞ曾て你に問い来たる。〕這の漆桶、我に無孔の鉄鎚を還し来たれ。〕会するも会せざるも、〔両頭坐断せよ。両処分れず、這の両辺には在らず。〕南山北山転た雱霈たり。〔頭上にも脚下にも。若し喚んで雨の声と作さば則ち瞎、喚んで雨の声と作さずんば、喚んで什麼の声とか作さん。這裏に到らば、須是らく脚実地を踏んで始めて得し。〕

一 誰も人のいない家の雨だれの音。二 腕ききの達道者でも返答しかねる。三 正法の不変の流れに踏み入る。四 にかわの入った器に頭を突っ込む。身動きがとれなくなる。五 お前に尋ねたことがあろうか。六 どちらとも押さえ込んでしまえ。七 いずれにしても同じこと、そのどちらに偏してもいけない。八 南山も北山もますます豪雨に包みこまれる。

【評唱】　虚堂雨滴声、作者難酬対。若喚作雨声、則是迷己逐物。不喚作雨声、又如何転物。到這裏、任是作者也難酬対。所以古[一]人道、見与師斉、

【評唱】　「虚堂の雨滴の声、作者も酬対し難し」と。若し喚んで雨声と作さば、則ち是れ己を迷い物を逐う。喚んで雨声と作さずんば、又た如何にか物を転ぜん。這裏に到らば、任い是れ作者なるも也た酬対し難し。

滅師半徳、見過於師、方堪伝授。又南院道、棒下無生忍、臨機不讓師。若謂曾入流、依前還不会。教中道、初於聞中入流忘所、所入既寂、動静二相、了然不生。若道是雨滴声、也不是。若道不是雨滴声、也不是。前頭頌、両喝与三喝、作者知機変、正類此頌。若道是入声色之流、也不是。若喚作声色、依前不会他意。譬如以指指月、月不是指。会与不会、南山北山転雱霈也。

所以に古人道く、「見、師と斉しきは師の半徳を減ず、見、師に過ぎて方めて伝授す堪し」と。又た南院道く、「棒下の無生忍、機に臨んでは師にも譲らず」と。若し曾て流れに入ると謂わば、依前として還た会せず。教中に道く、「初め聞中に於て流れに入り所を忘る、入りし所既に寂なれば、動静の二相、了然として生ぜず」と。若し是れ雨滴の声と道わば、也た是ならず。若し是れ雨滴の声にあらずと道わば、也た是ならず。前頭に頌す、「両喝と三喝と、作者は機変を知る」と、正に此の頌に類す。若し是れ声色の流れに入ると道わば、也た是ならず。若し喚んで声色と作さば、依前として他の意を会せず。譬えば指を以て月を指すが如し、月は是れ指にあらず。「会するも会せざるも、南山北山転た雱霈」たり。

一 百丈懐海(七四九―八一四)。第一一則・本則の評唱に既出。 二 南院慧顒(八六〇―九三〇?)。第三八則・本則の評唱に既出。 三『楞厳経』六に見える観音菩薩の語。 四 三慧(悟りに導く智慧の三段階)の一、聞慧。教えを聞いて了解する智慧。 五 第一〇則。

第四七則　雲門六不収

垂示云、天[1]何言哉、四時行焉。地何言哉、万物生焉。向四時行処、可以見体。於万物生処、可以見用。且道、向什麼処、見得衲僧。離却言語動用、行住坐臥、併却咽喉唇吻、還[2]辨得麼。

一『論語』陽貨に「子曰、天何言哉、四時行焉、百物生焉、天何言哉」と。　二 我が正体を見て取る。

【本則】挙。僧問雲[1]門、如何是法身。〔多少人疑著。千聖跳不出。漏逗不少。〕門云、六[2]不収。〔斬[3]釘截鉄。八[4]角磨盤空裏走。霊[5]亀曳尾。朕[*]兆未分時薦[6]得、已是第二頭。朕兆已生後薦得、又落[7]第三首。若更向言語上辨得、

第四七則　雲門の六不収

垂示に云く、天何をか言わんや、四時行わる。地何をか言わんや、万物生ず。四時の行わるる処に向いて、以て体を見るべし。万物の生ずる処に於て、以て用を見るべし。且道、什麼処に向いてか衲僧を見得する。言語動用、行住坐臥を離却れ、咽喉唇吻を併却いで、還た辨得するや。

【本則】挙す。僧、雲門に問う、「如何なるか是れ法身」。〔多少の人疑著さる。千聖も跳け出せず。漏逗少なからず。〕門云く、「六収まらず」。〔釘を斬り鉄を截つ。八角の磨盤空裏を走る。霊亀尾を曳く。朕兆未だ分さざる時に薦得するも、已に是れ第二頭。朕兆已に生じて後に薦得せば、又た第三首に落つ。若し更に言

且喜没交渉。〕

語上に向いて辨得せば、且喜たくも没交渉。〕

＊朕兆〜交渉〔三七字〕　福本に無し。

一 雲門文偃（八六四―九四九）。二 六は六根、六識など。評唱を参照。三 徹底的な裁断。四 一切のものを破砕する八つの尖りをもつ磨盤（武器の一種）が空中を旋転する。すさまじい破壊力の喩え。五 第二四則の垂示に既出。六 主体的に把握して、わがものとする。七 さらに後手に回った。

〔評唱〕　雲門道、六不収。直是難搆。若向朕兆未分時搆得、已是第二頭、若向朕兆已生後薦得、又落第三首。若向言句上辨明、卒摸索不著。且畢竟以何為法身。若是作家底、聊聞挙著、剔起便行。苟或佇思停機、伏聴処分。太原孚上座、本為講師。一日登座講次、説法身云、竪窮三際、横亘十方。有一禅客、在座下聞之失笑。孚下座云、某甲適来有甚短処、願禅者為説看。禅者云、座主只講得法身量辺事、不見法身。孚云、畢竟如何

〔評唱〕　雲門道く、「六収まらず」と。直だ是れ搆り難し。若し朕兆の未だ分さざる時に搆り得るも、已に是れ第二頭、若し朕兆已に生ぜし後に薦得せば、又た第三首に落つ。若し言句上に向いて辨明せば、卒に摸索不著。且て畢竟何を以てか法身と為さん。若是作家底ならば、聊か挙著するを聞くや、剔起して便ち行かん。苟或佇思停機せば、伏して処分に聴え。太原の孚上座、本と講師為り。一日、座に登りて講ずる次、法身を説いて云く、「竪は三際を窮め、横は十方に亘る」と。一禅客有り、座下に在りて之を聞いて失笑す。孚、座を下りて云く、「某甲適来甚の短処か有る、願わくは禅者為に説き看よ」。禅者云く、「座主は只だ法身量辺

即是。禅者云、可暫罷講、於静室中坐。必得自見。孚如其言。一夜静坐、忽聞打五更鐘、忽然大悟。遂敲禅者門云、我会也。禅者云、你試道看。孚云、我従今日去、[七]更不将父母所生鼻孔扭捏也。

の事を講じ得て、法身を見ず」。孚云く、「畢竟如何にすれば即ち是からん」。禅者云く、「暫く講を罷め、静室の中に坐すべし。必ず自ら見るを得ん」と。孚、其の言の如くす。一夜静坐するに、忽たま五更の鐘を打つを聞くや、忽然と大悟す。遂に禅者の門を敲いて云く、「我会せり」と。禅者云く、「你試みに道い看よ」。孚云く、「我今日より去、更に父母生ずる所の鼻孔を扭捏さじ」と。

一 地を蹴ってさっと行ってしまう。二 思案に暮れて、判断停止する。三 雪峰義存(八二二―九〇八)の法嗣。四 時間的には過去・現在・未来にわたり、空間的には十方におよぶ。五 禅門の達者。六 法身の周辺的、外面的な事がら。七 けっして本来面目について理窟をこねまわすまい。

[一]又教中道、仏真法身、猶若虚空。応物現形、如水中月。又僧問[二]夾山、如何是法身。山云、法身無相。如何是法眼。山云、法眼無瑕。

又た教中に道く、「仏の真法身は猶お虚空の若し。物に応じて形を現すこと、水中の月の如し」と。又た僧、夾山に問う、「如何なるか是れ法身」。山云く、「法身に相無し」。「如何なるか是れ法眼」。山云く、「法眼に瑕無し」と。

一『金光明経』四天王品。二 夾山善会(八〇五―八八一)。『伝灯録』一五。

雲門道、六不収。此公案、有者道、只是六根六塵六識、此六皆従法身生。＊六根収他不得。若恁麽情解、且喜没交渉。更帯累雲門。要見便見、無你穿鑿処。不見[一]教中道、是法非思量分別之所能解。他答話多惹人情解、[二]所以一句中須具三句。更不辜負你問頭、応時応節、一言一句、一点一画、不妨有出身処。所以道、一句透、千句万句一時透。且道、是法身、是祖師。[三]放你三十棒。雪竇頌云、

雲門道く、「六収まらず」と。此の公案につき、有る者は道う、「只だ是れ六根・六塵・六識なり、此の六は皆な法身より生ず。六根は他を収むること得ず」と。若し恁麽に情解せば、且喜たくも没交渉。更に雲門をも帯累す。見んと要せば便ち見よ、你が穿鑿する処無し。見ずや教中に道く、「是の法は思量分別の能く解する所に非ず」と。他の答話は多く人の情解を惹く、所以に一句中に須らく三句を具すべし。更に你の問頭に辜負かず、時に応じ節に応じて、一言一句、一点一画にも不妨に出身の処有り。所以に道う、「一句透れば千句万句一時に透る」と。且道、是れ法身か、是れ祖師か。你に放す三十棒。雪竇頌して云く、

【頌】一二三四五六、〔周而復始。＊[一]滴水滴凍。費許多工夫作什麽。〕碧[二]

【頌】一二三四五六、〔周りて復た始まる。滴水滴凍。許多の工夫を費して什麽か作ん。〕碧眼の胡僧も数え

＊六根収他不得　福本は「六根等一十八界収他不得」。
一『法華経』方便品。　二 以下九字、後人の注釈の混入か。　三 三十棒は勘弁してやるから言ってみよ。

眼胡僧数不足。〔三生六十劫。達磨何曾夢見。闍黎為什麼知而故犯。〕少林謾道付神光、〔一人伝虚、万人伝実。従頭来已錯了也。〕巻衣又説帰天竺。〔賺殺一船人。懡㦬不少。〕天竺茫茫無処尋、〔在什麼処。始是太平、如今在什麼処。〕夜来却対乳峰宿。〔刺破你眼睛。也是無風起浪。且道、是法身、是仏身。放你三十棒。〕

足れず。〔三生六十劫。達磨何ぞ曾て夢にだに見ん。闍黎は為什麼にか知りて故に犯す。〕少林謾に道う神光に付すと、〔一人虚を伝えて、万人実を伝う。従頭来已に錯り了れり。〕衣を巻げて又た説う天竺に帰ると。〔一船の人を賺殺す。懡㦬少なからず。〕天竺は茫茫として尋ぬるに処無し、〔什麼処にか在る。始めは是れ太平、如今什麼処にか在る。〕夜来は却って乳峰に対して宿す。〔你の眼睛を刺破す。也た是れ風無きに浪を起す。且道、是れ法身か、是れ仏身か。你に放す三十棒。〕

＊周　福本は「終」。　＊＊仏身　福本は「化身」。
一 断えることのないの水のしたたりがポトポト。　二 達磨でも数えきれない。　三 けりがつくときがない。
四 少林寺で神光すなわち二祖慧可に伝えたなどとでたらめを言い。　五 もともと事実無根のことが、多くの人々に伝承されているうちに事実となる。　六 第三一則・本則の著語に既出。　七 雪竇山のこと。第二二則・頌にも。　八 うっかり見ると君の眼玉を突きやぶる。　第五則・頌の著語に既出。

【評唱】雪竇善能於無縫罅処、出眼目頌出、教人見。雲門道、六不収。

【評唱】雪竇善く縫罅無き処に於て眼目を出だして頌出し、人をして見しむ。雲門道く、「六収まらず」

雪竇為什麼却道、一二三四五六。直是碧眼胡僧也数不足。所以道、只許老胡知、不許老胡会。須是還他屋裏児孫始得。適来道、一言一句、応時応節。若透得去、方知道不在言句中。其或未然、不免作情解。五祖老師道、釈迦牟尼仏、下賤客作児。庭前柏樹子、一二三四五。若向雲門言句下諦当見得、相次到這境界。少林謾道、付神光。二祖始名神光。及至後来、又道帰天竺。達磨葬於熊耳山之下。時宋雲奉使西帰、在西嶺見達磨手携隻履帰西天去。使回奏聖、開壙惟見遺下一隻履。雪竇道、其実此事作麼生分付。既無分付、巻衣又説帰天竺。且道、為什麼此土却有二三、逓相恁*麼伝来。這裏不妨誵訛。也須是搆得、

と。雪竇為什麼にか却って道う、「一二三四五六」と。直是い碧眼の胡僧なるも也た数え足れず。所以に道う、「只だ老胡の知るを許むるも、老胡の会するを許めず」と。須是らく他の屋裏の児孫に還して始めて得し。適来道う、「一言一句、時に応じ節に応ず」と。若し透得し去らば、方めて言句の中に在らざるを知道らん。其れ或し未だ然らずんば、情解を作すを免れず。五祖老師道く、「釈迦牟尼仏は、下賤の客作児。庭前の柏樹子は、一二三四五」と。若し雲門の言句下に向いて、諦当と見得せば、相次で這の境界に到らん。「少林謾に道う神光に付す」と。二祖は始め神光と名のる。後来に至るに及んで、又た道う「天竺に帰る」と。達磨は熊耳山の下に葬らる。時に宋雲、使を奉じて西より帰るに、西嶺に在いて達磨の、手に隻履を携えて西天に帰り去くを見る。使より回りて聖に奏し、壙を開くに惟だ一隻履を遺下せるを見る。雪竇道く、「其の実は此の事作麼生ぞ分付えん。既に分付無きに、衣を巻

始可入作。天竺茫茫無処尋、夜来却対乳峰宿。且道、即今在什麼処。師**便打云、瞎。

げて又た説う天竺に帰る」と。且道、為什麼にか此土に却って二三有りて逓相と恁麼に伝来する。這裏は不妨に諳訛れり。也た須是らく搆り得て始めて入作すべし。「天竺は茫茫として尋ぬるに処無し、夜来は却って乳峰に対して宿す」と。且道、即今什麼処にか在る。師便ち打って云く、瞎。

＊恁麼伝来這裏　福本は「伝受来到如今、到這裏」。＊＊師便打云　福本は「打又云」。

一 名状し難く渾然たるもののポイントを示して。二 達磨が仏法を知っていたとは認めるが、会得していたとまでは言わせぬ。第一則・頌の評唱に既出。三 圜悟の師、五祖法演(?—一一〇四)。四 賃やとい、半奴隷。五 第一則・本則の評唱を参照。六 達磨から慧能に至る六代。七 取りこんで活力にする(上・二三〇頁)。

第四八則　王太傅煎茶

【本則】＊挙。王太傅入招慶煎茶。〔作家相聚、須有奇特。等閑無事、大家著一隻眼。惹禍来也。〕時朗上座、与明招把銚。〔一火弄泥団漢、不会煎茶、帯累別人。〕朗翻却茶銚。〔事生也。果然。〕太傅見問上座、茶炉下是什麼。〔果然禍事。〕朗云、捧炉神。〔果然中他箭了也。不妨奇特。〕太傅云、既是捧炉神、為什麼翻却茶銚。〔何不与他本分草料。事生也。〕朗云、仕官千日、失在一朝。〔錯指注、是什麼語話。杜撰禅和、如麻似粟。〕太傅払袖便去。〔灼然作家。許他具一隻眼。〕明招云、朗上

第四八則　王太傅、茶を煎ず

【本則】挙す。王太傅、招慶に入りて茶を煎ず。〔作家相聚う、須らく奇特有るべし。等閑に無事なるところ、大家一隻眼を著けよ。禍を惹き来たらん。〕時に朗上座、明招の与に銚を把る。〔一火の泥団を弄する漢、茶を煎ずるを会せず、別人を帯累す。〕朗、茶銚を翻却す。〔事生ぜり。果然して。〕太傅見て上座に問う、「茶炉下是れ什麼ぞ」。〔果然して禍事。〕朗云く、「捧炉神」。〔果然して他の箭に中り了れり。不妨に奇特たり。〕太傅云く、「既に是れ捧炉神、為什麼にか茶銚を翻却す」。〔何ぞ他に本分の草料を与えざる。事生ぜり。〕朗云く、「仕官千日、失は一朝に在り」。〔錯って指注す、是れ什麼の語話ぞ。杜撰の禅和、麻の如く粟の似し。〕太傅、袖を払って便ち去る。〔灼然に作家。他の一隻眼を具せるを許む。〕明招云く、「朗

座喫却招慶飯了、[一四]却去江外打野榸。〔更与三十棒。這独眼龍、只具一隻眼。也須是明眼人[一五]点破始得。〕朗云、和尚作麼生。〔拶著。也好与一拶。終不作這般[一六]死郎当見解。〕招云、[一七]非人得其便。〔果然只具一隻眼、道得一半。[一八]一手擡、一手搦。〕雪竇云、当時但踏倒茶炉。〔争奈賊過後張弓。雖然如是、也未称徳山門下客。一等[一九]是潑郎潑頼、就中奇特。〕

上座、招慶の飯を喫却い了るや、却って江外に去きて野榸を打す」。〔更に三十棒を与えん。這の独眼龍、只だ一隻眼を具するのみ。也た須是らく明眼の人点破して始めて得し。〕朗云く、「和尚は作麼生」。〔拶著めり。也た好し一拶を与うるに。終に這般る死郎当の見解を作さじ。〕招云く、「非人、其の便を得たり」。〔果然して只だ一隻眼を具し、一半を道い得たるのみ。一手には擡げ、一手には搦う。〕雪竇云く、「当時但だ茶炉を踏倒さん」。〔争奈せん賊過ぎし後に弓を張る。是の如くなりと雖然も、也た未だ徳山門下の客に称わず。一等く是れ潑郎潑頼なるも、就中奇特たり。〕

＊福本では第四六則の垂示がこの本則の前に在る。

一 王延彬。 二 王延彬が長慶慧稜（八五四―九三二）のために創した招慶院。 三 団茶を煮る。茶を立てる。 四 さあ大変な事になるぞ。 五 長慶の法嗣、報慈慧朗。 六 明招徳謙。独眼龍と称された。 七 茶びん。釜から湯を汲みわける器。 八 意味もなく泥だんごをこねくりまわすやからたち。「火」は伙、仲間の意。 九 火鉢の下は何か。 一〇 火鉢の足に刻まれた鬼神。 一一 かれに本来の力量を発揮させよ。 一二 千日もの宮仕えも、一日のしくじりでたちまちふいになる。 一三 でたらめな禅坊主。 一四 長江の向こうでお祭りさわぎをする。 一五 問題点を摘抉し、勘ど

ころを明かす。 一六 だらけきった。「死」は堕落の極を形容する接頭語。 一七 非人（ここでは捧炉神）が隙につけこんだ。もと『維摩経』観衆生品の句。 一八 一方ではもち上げ、一方では抑える。 一九 ちゃらんぽらんのでたらめぶり。ならず者ぶりは見事。

〔評唱〕　欲知仏性義、当観時節因縁。王太傅知泉州。久参招慶。一日因入寺時、[一]朗上座煎茶次、翻却茶銚。太傅也是箇作家、纔見他翻却茶銚、便問上座、茶炉下是什麼。朗云、捧炉神。不妨言中有響、争奈首尾相違、失却宗旨、[二]傷鋒犯手。不惟辜負自己、亦且触忤他人。[三]這箇雖是無得失底事、若拈起来、依旧有親疎、有皂白。若論此事、不在言句上、却要向言句上辨箇活処。所以道、[四]他参活句、不参死句。拠朗上座恁麼道、如[五]狂狗逐塊。太傅払袖便去、似不肯他。明招云、朗上座喫却招慶飯了、却去江外打野

〔評唱〕　仏性の義を知らんと欲せば、当に時節因縁を観るべし。王太傅、泉州を知む。久しく招慶に参ず。一日、因に寺に入りし時、朗上座、茶を煎ずる次に茶銚を翻却す。太傅也た是れ箇の作家なれば、他の茶銚を翻却したるを見るや纔や、便ち上座に問う、「茶炉下是れ什麼ぞ」。朗云く、「捧炉神」と。不妨に言中に響有るも、争奈せん首尾相違い、宗旨を失却いて、鋒に傷つき手を犯せり。惟だ自己に辜負くのみならず、亦且た他人にも触忤えり。這箇は是れ得失無き底の事なりと雖も、若し拈起げ来たらば、依旧り親疎有り、皂白有り。若し此の事を論ぜば、言句上に在らざるも、却って言句上に向いて、箇の活処を辨ずるを要す。所以に道う、「他活句に参じて、死句に参ぜず」と。朗上座の恁麼に道うに拠らば、狂狗の塊を逐うが如し。

狸。[六]野狸即是荒野中火焼底木橛、謂之野狸。用明朗上座不向正処行、却向外辺走。朗拶云、和尚又作麼生。招云、非人得其便。明招自然有出身処、亦不辜負他所問。所以道、[七]俊狗咬人不露牙。

太傅の袖を払って便ち去るは、他を肯わざるに似たり。明招云く、「朗上座、招慶の飯を喫却い了るや、却って江外に去きて野狸を打す」と。「野狸」は即ち是れ荒野の中にて火焼す底の木橛、之を野狸と謂う。用て朗上座の正処に向って行かず、却って外辺に向って走るを明す。朗、拶んで云く、「和尚又た作麼生」。招云く、「非人、其の便を得たり」と。明招は自然と出身の処有り、亦た他の所問にも辜負かず。所以に道う、「俊狗は人を咬むに牙を露さず」と。

一 刺史として赴任する。二 自分の刀の切っ先で自分の手を傷つける。三 このこと。禅の極則を指す。此事。四 第三九則・本則の評唱に既出。五 狂った犬は土塊を追いかけ、それを投げつけた人間には気づかない。六 この解釈は疑問。七 すぐれた犬は牙を見せる間もなく瞬時に咬みつく。

[一]潙山喆和尚云、王太傅大似相如[二]奪璧、直得鬚鬢衝冠。蓋明招[三]忍俊不禁、難逢其便。大潙若作朗上座、見他太傅払袖便行、放下茶銚、呵呵大笑。何故。見之不取、千載難逢。

潙山の喆和尚云く、「王太傅は、相如の、璧を奪うや、直得に鬚鬢は冠を衝けるに大いに似たり。蓋し明招は忍俊不禁なるも、其の便に逢うは難し。大潙若し朗上座と作らば、他の太傅の袖を払って便ち行くを見て、茶銚を放下して、呵呵大笑せん」と。何故ぞ。之

を見て取らずんば、千載にも逢い難し。

一 大潙慕喆(?—一〇九五)。 二 藺相如が秦王の手中から和氏の璧を奪還し、凄まじい形相を示して使命を全うした故事(『史記』藺相如列伝)による。 三 才気を押さえきれず発言したのだが、相手の隙をつかむのは難しい。

不見宝寿[一]問胡釘鉸[二]云、久聞胡釘鉸、莫便是否。胡云、是。寿云、還釘得虚空麼。胡云、請師[三]打破将来。寿便打。胡不肯。寿云、異日自有多口阿師、為你点破在。胡後見趙州[四]、挙似前話。州云、你因什麼被他打。胡云、不知過在什麼処。州云、只這一縫[五]、尚不奈何、更教他打破虚空来。胡便休去[六]。州代云、且釘這一縫。胡於是有省。

見ずや、宝寿、胡釘鉸に問うて云く、「久しく胡釘鉸と聞く、便ち是らず否」。胡云く、「是り」。寿云く、「還た虚空を釘け得るや」。胡云く、「請う師打破し将ち来たれ」。寿便ち打つ。胡肯わず。寿云く、「異日自ら多口の阿師有って、你が為に点破在」と。胡、後に趙州に見えて、前話を挙似す。州云く、「你什麼に因ってか他に打たる」。胡云く、「知らず過什麼処にか在る」。州云く、「只だ這の一縫すら尚お奈何ともせざるに、更に他をして虚空を打破し来たらしめんとすとは」と。胡便ち休し去る。州代って云く、「且は這の一縫を釘けよ」と。胡是に於て省有り。

一 臨済の法嗣、宝寿延沼。 二 釘鉸(鋳掛け)を業とした隠者。『唐詩紀事』二八によれば胡令能のこと。また『南部新書』壬集にも見える。 三 虚空を打ち割ってください(そうしたら鋳継いでみせます)。

四 趙州従諗(七七八―八九七)。 五 (君自身にある)ひび、裂け目。 六 何も言えなくなった。

[一]京兆米七師行脚帰。有老宿問云、月夜断[二]井索、人皆喚作蛇。未審七師見仏時、喚作什麼。七師云、若有所[三]見、即同衆生。老宿云、也是千[四]年桃核。

京兆の米七師行脚して帰る。老宿有り、問うて云く、「月夜の断井索、人皆な喚んで蛇と作す。未審、七師、仏を見る時、喚んで什麼とか作す」。七師云く、「若し所見有らば、即ち衆生に同じからん」。老宿云く、「也た是れ千年の桃核」と。

一 潙山霊祐(七七一―八五三)の法嗣。 二 切れたつるべ縄。 三『伝灯録』一一では「仏見」。 四 千年も経てカチカチになった桃のさね。硬直した教条主義に喩える。

[一]忠国師問紫[二]璘供奉、聞説供奉解註[三]思益経、是否。奉云、是。師云、凡当註経、須解仏意始得。奉云、若不会意、争敢言註経。師遂令侍者将一椀水・七粒米・一隻筯在椀上、送与供奉、問云、是什麼義。奉云、不会。師云、老師意尚不会、[四]更説甚仏意。

忠国師、紫璘供奉に問う、「聞説らく供奉は『思益経』を解註すと、是る否」。奉云く、「是り」。師云く、「凡そ経を註するに当っては、須らく仏の意を解して始めて得し」。奉云く、「若し意を会せずんば、争か敢て経を註すと言わん」と。師、遂に侍者をして一椀の水と七粒の米と一隻の筯とを椀の上に在き、供奉に送与りて、問うて云く、「是れ什麼の義ぞ」。奉云く、「会せず」。師云く、「老師の意すら尚お会せざるに、更に甚の仏の意とか説わん」と。

一 南陽慧忠（?—七七五）。二 唐・粛宗の時の内殿供奉僧。名は子璘。三 鳩摩羅什訳『思益梵天所問経』。四 どうして仏の真意を説き明かせよう。

王太傅与朗上座、如此話会不一。[一]
雪竇末後却道、当時但与踏倒茶炉。[二]
明招雖是如此、終不如雪竇。雪峰在
洞山会下作飯頭。[三]一日淘米次、山問、
作什麼。峰云、淘米。山云、淘米去
沙、淘沙去米。峰云、沙米一時去。
山云、大衆喫箇什麼。峰便覆却盆。
山云、子因縁不在此。雖然恁麼、争
似雪竇云、当時但踏倒茶炉。一等是
什麼時節、到他用処、自然騰今煥古、[四]
有活脱処。[五]頌云、

王太傅と朗上座と此の如く話会すること一ならず。雪竇末後に却って道う、「当時但だ与に茶炉を踏倒さん」と。明招は此の如しと雖是も、終に雪竇に如かず。雪峰は洞山の会下に在って飯頭と作る。一日米を淘ぐ次、山問う、「什麼をか作す」。峰云く、「米を淘ぐ」。山云く、「米を淘いで沙を去るか、沙を淘いで米を去るか」。峰云く、「沙も米も一時に去る」。山云く、「大衆は箇の什麼をか喫う」。峰、便ち盆を覆却す。山云く、「子が因縁は此に在らず」と。恁麼なりと雖然も、争か雪竇の「当時但だ茶炉を踏倒さん」と云うには似かん。一等く是れ什麼の時節なるも、他の用処に到って、自然に今に騰り古に煥いて、活脱の処有り。頌に云く、

一 理窟ばった問答をする。二 第五則・本則の評唱にも。三 禅院の食事係。四 古今独歩に光り輝く。五 本体がすばりと立ち現れた。

【頌】来問若成風、〔箭不虚発。偶爾成文。不妨要妙。〕応機非善巧。〔一弄泥団漢、有什麽限。二方木逗円孔。不妨撞著作家。〕三堪悲独眼龍、〔只具一隻眼、只得一橛。〕曾未呈牙爪。〔也無牙爪可呈。説什麽牙爪。也不得欺他。〕牙爪開、〔你還見麽。雪竇却較些子。若有恁麽手脚、踏倒茶炉。〕生雲雷、〔尽大地人、一時喫棒。天下衲僧、無著身処。旱天霹靂。〕四逆水之波経幾回。〔五七十二棒、翻成一百五十。〕

【頌】来問は風を成すが若き(ごと)も、〔箭(や)虚しくは発せず。偶爾(たま)たま文を成す。不妨(なかなか)に要妙なり。〕機に応ずること善巧に非ず。〔泥団を弄する漢、什麽(なん)の限りか有らん。方木を円孔に逗(い)る。不妨(みごと)に作家(てだれ)に撞著(つきあた)れり。〕悲しむ堪(べ)し独眼龍、〔只だ一隻眼を具し、只だ一橛を得たり。〕曾て未だ牙爪を呈せず。〔也(ま)た牙爪の呈すべき無し。什麽(なん)の牙爪とか説(い)わん。也た他(かれ)を欺(あなど)り得ず。〕牙爪開かば、〔你還(は)た見るや。雪竇却って些子(すこし)く較(たが)えり。若し恁麽(さよう)の手脚(てなみ)有らば、茶炉を踏倒せよ。〕雲雷を生ず、〔尽大地の人、一時に棒を喫せん。天下の衲僧、身を著(お)く処無し。旱天の霹靂(へきれき)。〕逆水の波幾回を経たる。〔七十二棒、翻(かえ)って一百五十と成る。〕

一 泥のかたまりをひねくりまわすやからに、けりのつく日はない。　二 角材を丸い穴に嵌め込もうとする。見当違い。　三 残念なことには明招が力量を発揮していない。　四 龍の住む海から川を逆流する波はどれほどくりかえしただろうか。批評者たるにとどまった独眼龍に期待を残すことば。　五 七十二棒ですまそうと思ったが、百五十棒くらわしてやろう。第六〇則・頌に「七十二棒且軽恕、一百五十難放君」と。

〔評唱〕　来問若成風、応機非善巧、太傅問処似運斤成風。此出荘子。郢人泥壁、餘一小竅、遂円泥擲補之。時有少泥落在鼻端。傍有匠者云、公補竅甚巧、我運斤為你取鼻端泥。其鼻端泥、若蠅子翼。使匠者斲之。匠者運斤成風而斲之、尽其泥而不傷鼻。郢人立不失容。所謂二倶巧妙。朗上座雖応其機、語無善巧。所以雪竇道、来問若成風、応機非善巧。堪悲独眼龍、曾未呈牙爪。明招道得也太奇特、争奈未有拏雲攫霧底爪牙。雪竇傍不肯、忍俊不禁、代他出気。雪竇暗去合他意、自頌他踏倒茶炉語。牙爪開、生雲雷、逆水之波経幾回。雲門道、不望你有逆水之波、但有順水之意亦得。所以道、活句下薦得、永劫不忘。

〔評唱〕「来問は風を成すが若きも、機に応ずること善巧に非ず」とは、太傅の問処、斤を運らして風を成すに似たり。此れは『荘子』に出づ。郢人壁を泥るに、一つの小竅を餘し、遂に泥を円めて擲って之を補う。時に少しの泥、鼻端に落在つる有り。傍に匠者有って云く、「公、竅を補うこと甚だ巧なり、我斤を運らし你が為に鼻端の泥を取らん」と。其の鼻端の泥、蠅子の翼の若し。匠者をして之を斲らしむ。匠者、斤を運らし風を成して之を斲るや、其の泥を尽して鼻を傷つけず。郢人立ちて容を失わず。所謂二り倶に巧妙なり。朗上座其の機に応ずと雖も、語に善巧無し。所以に雪竇道く、「来問は風を成すが若きも、機に応ずること善巧に非ず。悲しむ堪し独眼龍、曾て未だ牙爪を呈せず」と。明招道い得て也た太だ奇特たるも、争奈せん未だ雲を拏み霧を攫む底の爪牙有らず。雪竇傍にて肯わず、忍俊不禁にして、他に代って気を出だす。雪竇暗に去きて他の意に合わんとして自ら他の「茶炉を

朗上座与明招、語句似死。若要見活処、但看雪竇踏倒茶炉。

踏倒さん」の語を頌す。「牙爪開かば、雲雷を生ず、逆水の波幾回をか経たる」と。雲門道く、「你に逆水の波有ることを望まず、但だ順水の意有らば亦た得し」と。所以に道う、「活句下に薦得すれば、永劫にも忘れず」と。朗上座と明招と、語句死せるに似たり。若し活処を見んと要せば、但だ雪竇の「茶炉を踏倒さん」というを看よ。

一『荘子』徐無鬼篇にある寓話。二 うっぷんを晴らす。三 雲門文偃（八六四―九四九）。『雲門広録』では「亦得」を「亦難得」とする。四 雲門の法嗣、徳山縁密の語。

第四九則　三聖以何為食

垂示云、七穿八穴、[一]攙鼓奪旗。[二]百[三]匝千重、瞻前顧後。踞虎頭、収虎尾、未是作家。[四]牛頭没、馬頭回、亦未為奇特。且道、[五]過量底人来時如何。試挙看。

一 完膚なきまで突き破って穴だらけにする。 二「攙旗奪鼓」（第三八則・本則の著語）に同じ。 三 百重千重に守りを固め、前にも後ろにも隙を見せない。 四 第五則・頌の句。 五 並はずれた力量の人。

【本則】 挙。[一]三聖問雪峰、[二]透網金鱗、[三]未審以何為食。〔不妨縦横自在。此問太高生。你合只自知。何必更問。〕峰云、待汝出網来、向汝道。〔[四]減人多少声価。作家宗師、天然自在。〕聖云、[五]一千五百人善知識、話頭也不

第四九則　三聖、何を以てか食と為す

垂示に云く、七穿八穴、鼓を攙り旗を奪う。百匝千重、前を瞻後を顧みる。虎の頭に踞り、虎の尾を収むるも、未だ是れ作家ならず。牛頭没れ、馬頭回るも、亦た未だ奇特と為さず。且道、過量底人来たる時は如何。試みに挙し看ん。

【本則】 挙す。三聖、雪峰に問う、「網を透る金鱗、未審、何を以てか食と為す」。〔不妨に縦横自在なり。此の問い太だ高生。你合に只だ自知すべし。何ぞ必ずしも更に問わん。〕峰云く、「汝が網を出で来たるを待って汝に道わん」。〔人の多少の声価を減ず。作家の宗師、天然自在。〕聖云く、「一千五百人の善知識なるに、

識。〔迅雷霹靂、可煞驚群。一任䟦跳。〕峰云、老僧住持事繁。〔不在勝負。放過一著。此語最毒。〕

一 三聖慧然。 二 雪峰義存(八二二—九〇八)。 三 どんな網にもかからぬすばらしい魚。悟りを超えた自由自在な人。 四 三聖の名声を随分落とした。 五 一千五百人(『祖堂集』では「一千七百人」)もの修行僧を指導する大宗匠が問答のしかたすらご存じない。当時、雪峰山には一千五百人もの修行僧が集まっていたという。 六 寺の仕事が忙しいので、これで失礼。相手の気勢をかわす語。 七 勝ち負けは問題ではない。

〔評唱〕 雪峰三聖、雖然一出一入、一挨一拶、未分勝負在。且道、這二尊宿、具什麼眼目。三聖自臨済受訣、徧歴諸方、皆以高賓待之。看他致箇問端、多少人摸索不著。且不渉理性仏法、却問道、透網金鱗、以何為食。且道、他意作麼生。透網金鱗、尋常既不食他香餌、不知以什麼為食。雪峰是作家、匹似閑只以一二分酬他、

話頭すら也識らず」。〔迅雷霹靂、可煞だ群を驚かす。一に䟦跳るに任す。〕峰云く、「老僧は住持に事繁し」。〔勝負に在らず。一著を放過む。此の語最も毒あり。〕

〔評唱〕 雪峰と三聖と、一出一入、一挨一拶すと雖然も、未だ勝負を分たざる在。且道、這の二尊宿、什麼の眼目をか具う。三聖は臨済より訣を受けて、諸方を徧歴するに、皆な高賓を以て之を待す。看よ他の箇の問端を致すや、多少の人摸索不著。且は理性仏法に渉らず、却って問うて道く、「網を透る金鱗、何を以てか食と為す」と。且道、他の意作麼生。網を透る金鱗は、尋常既に他の香餌を食わざれば、知らず什麼を以て食と為せる。雪峰は是れ作家なれば、匹似閑に只だ一二

却向他道、待汝出網来向汝道。[四]汾陽謂之呈解問、洞下謂之借事問。須是超倫絶類、得大受用、頂門有眼、方謂之透網金鱗。争奈雪峰是作家、不妨減人声価、却云、待汝出網来向汝道。看他両家、[五]把定封疆、壁立万仞。若不是三聖、[六]只此一句、便去不得。争奈三聖亦是作家、方解向他道、一千五百人善知識、[七]話頭也不識。雪峰却道、老僧住持事繁。此語得恁麼頑慢。他作家相見、一擒一縦、逢強即弱、遇賤即貴。你若作勝負会、未夢見雪峰在。看他二人、最初孤危峭峻、末後二倶[八]死郎当。且道、還有得失勝負麼。他作家酬唱、必不如此。

分のみを以て他に酬え、却って他に道う、「汝が網を出で来たるを待って、汝に道わん」と。汾陽は之を呈解問と謂い、洞下には之を借事問と謂う。須是らく倫を超え類を絶し、大受用を得、頂門に眼有って方めて之を「網を透る金鱗」と謂うべし。争奈せん雪峰は是れ作家なれば、不妨に人の声価を減じて、却って云う、「汝が網を出で来たるを待って、汝に道わん」と。看よ他の両家、封疆を把定して、壁立万仞なるを。若し是れ三聖にあらずんば、只だ此の一句にて便ち去み得ざらん。争奈せん三聖も亦た是れ作家なれば、方めて解く他に向って道う、「一千五百人の善知識なるに、話頭すら也識らず」と。雪峰却って道う、「老僧は住持に事繁し」と。此の語恁麼に頑慢なるを得たり。他の作家の相見は、一擒一縦して、強に逢っては即ち弱、賤に遇っては即ち貴なり。你若し勝負の会を作さば、未だ夢にも雪峰を見ざる在。看よ他の二人、最初は孤危峭峻なるも、末後は二り倶に死郎当。且道、還た得

失勝負有りや。他の作家の酬唱は、必ずしも此の如くならず。

＊匹似閑　福本は「匹似閑地」。＊＊便去不得　福本は「便出不得」。一 隠顕自在なはたらきぶり。互いに譲らずせめぎあうさま。二 奥義を伝授されて。三 仏法の本質論には触れず。四 汾陽善昭（九四七―一〇二四）。五 自分の世界をしかと守る。六 この一句だけで手も足も出なくなってしまう。七 よくもそこまで傲岸になったものだ。八 第四八則・本則の著語に既出。

＊三聖在臨済作院主。臨済遷化垂示云、吾去後、不得滅吾正法眼蔵。三聖出云、争敢滅却和尚正法眼蔵。済云、已後有人問你作麼生。三聖便喝。済云、誰知吾正法眼蔵、向這瞎驢辺滅却。三聖便礼拝。他是臨済真子、方敢如此酬唱。雪竇末後只頌透網金鱗、顕他作家相見処。頌云、

三聖、臨済に在って院主と作る。臨済、遷化に垂示して云く、「吾去りし後、吾が正法眼蔵を滅ぼすこと不得れ」と。三聖出でて云く、「争でか敢えて和尚の正法眼蔵を滅却さん」。済云く、「已後人有って你に問わば作麼生」。三聖便ち喝す。済云く、「誰か知らん、吾が正法眼蔵は這の瞎驢の辺に向いて滅却ぶとは」と。三聖便ち礼拝す。他は是れ臨済の真子なれば、方めて敢えて此の如く酬唱す。雪竇末後に只だ網を透る金鱗を頌して、他の作家の相見の処を顕す。頌に云く、

＊三聖在〜相見処〔一〇五字〕　福本は「雪峰一日見獮猴、各背一面古鏡。三聖便問、歴劫無名、

何以彰為古鏡。峰云、瑕生也。聖云、一千五百人善知識、話頭也不識。峰云、老僧住持事煩。雪竇拈云、好与三十棒、放過也好、免見将錯就錯。又三聖問、透網金鱗、以何為食。峰云、待汝出網来、即向汝道。聖云、一千五百人善知識、話頭也不識。峰云、老僧住持事煩。雪竇云、可惜放過、好与三十棒、一棒也饒不得。只是罕遇知音作家。此処却便頌他透網金鱗、提他作家相見(一六二字)。

一『臨済録』行録(岩波文庫二一〇頁)を参照。　二 仏法の眼目。

【頌】透網金鱗、〔[1]千兵易得、一将難求。[2]何似生。千聖不奈何。〕[3]休云滞水。〔[4]向他雲外立。[5]活潑潑地。且[6]莫鈍置好。〕[7]揺乾蕩坤、〔作家作家。未是他奇特処。放出又何妨。〕振鬣擺尾。〔[8]誰敢辨端倪。[9]做得箇伎倆、売弄出来。不妨驚群。〕千尺鯨噴洪浪飛、〔転過那辺去。不妨奇特。尽大地人、一口呑尽。〕一声雷震清飆起。〔有眼有耳、如聾如盲。誰不[10]悚然。〕清飆起、〔在什麼処。咄。〕[11]天上人間知幾幾。〔雪峰牢把陣頭、三

【頌】網を透る金鱗、〔千兵は得易きも、一将は求め難し。何似生。千聖も奈何ともせず。〕云うを休めよ水に滞ると。〔他の雲外に立つ。活潑潑地。且は鈍置すること莫くんば好し。〕乾を揺し坤を蕩し、〔作家なり、作家なり。未だ是れ他の奇特たる処にあらず。放出するも又た何ぞ妨げん。〕鬣を振い尾を擺す。〔誰か敢て端倪を辨ぜん。箇の伎倆を做し得て売弄し出で来たれり。不妨に群を驚かす。〕千尺の鯨噴いて洪浪飛び、〔那辺に転過し去る。不妨に奇特たり。尽大地の人を一口に呑み尽す。〕一声雷震いて清飆起る。〔眼有り耳有るも、聾の如く盲の如し。誰か悚然たらざらん。〕清飆起る、〔什麼処にか在る。咄。〕天上人間知

聖牢把陣脚。撒土撒沙作什麼。打云、你在什麼処。〕

ん幾幾ぞ。〔雪峰は牢く陣頭を把り、三聖は牢く陣脚を把る。土を撒き沙を撒いて什麼か作ん。打って云く、你什麼処にか在る。〕

一 力量のある者は得難い。二 さあどうだ。三 いつまでも水の中にとどまっていると思うな。四 もう雲の外に飛び出ている。五 ピチピチと跳ねている。六 コケにしてくれるな。七 網から放してやったらどうだ。八 容易に推し量れるものではない。九 なかなかの手なみを見せたぞ。一〇 ぞっとしてたちすくむ。一一 この二人の応酬の高邁な呼吸が分る者は何人いるか。一二 余計なことを言ってどうするのか。

〔評唱〕透網金鱗、休云滞水、五祖道、只此一句頌了也。既是透網金鱗、豈居滞水。必在洪波浩渺、白浪滔天処。且道、二六時中、以何為食。諸人且向三条椽下、七尺単前、試定当看。雪竇道、此事随分拈弄。如金鱗之類、振鬣擺尾時、直得乾坤動揺。千尺鯨噴洪浪飛、此頌三聖道、一千五百人善知識、話頭也不識。如鯨噴

〔評唱〕「網を透る金鱗、云うを休めよ水に滞ると」というに、五祖道く、「只だ此の一句もて頌し了れり」と。既に是れ網を透る金鱗ならば、豈に水に居滞せんや。必ず洪波浩渺、白浪滔天の処に在らん。且道、二六時中、何を以てか食と為す。諸人且は三条椽下、七尺単前に向いて、試みに定当し看よ。雪竇道く、「此の事は分に随って拈弄せよ」と。金鱗の類の如きは、鬣を振い尾を擺す時は、直得に乾坤動揺す。「千尺の鯨噴いて洪浪飛ぶ」とは、此れは三聖の「一千五

洪浪相似。一声雷震清颷起、頌雪峰道老僧住持事繁。如一声雷震清颷起相似。大綱頌他両箇倶是作家。清颷起、天上人間知幾幾、且道、這一句落在什麼処。颷者風也。当清颷起時、天上人間能有幾人知。

百人の善知識なるに、話頭すら也識らず」と道うを頌す。鯨の洪浪を噴くが如くに相似たり。「一声雷震いて清颷起る」とは、雪峰の「老僧は住持に事繁し」と道うを頌す。一声の雷震いて清颷起るが如くに相似たり。大綱他の両箇倶に是れ作家なるを頌す。「清颷起る、天上人間知んぬ幾幾ぞ」という、且道、這の一句は什麼処にか落在く。「颷」は風なり。清颷起る時に当って、天上人間能く幾人か知る有らん。

一 五祖法演(?—一一〇四)。 二 僧堂内の一人分の坐床。 三 勘どころをつかむ。 四 各自の力量に応じて論ぜよ。

第五〇則　雲門塵塵三昧

垂示云、度越階級[一]、超絶方便。機機相応、句句相投。儻非入大解脱門、得大解脱用、何以権衡仏祖、亀鑑宗乗。且道、当機直截[二]、逆順縦横、如何道得出身句[三]。試請挙看。

第五〇則　雲門の塵塵三昧

垂示に云く、階級を度越し、方便を超絶す。機機相応じ、句句相投ず。儻し大解脱門に入り、大解脱の用を得るに非ずんば、何を以てか仏祖を権衡り、宗乗に亀鑑たらん。且道、当機直截、逆順縦横して、如何か出身の句を道い得ん。試みに請う挙し看ん。

一 修行の階梯を超越する。 二 問題の核心をずばりと突いて。 三 現在の在り方から超出した心境を言い留めた一句。

【本則】 挙。僧問雲門[一]、如何是塵塵[二]三昧。〔天下衲僧、尽在這裏作[三]窠窟。満口含霜。撒[四]沙撒土作什麼。〕門云、鉢[五]裏飯、桶裏水。〔布袋[六]裏盛錐。金沙混雑。将錯就錯。含[七]元殿裏、不問長安。〕

【本則】 挙す。僧、雲門に問う、「如何なるか是れ塵塵三昧」。〔天下の衲僧尽く這裏に在って窠窟を作す。満口に霜を含む。沙を撒き土を撒いて什麼か作ん。〕門云く、「鉢の裏の飯、桶の裏の水」。〔布袋の裏に錐を盛る。金と沙と混雑す。錯を将て錯を就す。含元殿裏に長安を問わず。〕

一 雲門文偃（八六四―九四九）。二 個物が個物でありつつ一切を含むという禅定の境地。『華厳経』賢首品の偈に基づく。三 わかったつもりで収まりかえる。四 ことごとしく言挙げしてどうしようというのか。沙・土は「塵塵」に掛けている。五 あたり前の物があたり前にある在り方。六 麻袋に錐を入れる。七 長安の含元殿に居て長安はどこかとたずねることはない。もともと自分に具わっているものが見て取れぬか。

〔評唱〕還定当得麼。若定当得、雲門鼻孔、在諸人手裏。若定当不得、諸人鼻孔、在雲門手裏。雲門有斬釘截鉄句。此一句中、具三句。有底問著便道、鉢裏飯粒粒皆円、桶裏水滴滴皆湿。若恁麼会、且不見雲門端的為人処。頌云、

〔評唱〕還た定当し得るや。若し定当し得れば、雲門の鼻孔は諸人の手の裏に在らん。若し定当し得ざれば、諸人の鼻孔は雲門の手の裏に在らん。雲門に斬釘截鉄の句有り。此の一句の中に三句を具す。有る底は問著るれば便ち道う、「鉢の裏の飯は粒粒皆な円く、桶の裏の水は滴滴皆な湿う」と。若し恁麼に会せば、且は雲門の端的為人せし処を見ず。頌に云く、

一 勘どころをつかむ。二 第一四則・本則の評唱を参照。三 ポイントをずばりと提示して教え導く。

【頌】　鉢裏飯、桶裏水。〔露也。撒沙撒土作什麼。漱口三年始得。〕多口阿師難下觜。〔縮却舌頭。識法者

【頌】　鉢の裏の飯、桶の裏の水。〔露れり。沙を撒き土を撒いて什麼か作ん。口を漱ぐこと三年にして始めて得し。〕多口の阿師も觜を下し難し。〔舌頭を縮却む。

懼。為什麼却恁麼挙。〕四北斗南星位不殊、〔喚東作西作什麼。五坐立儼然。六長者長法身、短者短法身。〕七白浪滔天平地起。〔脚下深数丈。賓主互換。驀然在你頭上。你又作麼生。打。〕八擬不擬、〔**蒼天蒼天。九咄。〕一〇止不止、〔***説什麼。更添怨苦。〕一一箇箇無裩長者子。〔一二郎当不少、傍観者哂。〕

法を識る者は懼る。為什麼にか却って恁麼に挙する。〕北斗南星位殊ならず、〔東を喚んで西と作して什麼か作ん。坐立儼然。長き者は長き法身、短き者は短き法身。〕白浪滔天平地に起る。〔脚下深きこと数丈。賓と主と互いに換わる。驀然と你の頭上に在り。你又た作麼生。打つ。〕擬するも擬せず、〔蒼天、蒼天。咄。〕止むるも止まらず、〔什麼をか説う。更に怨苦を添う。〕箇箇無裩の長者の子。〔郎当少なからず、傍観する者は哂う。〕

* 三年　福本は「三十年」。　** 蒼天蒼天咄　福本に無し。　*** 説什麼更添怨苦　福本は「咄蒼天蒼天」。

一 正体を現した。 二 三年間口をすすがねばならぬ。安直な発言を批判する語。 三 掟をわきまえている者は口を慎むものだ。 四 北斗星も南斗星もそれぞれあるべきところにある。鉢の中の飯と桶の中の水とがそれぞれピタリと所を占めてそこにあるように。 五 坐ると立つとははっきり区別がある。 六 長いものは長いままに法身の顕現、短いものは短いままに法身の顕現。 七 桶の中の水が天にとどく大波を平地にまきおこした。 八 やってみようとしてやれぬ。 九 やれ、悲しや。 一〇 やめようとしてやめられない。 一一 どいつもこいつも落ちぶれたなりの長者の息子だ。長者の息子が自分の出自を知らずに貧窮の中をさまよう。自己の仏性に気づかないことの喩え(『法華経』信解品に見える)。

「裩」は褌、したばかま。　三　なんともだらしがない。そばで見ている者に嗤われる。

〔評唱〕　雪竇前面頌雲門対一説話道、対一説、太孤絶、無孔鉄鎚重下楔。後面又頌馬祖離四句絶百非話道、蔵頭白、海頭黒、明眼衲僧会不得。若於此公案透得、便見這箇頌。雪竇当頭便道、鉢裏飯、桶裏水。言中有響、句裏呈機。多口阿師難下觜、随後便与你下注脚也。你若向這裏、要求玄妙道理計較、転難下觜。雪竇只到這裏、也得他愛恁麼、頭上先把定、恐衆中有具眼者覰破也。到後面、須放過一著、俯為初機打開頌出、教人見。北斗依旧在北、南星依旧只在南。所以道、北斗南星位不殊。白浪滔天平地起、忽然平地上起波瀾、又作麼生。

〔評唱〕　雪竇前面に雲門の対一説の話を頌して道く、「対一説、太だ孤絶、無孔の鉄鎚重ねて楔を下す」と。後面に又た馬祖の四句を離れ百非を絶する話を頌して道く、「蔵頭は白く、海頭は黒し、明眼の衲僧も会すること得ず」と。若し此の公案に於て透得せば、便ち這箇の頌を見ん。雪竇当頭に便ち道う、「鉢の裏の飯、桶の裏の水」と。言中に響有り、句裏に機を呈す。「多口の阿師も觜を下し難し」と、随後て便ち你が与に注脚を下す。你若し這裏に向いて、玄妙の道理を求め計較せんと要せば、転ます觜を下し難し。雪竇頭上に先ず把定するは、衆中に具眼の者有って覰破されんことを恐るればなり。後面に到って須らく一著を放過め、俯して初機の為に打開頌出して人をして見らしむべし。北斗は依旧として北に在り、南星は依旧として只だ南に在り。所以に道う、「北斗南星位殊ならず」

若向事上覰則易、若向意根下尋、卒摸索不著。這箇如鉄橛子相似、擺撥不得、挿觜不得。你若擬議、欲会而不会、止而不止、乱呈懞袋、正是箇箇無裩長者子。寒山詩道、六極常嬰苦、九維徒自論。有才遺草沢、無勢閉蓬門。日上巌猶暗、煙消谷尚昏。其中長者子、箇箇総無裩。

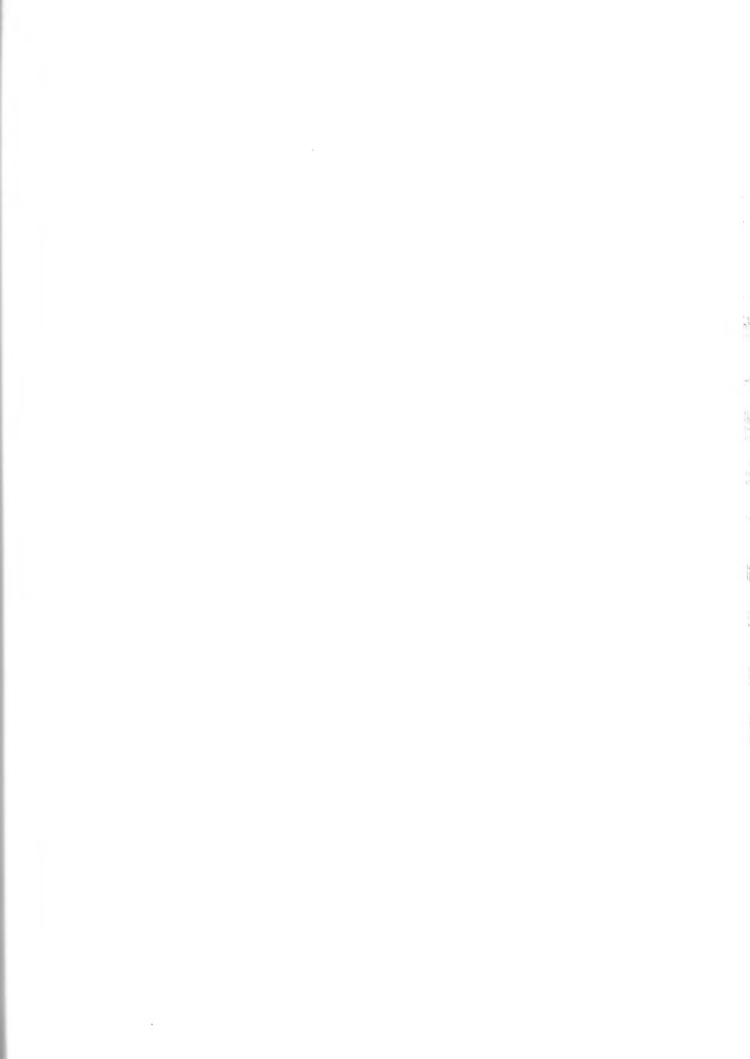
と。「白浪滔天平地に起る」とは、忽然平地上に波瀾を起さば、又た作麼生。若し事上に向いて覰れば則ち易く、若し意根下に向いて尋ぬれば、卒に摸索不著ざらん。這箇は鉄の橛子の如くに相似て、擺撥け得ず、觜を挿み得ず。你若し擬議せば、会せんと欲するも会せず、止めんとして止まらず、乱りに懞袋を呈す、正に是れ「箇箇無裩の長者の子」なり。寒山の詩に道く、「六極常に苦に嬰り、九維徒自に論ず。才有りて草沢に遺てられ、勢無くして蓬門を閉す。日上るも巌は猶お暗く、煙消ゆるも谷は尚お昏し。其の中の長者の子、箇箇総て裩も無し」と。

＊只到～恁麼〔一〇字〕　福本に無し。これに従う。

一 第一四則を参照。二 第七三則を参照。三 智蔵の頭は白く、懐海の頭は黒い。馬祖が二人の弟子を批評した言葉。四 意識分別によって追究する。五 払いのけることもできず、手を出すこともできない。六 愚かさのつまった袋。愚鈍な頭脳。七 九世紀ごろの隠者、詩人。以下の詩句に文字の異同あり。八「六極」は天地四方、「九維」は八方と天。あるいは、『書経』洪範の「六極」(六つの罰)、「九疇」(九つの大綱)。六種の不幸が常に人を苦しめているのに、九つもの法についての空しい議論がある。九 あばら家の粗末な門。

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第五

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第五

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第六

第五一則　雪峰是什麼

垂示云、纔有是非、紛然失心。不落階級、又無摸索。且道、放行即是、把住即是。到這裏、若有一糸毫解路、猶滞言詮、尚拘機境、尽是依草附木。直饒便到独脱処、未免万里望郷関。還搆得麼。若未搆得、且只理会箇現成公案。試挙看。

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第六

第五一則　雪峰の是れ什麼ぞ

垂示に云く、纔に是非有らば、紛然として心を失う。階級に落ちざれば、又た摸索すること無し。且道、放行するが即ち是か、把住するが即ち是か。這裏に到り、若し一糸毫の解路有らば、猶お言詮に滞り、尚お機境に拘われ、尽く是れ依草附木。直饒便ち独脱の処に到るも、未だ免れず万里に郷関を望むを。還た搆り得るや。若し未だ搆り得ずんば、且は只だ箇の現成公案を理会せよ。試みに挙し看ん。

一 よしあしの判断にかかわったとたん、ぱらりと本心を見うしなう。『信心銘』の句。 二 段階を追って進むという枠づけを超え出るのでは、糸口をさぐるすべが無くなる。 三 第四則の垂示に「放行好、把定好」と。 四 分析的な解釈。 五 その辺の草木に憑依する物の怪の類だ。 六 ひとり超脱する。唯我独尊の自立。 七 故郷は一万里の彼方。自己の本来のありかとは遠く離れている。 八 「見成公案」

（第九則・本則の著語）に同じ。

【本則】挙。雪[1]峰[2]住庵時、有両僧来礼拝。〔作什麼。[3]一状領過。〕峰見来、[4]以手托庵門、放身出云、是什麼。[5]〔鬼眼睛。[6]無孔笛子。[7]擎頭戴角。〕僧亦云、是什麼。〔[8]泥弾子。[9]氈拍板。[10]箭鋒相拄。〕峰低頭帰庵。〔[11]爛泥裏有刺。[12]如龍無足、似蛇有角。就中難為措置。〕僧後到巌頭。〔[13]也須是問過始得。同道方知。〕頭問、什麼処来。〔也須是作家始得。這漢往往納敗闕。若不是同参、[14]泊乎放過。〕僧云、嶺[15]南来。〔伝得什麼消息来。也須是通箇消息。還見雪峰麼。〕頭云、曾到雪峰麼。〔[16]勘破了多時、不可道不到。〕僧云、曾到。〔[17]実頭人難得。[18]打

【本則】挙す。雪峰住庵の時、両僧有り、来たり礼拝す。〔什麼をか作す。一状に領過す。〕峰、来たるを見て、手を以て庵門を托き、身を放って出でて云く、「是れ什麼ぞ」。〔鬼眼睛。無孔の笛子。頭を擎げ角を戴く。〕僧も亦た云く、「是れ什麼ぞ」。〔泥弾子。氈拍板。箭鋒相拄る。〕峰、低頭て庵に帰る。〔爛泥裏に刺有り。龍に足無きが如く、蛇に角有るが似し。就中措置し難為し。〕僧、後に巌頭に到る。〔也た須是らく問過して始めて得し。同道にして方めて知る。〕頭問う、「什麼処よりか来たる」。〔也た須是らく作家にして始めて得し。這の漢往往敗闕に納る。若し是れ同参にあらずんば、泊乎ど放過さん。〕僧云く、「嶺南より来たる」。〔什麼の消息をか伝え得来たる。也た須是らく箇の消息を通ずべし。還た雪峰に見うや。〕頭云く、「曾て雪峰に到るや」。〔勘破し了ること多時、到らずと道うべ

作両橛。〕頭云、有何言句。〔便恁麼去也。〕僧挙前話。〔便恁麼去也。重重納敗闕。〕頭云、他道什麼。〔好劈[一九]口便打。失却鼻孔了也。〕僧云、他無語、低頭帰庵。〔又納敗闕。你且道、他是什麼。〕頭云、噫、我当初悔不向他道末後句[二〇]。〔洪波浩渺、白浪滔天。〕若向伊道[二一]、天下人不奈雪老何。〔癩児牽伴。不必。須弥也須粉砕。且道、他圏繢[二二]在什麼処。〕僧至夏末[二三]、再挙前話請益。〔已是不惺惺。正賊去了多時。賊過後張弓。〕頭云、何不早問。〔好与掀倒禅床。過也[二四]。〕僧云、未敢容易[二五]。〔這棒本是這僧喫。穿却鼻孔。停囚長智[二六]。已是両重公案。〕頭云、雪峰[二七]雖与我同条生、不与我同条死。〔漫天網地。〕要

からず。〕僧云く、「曾て到る」。〔実頭なる人は得難し。両橛と打作す。〕頭云く、「何の言句か有りし」。〔便ち恁麼にし去る。〕僧、前話を挙す。〔便ち恁麼にし去る。重ね重ね敗闕に納る。〕頭云く、「他は什麼とか道いし」。〔好し劈口に便ち打たん。鼻孔を失却い了れり。〕僧云く、「他は語無く、低頭て庵に帰れり」。〔又た敗闕に納る。你且道、他は是れ什麼ぞ。〕頭云く、「噫、我当初悔ゆらくは他に末後の句を道わざりしことを。〔洪波浩渺、白浪天に滔く。〕若し伊に道わば、天下の人、雪老を奈何ともせず」。〔癩児伴を牽く。必せず。須弥も也た須ずや粉砕せられん。且道、他の圏繢は什麼処にか在る。〕僧、夏末に至り、再び前話を挙して請益す。〔已是に惺惺ならず。正賊去り了ること多時。賊過ぎし後に弓を張る。〕頭云く、「何ぞ早く問わざる」。〔好し与に禅床を掀倒さん。過ぎたり。〕僧云く、「未だ敢て容易せず」。〔這の棒、本と是れ這の僧喫せん。鼻孔を穿却てり。囚に停まりて智を長ず。已

識末後句、只這是。〔賺殺一船人。〕我也不信、泊乎分疎不下。〕

に是れ両重の公案。〕頭云く、「雪峰は我と同じ条に生るると雖も、我と同じ条に死せず。〔漫天網地。〕末後の句を識らんと要せば、只だ這れ是なるのみ」。〔一船の人を賺殺す。我も也た信ぜざるも、泊乎ど分疎不下。〕

一 雪峰義存(八二二―九〇八)。二 修行の途中しばらく草庵にとどまること。三 二人を一まとめに処断する。四 手のひらで庵の門を押し開き、ぱっと飛び出して。五 あやしい目つき。六 穴なしの笛。七 頭にすっくと角が生えている。八 泥の弾丸。役に立たぬもの。九 フェルト製のカスタネット。第四一則・本則の評唱に「無孔笛撞著氈拍版」と。一〇 見事な互角の名人芸。第四二則・本則の著語にも。一一 思わぬところに伏兵がいる。一二 龍かと思えば足が無く、蛇かと思えば角がある。もてあつかいかねる代物。一三 巌頭全奯(八二八―八八七)。雪峰の先輩。一四 あやうく見逃してしまうところ。「泊合放過」(第二〇則・本則の著語)に同じ。一五 五嶺(広東省北部の連山)の南方。雪峰のところ。一六 とっくに見抜いている。一七 めったにない実直なお人だ。一八 二つに分けてしまった。一九 口をめがけて打ちたいところだ。二〇 とどめを刺すことば。跡をのこさぬことば。二一 そこまで言わずとも。二二 さらに教えを請う。二三 肝心の賊はとうに逃げてしまった。二四 あとの祭りだ。二五 気安く、おいそれと。二六 長く獄舎にいる間にずる賢くなる。二七 天地を覆い尽す網をおっかぶせた。絶体絶命の断案を下した。

〔評唱〕大凡扶竪宗教、須是辨箇当機、知進退是非、明殺活擒縱。若忽

〔評唱〕大凡そ宗教を扶竪てんには、須是らく箇の当機を辨じ、進退是非を知り、殺活擒縦を明むべし。若も

眼目迷[二]黎麻羅、到処逢問便問、逢答便答、殊不知、鼻孔在別人手裏。只如雪峰・巌頭、同参[三]徳山。此僧参雪峰、見解只到恁麼処。及乎見巌頭、亦不曾成得一事、虚煩他二老宿、一問一答、一擒一縦、直至如今、天下人成節角諸訛、分疎不下。且道、節角諸訛、在什麼処。雪峰雖[四]遍歴諸方、末後於鼇山店、巌頭因而激之、方得勦[五]絶大徹。巌頭後値沙[六]汰、於湖辺作渡子。両岸各懸一板、有人過敲板一下、頭云、你過那辺。遂従蘆葦間舞棹而出。

雪峰帰嶺南住庵。這僧亦是久参底人。雪峰見来、以手托庵門、放身出云、是什麼。如今有底恁麼問著、便

忽眼目迷黎麻羅して、到る処、問に逢っては便ち問い、答に逢っては便ち答うれば、殊に知らず、鼻孔は別人の手の裏に在るを。只だ雪峰・巌頭の如きは、同に徳山に参ず。此の僧、雪峰に参ずるや、見解只だ恁麼の処に到るのみ。巌頭に見ゆるに及ぶも、亦た曾て一事だに成し得ず、虚しく他の二老宿を煩し、一問一答、一擒一縦、直に如今に至るも、天下の人節角諸訛と成して、分疎不下なり。且道、節角諸訛は什麼処にか在る。雪峰は諸方を遍歴すと雖も、末後に鼇山店に於て、巌頭因りて之を激して、方めて勦絶し大徹するを得たり。巌頭後に沙汰に値い、湖辺に於て渡子と作る。両岸に各おの一板を懸け、人の過るもの有って板を敲くこと一下すれば、頭云く「你那辺にか過る」と。遂に蘆葦の間より棹を舞りて出づ。

雪峰、嶺南に帰り住庵す。這の僧も亦た是れ久参底の人なり。雪峰来たるを見て、手を以て庵門を托き、身を放って出でて云く、「是れ什麼ぞ」と。如今有る

去他語下咬嚼。這僧亦怪也、只向他道、是什麼。峰低頭帰庵。往往喚作無語会去也。這僧便摸索不著。有底道、雪峰被這僧一問、直得無語帰庵。殊不知、雪峰意有毒害処。雪峰雖得便宜、争奈蔵身露影。

這僧後*辞雪峰、持此公案、令巌頭判。既到彼、巌頭問、什麼処来。僧云、嶺南来。頭云、曾到雪峰麼。若要見雪峰**、只此一問、也好急著眼看。僧云、曾到。頭云、有何言句。此語亦不空過、這僧不暁、只管逐他語脈転。頭云、他道什麼。僧云、他低頭無語帰庵。這僧殊不知、巌頭著草鞋、在他肚皮裏行***幾回了也。巌頭云、噫、

底は、恁麼に問著るれば、便ち他の語下に去いて咬嚼せん。這の僧も亦た怪なり、只だ他に道う、「是れ什麼ぞ」と。峰、低頭て庵に帰る。往往喚んで無語の会と作し去る。這の僧は便ち摸索不著。有る底は道う、「雪峰這の僧に一問せられて、直得に語無く庵に帰る」と。殊に知らず、雪峰の意に毒害の処有ることを。雪峰は便宜を得たりと雖も、争奈せん身を蔵して影を露すのみ。

這の僧後に雪峰を辞し、此の公案を持して、巌頭をして判ぜしむ。既に彼に到るや、巌頭問う、「什麼処よりか来たる」。僧云く、「嶺南より来たる」。頭云く、「曾て雪峰に到るや」と。若し雪峰を見んと要せば、只だ此の一問、也た急と眼を著けて看るに好し。僧云く、「曾て到る」。頭云く、「何の言句か有りし」と。此の語亦た空しくは過らざるに、這の僧暁らず、只管に他の語脈を逐って転ず。頭云く、「他什麼とか道いし」。僧云く、「他は低頭て語無く庵に帰る」と。這の

我当初悔不向他道末後句。若向他道、天下人不奈雪老何。巌頭也是扶強不扶弱。這僧依旧黒漫漫地、不分緇素、懐一肚皮疑、真箇道、雪峰不会。至夏末、再挙前話、請益巌頭。頭云、何不早問。這老漢、計較生也。僧云、未敢容易。頭云、雪峰雖与我同条生、不与我同条死。要識末後句、只這是。巌頭太煞不惜眉毛。諸人畢竟作麼生会。

僧殊に知らず、巌頭は草鞋を著けて他の肚皮の裏を行くこと幾回もし了れるを。巌頭云く、「噫、我当初悔ゆらくは他に末後の句を道わざりしことを。若し他に道わば、天下の人、雪老を奈何ともせじ」と。巌頭也た是れ強きを扶けて弱きを扶けず。這の僧依旧として黒漫漫地にして、緇素を分たず、一肚皮の疑を懐き、真箇に道う、「雪峰は会せず」と。夏末に至り再び前話を挙して、巌頭に請益す。頭云く、「何ぞ早く問わざる」と。這の老漢、計較生ぜり。僧云く、「未だ敢て容易せず」。頭云く、「雪峰は我と同じ条に生ると雖も、我と同じ条に死せず。末後の句を識らんと要せば、只だ這れ是なるのみ」と。巌頭太煞だ眉毛を惜まず。諸人畢竟作麼生か会せん。

＊後辞雪峰持　福本は「後来辞雪峰、峰修書馳」。　＊＊雪峰只　福本に無し。　＊＊＊行幾回　福本は「遶百千匝」。

一 根本の教え。　二 ぼんやりかすんださま。　三 徳山宣鑑（七八二―八六五）。　四 第五則・本則の評唱を参照。　五 徹底的に払拭する。　六 会昌五年（八四五）の廃仏を指す。　七 ことばに捕われ、あれこれ

穿鑿する。八 非常に辛辣なところ。九 好機をとらえてそれに乗ずる。一〇 本意をかくして、ほのめかすだけ。一一 勘どころに心を集中してみたいところだ。一二 思量、分別。一三 誤った説法をすると眉毛が抜け落ちるといわれているが、それをも厭わず、人のために説いてやる。

雪峰在徳山会下作飯頭。[1]一日斎晩。[2]徳山托鉢、[3]下至法堂。峰云、鐘未鳴、鼓未響、這老漢托鉢向什麼処去。山無語低頭帰方丈。雪峰挙似巌頭。頭云、大小徳山、不会末後句。山聞、令侍者喚至方丈、問云、汝不肯老僧那。頭密啓其語。山至来日上堂、与尋常不同。頭於僧堂前、撫掌大笑云、且喜老漢会末後句。他後天下人不奈他何。[4]雖然如是、只得三年。

此公案中、如雪峰見徳山無語、将謂得便宜、殊不知、[5]著賊了也。蓋為

雪峰、徳山の会下に在りて飯頭と作る。一日、斎晩し。徳山、鉢を托げて法堂に下り至る。峰云く、「鐘未だ鳴らず、鼓未だ響かず、這の老漢鉢を托げて什麼処にか去く」と。山、語無く低頭て方丈に帰る。雪峰、巌頭に挙似す。頭云く、「大小の徳山も末後の句を会せず」と。山、聞いて侍者をして(巌頭を)喚んで方丈に至らしめ、問うて云く、「汝、老僧を肯わざるや」と。頭、密に其の語を啓す。山、来日に至って上堂するや、尋常と同じからず。頭、僧堂の前に於て、掌を撫ち大笑して云く、「且喜や老漢、末後の句を会せり。他後天下の人、他を奈何ともせじ。如是と雖然も、只だ三年を得るのみならん」と。

此の公案の中、雪峰の如きは、徳山の語無きを見て、便宜を得たりと将謂いしに、殊に知らず、賊に著り了

他曾著賊来、後来亦解做賊。所以古[六]人道、末[七]後一句、始到牢関、有者道、巌頭勝雪峰。則錯会了也。巌頭常用此機示衆云、明眼漢没窠[八]臼。却物為[九]上、逐物為下。這末後句、設使親見祖師来、也理会不得。

徳山斎晩、[一〇]老子自捧鉢、下法堂去。巌頭道、大小[一一]徳山、未会末後句在。雪竇拈云、曾聞説箇独眼龍、元来只具一隻眼。殊不知、徳山是箇[一二]無歯大虫。若不是巌頭識破、争知得昨日与今日不同。諸人要会末後句麼。只許[一三]老胡知、不許老胡会。自古及今、公案万別千差、如荊棘林相似。你若透得去、天下人不奈何、三世諸仏、立

れるを。蓋し他曾て賊に著り来たるが為に、後来亦た解く賊と做るなり。所以に古人道く、「末後の一句、始めて牢関に到る」と。有る者は道う、「巌頭は雪峰に勝れり」と。則ち錯り会し了れり。巌頭は常に此の機を用て衆に示して云く、「明眼の漢は窠臼没し。物を却くるを上と為し、物を逐うを下と為す」と。這の末後の句、設使親しく祖師に見え来たるも、也た理会し得ず。

徳山斎晩く、老子自ら鉢を捧げて法堂に下り去く。巌頭道く、「大小の徳山も未だ末後の句を会せざる在」と。雪竇拈げて云く、「曾て箇の独眼龍と説くを聞くも、元来只だ一隻眼を具するのみ」と。殊に知らず、徳山は是れ箇の無歯の大虫なることを。若し是れ巌頭の識破するにあらずんば、争か昨日と今日と同じからざるを知り得ん。諸人、末後の句を会せんと要すや。只だ老胡の知るを許むるも、老胡の会するを許めず。古より今に及ぶまで、公案万別千差、荊棘の林の

在下風。你若透不得、巌頭道、雪峰雖与我同条生、不与我同条死。只這一句、自然有出身処。雪竇頌云、

一 禅院の食事係。二 昼食。三 手のひらに鉢をのせて。四『会元』七・巌頭章には「雖然、也祇得三年活」とあり、そこの注に「山果三年後示滅」と。『伝灯録』一六に「雖然如是、也祇得三年。三年後果然遷化矣」と。五 したたか者にしてやられる。六 楽普元安（八三四—八九八）。七 ぎりぎり決着の一句を言いとめて、やっと堅牢な関所（迷悟の境）に到達できた。八 紋切り型、かたどおりの方式。九 枠づけされた事物を受けつけないのが上根で、それについてまわるのは下根である。一〇 おやじ。「老漢」に同じ。ここは、徳山を指す。一一 独眼龍と聞いていたが、ただの片目にすぎなかった。この文は「独眼龍」と称された明招徳謙の語に対するコメント（第四八則・頌の著語）。この前後の文脈にはそぐわない。一二 辣腕の禅匠の枯れきった老成ぶり。一三 第四七則・頌の評唱にも。

【頌】 末後句、〔一已在言前。将謂真箇、覰著則瞎。〕為君説。〔舌頭落也。二説不著。有頭無尾、有尾無頭。〕三明暗双双底時節。〔四葛藤老漢、如牛無角、似虎有角。彼此是*恁麼。〕同条

如くに相似たり。你若し透得け去らば、天下の人奈何ともせず、三世の諸仏も下風に立在たん。你若し透け得ざらば、巌頭道く、「雪峰は我と同じ条に生ると雖も、我と同じ条に死せず」と。只だ這の一句、自然に出身の処有り。雪竇の頌に云く、

【頌】 末後の句、〔已に言前に在り。真箇なるかと将謂いしに、覰著れば則ち瞎す。〕君が為に説う。〔舌頭落ちたり。説い著らず。頭有るも尾無く、尾有るも頭無し。〕明暗双双、底の時節ぞ。〔葛藤する老漢、牛の角無きが如く、虎の角有るが似し。彼も此も是れ恁

生也共相知、〔是何種族。彼此没交渉。[五]君向瀟湘我向秦。〕不同条死還[六]殊絶。〔拄杖子在我手裏。争怪得山僧。你鼻孔為什麼在別人手裏。〕還殊絶。〔還要喫棒麼。有什麼摸索処。〕[七]黄頭碧眼須甄別。〔尽大地人、[八]亡鋒結舌。我也恁麼、他人却不恁麼。只許老胡知、不許老胡会。〕[九]南北東西帰去来、〔収。脚跟下猶帯[一〇]五色線在。乞你[一一]一条拄杖子。〕夜深同看千巌雪。〔[一二]猶較半月程。従他大地雪漫漫、[一三]填溝塞壑無人会。也只是箇瞎漢、還識得末後句麼。便打。〕

麼。〕同じ条に生るることは共に相知るも、〔是れ何の種族ぞ。彼此に没交渉。君は瀟湘に向い我は秦に向う。〕同じ条に死せざることは還って殊絶す。〔拄杖子は我が手の裏に在り。争か山僧を怪得ん。你が鼻孔、為什麼にか別人の手の裏に在る。〕還って殊絶す。〔還た棒を喫せんと要すや。什麼の摸索する処か有らん。〕黄頭と碧眼と須らく甄別すべし。〔尽大地の人 鋒 を亡い舌を結ぶ。我も也た恁麼なるに、他人は却って恁麼ならず。只だ老胡の知るを許むるも、老胡の会するを許めず。〕南北東西帰去来、〔収れり。脚跟下に猶お五色の線を帯び在。你に一条の拄杖子を乞う。〕夜深けて同に看ん千巌の雪。〔猶お半月程も較えり。従他大地雪漫漫たるとも、溝を塡め壑を塞いで人の会する無し。也た只だ是れ箇の瞎漢、還た末後の句を識得むるや。便ち打つ。〕

＊是　蜀本は「見」。

一 ことば以前が問題だ。 二 ぴたりと言いとめていない。 三 明と暗とが対をなすとは、いかなる時の

ことか。「底」は俗語で「何」と同じ。韻文以外にはあまり用いない。四 ことばをもてあそぶ。五 北と南へ訣別。唐末の鄭谷の詩句。六 遠くかけ離れる。七「黄頭」は釈迦、「碧眼」は達磨。「甄別」は、はっきりと弁別する。八 第四五則の垂示に既出。九 青・黄・赤・白・黒の糸。俗塵の喩え。一〇 夜は暗、雪は明。一一 まだ半月の道のりの差がある。一二 谷間を埋めつくすほどに死人(解らずじまいの人)は無数。

〔評唱〕末後句、為君説、雪竇頌此末後句。他意極有落草相為。頌則煞頌、只頌毛彩些子。若要透見也未在。更敢開大口便道、明暗双双底時節。与你開一綫路、亦与你一句打殺了也、末後更与你注解。

只如招慶、一日問羅山云、巌頭道、恁麼恁麼、不恁麼不恁麼、意旨如何。羅山召云、大師。師応諾。山云、双明亦双暗。慶礼謝而去。三日後又問、前日蒙和尚垂慈、只是看不破。山云、

〔評唱〕「末後の句、君が為に説う」と、雪竇此の末後の句を頌す。他の意極めて落草し相為にする有り。頌することは則ち煞だ頌するも、只だ毛彩の些子を頌するのみ。若し透見せんと要せば也た未在。更に敢て大口を開いて便ち道う、「明暗双双、底の時節ぞ」と。你が与に一綫の路を開き、亦た你が与に一句もて打殺し了り、末後に更に你が与に注解す。

只だ招慶の如きは、一日、羅山に問うて云く、「巌頭道く、『恁麼恁麼、恁麼ならず恁麼ならず』と、意旨如何」。羅山召して云く、「大師」。師、応諾す。山云く、「双明亦た双暗」と。慶、礼謝して去る。三日の後又た問う、「前日和尚の垂慈を蒙るも、只だ是れ

尽情向你道了也。慶云、和尚是把火行。山云、若恁麼、拠大師疑処問将来。慶云、如何是双明亦双暗。山云、同生亦同死。慶当時礼謝而去。

後有僧問招慶、同生亦同死時如何。慶云、合取狗口。僧云、大師収取口喫飯。其僧却来問羅山云、同生不同死時如何。山云、如牛無角。僧云、同生亦同死時如何。山云、如虎戴角。末後句、正是這箇道理。

羅山会下有僧、便用這箇意致問招慶。慶云、彼此皆知。何故。我若東勝身洲道一句、西瞿耶尼洲也知。天上道一句、人間也知。心心相知、眼眼相照。同条生也則猶易見、不同条

看破せず」。山云く、「情を尽して你に道い了れり」。慶云く、「和尚は是れ把火もて行くなり」。山云く、「若し恁麼ならば、大師の疑処に拠って問い将ち来たれ」。慶云く、「如何なるか是れ双明亦た双暗」。山云く、「同生亦た同死」と。慶、当時に礼謝して去る。

後に僧有り、招慶に問う、「同生亦た同死の時如何」。慶云く、「狗の口を合取よ」。僧云く、「大師、口を収取いで飯を喫せよ」と。其の僧却来たりて羅山に問うて云く、「同生不同死の時如何」。山云く、「牛の角無きが如し」。僧云く、「同生亦た同死の時如何」。山云く、「虎の角を戴くが如し」と。末後の句、正に是れ這箇の道理なり。

羅山の会下に僧有り、便ち這箇の意を用て問を招慶に致す。慶云く、「彼も此も皆な知る。何故ぞ。我若し東勝身洲に一句を道わば、西瞿耶尼洲にも也た知る。天上に一句を道わば、人間にも也た知る。心心相知り、眼眼相照す」と。同じ条に生るるは則ち猶お見

死也還殊絶。釈迦・達磨、也摸索不著。南北東西帰去来、有些子好境界。夜深同看千巌雪、且道、是双明双暗、是同条生是同条死。具眼衲僧、試甄別看。

易きも、同じ条に死せざるは也た還って殊絶せり。釈迦・達磨も也た摸索不著。「南北東西帰去来」と、些子の好境界有り。「夜深けて同に看ん千巌の雪」とは、且道、是れ双明か双暗か、是れ同じ条に生るるか是れ同じ条に死するか。具眼の衲僧、試みに甄別し看よ。

一 相手のレベルに合わせる。 二 わずかばかり。 三 「開一線道」(第三九則・本則の評唱)に同じ。 四 招慶院に住した長慶慧稜(八五四―九三二)。 五 羅山道閑。巌頭の法嗣。 六 和尚はタイマツを手に(先頭を)行く人です(夜の道案内人です)。 七 つまらぬことを言うな。 八 四大洲の一つ。須弥山の東方。 九 四大洲の一つ。須弥山の西方。

第五二則　趙州石橋略彴

【本則】挙。僧問趙州[一]、久響[二]趙州石橋、到来只見略彴[三]。〔也有人来捋虎鬚。也是衲僧本分事[四]。〕州云、汝只見略彴、且不見石橋。〔慣得其便。這老漢売身去也[五]。〕僧云、如何是石橋。〔上釣来也。果然。〕州云、渡驢渡馬。〔一網打就[六]。直得尽大地人、無出気処[七]。一死更不再活。〕

一 趙州従諗(七七八—八九七)。 二 かねてから一度お目にかかりたいものと敬慕しておりました。初対面の挨拶の語。「響」は正しくは「嚮」。 三 丸木橋。 四 第四六則・本則の著語に既出。 五 捨て身で打って出た。 六 一網打尽にかたをつけた。 七 気を吐く。

〔評唱〕趙州有石橋*、蓋李膺[一]造也。至今天下有名。略彴者即是独木橋也。

第五二則　趙州の石橋と略彴

【本則】挙す。僧、趙州に問う、「久しく趙州の石橋を響うに、到来すれば只だ略彴を見るのみ」。〔也た人の来たりて虎鬚を捋く有り。也た是れ衲僧の本分事。〕州云く、「汝は只だ略彴のみを見て、且も石橋は見ず」。〔其の便を得るに慣れたり。這の老漢、身を売り去る。〕僧云く、「如何なるか是れ石橋」。〔釣に上り来たれり。果然して。〕州云く、「驢を渡し馬を渡す」。〔一網に打就す。直得に尽大地の人、気を出だす処無し。一たび死すれば更に再びは活きず。〕

〔評唱〕趙州に石橋有り、蓋し李膺造れり。今に至るまで天下に名有り。「略彴」とは即ち是れ独木橋なり。

其僧故意滅他威光、問他道、久響趙州石橋、到来只見略彴。趙州便道、汝只見略彴、且不見石橋。拠他問処、也只是平常説話相似。趙州用去釣他。這僧果然上鉤、随後便問、如何是石橋。州云、渡驢渡馬。不妨言中自有出身処。

趙州不似臨済・徳山行棒行喝、他只以言句殺活。這公案好好看来、只是尋常闘機鋒相似。雖然如是、也不妨難湊泊。

一日与首座看石橋、州乃問首座、是什麼人造。座云、＊＊李膺造。州云、造時向什麼処下手。座無対。州云、尋常説石橋、問著、下手処也不知。

其の僧故意に他の威光を滅じ、他に問うて道く、「久しく趙州の石橋を響うに、到来すれば只だ略彴を見るのみ」と。趙州便ち道う、「汝只だ略彴を見て、且も石橋は見ず」と。他の問処に拠らば、也た只だ是れ平常の説話に相似たり。趙州は用い去きて他を釣る。這の僧果然して鉤に上り、随後て便ち問う、「如何なるか是れ石橋」。州云く、「驢を渡し馬を渡す」と。不妨に言中に自ら出身の処有り。

趙州は臨済・徳山の棒を行じ喝を行ずるに似ず、他は只だ言句を以て殺活す。這の公案好好と看来たれば、只だ是れ尋常の機鋒を闘わすに相似たり。是の如くなりと雖然も、也た不妨に湊泊し難し。

一日、首座と与に石橋を看るに、州乃ち首座に問う、「是れ什麼なる人か造れる」。座云く、「李膺造れり」。州云く、「造る時什麼処よりか手を下す」。座、対無し。州云く、「尋常石橋を説うに、問著るれば手を下す処も也た知らず」。

又一日州掃地次、僧問、和尚是善知識、為什麼有塵。州云、外来底。又問、清浄伽藍、為什麼有塵。州云、又有一点也。

又僧問、如何是道。州云、墻外底。僧云、不問這箇道、問大道。州云、大道透長安。

趙州偏用此機。他到平実安穏処為人、更不傷鋒犯手、自然孤峻、用得此機甚妙。雪竇頌云、

又た一日、州、地を掃く次、僧問う、「和尚は是れ善知識、為什麼にか塵有る」。州云く、「外より来たる底なり」。又た問う、「清浄の伽藍、為什麼にか塵有る」。州云く、「又た一点有り」。

又た僧問う、「如何なるか是れ道」。州云く、「墻の外の底なり」。僧云く、「這箇の道を問わず、大道を問う」。州云く、「大道は長安に透る」と。

趙州偏に此の機を用う。他は平実安穏の処に到って人に為え、更に鋒に傷つき手を犯すということなく、自然に孤峻にして、此の機を用い得て甚だ妙なり。雪竇の頌に云く、

＊趙州～有名(一六字)　蜀本に無し。　＊＊李膺　蜀本は「李春」。

一 後漢の李膺(一一〇—一六九)か。　二 勘どころ・つぼをつかまえにくい。　三 大道は長安に通じる。

四 日常の平穏無事な際に。

【頌】孤危不立道方高、〔須是到這田地始得。言猶在耳。還他本分草料。〕入海還須釣巨鼇。〔坐断要津、

【頌】孤危を立てずして道方に高し、〔須らく這の田地に到って始めて得し。言猶お耳に在り。他に本分の草料を還せ。〕海に入れば還た須ずや巨鼇を釣らん。

不通凡聖。[四]鰕蜆螺蚌不足問。* 大丈夫漢、[五]不可両両三三。〔也有恁麼人曾恁麼来。** 也有恁麼用機関底手脚。〕解云劈箭亦徒労。[七]〔猶較半月程。似則似、是則未是。〕

〔要津を坐断して、凡聖を通ぜず。鰕蜆螺蚌は問うに足らず。大丈夫の漢、両両三三なるべからず。〕笑う堪し同時の灌渓老、〔也た恁麼の人の曾て恁麼にし来たる有り。也た恁麼に機関を用うる底の手脚有り。〕解く「劈箭」と云うも亦た徒労なり。〔猶お半月程も較えり。似たることは則ち似たるも、是なることは則ち未だ是ならず。〕

* 不足問　福本は「不得同途」。 ** 也有〜手脚（一九字）　福本は「也有人会恁麼用機関底、也曾用過来」。

一 孤高を標榜せぬところが趙州の気高いところ。 二 彼に本領を発揮させよ。 三 急所を押さえて凡夫も聖人も受けつけない。独脱無依のありかた。 四 魚の餌にしかならないようなものは問題ではない、釣り上げるべきは巨鼇である。 五 あれこれと摘まみ食いはせぬものだ。 六 臨済の法嗣、灌渓志閑（?—八九五）。 七 飛ぶ矢（のように速い急流だ）。評唱を参照。

【評唱】　孤危不立道方高、雪竇頌趙州尋常為人処、不立玄妙、不立孤危。不似諸方道、打破虚空、撃砕須弥、海底生塵、須弥鼓浪、方称他祖師之

【評唱】「孤危を立てずして道方に高し」と、雪竇は趙州の尋常人に為うる処の、玄妙を立てず、孤危を立たざるを頌す。諸方の「虚空を打破し、須弥を撃砕し、海底に塵を生じ、須弥に浪を鼓して方めて他の祖

道。所以雪竇道、孤危不立道方高。壁立万仞、顕仏法奇特霊験、雖然孤危峭峻、不如不立孤危。但平常自然転轆轆地、不立而自立、不高而自高。機出孤危、方見玄妙、所以雪竇云、入海還須釣巨鼇。看他具眼宗師、等閑垂一語、用一機、不釣鰕蜆螺蚌、直釣巨鼇。也不妨是作家。此一句用顕前面公案。

堪笑同時灌渓老、不見僧問灌渓、久響灌渓、及乎到来、只見箇漚麻池。渓云、汝只見漚麻池、且不見灌渓。僧云、如何是灌渓。渓云、劈箭急。又僧問黄龍、久響黄龍、及乎到来、只見箇赤斑蛇。龍云、子只見赤斑蛇、且不見黄龍。僧云、如何是黄龍。龍

師の道に称う」と道うに似ず。所以に雪竇道く、「孤危を立てずして道方に高し」と。壁立万仞にして、仏法の奇特霊験を顕すは、孤危峭峻なりと雖然も、孤危を立てざるに如かず。但だ平常自然に転轆轆地にして、立てずして自ずから立ち、高くせずして自ずから高し。機、孤危を出でて、方めて玄妙を見る、所以に雪竇云く、「海に入れば還た須ずや巨鼇を釣らん」と。看よ他の具眼の宗師は等閑と一語を垂れ一機を用い、鰕蜆螺蚌を釣ることなく、直に巨鼇を釣るを。也た不妨に是れ作家なり。此の一句用て前面の公案を顕わす。

「笑う堪し同時の灌渓老」とは、見ずや僧、灌渓に問う、「久しく灌渓を響うに、到来するに及ぶや、只だ箇の漚麻池を見るのみ」。渓云く、「汝只だ漚麻池を見て、且も灌渓は見ず」。僧云く、「如何なるか是れ灌渓」。渓云く、「劈箭急なり」と。又た僧、黄龍に問う、「久しく黄龍を響うに、到来するに及ぶや、只だ箇の赤斑蛇を見るのみ」。龍云く、「子只だ赤斑蛇を見て、

云、[四]拖拖地。僧云、忽遇金[五]翅鳥来時如何。龍云、性命難存。僧云、恁麼則遭他食噉去也。龍云、謝子供養。此総是立孤危。是則也是、不免費[六]力、終不如趙州尋常用底。所以雪竇道、解云劈箭亦徒労。只如灌渓・黄龍即且致、趙州云、渡驢渡馬、又作麼生会。試辨看。

且(さて)も黄龍は見ず」。僧云く、「如何なるか是れ黄龍」。龍云く、「拖拖地(たたじ)」。僧云く、「忽(も)し金翅鳥(こんじちょう)の来たるに遇(あ)わん時は如何」。龍云く、「性命(いのち)存し難し」。僧云く、「恁麼(さよう)ならば則ち他(そ)の食噉(くらう)に遭(あ)い去らん」。龍云く、「子(なんじ)が供養を謝す」と。此れ総(すべ)て是れ孤危を立つ。是(ぜ)なることは則ち也(ま)た是なるも、力を費すを免れず、終(つい)に趙州の尋常に用うる底(ところ)には如かず。所以に雪竇道(い)わく、「解く劈箭と云うも亦た徒労なり」と。只だ灌渓・黄龍の如きは即ち且(さ)て致(お)き、趙州の「驢を渡し馬を渡す」と云うは、又た作麼生(いかに)か会(え)せん。試みに辨じ看よ。

一 磨をごろごろ挽く音。自在に転動するさま。 二 麻を柔らかくするために浸しておく池。 三 黄龍慧南(一〇〇二—一〇六九)。問うた僧は鼓山智岳。 四 くねくね、にょろにょろ。 五 迦楼羅(ガルダ)。龍(蛇)を食べるという伝説上の巨鳥。 六 余計な手間をかける。

第五三則　馬大師野鴨子

垂示云、[一]徧界不蔵、[二]全機独露。[三]触途無滞、[四]著著有出身之機。句下無私、[五]頭頭有殺人之意。且道、古人畢竟向什麼処[六]休歇。試挙看。

第五三則　馬大師の野鴨子

垂示に云く、偏界蔵れず、全機独露す。触途に滞る無く、著著に出身の機あり。句下に私無く、頭頭に殺人の意あり。且道、古人は畢竟什麼処に向いてか休歇む。試みに挙し看ん。

[一] 全世界に隠れもなく全身を示現する。『伝灯録』一五・石霜の語。[二] 全てのはたらきが現れ出る。[三] どこへ行ってもさまたげられることなく。[四] 一つ一つの提起に束縛から超出させるはたらきがある。[五] どの一語にも相手を殺してしまう気迫がある。[六] ケリをつける。

【本則】 挙。馬大師[一]与百丈[二]行次、見野鴨子飛過。〔両箇落草漢、草裏輥。驀顧作什麼。〕大師云、是什麼。〔和尚合知。這老漢、鼻孔[三]也不知。〕丈云、野鴨子。〔鼻孔已在別人手裏。只管供款[四]。第二杓悪水更毒。〕大師云、什麼処去也。〔前箭猶軽、後箭

【本則】 挙す。馬大師、百丈と行きし次、野鴨子の飛び過ぐるを見る。〔両箇の落草漢、草の裏を輥る。驀に顧みて什麼をか作す。〕大師云く、「是れ什麼ぞ」。〔和尚合に知るべし。這の老漢、鼻孔も也た知らず。〕丈云く、「野鴨子」。〔鼻孔は已に別人の手の裏に在り。只管款を供す。第二杓の悪水更に毒なり。〕大師云く、「什麼処に去くや」。〔前箭は猶お軽きも後箭は深し。

深。第二回啗啄[五]、也合自知。〕丈云、飛過去也。〔只管随他後転。当面蹉過。〕大師遂扭百丈鼻頭。〔父母所生鼻孔、却在別人手裏。[六]捩転鎗頭、裂転鼻孔来也。〕丈作[七]忍痛声。〔只在這裏。還喚作野鴨子得麼。還識痛痒麼。〕大師云、何曾飛去。〔莫瞞人好。這老漢元来只在鬼窟裏作活計。〕

第二回の啗啄、也た合に自知すべし。〕丈云く、「飛び過ぎ去れり」。〔只管他の後に随って転ず。当面に蹉過えり。〕大師、遂に百丈の鼻頭を扭る。〔父母所生の鼻孔、却って別人の手裏に在り。鎗頭を捩転し、鼻孔を裂転し来たれり。〕丈、忍痛の声を作す。〔只だ這裏に在り。還た喚んで野鴨子と作して得しきや。還た痛痒と識るや。〕大師云く、「何ぞ曾て飛び去らん」。〔人を瞞ること莫くんば好し。這の老漢元来只だ鬼窟裏に在って活計を作すのみ。〕

一 馬祖道一(七〇九—七八八)。 二 百丈懐海(七四九—八一四)。 三 自己の本来面目に気づいていない。 四 ありていを白状する。 五 鳥や魚がえさをつつくこと。誘いかけの問い。 六 ほこ先を転じて、鼻づらをねじまげに来た。 七 痛みをこらえきれずに発する声。

〔評唱〕正眼観来、却是百丈具正因[一]、馬大師無風起浪。諸人要与仏祖為師、[二]参取百丈。[三]要自救不了、参取馬祖大師。看他古人二六時中、未嘗不在箇裏。百丈廾歳[四]離塵、[五]三学該練、属[六]大

〔評唱〕正眼もて観来たれば、却って是れ百丈は正因を具し、馬大師は風無きに浪を起す。諸人仏祖に与して師と為らんと要せば、百丈に参取せよ。自救不了ならんと要せば、馬祖大師に参取せよ。看よ他の古人は二六時中、未だ嘗て箇裏に在らずんばあらず。百丈は

寂闌化南昌、乃傾心依附。二十年為侍者、及至再参、於喝下方始大悟。而今有者道、本無悟処、作箇悟門、建立此事。若恁麼見解、如獅子身中虫自食獅子肉。不見古人道、源不深者流不長、智不大者見不遠。若用作建立会、仏法豈到如今。

一 本来具有の仏性。二 入門して教えを受ける。「取」は動作を意図的かつ積極的に行うという気分を示す接尾語。三 馬大師に教えを受けると、自分すら救いおおせない。四 幼年。五 修行者が修めるべき三つの修行項目(戒学・定学・慧学)をすべて修める。六 馬祖の諡号。七 未詳。なお、蘇軾の儒者可与守成論に「三代聖人取守一道、源深而流長也」と。

看他馬大師与百丈行次、見野鴨子飛過。大師豈不知是野鴨子。為什麼却恁麼問。且道、他意落在什麼処。百丈只管随他後走、馬祖遂扭他鼻孔。

丱歳(かんさい)にして塵(せぞく)を離れて、三学該練し、大寂の、化(け)を南昌に闡(ひら)くに属(あた)り、乃ち心を傾けて依附(つきしたが)う。二十年侍者と為(な)り、再参するに至るに及んで、喝の下に方始(はじ)めて大悟す。而今(いま)有る者は道(い)う、「本(もと)と悟処(さとり)無し、箇(こ)の悟門を作って、此の事を建立(こんりゅう)す」と。若し恁麼(さよう)の見解(けんげ)ならば、獅子身中の虫の自(みずか)ら獅子の肉を食(くら)うが如し。見ずや古人道(いわ)く、「源深からざる者は流れ長からず、智大いならざる者は見(けん)遠からず」と。若し用(もっ)て建立(こんりゅう)の会(え)を作(な)さば、仏法豈に如今(いま)に到らんや。

看よ他(か)の馬大師、百丈と行きし次(とき)、野鴨子の飛び過ぐるを見る。大師豈に是れ野鴨子と知らざらんや。為什麼(なにゆえ)にか却って恁麼(さよう)に問う。且(さて)道、他(かれ)の意什麼処(いずこ)にか落在す。百丈は只管(ひたすら)他(かれ)の後に随って走(ゆ)き、馬祖遂に

丈作忍痛声、馬祖云、何曾飛去。百丈便省。而今有底錯会、纔問著便作忍痛声。且喜跳不出。宗師家為人、須為教徹。見他不会、不免傷鋒犯手、只要教他明此事。所以道、会則途中受用、不会則世諦流布。馬祖当時若不扭住、只成世諦流布。也須是逢境遇縁、宛転教帰自己、十二時中、無空欠処。謂之性地明白。若只依草附木、認箇驢前馬後、有何用処。看他馬祖・百丈恁麼用。雖似昭昭霊霊、却不住在昭昭霊霊処。百丈作忍痛声、若恁麼見去、偏界不蔵、頭頭成現。所以道、一処透、千処万処一時透。

他の鼻孔を扭る。丈、忍痛の声を作すや、馬祖云く、「何ぞ曾て飛び去らん」と。百丈便ち省る。而今有る底は錯り会して、問著るるや纔や、便ち忍痛の声を作す。且喜たくも跳び出せず。宗師家の人に為うるは、須らく為えて徹せしむべし。他の会せざるを見ては、鋒に傷つき手を犯すことを免れざるも、只だ他をして此の事を明めしめんと要す。所以に道く、「会すれば則ち途中受用、会せざれば則ち世諦流布」と。馬祖当時若し扭住げずんば、只だ世諦流布と成らん。也た須是らく境に逢い縁に遇い、宛転して自己に帰せしむれば、十二時中、空欠の処無し。之を性地明白と謂う。只だ依草附木して箇の驢前馬後を認むるが若きは、何の用処か有らん。看よ他の馬祖・百丈の恁麼に用くを。昭昭霊霊たるが似しと雖も、却って昭昭霊霊の処に住在らず。百丈忍痛の声を作すを若し恁麼に見去らば、偏界蔵れず、頭頭成現せん。所以に道う、「一処透れば千処万処一時に透る」と。

一 第八則の垂示に既出。 二「住」は動詞の後に付き、動作の固定を示す。 三 いかなる状況にあっても。 四 自己の問題へと回帰させる。 五 空虚な時が無い。 六 本性がはっきりと現れている。 七 主人の後について回るだけの従者。 八 輝きわたる霊妙さ。本来の主人公の躍動するさま。 九 一つの関門を突破すると、あらゆる関門をいっぺんに突破することになる。

馬祖次日[一]陞堂。衆纔集、百丈出[二]巻却[三]拝蓆。馬祖便下座、帰方丈次、問百丈、我適来上堂、未曾説法。你為什麼便巻却蓆。丈云、昨日被和尚扭得鼻孔痛。祖云、你昨日向甚処留心。丈云、今日鼻頭又不痛也。祖云、你深知[四]今日事。丈乃[五]作礼、却帰侍者寮哭。[六]同事侍者問云、你哭作什麼。丈云、你去問取和尚。侍者遂去問馬祖。祖云、你去問取他看。侍者却帰寮問百丈。丈却呵呵大笑。侍者云、你適来哭、[七]而今為什麼却笑。丈云、我適来哭、如今却笑。看他悟後、[八]阿轆轆

馬祖、次の日陞堂(しんどう)す。衆、集まるや纔(いな)や百丈出でて拝蓆(はいせき)を巻却(まきあ)ぐ。馬祖便ち下座し、方丈に帰る次(おり)、百丈に問う、「我適来(いましがた)上堂し、未だ曾て説法せず。你為什麼(なにゆえ)にか、便ち蓆(せき)を巻却(まきあ)ぐ」。丈云く、「昨日和尚に鼻孔を扭得(ねじあげ)られて痛し」。祖云く、「你昨日は甚処(いずこ)にか心を留めし」。丈云く、「今日は鼻頭又た痛からず」。祖云く、「你深く今日の事を知れり」と。丈乃ち作礼(さらい)し、侍者寮に却帰(もど)りて哭す。同事の侍者問うて云く、「你哭して什麼(なに)か作(せ)ん」。丈云く、「你去(ゆ)きて和尚に問取(と)え」と。侍者遂に去きて馬祖に問う。祖云く、「你去きて他(かれ)に問取(と)うて看よ」と。侍者、寮に却帰(もど)りて百丈に問う。丈却って呵呵大笑す。侍者云く、「你適来(さきほど)は哭し、而今(いま)は為什麼にか却って笑う」。丈云く、「我適

地、羅籠[九]不住、自然玲瓏[一〇]。雪竇頌云、

来は哭し、如今は却って笑う」と。看よ他悟りし後は、阿轆轆地にして羅籠し住れず、自然に玲瓏たり。雪竇の頌に云く、

一 法堂の高座に上る。二 巻いて片づける。三 礼拝のときに用いる敷物。蓆。四「今日」は開悟のときをいう。五 礼拝する。六 職務を同じくする者。七「如今」に同じ。八 ゴロリゴロリと、（石臼を廻すように）あらゆるものを自在にこなしていくさま。九 制御しようとしても、ままならない。一〇 すがすがしく透き通っている。

【頌】野鴨子、〔成群作隊。又有一隻。〕知[一]何許。〔用作什麼。如麻似粟。〕馬[二]祖見来相共語。〔打葛藤、有什麼了期。説箇什麼。*独有馬祖識箇俊[三]底。〕話[四]尽山雲海月情、〔東[五]家杓柄長、西家杓柄短。知[六]他打葛藤多少。〕依前不会還飛去。〔囮[七]。莫**道他不会言、飛過什麼処去。〕欲飛去、〔鼻孔在別人手裏。已是与他下注脚了也。〕却把住。〔老婆心切。更道什麼。〕道[八]

【頌】野鴨子、〔群を成し隊を作す。又た一隻有り。〕何許なるを知らん。〔用いて什麼か作ん。麻の如く粟の似し。〕馬祖見来たりて相共に語る。〔葛藤を打して什麼の了期か有らん。箇の什麼をか説う。独り馬祖のみ有って箇の俊底を識る。〕山雲海月の情を話り尽すも、〔東家は杓柄長く、西家は杓柄短し。葛藤を打すること多少なるを知他らんや。〕依前として会せず還た飛び去る。〔囮。他の言を会せざるは莫道、什麼処にか飛び過ぎ去る。〕飛び去らんと欲して、〔鼻孔は別人の手の裏に在り。已是に他の与に注脚を下し了れ

道。〔＊＊＊什麼道。不可也教山僧道。不可作野鴨子叫。蒼天蒼天。脚跟下好与三十棒。不知向什麼処去。〕

り。〕却って把住る。〔老婆心切。更に什麼をか道わん。〕道え道え。〔什麼の道えぞや。也た山僧をして道わしむべからず。野鴨子の叫を作すべからず。蒼天、蒼天。脚跟下好し三十棒を与うるに。知らず什麼処に向ってか去く。〕

＊独有〜俊底　福本は「独有一人不識名底」。＊＊莫道〜会言　福本は「莫道不会」。＊＊＊什麼道　福本に無し。

一 どこへ行ったかわからない。ただし、圜悟は「どれほどかわからない」と解する。二 馬祖はそれを見て語りかけた。三 すぐれた人物。百丈を指す。四 山の雲や海の月のさまを語り尽したものの。五 両者の風格の隔絶をいう。六 馬祖はどれほど言句を弄したことか。「知他〜」は反語的な疑問表現で、「他」は意味の無い助詞。七 気合いを入れる掛け声。八 頌の句ではなく、余勢を駆ったコメント。

〔評唱〕雪竇劈頭便頌道、野鴨子、知何許。且道、有多少。馬祖見来相共語、此頌馬祖問百丈云、是什麼、丈云、野鴨子。語尽山雲海月情、頌再問百丈、什麼処去。馬大師為他意旨、＊自然脱体。百丈依前不会、却道、

〔評唱〕 雪竇は劈頭に便ち頌して道く、「野鴨子、何許なるを知らん」と。且道、多少か有る。「馬祖見来たりて相共に語る」と、此れは馬祖、百丈に問うて云く、「是れ什麼ぞ」、丈云く、「野鴨子」というを頌す。「山雲海月の情を話り尽す」とは、再び百丈に問う、「什麼処に去くや」というを頌す。馬大師の他に為え

飛過去也。両重蹉過。欲飛去、却把住、雪竇拠款結案。又云、道道、此是雪竇転身処。且道、作麼生道。若作忍痛声則錯。若不作忍痛声、又作麼生会。雪竇雖然頌得甚妙、争奈也跳不出。

んとする意旨、自然に脱体なり。百丈は依前として会せず、却って道う、「飛び過ぎ去れり」と。両重蹉過えり。「飛び去らんと欲して、却って把住る」とは、雪竇 款に拠って案を結す。又た云く、「道え道え」と、此れは是れ雪竇転身の処なり。且道、作麼生か道わん。若し忍痛の声を作さば則ち錯れり。若し忍痛の声を作さずんば、又た作麼生か会せん。雪竇は頌し得て甚だ妙なりと雖然も、争奈せん也た跳け出せず。

＊自然脱体　福本は「自然脱体現成」。

一 そっくりそのまま露呈している。（福本に従い「現成」を補う。）　二 一段上の次元への脱皮をうながす。

第五四則　雲門近離甚処

垂示云、透出生死、撥転機関。等閑截鉄斬釘、随処蓋天蓋地。且道、是什麼人行履処。試挙看。

【本則】挙。雲門問僧、近離甚処。〔不可也道西禅。探竿影草。不可道東西南北。〕僧云、西禅。〔果然可煞実頭。当時好与本分草料。〕門云、西禅近日有何言句。〔欲挙恐驚和尚。深辨来風。也似和尚相似寐語。〕僧展両手。〔敗闕了也。勾賊破家。不妨令人疑著。〕門打一掌。〔拠令而行。好打。快便難逢。〕僧云、某甲話在。

第五四則　雲門の近ごろ甚処を離れしや

垂示に云く、生死を透出し、機関を撥転す。等閑に鉄を截り釘を斬り、随処に天を蓋い地を蓋う。且道、是れ什麼なる人の行履の処ぞ。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。雲門、僧に問う、「近ごろ甚処を離れしや」。〔也た西禅と道うべからず。探竿影草。東西南北と道うべからず。〕僧云く、「西禅」。〔果然して可煞だ実頭なり。当時に本分の草料を与うるに好し。〕門云く、「西禅には近日何の言句か有る」。〔挙せんと欲するも恐るらくは和尚を驚かさん。深く来風を辨ず。也た和尚の似くに相似て寐語いう。〕僧、両手を展ぶ。〔敗闕し了れり。賊を勾いて家を破らる。不妨に人をして疑著わしむ。〕門、打つこと一掌す。〔令に拠りて

一 秘められたはたらきを激発する。　二 あらゆるところで天地を蓋う力量を示す。　三 実践し体現する。

〔**你待要翻款那。却似有攙旗奪鼓底手脚。〕門却展両手。〔嶮[12]。駕[13]与青龍不解騎。〕僧無語。〔可惜。〕門便打。〔不可放過。此棒合是雲門喫。何故。当断不断、返招其乱。闍黎合喫多少。放過一著。若不放過、合作麼生。〕

行う。好し打て。快便逢い難し。〕僧云く、「某甲話在り」。〔你 款を翻さんと待要するや。却って旗を攙り鼓を奪う底の手脚有るが似し。〕門、却って両手を展ぶ。〔嶮うし。青龍に駕与するも騎る解わず。〕僧、語無し。〔惜しむ可し。〕門、便ち打つ。〔放過すべからず。此の棒合に是れ雲門喫すべし。何故ぞ。当に断ずべくして断ぜざれば、返って其の乱を招く。闍黎は合た多少を喫すや。一著を放過す。若し放過さずんば合た作麼生。〕

＊也似～寐語　福本は「和尚寐語模様」。　＊＊你待～款那　福本は「你要翻款」。

一 雲門文偃(八六四—九四九)。 二 蘇州西禅和尚(の道場)。南泉普願の法嗣。 三 誘導尋問をしかけてきたぞ。 四 その人が本来人として生きて行くための営養源。 五 雲門の問い口を見極めた。 六 西禅も和尚と同じく寝言を言っている。 七 両の手のひらを開いて差し出す。 八 泥棒をまねき寄せて家財ごっそりやられる。 九 平手打ちを一発くらわす。 一〇 快便(速い便船か?)にはなかなかめぐり会えない。第八一則・本則の著語に「下坡不走、快便難逢」と。好機はとらえにくい、今がその時だ。 一一 話がまだ残っている。問題は片付いてはいない。 一二「険」に通ず。すごい、すさまじい。 一三 青龍(天の東方をつかさどる神獣)に車をつけることはできるが、青龍そのものを乗りこなすことはできない。第二〇則・本則の著語に既出。

【評唱】雲門問這僧、近離甚処。僧云、西禅。這箇是当面話[一]、如閃電相似。門云、近日有何言句。也只是平常説話。這僧也不妨是箇作家、却倒去験雲門、便展両手。若是尋常人、遭此一験、便見手忙脚乱。他雲門有石火電光之機、便打一掌。僧云、打即故是、争奈某甲話在。這僧有転身処、所以雲門放開[二]、却展両手。其僧無語、門便打。看他雲門、自是作家。行一歩、知一歩落処。会瞻前亦解顧後、不失蹤由。這僧只解瞻前、不能顧後。頌云、

【評唱】雲門這の僧に問う、「近ごろ甚処を離れしや」。僧云く、「西禅」と。這箇は是れ当面の話にして、閃電の如くに相似たり。門云く、「近日何の言句か有る」と。也た只だ是れ平常の説話なり。這の僧也た不妨に是れ箇の作家なり、却って倒去に雲門を験して、便ち両手を展ぶ。若是尋常の人ならば、此の一験に遭うや、便ち手忙しく脚乱るるを見ん。他の雲門は石火電光の機有れば、便ち打つこと一掌す。僧云く、「打つことは即ち故より是なるも、争奈せん某甲に話在り」。這の僧転身の処有り、所以に雲門放開し、却って両手を展ぶ。其の僧語無く、門便ち打つ。看よ、他の雲門は自是より作家なり。一歩行けば一歩の落処を知る。会く前を瞻て亦た解く後ろを顧み、蹤由を失らず。這の僧只だ解く前を瞻るのみにして、後ろを顧みること能わず。頌に云く、

一　まっこうから問題の核心を突いた応酬。　二　やりたいようにやらせる。

【頌】虎頭虎尾一時収、[一]〔殺人刀、活人剣。[二]須是這僧始得。千兵易得、一将難求。〕凜凜威風四百州。[三]〔坐断天下人舌頭。蓋天蓋地。〕却問不知何太嶮。〔不可盲枷瞎棒。[四]雪竇元来未知在。闍黎相次著也。[五]〕師云、放過一著。〔若不放過、又作麼生。尽天下人一時落節。[六]撃禅床一下。〕

【頌】虎頭虎尾一時に収む、〔殺人刀、活人剣。須是らく這の僧にして始めて得し。千兵は得易きも、一将は求め難し。〕凜凜たる威風四百州。〔天下の人の舌頭を坐断す。天を蓋い地を蓋う。〕却って問う、知らず何ぞ太だ嶮なる。〔盲枷瞎棒すべからず。雪竇元来未だ知らざる在。闍黎相次に著れり。〕師云く、「一著を放過す」と。〔若し放過さずんば又た作麼生。尽天下の人一時に落節す。禅床を撃つこと一下す。〕

一 虎の頭も尾も手中にする。大力量を発揮すること。 二 師家が学人を指導する際の活殺自在の手さばき。 三 すさまじい威風が天下を圧倒する。 四 やみくもに打ってはだめだ。 五 お前さん(雪竇)が打たれる番だ。 六 損をする。へまをやらかす。

〔評唱〕雪竇頌得此話極易会、大意只頌雲門機鋒。所以道、虎頭虎尾一時収。古人云、拠虎頭、収虎尾、第一句下明宗旨。雪竇只拠款結案、愛雲門会拠虎頭、又能収虎尾。僧展両手、門便打、是拠虎頭。雲門展両手、

〔評唱〕雪竇此の話を頌し得て極めて会し易し、大意は只だ雲門の機鋒を頌す。所以に道く、「虎頭虎尾一時に収む」と。古人云く、「虎頭に拠って虎尾を収め、第一句下に宗旨を明らむ」と。雪竇只だ款に拠って案を結すは、雲門の会く虎頭に拠り、又た能く虎尾を収むるを愛づればなり。僧両手を展べ、門便ち打つ

僧無語、門又打、是収虎尾。頭尾斉収、眼似流星、自然如撃石火、似閃電光。直得凜凜威風四百州。直得*尽大地世界、風颯颯地。却問不知何太嶮、不妨有嶮処。雪竇云、放過一著。且道、如今不放過時、又作麼生。尽大地人、総[二]須喫棒。如今禅和子、総道等他展手時、也還他本分草料。似則也似、是則未是。[三]雲門不可只恁麼教你休、也須別有事在。

は、是れ虎頭に拠るなり。雲門両手を展べ、僧語無く、門又た打つは、是れ虎尾を収むるなり。頭尾斉しく収めて、眼は流星に似たり、自然に撃石火の如く、閃電光の似し。直得に凜凜たる威風四百州。直得は尽大地世界に風颯颯地ならん。「却って問う、知らず何ぞ太だ嶮なる」とは、不妨に嶮処有るなり。雪竇云く、「一著を放過む」と。且道、如今放過めざる時、又た作麼生。尽大地の人、総須らく棒を喫すべし。如今の禅和子は総な道う、「他の手を展ぶる時を等って、也た他に本分の草料を還さん」と。似たることは則ち也た似たるも、是なることは則ち未だ是ならず。雲門は只だ恁麼に你をして休せしむるを可とせず、也た須ず別に事の在る有り。

＊直得　福本は「説甚四百州」。

一 羅山道閑。 二「総」は強意の接頭語。きっと〜しなければならない。 三 雲門はそんなふうにけりをつけてしまうことを許さない。きっと格別の何かがある。

第五五則　道吾漸源弔孝

垂示云、穏密全真[一]、当頭取証[二]、渉流転物[三]、直下承当[四]。向撃石火閃電光中、坐断誵訛[五]、於拠虎頭収虎尾処、壁立千仞、則且置。放一線道[六]、還有為人処也無。試挙看。

一 奥深く隠れ込みながら真実をまるごとあらわにする。二 即座に証悟する。三 万物流転の中に分け入りながら、物を自在にあやつってゆく。四 そのまま引き受けて己れの事とする。五 いりくんで難解なところをすぱりと裁断する。六 さりげないヒントを与える。

【本則】挙。道吾与漸源[一]、至一家弔慰[二]。源拍棺云、生邪、死邪。〔道什麼。好不惺惺[三]。這漢猶在両頭[四]。〕吾云、生也不道、死也不道。〔龍吟霧起、虎嘯風生[五]。買帽相頭[六]、老婆心切。〕源云、為什麼不道。〔蹉過了也。

第五五則　道吾、漸源と弔孝す

垂示に云く、穏密全真、当頭に取証り、渉流転物、直下と承当す。撃石火閃電光中に向いて、誵訛を坐断し、虎頭に拠り虎尾を収むる処に於て、壁立千仞なるは則ち且て置く。一線の道を放って、還た為人の処有り也無。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。道吾、漸源と一家に至って弔慰す。源、棺を拍って云く、「生か死か」。〔什麼を道うぞ。好だ惺惺ならず。這の漢猶お両頭に在り。〕吾云く、「生とも道わじ、死とも道わじ」。〔龍吟りて霧起り、虎嘯えて風生ず。帽を買うに頭を相る、老婆心切。〕源云く、「為什麼にか道わざる」。〔蹉過い了れり。果然して錯

果然錯会。〕吾云、不道不道。〔悪水驀頭澆。前箭猶軽、後箭深。〕回至中路、〔太惺惺。〕源云、和尚快与某甲道。若不道、打和尚去也。〔却較些子。罕逢穿耳客、多遇刻舟人。似這般不唧嚠漢、入地獄如箭。〕吾云、打即任打、道即不道。〔再三須重事。就身打劫。這老漢満身泥水。初心不改。〕源便打。〔好打。且道、打他作什麼。屈棒元来有人喫在。〕

後道吾遷化。源到石霜、挙似前話。〔知而故犯。不知是不是、是則也大奇。〕霜云、生也不道、死也不道。〔可煞新鮮。這般茶飯却元来有人喫。〕源云、為什麼不道。〔語雖一般、

って会す。〕吾云く、「道わじ、道わじ」。〔悪水驀頭に澆ぐ。前の箭は猶お軽きも後の箭は深し。〕回りて中路に至り、〔太だ惺惺。〕源云く、「和尚快かに某甲が与に道え。若し道わずんば、和尚を打ち去らん」。〔却って些子く較えり。穿耳の客に逢うことは罕にして、刻舟の人に遇うことは多し。這般る不唧嚠漢の似きは、地獄に入ること箭の如し。〕吾云く、「打つことは即ち打つに任すも、道うことは即ち道わじ」。〔再三するは須ずや事を重んずればなり。身に就いて打劫す。這の老漢満身泥水。初心改めず。〕源、便ち打つ。〔好し打て。且道、他を打って什麼か作ん。屈棒元来と人の喫すること有る在。〕

後に道吾遷化す。源、石霜に到って、前話を挙似す。〔知りて故さらに犯す。知らず是か不是か、是ならば則ち也た大いに奇なり。〕霜云く、「生とも道わじ、死とも道わじ」。〔可煞だ新鮮。這般る茶飯却って元来と人の喫すること有り。〕源云く、「為什麼にか道わざ

**意無両種。且道、与前来問、是同是別。〕霜云、不道不道。〔[六]天上天下。[七]曹渓波浪如相似、無限平人被陸沈。〕源於言下有省。〔瞎漢。且莫瞞山僧好。〕源一日将鍬子於法堂上、従東過西、従西過東。〔也是死中得活。好与先師出気。莫問他。且看這漢一場懡㦬。〕霜云、作什麼。〔[八]随後婁藪也。〕源云、覓先師霊骨。〔[九]喪車背後抛薬袋。[一〇]悔不慎当初。你道什麼。〕霜云、洪波浩渺、白浪滔天、覓什麼先師霊骨。〔也須還他作家始得。成群作隊作什麼。〕雪竇著語云、[一一]蒼天蒼天。〔太遅生。賊過後張弓。好与一坑埋却。〕源云、正好著[一二]力。〔且道、落在什麼処。先師曾向你道什[一三]麼。這漢従頭到尾、直至如今、出身不得。〕

る」。〔語は一般なりと雖も意は両種無し。且道、前来の問と是れ同じか是れ別か。〕霜云く、「道わじ、道わじ」。〔天上天下。曹渓の波浪如し相似たらば、限り無き平人陸沈せられん。〕源、言下に省有り。〔瞎漢。且は山僧を瞞すこと莫くんば好し。〕源、一日鍬子を将って法堂上を東より西に過り、西より東に過る。〔也た是れ死中に活を得たり。好し先師の与に気を出すに。他に問うこと莫れ。且は這の漢一場の懡㦬するを看よ。〕霜云く、「什麼をか作す」。〔随後に婁藪す。〕源云く、「先師の霊骨を覓む」。〔喪車の背後に薬袋を抛つ。当初を慎しまざりしことを悔ゆ。你什麼を道うぞ。〕霜云く、「洪波浩渺、白浪滔天、什麼の先師の霊骨をか覓めん」。〔也た須らく他の作家に還して始めて得し。群を成し隊を作して什麼か作ん。〕雪竇著語して云く、「蒼天、蒼天」。〔太だ遅し。賊過ぎし後に弓を張る。好し与に一坑に埋却せん。〕源云く、「正に好し、力を著くるに」。〔且道、什麼処にか落在ける。先

二四 太原孚云、先師霊骨猶在。〔大衆見麼。閃電相似。是什麼破草鞋。二五 猶較些子。〕

師曾て伱に向って什麼をか道いし。這の漢頭より尾に到り、直に如今に至るまで出身することを得ず。」太原の孚云く、「先師の霊骨、猶お在り」。〔大衆見るや。閃電に相似たり。是れ什麼たる破草鞋ぞ。猶お些子く較えり。〕

＊須重事　福本は「相重」。　＊＊意無両種　福本は「意無多種」。

一 道吾円智(七六九—八三五)。二 漸源仲興。のちに道吾の法嗣となる。三 まったく正気でない。「好不」は強い否定。四 まだ生と死との両面から離れられない。五 龍が唸ると霧が起り、虎が吼えると風が生じる。六 相手にふさわしい対応をする。七 非常に冴えている。八 智慧者をいう。九 舟から川に剣を落とし、舟べりを刻んでめじるしとした愚者のこと。一〇 二度三度と「不道」と言っているのは、それが重大な事だから。一一 自分自身を丸裸にする。一二 無実の罪で罰棒を打たれる奴がいるとは。第七五則・本則にも。一三 石霜慶諸(八〇七—八八八)。道吾の法嗣。一四 悪いと知りながらわざとやる。一五 こんなありふれた手でも食らう奴がいるとは。一六 どこもかしこも。世界あまねく。一七 第九三則・頌の句。第二〇則・本則の著語に既出。一八 すぐさまけちくさい詮索を始めおった。一九 手おくれ。二〇 後悔先に立たず。二一 嘆息をあらわす感嘆詞。やれ悲しや。二二 全力を尽くす。二三 出離できない。二四 雪峰義存(八二二—九〇八)の法嗣。二五 枯れ切った修行者。

【評唱】道吾与漸源、至一家弔慰。源拍棺木云、生邪、死邪。吾曰、生

【評唱】道吾と漸源と、一家に至って弔慰す。源、棺木を拍って云く、「生か死か」。吾曰く、「生とも道わ

也不道。死也不道。若向句下便入得、言下便知帰、只這便是透脱生死底関鍵。其或未然、往往当頭蹉過。看他古人、行住坐臥、不妨以此事為念。纔至人家弔慰、漸源便拍棺問道吾云、生邪、死邪。道吾不移易一糸毫、対他道、生也不道、死也不道。漸源当面蹉過、逐他語句走、更云、為什麼不道。吾云、不道不道。吾可謂赤心片片、将錯就錯。源猶自不惺惺、回至中路、又云、和尚快与某甲道、若不道、打和尚去也。這漢識什麼好悪。所謂好心不得好報。道吾依旧老婆心切、更向他道、打即任打、道即不道。源便打。雖然如是、却是他贏得一籌。道吾恁麼血滴滴地為他、漸源得恁麼不瞥地。道吾既被他打、遂向漸源云、

じ、死とも道わじ」と。若し句下に便ち入得し、言下に便ち帰を知らば、只だ這れ便ち是れ生死を透脱する底の関鍵なり。其れ或し未だ然らずんば、往往、当頭に蹉過わん。看よ他の古人、行住坐臥、不妨に此の事を以て念と為す。人家に至り弔慰するや纔や、漸源便ち棺を拍って道吾に問うて云く、「生か死か」と。道吾は一糸毫も移易ず、他に対して道う、「生とも道わじ、死とも道わじ」と。漸源当面にしながら蹉過いて、他の語句を逐って走き、更に云く、「為什麼にか道わざる」。吾云く、「道わじ道わじ」と。吾は赤心片片、錯を将て錯を就すと謂うべし。源は猶自惺惺ならず、回りて中路に至り、又た云く、「和尚快かに某甲が与に道え、若し道わずんば和尚を打ち去らん」と。這の漢什麼の好悪をか識らん。所謂好心、好報を得ずなり。道吾は依旧に老婆心切にして更に他に道う、「打つことは即ち打つに任すも、道うことは即ち道わじ」と。源、便ち打つ。是の如くなりと雖然も、却って是れ他

汝且去。恐院中[7]知事探得与你作禍。密遣漸源出去。道吾[8]忒煞傷慈。源後来至一小院、聞[9]行者誦観音経云、応以比丘身得度者、即現比丘身而為説法、忽然大悟云、我当時錯怪先師。[10]争知此事不在言句上。[11]古人道、没量大人、被語脈裏転却。有底情解道、道吾云不道不道、便是道了也。喚作[12]打背翻筋斗、教人摸索不著。若恁麼会、作麼生得平穏去。若脚[14]踏実地、不隔一糸毫。不見[13]七賢女、遊屍陁林、遂指屍問云、屍在這裏、人在什麼処。[15]大姉云、[16]作麼作麼。[17]一衆斉証無生法忍。且道、有幾箇。千箇万箇、只是一箇。

は一籌を贏ち得たるのみ。道吾恁麼に血滴滴地に他の為にするも、漸源は得恁麼瞥地ならず。道吾既に他に打たれ、遂に漸源に云く、「汝且は去れ、恐らくは院中の知事、探得けて你が与に禍を作さん」と。密に漸源をして出で去らしむ。道吾忒煞だ慈に傷めり。源、後来に一小院に至り、行者の『観音経』を誦し「応に比丘の身を以て度うことを得べき者には、即ち比丘の身を現して為に法を説くなり」と云うを聞いて、忽然と大悟して云く、「我、当時錯って先師を怪しむ。争か知らん此の事は言句の上に在らざることを」と。古人道く、「没量の大人も、語脈の裏に転却さる」と。有る底は情解して道う、「道吾の『道わじ道わじ』と云うは便ち是れ道い了れり」と。喚んで背翻筋斗を打して、人をして摸索不著らしむと作す。若し恁麼に会せば、作麼生か平穏ことを得去らん。若し脚実地を踏まば、一糸毫も隔てず。見ずや七賢女、屍陁林に遊び、遂に屍を指して問うて云く、「屍は這裏に在り、

人は什麼処にか在る」。大姉云く、「作麼、作麼」と。一衆斉しく無生法忍を証す。且道、幾箇か有る。千箇万箇に只だ是れ一箇のみ。

一 悟入する。二 まごころがこまごまと行き届く。三 情けが仇。四 (漸源が)勝ったようだが、得たものはほとんどない。「籌」は勝負の点数をかぞえる竹の棒。五 血をしたたらせて。六 よくもこんなにピンとこずにいられたものだ。七 寺院の庶務をつかさどる役。八 あまりにも慈悲深い。九 得度せず寺院の用務をする者。一〇 禅の極則。一一 雲門文偃(八六四—九四九)。語は第二九則・本則の著語に既出。一二 後方にとんぼ返りをする。一三『七賢女経』にもとづく。一四 王舎城のそばにあった墓地。寒林。一五 七賢女のうちの先達。一六 それがどうしたというのだ。一七 一切は空であり、生滅変化を超えているという道理を悟った境地。「無生忍」(第三八則・本則の評唱)とも。

漸源後到石霜、挙前話。石霜依前云、生也不道、死也不道。源云、為什麼不道。霜云、不道不道。他便悟去。一日将鍬子於法堂上、従東過西、従西過東。意欲呈己見解。霜果問云、作什麼。源云、覓先師霊骨。霜便截断他脚跟云、我這裏、洪波浩渺、白

漸源、後に石霜に到って前話を挙す。石霜依前として云く、「生とも道わじ、死とも道わじ」。源云く、「為什麼にか道わざる」。霜云く、「道わじ道わじ」と。他便ち悟り去る。一日、鍬子を将て法堂上を東より西に過り、西より東に過る。意己が見解を呈せんと欲す。霜、果して問うて云く、「什麼をか作す」。源云く、「先師の霊骨を覓む」。霜便ち他の脚跟を截断して云く、

浪滔天、覓什麼先師霊骨。他既是覓先師霊骨、石霜為什麼却恁麼道。到這裏、若於生也不道、死也不道処、言下薦得、方知自始至終、全機受用。你若作道理、擬議尋思、直是難見。漸源云、正好著力。看他悟後、道得自然奇特。道吾一片頂骨如金色、撃時作銅声。雪竇著語云、蒼天蒼天、其意落在両辺。太原孚云、先師霊骨猶在、自然道得穏当。這一落索、一時拈向一辺。且道、作麼生是省要処、作麼生是著力処。不見道、一処透、千処万処一時透。若向不道不道処透得去、便乃坐断天下人舌頭。若透不得、也須是自参自悟。不可容易過日、可惜許時光。雪竇頌云、

「我が這裏は洪波浩渺、白浪滔天、什麼の先師の霊骨をか覓めん」と。他既是に先師の霊骨を覓むるに、石霜為什麼にか却って恁麼に道う。這裏に到って、若し「生とも道わじ、死とも道わじ」という処に於て言下に薦得せば、方めて始めより終りに至るまで、全機受用することを知らん。你若し道理を作てて、擬議尋思せば、直に是れ見難し。漸源云く、「正に好し力を著くるに」と。看よ他悟りし後、道い得て自然に奇特たり。道吾の一片の頂骨金色の如し、撃つ時銅声を作す。雪竇著語して、「蒼天蒼天」と云うは、其の意両辺に落在つ。太原の孚云く、「先師の霊骨猶お在り」とは、自然に道い得て穏当なり。這の一落索、一時に一辺に拈向す。且道、作麼生か是れ省要の処、作麼生か是れ力を著くる処。見道わずや、「一処透れば千処万処一時に透る」と。若し「道わじ道わじ」という処を透得け去らば、便乃ち天下の人の舌頭を坐断せん。若し透得けざれば、也た須是らく自ら参じ自ら悟るべし。

＊道吾～銅声　福本は「道吾一片頂蓋骨如金、敲作金玉声」。

一 自己が倚って立つ基盤。二 主体的に受け止める。三 全人格をもって使いこなす。四 あれこれと詮議する。五『宋高僧伝』一一に「脳蓋一節特異而清瑩。其色如金、其響如銅」。六 生と死との両方を踏まえている。七 堅実な安定感がある。八 このひとしきりのやりとりは瞬時に(生死にとらわれない)あり方へと落ち着けられた。九 そのものずばりのかなめのところ。

【頌】兎馬有角、〔[一]斬。[二]可煞奇特、可煞新鮮。〕牛羊無角。〔斬。[三]成什麼模様。瞞別人即得。〕[四]絶毫絶氂、〔天上天下、唯我独尊。你向什麼処模索。〕如山如嶽。〔在什麼処。[五]平地起波瀾。[六]堲著你鼻孔。〕黄金霊骨今猶在、〔[七]截却舌頭、塞却咽喉。拈向一辺。只恐無人識得伊。〕白浪滔天何処著。〔放過一著。脚跟下蹉過。眼裏耳裏著不得。〕無処著。〔果然。却

容易と日を過ごすべからず、可惜許かな時光。雪竇の頌に云く、

【頌】兎馬に角有り、〔斬。可煞だ奇特、可煞だ新鮮。〕牛羊に角なし。〔斬。什麼なる模様をか成す。別人を瞞すことは即ち得し。〕毫を絶し氂を絶して、〔天上天下、唯我独尊。你什麼処に向いてか模索せん。〕山の如く嶽の如し。〔什麼処にか在る。平地に波瀾を起す。你の鼻孔を堲著す。〕黄金の霊骨今猶お在り、〔舌頭を截却し、咽喉を塞却ぐ。一辺に拈向す。只だ恐らくは人の伊を識り得ること無からん。〕白浪滔天何処にか著く。〔一著を放過む。脚跟下に蹉過う。眼裏耳裏に著き得ず。〕著く処無し。〔果然して。却って

較些子。果然没溺深坑。〕隻履西帰曾失却。〔祖禰不了、累及児孫。打云、為什麼却在這裏。〕

些子く較えり。果然して深坑に没溺す。〕隻履西に帰り、曾て失却う。〔祖禰了せざれば、累は児孫に及ぶ。打って云く、為什麼にか却って這裏に在る。〕

一 バサリと一刀の下に切った。 二 なんと珍しい、まったく初耳だ。 三 どんな姿になることやら。 四 この上なく微細。 五 平坦なところに波瀾を巻き起した。 六 鼻をドンと撞いた。骨身に沁みる一撃。 七 だれも何も言えない。 八 抜け出ようのない深い穴におぼれてしまっている。 九 達磨は西へ帰ってしまい、いまや行くえが知れない。 一〇 親の代でカタをつけておかないと、子孫がとばっちりを食う。

〔評唱〕雪竇偏会下注脚。他是雲門下児孫。凡一句中、具三句底鉗鎚。向難道処道破、向撥不開処撥開、去他緊要処頌出。直道、兎馬有角、牛羊無角。且道、兎馬為什麼有角、牛羊為什麼却無角。若透得前話、始知雪竇有為人処。有者錯会道、不道便是道、無句是有句、兎馬無角却云有角、牛羊有角却云無角。且得没交渉。殊不知、古人千変万化、現如此神通、

〔評唱〕雪竇偏に会く注脚を下す。他は是れ雲門下の児孫なり。凡そ一句の中に、三句底の鉗鎚を具す。道い難き処を道い破て、撥不開処を撥開き、他の緊要の処に去いて頌出す。直に道う、「兎馬に角有り、牛羊に角無し」と。且道、兎馬は為什麼にか角有り、牛羊は為什麼にか却って角無き。若し前話を透得くれば、始めて雪竇に為人の処有るを知らん。有る者は錯り会して道う、「『道わじ』とは便ち是れ道う、無句は是れ有句、兎馬角無きに却って『角有り』と云い、牛羊角有るに却って『角無し』と云う」と。且得没交渉。殊に

只為打破你這精霊鬼窟[二]。若透得去、[三]不消一箇了字。兎馬有角、牛羊無角。絶毫絶氂、如山如嶽。這四句、似摩[四]尼宝珠一顆相似。雪竇渾崙地吐在你面前了也。末後皆是拠款結案。黄金霊骨今猶在、白浪滔天何処著、此頌石霜与太原孚語。為什麼無処著、隻履西帰曾失却、[五]霊亀曳尾。此是雪竇転身為人処。[六]古人道、他参活句、不参死句。既是失却、他[七]一火為什麼却競頭争。

知らず、古人の千変万化し、此の如く神通を現ずるは、只だ你の這の精霊の鬼窟を打破せんが為なり。若し透得け去らば、一箇の「了」の字すら消いず。「兎馬に角有り、牛羊に角無し。毫を絶し氂を絶して、山の如く嶽の如し」と。這の四句、摩尼宝珠の一顆の似くに相似たり。雪竇は渾崙地に你の面前に吐在し了れり。末後は皆な是れ款に拠って案を結す。「黄金の霊骨今猶お在り、白浪滔天何処にか著く」とは、此れ石霜と太原孚との語を頌す。「為什麼にか著く処無き。隻履西に帰り、曾て失却う」とは、霊亀尾を曳く。此れは是れ雪竇の転身して為人せし処。古人道く、「他活句に参じて死句に参ぜず」と。既是に失却われしに、他の一火は為什麼にか却って競頭に争う。

一 雲門による三句の問題提起。 二 物の怪や死者の霊の巣窟。迷妄の境。 三 一つの「了」の字もいらない。 四 宝玉。 五 霊験あらたかな亀が尾の跡を残していったようなもの。 六 徳山縁密か。語は第二〇則・本則の評唱、第三九則・本則の評唱などに既出。 七 ひとかたまりの集団。

第五六則　欽山一鏃破三関

垂示云、諸仏不曾出世、亦無一法与人。祖師不曾西来、未嘗以心伝授。自是時人不了、向外馳求。殊不知、自己[一]脚跟下一段大事因縁、千聖亦摸索不著。只如今見不見、聞不聞、説不説、知不知、従什麼処得来。若未能洞達、且向葛藤窟裏会取。試挙看。

【本則】挙。良禅客[二]問欽山[三]、一鏃破三関時如何。〔嶮。不妨奇特。不妨是箇猛将。〕山云、放出関[四]中主看。〔劈面来也。也要大家知[五]。主山高、

第五六則　欽山、一鏃もて三関を破る

垂示に云く、諸仏曾て世に出でず、亦た一法も人に与うること無し。祖師曾て西来せず、未だ嘗て心を以て伝授せず。自是より時人了せず、外に向って馳求む。殊に知らず、自己脚跟下の一段の大事因縁、千聖も亦た摸索不著を。只だ如今見と不見、聞と不聞、説と不説、知と不知、什麼処よりか得来たる。若し未だ洞達する能わずんば、且は葛藤窟裏に向いて会取せよ。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。良禅客、欽山に問う、「一鏃もて三関を破る時、如何」。〔嶮うし。不妨に奇特たり。不妨に是れ箇の猛将なり。〕山云く、「関中の主を放出し看よ」。〔劈面より来たれり。也た大家の知るを要す。主

一　自己の本来の面目を明らかにするという根本問題。「自己一段大事」(第二〇則・本則の評唱)に同じ。

按山低。〕良云、恁麼則知過必改。〔見機而作、已落第二頭。〕山云、更待何時。〔有擒有縦。風行草偃。〕良云、好箭放不著所在。便出。〔果然。擬待翻款那。第二棒打人不痛。〕山云、且来、闍黎。〔呼則易、遣則難。喚得回頭、堪作什麼。〕良回首。〔果然把不住。中也。〕山把住云、一鏃破三関即且止、試与欽山発箭看。〔虎口裏横身。逆水之波。見義不為、無勇也。〕良擬議。〔果然摸索不著。打云、可惜許。〕山打七棒云、且聴這漢疑三十年。〔令合恁麼。有始有終。頭正尾正。這箇棒合是欽山喫。〕

山は高く按山は低し。〕良云く、「恁麼ならば則ち過を知りて必ず改めん」。〔機を見て作すも、已に第二頭に落つ。〕山云く、「更に何時をか待たん」。〔擒有り縦有り。風行けば草偃す。〕良云く、「好箭放つに所在に著かず」と。便ち出づ。〔果然して。款を翻さんと擬待するや。第二棒もて人を打てども痛からず。〕山云く、「且は来たれ、闍黎」。〔呼ぶことは則ち易きも、遣ることは則ち難し。喚得んで頭を回らしむるも堪く什麼をか作さん。〕良、首を回らす。〔果然して把不住。中れり。〕山、把住えて云く、「一鏃もて三関を破ることは即ち且て止く、試みに欽山の与に箭を発し看よ」。〔虎口裏に身を横たう。逆水の波。義を見て為ざるは勇無きなり。〕良、擬議す。〔果然して摸索不著。打って云く、可惜許。〕山、打つこと七棒して云く、「且は聴す、這の漢疑うこと三十年なるを」。〔令合に恁麼なるべし。始有り終有り。頭正しく尾も正し。這箇の棒は合に是れ欽山喫すべし。〕

一 未詳。二 欽山文邃。三 一本の矢で三つの関所をうち抜く。四 関所の主人。五「風水」思想では、北方に高い山、南方に低い山を眺望できる地を吉とする。北の山を主山、南の山を按山と呼ぶ。六 私の射方が悪かったようです、改めて射直しましょう。七 引き締めたり緩めたり自由自在。八 場所に限定されないものだ。九 呼び寄せるのは易しいが、追い払うのは難しい。第七五則・頌の評唱に「呼蛇易、遣蛇難」と。一〇『論語』為政の句。一一 こいつめ、三十年ほど疑いをかつがせておこう。一二 はじめよし、おわりもよし。

〔評唱〕良禅客、也不妨是一員戦将、向欽山手裏、[一]左盤右転、[二]墜鞭閃鐙、末後可惜許、弓折箭尽。雖然如是、[三]李将軍自有嘉声在、不得封侯也是閑。這箇公案、一出一入、一擒一縦、[四]当機覿面提、覿面当機疾、都不落有無得失、謂之[五]玄機。稍虧些子力量、便有顛蹶。這僧亦是箇英霊底衲子、致箇問端、不妨驚群。欽山是作家宗師、便知他問頭落処。鏃者箭鏃也。一箭射透三関時如何。欽山意道、你射透

〔評唱〕良禅客は、也た不妨に是れ一員の戦将なり、欽山の手の裏に向いて左盤右転して鞭を墜し鐙を閃かすも、末後は可惜許、弓折れ箭尽く。是の如しと雖然も、李将軍は自ら嘉声の在る有り、封侯を得ざるも也た是れ閑なり。這箇の公案、一出一入、一擒一縦、当機覿面に提げ、覿面当機に疾く、都て有無得失に落ちざる、之を玄機と謂う。稍些子に力量を虧けば、便ち顛蹶有らん。這の僧亦た是れ箇の英霊底衲子にして箇の問端を致し、不妨に群を驚かす。欽山は是れ作家の宗師にして、便ち他の問頭の落処を知る。「鏃」とは箭鏃なり。一箭もて三関を射透く時如何。欽山の意に

得則且置、試放出関中主看。良云、恁麼則知過必改。也不妨奇特。欽山云、更待何時。看他恁麼祇対。欽山所問、更無些子空欠処。

後頭良禅客却道、好箭放不著所在、払袖便出。欽山纔見他恁麼道、便喚云、且来闍黎。良禅客果然把不住、便回首。欽山擒住云、一鏃破三関則且止、試与欽山発箭看。良擬議。欽山便打七棒、更随後与他念一道呪云、且聴這漢疑三十年。如今禅和子尽道、為什麼不打八下、又不打六下、只打七下。不然、等他問道、試与欽山発箭看、便打。似則也似、是則未是在。這箇公案、須是胸襟裏不懐些子道理計較、超出語言之外、方能有一句下

道く、「你が射透得ることは則ち且て置く、試みに関中の主を放出し看よ」と。良云く、「恁麼ならば則ち過を知りて必ず改めん」と。也た不妨に奇特たり。欽山云く、「更に何時をか待たん」と。看よ他恁麼に祇対う。欽山の所問、更に些子も空欠たる処無し。

後頭に良禅客却って「好箭放つに所在に著かず」と道い、袖を払って便ち出づ。欽山、他の恁麼に道うを見るや纔や、便ち喚んで云く、「且は来たれ、闍黎」と。良禅客果然して把不住、便ち首を回らす。欽山擒住えて云く、「一鏃もて三関を破ることは且て止く、試みに欽山の与に箭を発し看よ」。良、擬議す。欽山便ち打つこと七棒して、更に随後て他の与に一道の呪を念じて云く、「且は聴す、這の漢疑うこと三十年なるを」と。如今の禅和子尽く道う、「為什麼にか打つこと八下せず、又た打つこと六下せずして、只だ打つこと七下す。然らずんば他問うて、『試みに欽山の与に箭を発し看よ』と道うを等って便ち打たん」と。似

破三関、及有放箭処。若存是之与非、卒摸索不著。当時這僧、若是箇漢、欽山也大嶮。他既不能行此令、不免倒行。且道、関中主、畢竟是什麼人。看雪竇頌云、

たることは則ち也た似たるも、是なることは則ち未だ是ならざる在。這箇の公案、須是らく胸襟裏に些子も道理計較を懐かず、語言の外に超出して、方めて能く一句下に三関を破すること有り、及た箭を放つ処有るべし。若し是と非とを存せば、卒に摸索不著らん。当時這の僧、若是箇の漢ならば、欽山も也た大いに嶮うし。他既に此の令を行ずる能わず、倒に行くを免れず。且道、関中の主とは、畢竟是れ什麼なる人ぞ。看よ雪竇の頌に云く、

一 左へ右へと巧みに身をかわす。二 馬上で奮戦するさま。三 羅隠（八三三—九〇九）の絶句「韋公子」の句（『甲乙集』一〇）。「李将軍」は漢の李広（?—前一一九）。四 問題の核心をずばりと突いて。五 玄妙な働き。

【頌】与君放出関中主、〔中也。当頭蹉過。退後退後。〕放箭之徒莫莽鹵。〔一死不再活。大諳訛。過了。〕取箇眼兮耳必聾、〔左眼半斤。放過一著。左辺不前、右辺不後。〕捨箇

【頌】君の与に放出す関中の主、〔中れり。当頭に蹉過う。退後、退後。〕箭を放つの徒、莽鹵なること莫れ。〔一たび死すれば再びは活きず。大いに諳訛れり。過ぎ了れり。〕箇の眼を取れば耳必ず聾し、〔左眼半斤。一著を放過す。左辺前まず、右辺後かず。〕箇

耳今目双瞽。〔右眼八両。只得一路。進前則堕坑落塹、退後則猛虎銜脚。〕可憐一鏃破三関、〔全機恁麼来時如何。道什麼。破也、堕也。〕的的分明箭後路。〔死漢。咄。打云、還見麼。〕君不見、〔癩児牽伴。打葛藤去也。〕玄沙有言兮、〔那箇不是玄沙。〕大丈夫先天為心祖。〔一句截流、万機寝削。鼻孔在我手裏。未有天地世界已前、在什麼処安身立命。〕

の耳を捨つれば目双ながら瞽す。〔右眼八両。只だ一路を得たり。進前めば則ち坑に堕ち塹に落ち、退後けば則ち猛虎脚を銜う。〕憐ずべし一鏃もて三関を破る、〔全機恁麼に来たる時如何。什麼を道うぞ。破れたり、堕ちたり。〕的的分明なり箭後の路。〔死漢。咄。打って云く、「還た見るや」。〕君見ずや、〔癩児伴を牽く。葛藤を打し去る。〕玄沙言えること有り、〔那箇は是れ玄沙にあらず。〕「大丈夫は天に先だって心の祖と為る」と。〔一句流れを截ちて、万機寝削す。鼻孔は我が手の裏に在り。未だ天地世界有らざる已前、什麼処に在いてか安身立命せん。〕

一 がさつ、おおざっぱではいかん。二 終わった、手おくれ。三 眼のはたらきに執着すると耳が聞こえなくなるし、耳のはたらきを止めたままにしておくと両目が見えなくなる。帰宗智常の頌に「棄箇耳還聾、取箇眼還瞽。一鏃破三関、分明箭後路。可憐大丈夫、先天為心祖」(『伝灯録』二九)と。四 「右眼八両」と対になり、違うように見えるが実は同じ。五 前へも進めず、後へも退けず。六 進退きわまり絶体絶命。七 矢の飛んだあとがありありと見てとれる。八 玄沙師備(八三五—九〇八)。九 万物以前に主体が確立している。一〇 第三二則の垂示に既出。

〔評唱〕 此頌数句、取帰宗頌中語。帰宗昔日因作此頌、号曰帰宗。宗門中謂之宗旨之説。後来同安聞之云、良公善能発箭、要且不解中的。有僧便問、如何得中的。安云、関中主是什麼人。後有僧挙似欽山。山云、良公若恁麼、也未免得欽山口。雖然如是、同安不是好心。雪竇道、与君放出関中主。開眼也著、合眼也著。有形無形、尽斬為三段。放箭之徒莫莽鹵。若善能放箭、則不莽鹵。若不善放、則莽鹵可知。取箇眼兮耳必聾、捨箇耳兮目双瞽。且道、取箇眼、為什麼却耳聾、捨箇耳、為什麼却双瞽。此語無取捨、方能透得。若有取捨、則難見。可憐一鏃破三関、的的分明箭後路。良禅客問、一鏃破三関時如

〔評唱〕 此の頌の数句、帰宗の頌の中の語を取る。帰宗昔日此の頌を作るに因って、号して帰宗と曰う。宗門中に之を宗旨の説と謂う。後来に同安之を聞いて云く、「良公善能く箭を発するも、要且に的に中る解わず。」僧有り便ち問う、「如何にせば的に中るを得ん」。安云く、「関中の主は是れ什麼なる人ぞ」と。後に僧有り欽山に挙似す。山云く、「良公若し恁麼なるも、也た未だ欽山の口を免れ得ず。是の如くなりと雖然も、同安は是れ好心ならず」と。雪竇道く、「君の与に放出す関中の主」と。眼を開くも也た著り、眼を合るも也た著る。有形無形、尽く斬って三段と為す。「箭を放つの徒、莽鹵なること莫れ」と。若し善能く箭を放たば、則ち莽鹵ならず。若し善く放たずんば、則ち莽鹵なること知るべし。「箇の眼を取れば耳必ず聾し、箇の耳を捨つれば目双ながら瞽す」。且道、箇の眼を取れば為什麼にか却って耳聾す。箇の耳を捨つれば為什麼にか却って双ながら瞽す。此の語取捨無ければ、

何。欽山云、放出関中主看。乃至末後同安公案、尽是箭後路。畢竟作麼生。君不見、玄沙有言兮、大丈夫先天為心祖。尋常以心為祖宗極則。這裏為什麼却於天地未生已前、猶為此心之祖。若識破這箇時節、方識得関中主、*的的分明箭後路。若要中的、箭後分明有路。且道、作麼生是箭後路。也須是自著精彩始得。**大丈夫先天為心祖。玄沙常以此語示衆。此乃是帰宗有此頌。雪竇誤用為玄沙語。如今参学者、若以此心為祖宗、参到弥勒仏下生、也未会在。若是大丈夫漢、心猶是児孫、天地未分、已是第二頭。且道、正当恁麼時、作麼生是先天地。

方めて能く透得せん。若し取捨有らば則ち見難し。「憐ずべし一鏃もて三関を破る、的的分明なり箭後の路」と。良禅客問う、「一鏃もて三関を破る時如何」。欽山云く、「関中の主を放出し看よ」と。末後の同安の公案に乃至まで、尽く是れ箭後の路なり。畢竟作麼生。「君見ずや、玄沙言えること有り、大丈夫は天に先だって心の祖と為る」と。尋常、心を以て祖宗の極則と為す。這裏は為什麼にか却って天地未生已前に於て、猶お此の心の祖と為る。若し這箇の時節を識破せば、方めて関中の主を識得して、的的と箭後の路は分明ならん。若し的に中んと要せば、箭後分明に路有り。且道、作麼生か是れ箭後の路。也た須是らく自ら精彩を著けて始めて得し。「大丈夫は天に先だって心の祖と為る」。玄沙常に此の語を以て衆に示す。此れは乃是ち帰宗に此の頌有るを、雪竇誤って用て玄沙の語と為す。如今参学の者、若し此の心を以て祖宗と為さば、参じて弥勒仏下生に到るとも、也た未だ会せざる在。

若是大丈夫の漢ならば、心は猶お是れ児孫、天地未分も已に是れ第二頭なるのみ。且道、正に恁麼なる時に当っては、作麼生か是れ天地に先だつ。

＊的的分明箭後路　福本に無し。＊＊大丈夫〜玄沙語〔三二字〕　福本に無し。

一 同安常察。 二 好意の発言ではなく毒を含んでいる。 三 本気になって打ちこむ。

第五七則　趙州至道無難

垂示云、未透得已前、一似銀山鉄壁。及乎透得了、自己元来是鉄壁銀山。或有人問且作麼生、但向他道[一]、若向箇裏、露得一機、看得一境、坐断要津、不通凡聖、未為分外[二]。苟或未然、看取古人様子。

一　第五二則・頌の著語に既出。　二　僭越、分不相応。

【本則】挙。僧問趙州[一]、至道無難[二]、唯嫌揀択。如何是不揀択。〔這鉄蒺[三]藜、多少人呑不得。大有人疑著在。満[四]口含霜[五]。〕州云、天上天下、唯我独尊。〔平地上起骨堆。衲僧鼻孔、一時穿却。金[六]剛鋳鉄券。〕僧云、此

第五七則　趙州の至道無難

垂示に云く、未だ透得せざる已前は、一に銀山鉄壁の似し。透得し了るに及べば、自己は元来是れ鉄壁銀山。或は人有り、且も作麼生と問わば、但だ他に道わん、若し箇裏に向いて一機を露得し、一境を看得せば、要津を坐断して、凡聖を通さざるも、未だ分外と為ずと。苟或未だ然らずんば、古人の様子を看取よ。

【本則】挙す。僧、趙州に問う、「『至道は難きこと無し、唯だ揀択を嫌う』と。如何なるか是れ不揀択」。〔這の鉄蒺藜、多少の人呑み得ず。大いに人の疑著する有る在。満口に霜を含む。〕州云く、「天上天下、唯我独尊」。〔平地上に骨堆を起す。衲僧の鼻孔一時に穿却たる。金剛もて鉄券を鋳る。〕僧云く、「此れは猶お

猶是揀択。〔果然随他転了也。〕拶著[七]這老漢。〕州云、田厙奴[八]、什麼処是揀択。〔山高石裂。〕僧無語。〔放你三十棒。直得目瞪[九]口呿。〕

是れ揀択」。〔果然して他に随って転じ了れり。這の老漢を拶著す。〕州云く、「田厙奴、什麼処か是れ揀択」。〔山高く石裂く。〕僧、語無し。〔你に放す三十棒。直得に目瞪り口呿く。〕

一 趙州従諗（七七八―八九七）。二 三祖僧璨『信心銘』の句。第二則・第五八則・第五九則にも。三 鉄菱。鉄製の刺のある菱の実形の武器。四 発言不能。五 平らな地面にうず高く土やごみを盛り上げる。ことさらな行為。六「鉄券」は帝王が功臣に与えて子孫の行く末を保証する鉄製の割り符。それを仏陀は金剛で造って仏弟子に与えた。仏陀からのお墨つき。七 このおやじに一発食らわせた（つもりでいる）。八 罵語。「田舎奴」とも。一般には「客作児」（第四七則・頌の評唱）という。九 目はぱちくり口はあんぐり。度肝を抜かれたさま。

〔評唱〕僧問趙州、至道無難、唯嫌揀択。三祖信心銘、劈頭便道這両句。有多少人錯会。何故。至道本無難、亦無不難、只是唯嫌揀択。若恁麼会、一万年也未夢見在。趙州常以此語問人。這僧将此語倒去問他。若向語上覓、此僧却驚天動地。若不在語句上、

〔評唱〕僧、趙州に問う、「至道は難きこと無し、唯だ揀択を嫌う」と。三祖の『信心銘』、劈頭便ち這の両句を道う。多少の人の錯り会す有り。何故ぞ。至道は本より難きこと無く、亦た難からざること無く、只だ是れ唯だ揀択を嫌うと。若し恁麼に会せば、一万年なるも也た未だ夢にも見ざる在。趙州常に此の語を以て人に問う。這の僧此の語を将て、倒に去きて他に問

又且如何。更参三十年。這箇些子[一]関捩子、須是転得始解。捋虎鬚、也須是本分手段始得。這僧也不顧危亡、敢捋虎鬚便道、此猶是揀択。趙州劈[二]口便塞道、田厙奴、什麼処是揀択。若問著別底、便見脚忙手乱。争奈這老漢是作家、向動不得処動、向転不得処転。你若透得、一切悪毒言句、乃至千差万状[三]世間戯論、皆是醍醐上味。若到著実処、方見趙州[四]赤心片片。田厙奴、乃福唐人郷語、罵人似無意智相似。這僧道、此猶是揀択。趙州道、田厙奴、什麼処是揀択。宗師眼目、須至[五]恁麼、如金翅鳥擘海直取龍呑。雪竇頌云、

う。若し語上に向いて覓めば、此の僧却って天を驚かし地を動かす。若し語句上に在らずんば、又た且て如何。更に参ぜよ三十年。這箇の些子の関捩子、須是らく転じ得て始めて解す。虎鬚を捋くは也た須是らく本分の手段にして始めて得し。這の僧也た危亡を顧みず、敢て虎鬚を捋いて便ち道う、「此れは猶お是れ揀択」と。趙州、劈口に便ち塞いで道う、「田厙奴、什麼処か是れ揀択」と。若し別底に問著れば、便ち脚忙しく手乱るるを見ん。争奈せん這の老漢は是れ作家なれば、動き得ざる処に向いて動き、転じ得ざる処に向いて転ず。你若し透得せば、一切悪毒の言句、乃至千差万状の世間の戯論も、皆な是れ醍醐の上味なり。若し著実の処に到らば、方めて趙州の赤心片片たるを見ん。「田厙奴」は乃ち福唐の人の郷語にして、人の意智無きが似くに相似たるを罵る。這の僧道く、「此れは猶お是れ揀択」と。趙州道く、「田厙奴、什麼処か是れ揀択」と。宗師の眼目、須らく恁麼なるに至り、金翅

鳥の海を擘いて直に龍を取って呑むが如くなるべし。

雪竇の頌に云く、

一 微妙なポイント。 二 いきなり相手の口を塞いで。 三 真実究極の境地。 四 こまごまと行き届いたまごころ。 五 龍を食べるという伝説上の巨鳥。ガルダ。

【頌】似海之深、〔是什麼度量。淵源難測。也未得一半在。〕如山之固。〔什麼人撼得。猶在半途。〕蚊䖸弄空裏猛風、〔也有恁麼底。果然不料力。可煞不自量。〕螻蟻撼於鉄柱。〔同坑無異土。且得没交渉。闍黎与他同参。〕揀兮択兮、〔担水河頭売。道什麼。趙州来也。〕当軒布鼓。〔已在言前。一坑埋却。如麻似粟。打云、塞却你咽喉。〕

【頌】海の深きが似く、〔是れ什麼たる度量ぞ。淵源測り難し。也た未だ一半を得ざる在。〕山の固きが如し。〔什麼人か撼がし得ん。猶お半途に在り。〕蚊䖸空裏の猛風を弄し、〔也た恁麼なる底有り。果然して力を料らず。可煞だ自らを量らず。〕螻蟻鉄柱を撼がす。〔同坑に異土無し。且得没交渉。闍黎は他と同参。〕揀び択ぶ、〔水を担って河頭に売る。什麼を道うぞ。趙州来たれり。〕当軒の布鼓。〔已に言前に在り。一坑に埋め却まん。麻の如く粟の似し。打って云く、你が咽喉を塞却がん。〕

一 蚊やあぶが猛風の中を飛ぼうとする。身のほど知らず。 二 ありが鉄柱をゆさぶろうとする。蟷螂の斧。 三 同じ穴の狢。 四 おまえさん(雪竇を指す)もこの僧のなかまであろう。 五 河のほとりで水

を売る。無駄なことをやる。六 軒先の布張りの(音の出ない)太鼓。見掛け倒し。ここでは、堂々たる無功用の呈示。「布鼓を持して雷門を過ぎること毋れ」(『漢書』王尊伝)という語をふまえる。

〔評唱〕　雪竇注両句云、似海之深、如山之固。僧云、此猶是揀択。雪竇道、這僧一似蚊蝱弄空裏猛風、螻蟻撼於鉄柱。此是上頭人用底[1]。雪竇賞他胆大。何故。他敢恁麼道、趙州亦不放他便云、田厙奴、什麼処是揀択。豈不是猛風鉄柱。揀兮択兮、当軒布鼓、雪竇末後提起教活[2]。若識得明白、十分你自将来了也[3]。何故。不見道、欲得親切、莫将問来問[4]。是故当軒布鼓[5]。

〔評唱〕　雪竇、両句を注して云く、「海の深きが似く、山の固きが如し」と。僧云く、「此れは猶お是れ揀択」と。雪竇道く、「這の僧一に蚊蝱空裏の猛風を弄し、螻蟻鉄柱を撼がすが似し」と。雪竇他の胆大なるを賞す。何故ぞ。此れは是れ上頭の人の用うる底なり。他敢て恁麼に道うも、趙州亦た他を放さず、便ち云く、「田厙奴、什麼処か是れ揀択」と。豈に是れ猛風鉄柱にあらずや。「揀び択ぶ、当軒の布鼓」と、雪竇は末後に提起して活かしむ。若し識得して明白ならば、十分に你自ら将ち来たり了れり。何故ぞ。見道ずや、「親切ならんと欲得せば、問を将ち来たりて問うこと莫れ」と。是の故に「当軒の布鼓」なり。

一 すぐれた機根の人。二 (趙州に殺された)この僧を再生させてやった。三 堂々と自己を提示したことになる。四 首山省念(九二六―九九三)の語。五 つまり、せっかくのその布鼓をバチで打つようなことはするな、というわけだ。

第五八則　趙州時人窠窟

【本則】 挙。僧問趙州、至道無難、唯嫌揀択。是時人窠窟否。〔両重公案。也是疑人処。踏著秤鎚硬似鉄。猶有這箇在。莫以己方人。〕州云、曾有人問我、直得五年分疎不下。〔面赤不如語直。胡孫喫毛虫、蚊子咬鉄牛。〕

第五八則　趙州の時人窠窟

【本則】 挙す。僧、趙州に問う、「『至道は難きこと無し、唯だ揀択を嫌う』と。是れ時人の窠窟なりや」。〔両重の公案。也た是れ人を疑わしむる処。秤鎚を踏著くるに硬きこと鉄の似し。猶お這箇の在る有り。己を以て人を方すこと莫れ。〕州云く、「曾て人の我に問う有り、直得に五年分疎不下なり」。〔面の赤らむは語の直きに如かず。胡孫、毛虫を喫い、蚊子、鉄牛を咬む。〕

一 今どきの人。 二 腰をすえたがる教条。 三 『趙州録』では「否」が無い。 四 秤の分銅にも似た「至道〜」の語は鉄の硬さ。 五 まだふっきれていないものがある。まだ悟りくささを引きずっている。 六 自分を規準にして他人を律するな。 七 第三四則・本則の著語に既出。 八 猿が毛虫を口に入れたときのように呑み込み切れないし、蚊が鉄牛を刺そうとしても嘴の突き立てようがない。もてあつかいかねる代物。

〔評唱〕 趙州平生不行棒喝、用得過

〔評唱〕 趙州は平生、棒喝を行ぜず、(言句を)用い得

於棒喝。這僧問得来、也甚奇怪。若不是趙州、也難答伊。蓋趙州是作家、只向伊道、曾有人問我、直得五年分疎不下。問処壁立千仞、答処亦不軽他。只恁麼会、直是当頭。若不会、且莫作道理計較。不見投子宗道者、在雪竇会下作書記、雪竇令参至道無難、唯嫌揀択。於此有省。一日雪竇問他、至道無難、唯嫌揀択、意作麼生。宗云、畜生畜生。後隠居投子。凡去住持、将袈裟裹草鞋与経文。僧問、如何是道者家風。宗云、袈裟裹草鞋。僧云、未審意旨如何。宗云、赤脚下桐城。所以道、献仏不在香多。若透得脱去、縦奪在我。既是一問一答、歴歴現成、為什麼趙州却道、分疎不下。且道、是時人窠窟否。趙州

て棒喝より過れり。這の僧問い得来たって也た甚だ奇怪なり。若し是れ趙州にあらずんば、也た伊に答え難からん。蓋し趙州は是れ作家、只だ伊に向って道う、「曾て人の我に問う有り、直得に五年分疎不下なり」と。問処壁立千仞なれば、答処も亦た他を軽ぜず。只だ恁麼に会せば、直是に当頭。若し会せざるも、且は道理計較を作すこと莫れ。見ずや投子宗道者、雪竇の会下に在って書記と作りしとき、雪竇、「至道は難きこと無し、唯だ揀択を嫌う」に参ぜしむ。此に於て省有り。一日、雪竇他に問う、「『至道は難きこと無く、唯だ揀択を嫌う』と、意作麼生」。宗云く、「畜生、畜生」と。後に投子に隠居す。凡そ去きて住持するに、袈裟を将て草鞋と経文とを裹む。僧問う、「如何なるか是れ道者の家風」。宗云く、「袈裟に草鞋を裹む」。僧云く、「未審、意旨如何」。宗云く、「赤脚にて桐城に下る」と。所以に道う、「仏に献ずるは香の多きに在らず」と。若し透得脱去れば、縦奪我に在り。既是

在窠窟裏答他、在窠窟外答他。須知此事不在言句上。或有箇漢、徹骨徹髓、信得及去、如龍得水、似虎靠山。頌云、

一 目の前にある。二 雪竇の法嗣、投子法宗。三 「至道」(やみくもの無揀択)は畜生道と異ならず、とおとしめたか。四 投子山の近くの都市。五 思いのままに放ったり、取りこめたり。

【頌】[一]象王嚬呻、〔富貴中之富貴。誰人不悚然[二]。好箇消息。〕獅子哮吼。〔作家中作家。百獣脳裂[三]。好箇入[四]路。〕無味之談[五]、〔相罵[六]饒你接觜。鉄橛子相似、有什麼咬嚼処。〕分疎不下[七]五年強、一葉[八]舟中載大唐。渺渺兀然[九]波浪起、誰知[一〇]別有好思量。〕塞断人

に一問一答、歴歴と現成するに、為什麼にか趙州却って道う、「分疎不下」と。且道、是れ時人の窠窟なりや。趙州、窠窟の裏に在って他に答うるか、窠窟の外に在って他に答うるか。須らく知るべし此の事は言句の上に在らざることを。或は箇の漢有り、徹骨徹髄、信得及去れば、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るが似し。頌に云く、

【頌】象王は嚬呻り、〔富貴の中の富貴。誰人か悚然たらざらん。好箇消息なり。〕獅子は哮吼ゆ。〔作家の中の作家。百獣脳裂す。好箇入路なり。〕無味の談、〔相罵るときは你に饒す觜を接げ。鉄橛子に相似たり、什麼の咬嚼す処か有らん。〕分疎不下なること五年強、一葉の舟中に大唐を載す。渺渺たるに兀然と波浪起る、誰か知る別に好思量有ることを。〕人の口を塞断ぐ。

口。〔相唾饒你潑水。咦。[11] 闍黎道甚麼。〕南北東西、〔有麼、有麼。天上天下。[12] 蒼天、蒼天。〕烏飛兎走。[13] 〔自[14]古自今。一時活埋。〕

〔相唾するときは你に饒す水を潑けよ。咦。闍黎、甚麼を道う。〕南北東西、〔有りや、有りや。天上天下。蒼天、蒼天。〕烏飛び兎走る。〔古よりし今よりす。一時に活埋せん。〕

一 近寄り難く凄まじい問答の比喩。二 恐れて立ちすくむ。三 頭が破裂する。四 悟入への手がかり。五『老子』に「道の口を出づる、淡乎として味なし」と。六 お互いにとことんやり合おう。七 以下四句、白雲守端（一〇二五―一〇七二）の頌。八 一隻の小舟に大唐国を積み込んでしまった。この趙州の一言は天下の禅者をからめとってしまった。九 はてしなく広い水面に高く波が立つ。一〇 この世ならぬ絶妙の思いが秘められていようとは誰が想像できよう。一一 舌うち。一二 やれ悲しや、嘆かわしや。一三 至道の堂々たる運行を日月のそれに喩える。第一二則・頌に「金烏急、玉兎速」と。一四 古今を通じて変らぬもの。

【評唱】　趙州道、曾有人問我、直得五年分疎不下、似象王嚬呻獅子哮吼、無味之談、塞断人口。南北東西、烏飛兎走、雪竇若無末後句、何処更有雪竇来。既是烏飛兎走、且道、趙州・雪竇・山僧、畢竟落在什麼処。

【評唱】　趙州道く、「曾て人の我に問う有り、直得に五年分疎不下なり」とは、「象王嚬呻り、獅子哮吼え、無味の談、人の口を塞断ぐ」が似し。「南北東西、烏飛び兎走る」と、雪竇に若し末後の句無からば、何処にか更に雪竇の来たる有らん。既是に烏飛び兎走る、且道、趙州・雪竇・山僧は畢竟什麼処にか落在く。

第五九則　趙州唯嫌揀択

垂示云、該天括地、越聖超凡。百草頭上、指出涅槃妙心、干戈叢裏、点定衲僧命脈。且道、承箇什麼人恩力、便得恁麼。試挙看。

一 天地を統べおさめる。 二 万物に仏心のはたらきを示す。 三 法戦の場において禅僧の死命を決する。

【本則】挙。僧問趙州、至道無難、唯嫌揀択。〔再運前来。道什麼。三重公案。〕纔有語言、是揀択。〔満口含霜。〕和尚如何為人。〔撈著這老漢。団。〕州云、何不引尽這語。〔賊是小人、智過君子。白拈賊。騎賊馬趁賊。〕僧云、某甲只念到這裏。〔両箇弄泥団漢。逢著箇賊、埰根難敵手。〕

第五九則　趙州の唯嫌揀択

垂示に云く、天を該ね地を括り、聖を越え凡を超ゆ。百草頭上に涅槃妙心を指出し、干戈叢裏に衲僧の命脈を点定す。且道、箇の什麼なる人の恩力を承けてか、便ち恁麼なるを得たる。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。僧、趙州に問う、「『至道は難きこと無し、唯だ揀択を嫌う。〔再び運びて前み来たる。什麼をか道う。三重の公案。〕纔に語言有るや、是れ揀択なり』と。〔満口に霜を含む。〕和尚は如何に人に為うるや」。〔這の老漢に撈著む。団。〕州云く、「何ぞ這の語を引き尽さざる」。〔賊は是れ小人なるも、智は君子よりも過ぎたり。白拈賊。賊の馬に騎って賊を趁う。〕僧云く、「某甲は只だ這裏に念じ到るのみ」。〔両

州云、只這至道無難、唯嫌揀択。一〇〔畢竟由這老漢。一一被他換却眼睛。一二捉敗了也。〕

箇の泥団を弄する漢。箇の賊に逢著せば、垜根して敵手たること難し。」州云く、「只だ這れぞ至道は難きこと無し、唯だ揀択を嫌う」。〔畢竟這の老漢に由る。他に眼睛を換却えらる。捉敗し了れり。〕

＊垜根難敵手　福本は「垜根漢両个敵手」。

一 また同じ手を使った。二 ここは、かけ声。三 どうして、その文句を最後まで引用しないのか。断章取義ではいけない。四 器量の小さい悪党だが、智慧は君子以上だ。五 白昼堂々のひったくり。「唯嫌揀択」という発言自体が「揀択」ではないかという切り返しを指す。六 相手の攻撃手段を逆手に取る。七 私が暗誦しているのはここまでです。八 泥のかたまりをこねまわすやから。九「垜根」は一つところにじっとして動かないこと。収まりかえっていては対等には渡り合えない。一〇 結局この趙州に引き廻されただけだ。一一 彼に立場を逆転させられてしまった。一二 捕まってしまった。

【評唱】趙州道、只這至道無難、唯一嫌揀択。如撃石火、似閃電光。擒縦殺活、得恁麼自在。諸方皆謂、趙州有逸群之辯。趙州尋常示衆、有此二一篇云、至道無難、唯嫌揀択。纔有語言、是揀択、是明白。老僧不在明白

【評唱】趙州道く、「只だ這れぞ至道は難きこと無し、唯だ揀択を嫌う」と。撃石火の如く、閃電光の似し。擒縦殺活、恁麼も自在なるを得たり。諸方皆な謂う、「趙州には逸群の辯有り」と。趙州は尋常衆に示すに此の一篇有り、云く、「至道は難きこと無し、唯だ揀択を嫌う。纔に語言有れば、是れ揀択、是れ明白。老

裏。是汝等還護惜也無。時有僧問云、既不在明白裏、護惜箇什麼。州云、我亦不知。僧云、和尚既不知、為什麼道不在明白裏。州云、問事即得、礼拝了退。後来這僧只拈[三]他釁罅処、去問他。問得也不妨奇特、争奈只是[四]心行。若是別人、奈何他不得。争奈趙州是作家、便道、何不引尽這語。這僧也会転身吐気、便道、某甲只念到這裏。一似安排相似。趙州随声拈起便答、不須計較。[五]古人謂之相続也大難。他辨龍蛇、別休咎、還他本分作家。趙州換却這僧眼睛、不犯鋒鋩、不著計較、自然[六]恰好。你喚作有句也不得、[七]喚作無句也不得、喚作不有不無句也不得。離四句、絶百非。何故。若論此事、如擊石火、似閃電光。急

僧は明白裏に在らず、是れ汝等還た護惜する也無」と。時に僧有り問うて云く、「既に明白裏に在らずんば、箇の什麼をか護惜せん」。州云く、「我も亦た知らず」。僧云く、「和尚既に知らずんば、為什麼にか明白裏に在らずと道う」。州云く、「事を問うことは即ち得し、礼拝し了らば退け」と。後来に這の僧、只だ他の釁罅処を拈え、去きて他に問う。問い得て也た不妨に奇特たるも、争奈せん只だ是れ心行なり。若是別人ならば、他を奈何ともすることを得じ。争奈せん趙州は是れ作家なれば、便ち道う、「何ぞ這の語を引き尽さざる」と。這の僧也た会く身を転じて気を吐き、便ち道う、「某甲只だ這裏に念じ到るのみ」と。一に安排たるが似くに相似たり。趙州は声に随い拈起げて便ち答え、計較を須いず。古人之を「相続くるは也た大いに難し」と謂う。他の龍蛇を辨じ、休咎を別つは、他の本分の作家に還す。趙州は這の僧の眼睛を換却え、鋒鋩を犯さず、計較を著さず、自然に恰好なり。你喚んで

著眼看方見。若或擬議躊躇、不免喪身失命。雪竇頌云、

有句と作すも也た得からず、喚んで無句と作すも也た得からず、喚んで不有不無の句と作すも也た得からず。四句を離れ百非を絶せよ。何故ぞ。若し此の事を論ぜば、撃石火の如く、閃電光の似し。急と眼を著けて看て方めて見ゆ。若或擬議躊躇せば、喪身失命を免れず。

雪竇の頌に云く、

一 以下のような問題提起のテーゼ。 二 第二則を参照。 三 空隙、すきま。 四 不用意に痕跡を残すような言行。 五 洞山良价（八〇七―八六九）。 六 ぴたりとうまく収まっている。 七 「四句百非」は一切の言語表現をいう。第七三則・本則を参照。

【頌】 水灑不著、〔説什麼。太深遠生。有什麼共語処。〕風吹不入。〔如虚空相似。硬剝剝地。望空啓告。〕虎歩龍行、〔他家得自在、不妨奇特。〕鬼号神泣。〔大衆掩耳。〕草偃風行。闍黎莫是与他同参。〕頭長三尺知是誰、〔怪底物。何方聖者。見麼見麼。〕相対無言独足立。〔咄。縮頭

【頌】 水灑げども著かず、〔什麼をか説う。太だ深遠生。什麼の共に語る処か有らん。〕風吹けども入らず。〔虚空の如くに相似たり。硬剝剝地。空を望んで啓告す。〕虎のごとく歩み龍のごとく行き、〔他家は自在を得て、不妨に奇特たり。〕鬼号び神泣く。〔大衆耳を掩う。〕草偃し風行く。闍黎は是れ他と同参ならずや。〕頭の長きこと三尺、是れ誰なるを知らん、〔怪底き物。何方の聖者ぞ。見るや、見るや。〕相対して無言、独

去。放過一著。山魈。放過即不可。
便打。」

足にして立つ。〔咄。頭を縮め去れ。一著を放過す。
山魈。放過せば即ち不可。便ち打つ。〕

＊剗剗　福本は「料料」。＊＊何方聖者　福本はこの下に「甚処霊祇」と有り。＊＊＊山魈　福本に無し。

一 何ものも寄せつけぬさま。水と風は、虎と龍の縁語。二 カチンカチンの堅さ。三 天に訴えるほかはない無念さ。四 趙州を指す。五「風行草偃」とも。六 雪竇を指す。七 鬼神を指す。八 異様な姿。「至道」そのものと化した趙州の形容。九 山中の怪物。『抱朴子』登渉に「山中山精之形、如小児而独足、走向後、喜来犯人。……又有山精、如鼓赤色、亦一足、其名曰暉」と。

〔評唱〕　水灑不著、風吹不入。虎歩龍行、鬼号神泣。無你啗啄処。此四句頌趙州答話、大似龍馳虎驟。這僧只得一場懡㦬。非但這僧、直得鬼也号神也泣、風行草偃相似。末後両句、可謂一子親得。頭長三尺知是誰、相対無言独足立。不見僧問古徳、如何是仏。古徳云、頭長三尺、頸長二寸。雪竇引用。未審諸人還識麼。山僧也

〔評唱〕「水灑げども著かず、風吹けども入らず。虎のごとく歩み龍のごとく行き、鬼号び神泣く」と。你が啗啄する処無し。此の四句、趙州の答話の大いに龍馳せ虎驟るに似たるを頌す。這の僧只だ一場の懡㦬を得たり。但だ這の僧のみに非ず、直得には鬼も也た号び神も也た泣き、風行き草偃すに相似たり。末後の両句は、一子のみ親しく得たりと謂うべし。「頭の長きこと三尺、是れ誰なるを知らん、相対して無言、独足にして立つ」と。見ずや僧、古徳に問う、「如何なる

不識。雪竇一時脱体画＊＊却趙州、四真箇在裏了也。諸人須子細著眼看。

か是れ仏」。古徳云く、「頭の長きこと三尺、頸の長きこと二寸」と。雪竇引用す。未審、諸人還た識るや。山僧も也た識らず。雪竇は一時に脱体に趙州を画却し、真箇に在裏り了れり。諸人須らく子細に眼を著けて看るべし。

＊頸長　福本は「脛短」。　＊＊画却　福本は「活却」。

一 鳥や魚がえさをつつくさま。容啄。 二 一人の子だけがものにしている。 三 洞山良价。『洞山録』では「如何是仏」は「如何是沙門行」。 四 ほんとうに目の前に居るようだ。

第六〇則　雲門拄杖子

垂示云、諸仏衆生、本来無異。山河自己、寧有等差。為什麼却渾成両辺去也。若能撥転話頭、坐断要津、放過即不可。若不放過、尽大地不消一捏。且作麼生是撥転話頭処。試挙看。

一 話題（古則公案）を自在にあやつる。

【本則】挙。雲門以拄杖示衆云、〔点化在臨時。殺人刀、活人剣。換却你眼睛了也。〕拄杖子化為龍、〔何用周遮。用化作什麼。〕呑却乾坤了也。〔天下衲僧、性命不存。還碍著咽喉麼。闍黎向什麼処安身立命。〕

第六〇則　雲門の拄杖子

垂示に云く、諸仏と衆生と、本来異なること無し。山河と自己と、寧ぞ等差あらんや。為什麼にか却って渾て両辺と成り去る。若し能く話頭を撥転し、要津を坐断するも、放過せば即ち不可。若し放過さざれば、尽大地も一捏すら消いず。且て作麼生か是れ話頭を撥転する処。試みに挙し看ん。

二 急所を押さえ込む。　三 よしとして放っておいてはいけない。

【本則】挙す。雲門、拄杖を以て衆に示して云く、〔点化は時に臨むに在り。殺人刀、活人剣。你の眼睛を換却え了れり。〕「拄杖子化して龍と為り、〔何ぞ周遮するを用いん。化するを用いて什麼か作ん。〕乾坤を呑却み了れり。〔天下の衲僧、性命存せず。還た咽喉を碍著がれしや。闍黎は什麼処に向いてか安身立

[4]山河大地甚処得来。〔[5]十方無壁落、四面亦無門。東西南北、四維上下、[6]争奈這箇何。〕

命せん。〕山河大地、甚処よりか得来たる」。〔十方壁落無く、四面亦た門無し。東西南北、四維上下、這箇を争奈何せん。〕

一 雲門文偃（八六四―九四九）。二 モノの転換は臨機応変になされる。三 まわりくどい、くだくだしい。四 元来は、雪峰の「一口に乾坤を呑み尽す」という示衆に対して、雲門が投じた高次の批判。五 一切の判断が入りこみようもない泯絶超脱の境涯。「壁落」は窓のことらしい。六 とても扱いきれない。

【評唱】只如雲門道、拄杖子化為龍呑却乾坤了也、山河大地甚処得来、若道有則瞎、若道無則死。還見雲門為人処麼。還我拄杖子[2]来。如今人不会他雲門独露[1]処、却道即色明心、附物顕理。且如釈迦老子四十九年説法、不可不知此議論。何故更用拈華、迦葉微笑。這老漢便搽[3]胡道、吾有正法眼蔵、涅槃妙心、分付摩訶大迦葉。更何必単伝心印。諸人既是祖師門下

【評唱】只だ雲門の「拄杖子化して龍と為り、乾坤を呑却み了れり、山河大地、甚処よりか得来たる」と道うが如きは、若し有と道わば則ち瞎し、若し無と道わば則ち死す。還た雲門為人の処を見るや。我に拄杖子を還し来たれ。如今の人他の雲門独露の処を会せずして、却って道う「色に即して心を明め、物に附いて理を顕す」と。且も釈迦老子四十九年の説法の如きは、此の議論を知らざるべからず。何故ぞ更に拈華を用い、迦葉微笑する。這の老漢便ち搽胡して道く、「吾に正法眼蔵、涅槃妙心有り、摩訶大迦葉に分付す」と。更

客、還明得単伝底心麼。胸中若有一物、山河大地縦然現前。胸中若無一物、外則了無糸毫。説什麼理与智冥、境与神会。何故。一会一切会、一明一切明。

に何ぞ必ずしも心印を単伝せん。諸人既に是れ祖師門下の客、還た単伝底の心を明得すや。胸中若し一物有らば、山河大地縦然として現前せん。胸中若し一物無くんば、外則ち了に糸毫無し。什麼の理と智と冥し、境と神と会すとか説わん。何故ぞ。一会は一切会、一明は一切明なり。

一 人そのものが露呈したところ。二 拄杖という色相に即して心を明し、山河大地という物象に即して理を示した。『伝灯録』一〇・甘贄行者章に「僧云、借事明心、附物顕理」と。三 ごまかす。糊塗する。四 ずらりと隆起するさま。五 真如の理体と自己の一心とが冥合融会する。六 一事を会得すれば、他の一切がおのずと会得される。

長沙道、学道之人不識真、只為従前認識神。無量劫来生死本、痴人喚作本来人。忽若打破陰界、身心一如、身外無餘、猶未得一半在。説什麼即色明心、附物顕理。古人道、一塵纔起、大地全収。且道、是那箇一塵。若識得這一塵、便識得拄杖子。纔拈

長沙道く、「学道の人、真を識らざるは、只だ従前識神を認むるが為なり。無量劫来生死の本、痴人喚んで本来人と作す」と。忽若陰界を打破し、身心一如にして、身外に餘無きも、猶お未だ一半を得ざる在。什麼の「色に即して心を明め、物に附いて理を顕す」とか説わん。古人道く、「一塵起るや纔や、大地全く収まる」と。且道、是れ那箇の一塵ぞ。若し這の一塵を

起拄杖子、便見縦横妙用。恁麼説話、早是葛藤了也。何況更化為龍。慶蔵主云、五千四十八巻、還曾有恁麼説話麼。

識得せば、便ち拄杖子を識得せん。拄杖子を拈起するや纔や、便ち縦横の妙用を見さん。恁麼の説話も、早是に葛藤し了れり。何ぞ況んや更に化して龍と為るをや。慶蔵主云く、「五千四十八巻、還た曾て恁麼の説話有りや」と。

一 長沙景岑。 二 心識の主体的なはたらき。 三 生死流転を引き起こす根本である識神。 四 根源的主体。 五 迷いの世界。 六 身と心とが一如である時、身のそとに余計なものは何ひとつない。南陽慧忠の語。 七 楽普(洛浦、落浦とも)元安(八三四―八九八)。一微塵を取り出すと大地がまるごとおさまっている。華厳の法界縁起。 八 文字言説をもてあそぶこと。 九 圜悟が大潙慕喆のもとに参じたときの同学。 一〇 一切経をいう。

雲門毎向拄杖処拈掇、全機大用、活潑潑地為人。芭蕉*示衆云、衲僧巴鼻、尽在拄杖頭上。永嘉亦云、不是標形虚事褫、如来宝杖親蹤跡。如来**昔於然灯仏時、布髪掩泥、以待彼仏。然灯曰、此処当建梵刹。時有一天子、遂標一茎草云、建梵刹竟。諸人且道、

雲門は毎に拄杖の処に向いて拈掇し、全機大用して活潑潑地に人の為にす。芭蕉、衆に示して云く、「衲僧の巴鼻は尽く拄杖頭上に在り」と。永嘉亦た云く、「是れ形を標して虚しく事褫するにあらず、如来の宝杖親しく蹤跡す」と。如来は昔、然灯仏の時に髪を布き泥を掩って、以て彼の仏を待つ。然灯曰く、「此処に当に梵刹を建つべし」と。時に一の天子有り、遂に

這箇消息、従那裏得来。祖師道、棒頭取証、喝下承当。且道、承当箇什麼。忽有人問如何是拄杖子、莫是打筋斗麼、莫是撫掌一下麼。総是弄精魂。且喜没交渉。雪竇頌云、

一茎草を標てて云く、「梵刹を建て竟んぬ」と。諸人且く道え、這箇の消息那裏よりか得来たる。祖師道く、「棒頭に取証り、喝下に承当む」と。且道、箇の什麼をか承当る。忽し人の「如何なるか是れ拄杖子」と問うもの有らば、是れ筋斗を打るに莫や、是れ掌を撫すこと一下なるに莫や。総て是れ精魂を弄す。且喜たくも没交渉。雪竇の頌に云く、

＊示衆云　福本はこの下に「你有拄杖子、我与你拄杖子。你無拄杖子、我奪你拄杖子」と。＊＊如来昔～梵刹竟〔四〇字〕　福本は「有一天子従世尊行。仏指地云、此処宜建一宝刹。天子以拄杖標地云、建仏刹竟。仏遂讃云、有大智慧」。

一 杖を素材として問題を提起する。二 芭蕉慧清。三 禅僧の面目、本色。四 永嘉玄覚（六七五―七一三）。以下の句は第三一則・頌の評唱に既出。五 錠光仏、定光仏、提和竭羅仏とも。菩薩として修行中の釈尊に成仏の授記（予言）を与えたとされる仏。その仏のために髪を泥の上に布き、通り道とした。六 清浄なる国土。転じて、仏寺。七 未詳。八（せいぜい）とんぼがえりをするか、拍手をするくらいではあるまいか。九 狐つきをやらかす。

【頌】拄杖子、呑乾坤。〔道什麼。只用打狗。〕徒説桃花浪奔。〔撥開向

【頌】拄杖子、乾坤を呑む、〔什麼をか道う。只だ用て狗を打たん。〕徒しく説う、桃花の浪奔ると。〔向上の

上一竅、千聖斉立下風。也不在拏雲攫霧処。説得千偏万偏、不如手脚羅籠一偏。〕焼尾者不在拏雲攫霧、〔左之右之。老僧只管看、也只是一箇乾柴片。〕曝腮者何必喪胆亡魂。〔人人気宇如王。自是你千里万里。争奈悚然。〕拈了也。〔謝慈悲。老婆心切。〕聞不聞。〔不免落草。用聞作什麼。〕直須灑灑落落、〔残羹餿飯。乾坤大地、甚処得来。〕休更紛紛紜紜。〔挙令者先犯。相次到你頭上。打云、放過則不可。〕七十二棒且軽恕、〔山僧不曾行此令。拠令而行。頼値得山僧。〕一百五十難放君。〔正令当行。豈可只恁麼了。直饒朝打三千、暮打八百、堪作什麼。〕師驀拈拄杖下座。大衆一時走散。〔雪竇、龍頭蛇尾作

一竅を撥開すれば、千聖斉しく下風に立つ。也た雲を拏え霧を攫む処に在らず。説い得て千偏万偏せんより、手脚羅籠一偏せんに如かず。〕尾を焼く者も雲を拏え霧を攫むに在らず。〔左之右之。老僧只管に看るも、也た只だ是れ一箇の乾柴片。〕腮を曝す者も何ぞ必ずしも胆を喪い魂を亡わん。〔人人の気宇は王の如し。自是より你千里万里。争奈せん悚然たることを。〕拈じ了れり。〔慈悲を謝す。老婆心切。〕聞くや聞かずや。〔落草するを免れず。聞くことを用いて什麼か作ん。〕直に須らく灑灑落落たるべし、〔残羹餿飯。乾坤大地甚処よりか得来たる。〕更に紛紛紜紜たることを休めよ。〔令を挙ぐる者先ず犯す。相次で你の頭上に到る。打って云く、放過むれば則ち不可。〕七十二棒且は軽恕す、〔山僧曾て此の令を行わず。令に拠って行う。頼に山僧に値い得たり。〕一百五十、君に放し難し。〔正令当に行わる。豈に只だ恁麼にし了るべけんや。直饒朝打三千、暮打八百するも、什麼をか作すに堪

什麼。〕

えん。〕師、驀(いきな)り拄杖を拈(と)りて座を下る。大衆一時に走り散ず。〔雪竇、龍頭蛇尾にして什麼(なに)か作(せ)ん。〕

＊看　福本は「一面用」。　＊＊不免落草　福本はこの下に「亦不必呵呵大笑」と。　＊＊＊得山僧　福本は「山僧已行了」。

一 九竅のもう一つ上で機能する竅(あな)。第三の眼。 二 天に昇る龍のように志向高遠で世俗を超越したさま。 三 その龍の手脚をからめとる。 四 周辺をうろつくばかり。 五 一片の枯れ柴。転じて、価値の乏しいもの。 六 遥かに遠い。全く縁がない。 七 恐れて立ちすくむさま。 八 胸中さっぱりしているさま。 九 食べ残しのあつものと、すえためし。 一〇 ごたごたガヤガヤ騒ぎたてる。 一一 法令を提示したものが先ず違反した。 一二 (その罰が)君に廻ってきたぞ。 一三 ともかく今日は七十二棒を勘弁してやる。本来なら百五十棒でも許せんところだ。 一四 天子が定めた法令が目の当たりに実施された。 一五 朝に三千の、暮に八百の罰棒を喰わす。三千、八百は数の多いこと。 一六 雪竇を指す。

〔評唱〕雲門委曲為人、雪竇截径為人。所以撥却化為龍、不消恁麼道、只是拄杖子吞乾坤。雪竇大意、免人情解。更道、徒説桃花浪奔、更不必化為龍也。蓋禹門有三級浪、毎至三月、桃花浪漲。魚能逆水而躍過浪者、

〔評唱〕雲門は委曲(こまごま)と人の為(ため)にし、雪竇は截径(すばり)と人の為(ため)にす。所以(ゆえ)に「化して龍と為(な)る」を撥却(はらいの)けて、恁麼(さよう)に道(い)うを消(もち)いず、只(た)だ是れ「拄杖子乾坤を呑む」のみ。雪竇の大意、人の情解(じょうげ)を免る。更に道(い)う、「徒らに説く桃花の浪奔る」と、更に必ずしも化して龍と為(な)らず。蓋し禹門(うもん)に三級(さんだん)の浪有り、三月に至る毎(ごと)に、桃花の浪

即化為龍。雪竇道、縦化為龍、亦是徒説、焼尾者不在拏雲攫霧。魚過禹門、自有天火焼其尾、拏雲攫霧而去。雪竇意道、縦化為龍、亦不在拏雲攫霧也。曝腮者何必喪胆亡魂、清涼疏[二]序云、積行菩薩、尚乃曝腮於龍門。大意明華厳境界、非小徳小智之所造詣、猶如魚過龍門、透不過者、点額而回、[三]困於死水沙磧中、曝其腮也。[四]雪竇意道、既点額而回、必喪胆亡魂。

漲る。魚の能く水に逆らい躍りて浪を過ぐる者は、即ち化して龍と為る。雪竇道く、「縦い化して龍と為るも、亦た是れ徒らに説く。尾を焼く者も雲を拏え霧を攫むに在らず」と。魚禹門を過ぐれば、自ら天火有りて其の尾を焼き、雲を拏え霧を攫んで去る。雪竇の意に道う、「縦い化して龍と為るも、亦た雲を拏み霧を攫むに在らず」と。「腮を曝す者も何ぞ必ずしも胆を喪い魂を亡わん」とは、清涼の疏の序に云く、「積行の菩薩すら、尚乃腮を龍門に曝す」と。大意は華厳の境界は、小徳小智の造詣る所に非ず、猶お魚の龍門を過ぐるに、透り過ぎざる者は、点額して回り、死水沙磧の中に困して、其の腮を曝すが如くなるを明かす。雪竇の意に道く、「既に点額して回る、必ずや胆を喪い魂を亡わん」と。

一 山西省河津県の西の孟津。龍門とも。第七則・頌の評唱を参照。 二 澄観（七三八―八三九）の『華厳経疏』の序。 三 よどんだ川辺に身動きできず横たわって。 四 「何必喪胆亡魂」の誤か。

拈了也、聞不聞、重下注脚、一時与你掃蕩了也。諸人直須灑灑落落去、休更紛紛紜紜。你若更紛紛紜紜、失却拄杖子了也。七十二棒且軽恕、雪竇為你捨重従軽。古人道、七十二棒、翻成一百五十。如今人錯会、却只算数目。合是七十五棒、為什麼却只七十二棒。殊不知、古人意在言外。所以道、此事不在言句中。免後人去穿鑿。雪竇所以引用。直饒真箇灑灑落落、正好与你七十二棒。猶是軽恕。直饒総不如此、一百五十難放君。一時頌了也、却更拈拄杖重重相為。雖然恁麼、也無一箇皮下有血。

「拈じ了れり、聞くや聞かずや」とは、重ねて注脚を下して、一時に你が与に掃蕩し了れり。諸人直に須らく灑灑落落にし去るべし、更に紛紛紜紜たることを休めよ。你若し更に紛紛紜紜たらば、拄杖子を失却し了らん。「七十二棒且は軽恕す」と、雪竇は你が為に重を捨て軽きに従う。古人道く、「七十二棒、翻って一百五十と成る」と。如今の人錯り会して、却って只だ数目を算え、「合に是れ七十五棒なるべし、為什麼にか却って只だ七十二棒なる」と。殊に知らず、古人の意、言外に在るを。所以に道う、「此の事は言句の中に在らず」と。後人の去きて穿鑿するを免る。雪竇所以に引用す。直饒真箇に灑灑落落たるも、正に好し你に七十二棒を与えん。猶お是れ軽恕す。直饒総く此の如くならざるも、「一百五十、君に放し難し」と。一時に頌し了るや、却って更に拄杖を拈りて重重て相為にす。恁麼なりと雖然も、也た一箇も皮下に血有るもの無し。

一 未詳。 二 第四八則・頌の著語にも。

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第六

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第六

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第七

第六一則　風穴若立一塵

垂示云、建法幢、立宗旨、還他本分宗師。定龍蛇、別緇素、須是作家知識。剣刃上論殺活、棒頭上別機宜、則且置。且道、独拠寰中事、一句作麼生商量。試挙看。

一『証道歌』の句。仏法の本義を明示する。二 龍か蛇かを決定し、黒白を区別するのは、練達の禅者の見識でなければかなわぬ。三 独尊の主体者として天下を占有する。

【本則】挙。風穴垂語云、〔興雲致雨。也要為主為賓。〕若立一塵、〔我為法王、於法自在。花簇簇、錦簇簇。〕家国興盛、〔不是他屋裏事。〕

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第七

第六一則　風穴の若し一塵を立つれば

垂示に云く、法幢を建て宗旨を立つるは、他の本分の宗師に還す。龍蛇を定め緇素を別つは、須是らく作家の知識なるべし。剣刃上に殺活を論じ、棒頭上に機宜を別つは、則ち且ず置く。且道、独り寰中に拠るの事、一句もて作麼生か商量えん。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。風穴垂語して云く、〔雲を興し雨を致す。也た主と為り賓と為らんと要す。〕「若し一塵を立つれば、〔我法王為りて、法に於て自在なり。花簇簇、錦簇簇。〕家国興盛し、〔是れ他の屋裏の事にあらず。〕

不立一塵、〔掃蹤滅跡。失却眼睛、和鼻孔失也。〕家国喪亡。〔一切処光明。用家国作什麼。全是他家屋裏事。〕雪竇拈拄杖云、〔須是[七]壁立千仞始得。達磨来也。〕還有[八]同生同死底衲僧麼。〔[九]還我話頭来。雖然如是、[一〇]要平不平之事、須於雪竇商量始得。還知麼。若知、許你自由自在。若不知、[一一]朝打三千、暮打八百。〕

一 風穴延沼（八九六―九七三）。 二 問題を提起する。 三 ごくわずかなものを定立する。「一塵」は、一微塵。ここでは、家国（理法）存立の最低限の条件をいう。 四 私は理法の支配者であり、法を自在にあやつる。もとは『法華経』譬喩品の句。 五 咲きこぼれる花が錦織りなすように美しい。 六 おのれ自身の問題。 七 近よりがたい風格の喩え。 八 家国の興亡と運命を共にする者。 九 問題点に立ち帰ろう。 一〇（以上の）いざこざにケリをつけたいなら。第一〇〇則・頌に「要平不平、大巧若拙」と。
一一 朝に三千、暮に八百の罰棒を喰わせる。

〔評唱〕 只如風穴示衆云、若立一塵、家国興盛、不立一塵、家国喪亡、且

一塵を立てざれば、〔蹤を掃い跡を滅す。眼睛を失却い、鼻孔和も失う。〕家国喪亡す」。〔一切処光明。家国を用いて什麼か作ん。全て是れ他家の屋裏の事。〕雪竇、拄杖を拈げて云く、〔須是らく壁立千仞にして始めて得し。達磨来たれり。〕「還た同生同死底の衲僧ありや」。〔我に話頭を還し来たれ。是の如しと雖然も、不平の事を平げんと要せば、須らく雪竇と商量って始めて得し。還た知るや。若し知らば你の自由自在なるを許む。若し知らざれば朝打三千、暮打八百。〕

〔評唱〕 只だ風穴の衆に示して「若し一塵を立つれば家国興盛し、一塵を立てざれば、家国喪亡す」と云う

道、立一塵即是、不立一塵即是。到這裏、須是大用現前始得。所以道、設使言前薦得、猶是滞殻迷封。直饒句下精通、未免触途狂見。他是臨済下尊宿、直下用本分草料。若立一塵、家国興盛、野老顰蹙。意在立国安邦、須藉謀臣猛将、然後麒麟出、鳳凰翔、乃太平之祥瑞也。他三家村裏人、争知有恁麼事。不立一塵、家国喪亡、風颯颯地。野老為什麼出来謳歌。只為家国喪亡。

が如きは、且道（さて）、一塵を立つるが即ち是（ぜ）か、一塵を立てざるが即ち是か。這裏（ここ）に到り、須是（すべか）らく大用現前（だいゆうげんぜん）して始めて得（よ）し。所以（ゆえ）に道（い）う、「設使（たとい）言前に薦得（さと）るも、猶お是れ殻（から）に滞り封（さかい）に迷う。直饒（たとい）句下に精通するも、未だ触途狂見たるを免れず」と。他（かれ）は是れ臨済下の尊宿、直下（ただち）に本分の草料を用う。「若し一塵を立つれば家国興盛し、野老顰蹙す」と。意、国を立て邦（くに）を安んずるは、須らく謀臣猛将に藉（よ）るべしというに在り。然る後に麒麟出で鳳凰翔（かけ）るは乃ち太平の祥瑞なり。他（か）の三家村裏（かたいなか）の人、争（いかで）か恁麼（かよう）なる事有るを知らん。「一塵を立てざれば家国喪亡」して、風颯颯地（さつさつじ）たり。野老為什麼（なにゆえ）にか出で来たりて謳歌す。只だ家国喪亡するが為（ため）なり。

一 （達道者の）偉大なはたらきが発揮される。 二 風穴の上堂語に「大参学眼目、臨機直須大用見前、莫自拘於小節。設使言前薦得、猶是滞殻迷封。縦然句下精通、未免触途狂見」（『伝灯録』一三）と。 三 カラから出られず、一定の限界に封じこまれている。 四 どこででもその独断を振り廻す。 五 本来人としてのパワーの営養源。 六 国が栄えると野老（天子をも仏法をも超脱した自由人）は顔をしかめる。

七『天聖広灯録』一五では、このあとに「野老安貼(ゆったりと安らぐ)」とある。八さわやかに風が吹きわたる(あとの頌にいう万里清風)。

洞下謂之転変処。更無仏無衆生、無是無非、無好無悪、絶音響蹤跡。所以道、金屑雖貴、落眼成翳。又云、金屑眼中翳、衣珠法上塵。己霊猶不重、仏祖是何人。七穿八穴、神通妙用、不為奇特。到箇裏、衲被蒙頭万事休、此時山僧都不会。若更説心説性、説玄説妙、都用不著。何故。他家自有神仙境。

洞下に之を転変の処と謂う。更に仏無く衆生無く、是無く非無く、好無く悪無く、音響蹤跡を絶す。所以に道う、「金屑貴しと雖も、眼に落つれば翳を成す」。又た云く、「金屑は眼中の翳、衣珠は法上の塵。己霊すら猶お重んぜず、仏祖是れ何なる人ぞ」と。七穿八穴、神通妙用なるも、奇特と為ず。箇裏に到りては、「衲被を頭に蒙り万事休む、此の時山僧都て会せず」なり。若し更に心と説い性と説い、玄と説い妙と説うも、都て用に著たず。何故ぞ。他家には自から神仙の境有ればなり。

一 黄金の細片は貴重だが眼に入ったら眼病をおこす。「翳」は目のかすむ病気、瞖に同じ。二 徳山縁密の褒貶句(『雲門広録』下)。「衣珠」は『法華経』五百弟子受記品の寓話で、人が衣服に縫い込んでくれた宝珠。それも法身をけがす塵でしかない。絶対的な価値を立てると、かえってそれは障害となる。三 完膚なきまでに突き破る。四 石頭希遷(七〇〇—七九〇)の「草庵歌」(『伝灯録』三〇)の句。「衲被蒙頭」は外界から自分を遮断すること。

[一]南泉示衆云、[二]黄梅七百高僧、尽是会仏法底人、不得[三]他衣鉢。唯有[四]盧行者、不会仏法、所以得他衣鉢。又云、[五]三世諸仏不知有、狸奴白牯却知有。

南泉、衆に示して云く、「黄梅七百の高僧、尽く是れ仏法を会する底の人なるに、他の衣鉢を得ず。唯だ盧行者のみ有って、仏法を会せず、所以に他の衣鉢を得たり」と。又た云く、「三世の諸仏は、有るを知らず、狸奴と白牯と却って有るを知る」と。

一 南泉普願（七四八—八三四）。 二 湖北省東南端の地。 三 五祖弘忍（六〇一—六七四）を指す。 四 六祖慧能（六三八—七一三）。俗姓は盧。 五 三世諸仏は〈仏法〉の有ることを知らず、猫や牛の方が知っている。

野老或顰蹙、或謳歌。且道、作麼生会。且道、他具什麼眼却恁麼。須知野老門前、別有[一]条章。雪竇双提[二]了、却拈拄杖云、還有同生同死底衲僧麼。当時若有箇漢出来、道得一句、互為賓主、免得雪竇這老漢後面自[三]点胸。

野老或は顰蹙し、或は謳歌す。且道、作麼生か会せん。且道、他は什麼なる眼を具してか却って恁麼なる。須らく知るべし野老の門前に別に条章の有ることを。雪竇双提し了り、却で拄杖を拈げて云く、「還た同生同死底の衲僧有りや」と。当時若し箇の漢の出で来たる有り、一句を道い得て、互に賓主と為らば、雪竇なる這の老漢の、後面に自ら点胸するを免れ得ん。

一 きまり、価値規準。 二 一塵を立てると立てないとの二元世界を提示した。 三 うぬぼれの態度。

【頌】野老従教不展眉、〔三千里外有箇人。美食不中飽人喫。〕且図家国立雄基。〔太平一曲大家知。要行即行、要住即住。尽乾坤大地、是箇解脱門、你作麼生立。〕謀臣猛将今何在、〔有麼、有麼。土曠人稀、相逢者少。且莫点胸。〕万里清風只自知。〔旁若無人。教誰掃地。也是雲居羅漢。〕

【頌】野老は従教い眉を展べずとも、〔三千里外に箇の人有り。美食も飽人の喫には中らず。〕且は家国に雄基を立つることを図らん。〔太平の一曲は大家知る。行かんと要すれば即ち行き、住まらんと要すれば即ち住まる。尽乾坤大地、是れ箇の解脱門、你作麼生か立てん。〕謀臣猛将今何にか在る、〔有りや、有りや。土曠く人稀にして、相逢う者少なし。且は点胸すること莫れ。〕万里の清風只だ自知するのみ。〔旁若無人。誰をしてか地を掃わしめん。也た是れ雲居の羅漢。〕

一 顔をしかめる。顰蹙。 二 家国を問題にしない(仏法にも超然たる)一人の野老がいる。 三 どんなごちそうも満腹の人には食欲をおこさせない。 四 雄大な基盤。 五 天下太平をめでるしらべはみな先刻承知。改めて取り上げてもらうまでもない。 六 曠野には人影もなく出会う者とていない。孤絶独往のさま。 七 (ご自分は風になって結構だが)地上の塵は誰に掃除させるつもりだ。 八 自負高慢の喩え。

〔評唱〕適来双提了也。這裏却只拈一辺、放一辺、裁長補短、捨重従軽。所以道、野老従教不展眉、我且図家国立雄基、謀臣猛将今何在。雪竇拈

〔評唱〕適来は双提し了れり。這裏は却って只だ一辺を拈げ一辺を放て、長を裁ち短を補い、重を捨て軽に従う。所以に道う、「野老は従教い眉を展べずとも、我は且は家国の雄基を立つることを図らん、謀臣猛将

拄杖云、還有同生同死底衲僧麼、一似道還有謀臣猛将麼。一口呑却一切人了也。所以道、土曠人稀、相逢者少。還有相知者麼。出来一坑埋却。万里清風只自知、便是雪竇点胸処也。

今何にか在る」と。雪竇、拄杖を拈げて云く、「還た同生同死底の衲僧有りや」とは、一に「還た謀臣猛将有りや」と道うに似たり。一口に一切の人を呑却し了れり。所以に道う、「土曠く人稀にして、相逢う者少なし」と。還た相知る者有りや。出で来たらば一坑に埋め却まん。「万里の清風只だ自知す」とは、便ち是れ雪竇の点胸の処なり。

第六二則　雲門中有一宝

垂示云、以無師智[1]、発無作妙用[2]、以無縁慈[3]、作不請[4]勝友。向一句下、有殺有活。於一機中、有縦有擒。且道、什麼人曾恁麼来。試挙看。

一 師によらず自然に証得する智慧。 二 情識分別をまじえない絶妙のはたらき。 三 平等無差別の慈悲。
四 求められず自ら進んですぐれた友となる。衆生の導き手をいう。

【本則】挙。雲門[1]示衆云、乾坤[2]之内、〔土曠人稀。六合[3]収不得。〕宇宙之間、〔休向鬼窟裏作活計。蹉過了也。〕中有一宝[4]、〔在什麼処。光生[6]也。切忌向鬼窟裏覓。〕秘在形山[5]。〔拶。点。〕拈灯籠向仏殿裏、〔猶[7]可商量。〕将三[8]門来灯籠上。〔雲門大師是即是、不

第六二則　雲門、中に一宝有り

垂示に云く、無師の智を以て無作の妙用を発し、無縁の慈を以て不請の勝友と作る。一句下に殺あり活あり。一機中に縦あり擒あり。且道、什麼なる人か曾て恁麼にし来たる。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。雲門、衆に示して云く、「乾坤の内、〔土曠く人稀なり。六合収め得ず。〕宇宙の間、〔鬼窟裏に向いて活計を作すことを休めよ。蹉過い了れり。〕中に一宝有り、〔什麼処にか在る。光生ぜり。切に忌む鬼窟裏に向いて覓むることを。〕形山に秘在す、〔拶。点。〕灯籠を拈げて仏殿裏に向い、〔猶お商量すべし。〕三門を将て灯籠上に来たらしむ」。〔雲門

妨誵訛。猶較些子。若子細検点将来、九未免屎臭気。」

大師是なることは即ち是なるも、不妨(なかなか)に誵訛(むつかしげ)なり。猶お些子(すこ)く較(たが)えり。若し子細に検点し将(も)ち来たらば、未だ屎臭(ししゅう)の気を免れず。」

一 雲門文偃(八六四—九四九)。二 僧肇(三八四—四一四?)撰とされる『宝蔵論』の句による。三 天地四方にも収めきれない。四 仏性を指す。五 肉体を指す。六 グサリ。そら、ここだ! 七 これはまだ話としてわかる。八 禅院の正門。山門。九 どうも糞のにおい(悟りくささ)がする。

【評唱】 雲門道、乾坤之内、宇宙之間、中有一宝、秘在形山。且道、雲門意在釣竿頭一、意在灯籠上。此乃肇二法師宝蔵論数句。雲門拈来示衆。肇公時於後秦三逍遥園造論。写維摩経、方知荘老五未尽其妙。肇乃礼羅什四為師。又参瓦棺寺跋陀婆羅菩薩、従西天二十七祖処、伝心印来。肇深造其堂奥。肇一日遭難。臨刑之時、乞七日暇、造宝蔵論。

【評唱】 雲門道(いわ)く、「乾坤の内、宇宙の間、中に一宝有り、形山に秘在す」と。且(さて)道、雲門は意は釣竿頭に在るか、意は灯籠上に在るか。此れ乃ち肇法師の『宝蔵論』の数句なり。雲門拈(とりあ)げ来たりて衆に示す。肇公、時に後秦(こうしん)の逍遥園に於て論を造る。『維摩経』を写して、方(はじ)めて荘老の未だ其の妙を尽さざることを知る。肇乃ち羅什(らじゅう)を礼(らい)して師と為す。又た瓦棺寺(がかんじ)の跋陀婆羅(ばつだばら)菩薩(ぼさつ)の、西天(さいてん)二十七祖の処より、心印を伝え来たるに参ず。肇深く其の堂奥に造(いた)る。肇、一日、難に遭う。刑に臨むの時、七日の暇(いとま)を乞い、『宝蔵論』を造る。

一 頌の「釣竿」を念頭に置く。「頭」は名詞接尾語。二 僧肇。三 五胡十六国の一つ(三八四—四一

七)。四 鳩摩羅什(三四四—四一三)。ただし、生卒年に異説あり。五 仏駄跋陀羅(三五九—四二九)。

雲門便拈論中四句示衆。大意云、如何以無価之宝[一]、隠在陰界[二]之中。論中語言、皆与宗門説話[三]相符合。不見鏡清[四]問曹山[五]、清虚之理、畢竟無身時[六]如何。山云、理即如是、事作麼生。清云、如理如事[七]。山云、瞞曹山一人即得、争奈諸聖眼何。清云、若無諸聖眼、争知不恁麼。山云、官不容針、私通車馬[八]。所以道、乾坤之内、宇宙之間、中有一宝、秘在形山。大意明人人具足[九]、箇箇円成。

雲門、便ち論中の四句を拈げて衆に示す。大意に云く、如何ぞ無価の宝を以て、陰界の中に隠在すと。論中の語言、皆な宗門の説話と相符合す。見ずや鏡清、曹山に問う、「清虚の理、畢竟身無き時如何」。山云く、「理は即ち是の如し、事は作麼生」。清云く、「如に理、如に事なり」。山云く、「曹山一人を瞞すことは即ち得るも、諸聖の眼を争奈何せん」。清云く、「若し諸聖の眼無くんば、争か恁麼ならざるを知らん」。山云く、「官には針をも容れず、私には車馬をも通す」と。所以に道う、「乾坤の内、宇宙の間、中に一宝有り、形山に秘在す」と。大意は人人具足、箇箇円成するを明す。

一 価値の測りしれない宝。二「陰」は五蘊。現象の世界。三 禅門の言説。四 鏡清道怤(八六八—九三七)。五 曹山本寂(八四〇—九〇一)。六「清虚之理、畢竟無身」は『宝蔵論』の句。七 そのまま理であり、そのまま事である。八 表向きは針一本も許さぬが、裏口からは車馬も通れる。官界の内

実を衝いた俗諺。九 誰もがそなえており、ひとりひとりが欠けるところなく成就している。

雲門便拈来示衆、已是十分現成。不可更似座主[一]相似、与你注解去。他慈悲更与你下注脚道、拈灯籠向仏殿裏、将三門来灯籠上。且道、雲門恁[二]麼道、意作麼生。不見古人云、無明実性即仏性、幻化空身即法身。又云、[三]即凡心而見仏心。形山即是四大五蘊也、中有一宝、秘在形山。所以道、[四]諸仏在心頭、迷人向外求。[五]内懐無価宝、不識一生休。又道、仏性堂堂顕現、住相有情難見。若悟衆生無我、我面何殊仏面。[六]心是本来心、面是娘生面。劫石可移動、箇中無改変。有者只認[七]箇昭昭霊霊為[八]宝。只是不得其用、亦不得其妙、所以動転不得、開

雲門便ち拈げ来たりて衆に示すは已是に十分に現成す。更に座主の似くに相似て、你が与に注解し去るべからず。他慈悲もて更に你が与に注脚を下して道く、「灯籠を拈げて仏殿裏に向い、三門を将て灯籠上に来たらしむ」と。且道、雲門恁麼に道う意は作麼生。見ずや古人云く、「無明の実性は即ち仏性、幻化の空身は即ち法身なり」と。又た云く、「凡心に即して仏心を見る」と。「形山」とは即ち是れ四大五蘊なり、中に一宝有り、形山に秘在す。所以に道う、「諸仏は心頭に在るも、迷人は外に向って求む。内に無価の宝を懐くも、識らずして一生休す」と。又た道く、「仏性堂堂として顕現するも、相に住するの有情は見難し。若し衆生無我なるを悟らば、我が面何ぞ仏面に殊ならん」。「心は是れ本来心、面は是れ娘生の面。劫石は移動すべくとも、箇中には改変無し」と。有る者は只だ箇

撥不行。古人道、[九]窮則変、変則通。

の昭昭霊霊を認めて宝と為す。只だ是れ其の用を得ず、亦た其の妙を得ず、所以に動転し得ず、開撥し行れず。古人道く、「窮すれば則ち変じ、変ずれば則ち通ず」と。

一 経典を講義する僧。二 永嘉玄覚(六七五―七一三)述とされる『証道歌』の句。三 澄観『華厳経疏』一に見える。四 未詳。五 長沙景岑の偈。ただし『伝灯録』一〇で「住相」を「住性」とするのが正しい。六 南嶽懶瓚和尚歌の句。ただし『伝灯録』三〇では「本来心」を「無事心」とする。「劫石」は周囲四〇里の大石。「箇中」は仏性を指す。七 本来の主人公の躍動するさま。八 自在に動き回れない。九『周易』繋辞下伝の句。

拈灯籠向仏殿裏、*若是常情、可測度得。将三門来灯籠上、還測度得麼。雲門与你一時打破情識意想得失是非了也。雪竇道、[一]我愛韶陽新定機、一生与人抽釘抜楔。又云、[二]曲木拠位知幾何、利刃翦却令人愛。他道、拈灯籠向仏殿裏。這一句、已截断了也。又将三門来灯籠上。若論此事、如撃

「灯籠を拈げて仏殿裏に向う」は、若是常情なれば、測度り得べし。「三門を将て灯籠上に来たらしむ」は、還た測度り得んや。雲門は你が為に一時に情識意想、得失是非を打破し了れり。雪竇道く、「我は愛す韶陽新定の機、一生人の与に釘を抽き楔を抜く」と。又た云く、「曲木、位に拠る、知んぬ幾何ぞ、利刃もて翦却すること人をして愛せしむ」と。他道く、「灯籠を拈げて仏殿裏に向う」と。這の一句、已に截断し了れ

石火、似閃電光。雲門道、汝若相当**三去、且覓箇入路。四微塵諸仏、在你脚跟下。三蔵聖教、在你舌頭上。不如悟去好。五和尚子莫妄想。天是天、地是地。山是山、水是水。僧是僧、俗是俗。良久云、与我拈面前按山来看。六便有僧出問云、学人見山是山、水是水時如何。門云、三門為什麽従這裏過。七恐你死却、遂以手劃一劃云、識八得時、是醍醐上味、若識不得、反為毒薬也。

り。又た「三門を将て灯籠上に来たらしむ」と。若し此の事を論ぜば、撃石火の如く、閃電光の似し。雲門道く、「汝若し相当し去かざれば、且は箇の入路を覓めよ。微塵の諸仏、你が脚跟下に在り。三蔵の聖教、你が舌頭上に在り。如かじ悟り去るの好からんには。和尚子妄想すること莫れ。天は是れ天、地は是れ地。山は是れ山、水は是れ水。僧は是れ僧、俗は是れ俗」。良久して云く、「我が与に面前の按山を拈げ来たり看よ」と。便ち僧の出でて問う有り、云く、「学人の山は是れ山、水は是れ水と見る時如何」。門云く、「三門為什麽にか這裏を過る」と。你が死却せんを恐れて、遂に手を以て劃一劃して云く、「識得する時は、是れ醍醐の上味、若し識不得ならば、反って毒薬と為る」と。

＊若是〜度得　福本は「若用作常情、何以測度得」。　＊＊若相当去　蜀本・福本は「若不相当去」。これに従う。

一　第六則・本則の評唱に既出。「韶陽」は雲門を、「新定」は睦州を指し、「韶陽新定機」とは、雲門が用いた睦州の機略、また、斬新で定識ある霊機の意を含ませる。　二『祖英集』の「送勝因長老」の

句。説法の座に着いている師家は幾人いるとも知れぬほどだが、ただ雲門だけが鋭い禅機を振い、称えられている。三（この問題と）ピタリと嚙み合えないなら。四 悟入への手がかり。五「子」は接尾語。六 主山に対して比較的低い手前の山。七 さっと線を引く。八 その本質を見て取る。

所以道、了了了時無可了、玄玄玄処直須呵。雪竇又拈云、乾坤之内、宇宙之間、中有一宝、秘在形山。掛在壁上、達磨九年、不敢正眼覷著。而今衲僧要見、劈脊便棒。看佗本分宗師、終不将実法繫綴人。玄沙云、羅籠不肯住、呼喚不回頭。雖然恁麼、也是霊亀曳尾。雪竇頌云、

所以に道く、「了了了の時了ずべき無し、玄玄玄の処直だ須らく呵すべし」と。雪竇又た拈げて云く、「乾坤の内、宇宙の間、中に一宝有り、形山に秘在す。壁上に掛在くるも、達磨九年、敢て正眼覷著せず。而今衲僧見んと要すれば、劈脊に便ち棒せん」と。看よ佗の本分の宗師、終に実法を将て人を繫綴ることをせず。玄沙云く、「羅籠するも住まることを肯ぜず、呼喚べども頭を回らさず。恁麼なりと雖然も、也た是れ霊亀尾を曳く」と。雪竇の頌に云く、

＊秘在形山　福本に無し。

一 同安常察の『十玄談』正位前に「了了了時無所了、玄玄玄処亦須訶」と。徹底大悟すれば悟りも無い、玄妙究極のところなど吹き飛ばしてしまえ。二 まともに見る。三 常住不変なる絶対の定理。四 丸め込もうとしても受けつけないし、呼びとめても振り向かない。独立独歩の大丈夫児をいう。

【頌】看看、〔高著眼。用看作什麼。

【頌】看よ看よ、〔高く眼を著けよ。看ることを用い

一驪龍玩珠。〕古岸何人把釣竿。〔孤危甚孤危、壁立甚壁立、賊過後張弓。二脳後見腮、莫与往来。〕三雲冉冉、〔打断始得。四百匝千重。五炙脂帽子、鶻臭布衫。〕六水漫漫。〔左之右之、前遮後擁。〕七明月蘆花君自看。〔八看著則瞎。若識得雲門語、便見雪竇末後句。〕

て什麼か作ん。驪龍珠を玩ぶ。〕古岸何人か釣竿を把る。〔孤危は甚も孤危、壁立は甚も壁立なるも、賊過ぎし後に弓を張る。脳後に腮を見れば、与に往来すること莫れ。〕雲は冉冉、〔打断りて始めて得し。百匝千重。炙脂の帽子、鶻臭の布衫。〕水は漫漫。〔左之右之して、前に遮り後に擁ぐ。〕明月蘆花、君自ら看よ。〔看著すれば則ち瞎す。若し雲門の語を識得せば、便ち雪竇の末後の句を見ん。〕

一 驪龍はあごの下に宝珠を持つと言われ、それは仏性に喩えられる。その宝珠を龍自身がめでている情景。 二 頭の後ろに顔のあるような怪け物とはつきあうな。 三 雲の動くさま。 四 百重千重にとり巻かれているではないか。 五 あかじみた帽子と腋臭くさい肌着。禅臭がふっ切れていない状態。 六 湛える水のはてしないさま。 七 明月と蘆花とがたがいに照りはえ、個別相を消し去った情景。 八 見つめたら目がつぶれる。そのものに執われたら自己を喪失する。

〔評唱〕若識得雲門語、便見雪竇為人処。他向雲門示衆後面両句、便与你下箇注脚云、看看。你便作瞠眉瞠眼会、且得没交渉。古人道、霊光独

〔評唱〕若し雲門の語を識得せば、便ち雪竇の為人の処を見ん。他は雲門の衆に示す後面の両句に向いて、便ち你が与に箇の注脚を下して云う、「看よ看よ」と。你便ち瞠眉瞠眼の会を作さば、且得没交渉。古人道く、

耀、迥脱根塵[四]。体露真常[五]、不拘文字。心性無染、本自円成。但離妄縁、即如如仏[六]。若只向瞠眉努眼処坐殺[七]、豈能脱得根塵。雪竇道、看看、雲門如在古岸把釣竿相似。雲又冉冉、水又漫漫。明月映蘆花、蘆花映明月。正当恁麽時、且道、是何境界。若便直下見得、前後只是一句相似。

「霊光独り耀いて、迥に根塵を脱す。真常を体露し、文字に拘れず。心性に染無く、本自より円成す。但だ妄縁を離るれば、即ち如如仏」と。若し只だ瞠眉努眼の処に坐殺らば、豈に能く根塵を脱得せんや。雪竇道わく、「看よ看よ」とは、雲門、古岸に在りて釣竿を把るが如くに相似たり。雲又た冉冉、水又た漫漫。明月は蘆花に映じ、蘆花は明月に映ず。正当恁麽なる時、且道、是れ何の境界ぞ。若し便ち直下に見得せば、前後只だ是れ一句なるに相似ん。

一 眉をあげ、眼をみひらく。「瞠眉努眼」も同じ。 二 百丈懐海(七四九―八一四)の法嗣、古霊神讃。語は『伝灯録』九に見えるが、『祖堂集』一六には百丈の「禅門心要」の句として引く。 三 霊妙な光明。衆生本具の仏性を指す。 四 感覚や認識およびその対象。六根・六塵。 五 永遠不変の真実相がそのまま丸出し。 六 仏そのもの。 七 尻をすえる。収まりかえる。

第六三則　南泉両堂争猫

垂示云、意[一]路不到、正好提撕[二]。言[三]詮不及、宜急著眼。若也電転星飛、便[四]可傾湫倒嶽。衆中莫有辨得底麼。試挙看。

一 思慮分別の及ばないところ。二 師匠が修行者を指導すること。三 言語表現を超えたところ。四 池の水をくつがえし、高山をさかさまにする。桁はずれの力量を発揮する。

【本則】挙。南泉一日、東[一]西両堂争猫児。〔不是[*]今日[二]合鬧、也[三]一場漏逗。〕南泉見遂提起云、道得即不斬。〔[四]正令当行、十方坐断。這老漢有定龍蛇手脚。〕衆無対。〔可惜放過。[五]一隊漆桶、堪作什麼。杜撰禅和、如麻似粟。〕泉斬猫児為両段。〔快哉、快

第六三則　南泉、両堂に猫を争う

垂示に云く、意路の到らざる、正に好し提撕するに。言詮の及ばざる、宜しく急と眼を著くべし。若也電転じ星飛ばば、便ち湫を傾け嶽を倒す。衆中に辨得す底有るなきや。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。南泉、一日、東西の両堂、猫児を争う。〔是れ今日合鬧なるのみにあらず、也た一場の漏逗。〕南泉見て遂に提起して云く、「道い得ば即ち斬らず」。〔正令当行して、十方坐断せらる。這の老漢龍蛇を定むる手脚有り。〕衆対なし。〔惜しむべし放過せり。一隊の漆桶、堪く什麼をか作さん。杜撰の禅和、麻の如く粟の似し。〕泉、猫児を斬って両段と為す。〔快哉、

哉。若不如此、尽是弄泥団漢。賊過後張弓、已是第二頭。未挙起時、好打。」

〔評唱〕宗師家、看他一動一静、一出一入。且道、意旨如何。這斬猫児話、天下叢林、商量浩浩地。有者道、提起処便是。有底道、在斬処。且得都没交渉。他若不提起時、亦匝匝地作尽道理。殊不知、他古人有定乾坤底眼、有定乾坤底剣。你且道、畢竟是誰斬猫児。只如南泉提起云、道得即不斬、当時忽有人道得、且道、南泉斬不斬。所以道、正令当行、十方坐断。出頭天外看、誰是箇中人。其

快哉。若し此の如くならずんば、尽く是れ泥団を弄するの漢。賊過ぎし後に弓を張るは、已に是れ第二頭。未だ挙起せざる時に好し打て。」

＊不是〜漏逗　福本は「不可今日合閙一場、這漢漏逗」。

一 東西の僧堂の僧たちが猫をめぐって争った。二 多勢でさわぐ。三 破綻を招いた一件。四 法令がまともに施行されて、天下は押さえこまれた。五 妄昧愚痴の集団。六 後手に回ってしまった。

〔評唱〕宗師家につき、看よ他の一動一静、一出一入を。且道、意旨如何。這の猫児を斬る話、天下の叢林、商量浩浩地なり。有る者は道う、「提起する処は便ち是なり」と。有る底は道う、「斬る処に在り」と。且得都て没交渉。他は若し提起せざる時も、亦た匝匝地に道理を作し尽せり。殊に知らず、他の古人に乾坤を定むる底の眼有り、乾坤を定むる底の剣有ることを。你且道え、畢竟是れ誰か猫児を斬る。只だ南泉提起して「道い得ば即ち斬らじ」と云うが如きは、当時忽し人の道い得る有らば、且道、南泉斬るか斬らざるか。所以に道う、「正令当に行われ、十方坐断せらる」と。

実当時元不斬。此話亦不在斬与不斬処。此事軒[四]知、如此分明。不在情塵[五]意見上討。若向情塵意見上討、則辜負南泉去。但向当鋒剣刃上看。是有也得、無也得、不有不無也得。所以古人道、窮則変、変則通。而今人不解変通、只管向語句上走。南泉恁麼提起、不可教人合下[六]得甚語、只要教人自薦、各各自用自知。若不恁麼会、卒摸索不著。雪竇当頭頌云、

天外に出頭して看よ、誰か是れ箇中の人。其の実は当時元より斬らず。此の話亦た斬ると斬らずとの処に在らず。此の事軒かに知らん、此の如く分明なることを。情塵意見の上に討ねざれ。若し情塵意見の上に討ねば、則ち南泉に辜負き去らん。但だ当鋒剣刃上に向いて看よ。是れ有も也た得く、無も也た得し、不有不無も也た得し。所以に古人道く、「窮すれば則ち変じ、変ずれば則ち通ず」と。而今の人変通を解せずして、只管に語句上を走る。南泉恁麼に提起するは、人をして合下に甚なる語をも得せしむべからず、只だ人をして自ら薦め、各各自ら用い自ら知らしめんと要す。若し恁麼に会せずんば、卒に摸索不著らん。雪竇当頭に頌して云く、

一 まんべんなく。隅々まで行きとどいて。二 天下の秩序を安定させる眼力。三 天外に頭を出して、悟・不悟の次元を超えよ。四「軒」は「懸」と同音通用。時空を超えてそれと解る。五 思弁の働き。六 すぐに、その場で。

【頌】両堂倶是杜禅和[一]、親言[二]出親

【頌】両堂倶に是れ杜禅和、親言は親口より出づ。

口。一句道断。拠款結案。〕撥動煙塵不奈何。〔看你作什麼折合。現成公案。也有些子。〕頼得南泉能挙令、〔挙払子云、一似這箇。王老師猶較些子。好箇金剛王宝剣、用切泥去也。〕一刀両段任偏頗。〔百雑砕。忽有人按住刀、看他作什麼。不可放過也。便打。〕

一句もて道断る。款に拠って案を結す。〕煙塵を撥動して奈何ともせず。〔你什麼なる折合を作すかを看ん。現成公案。也た些子有り。〕頼得に南泉能く令を挙して、〔払子を挙して云く、一に這箇に似たり。王老師猶お些子く較えり。好箇な金剛王の宝剣、用て泥を切り去れり。〕一刀両段して偏頗に任す。〔百雑砕。忽し人の刀を按住くる有らば、看よ他什麼をか作さん。放過すべからず。便ち打つ。〕

＊這箇　福本は「這」。　＊＊作什麼　福本は「作麼生」。

一 いい加減な禅坊主。杜撰禅和。二 この人ならではのことば。三 たいへんな大喧嘩になった。「煙塵」は、戦塵。四 しめくくりをつける。決着。五 裁かれるべきものとして目の前に呈示された案件。六 法令を提示する。ここでは、絶対の断を下す。七 王は南泉の俗姓。八 行きすぎもかまわず、一刀両断にした。

〔評唱〕両堂倶是杜禅和、雪竇不向句下死、亦不認驢前馬後、有撥転処、便道、撥動煙塵不奈何。雪竇与南泉把手共行、一句説了也。両堂首座、

〔評唱〕「両堂倶に是れ杜禅和」と、雪竇は句下に向いて死せず、亦た驢前馬後を認めず、撥転する処有りて、便ち道う、「煙塵を撥動して奈何ともせず」と。雪竇は南泉と手を把って共に行き、一句に説き了れり。

没歇[三]頭処、到処只管撥動煙塵、奈何不得。頼得南泉与他断這公案、収得浄尽。他争奈前[四]不搆村、後不迭店。所以道、頼得南泉能挙令、一刀両段任偏頗。直下一刀両段、更不管有偏頗。且道、南泉拠什麼令。

両堂の首座は歇頭する処没く、到る処に只管煙塵を撥動して、奈何ともなし得ず。頼得に南泉他らの与に這の公案を断じて、収得浄尽たり。他ら争奈せん、前むも村に搆らず、後るも店に迭ばず。所以に道う、「頼得に南泉能く令を挙して、一刀両段して偏頗に任す」と。直下と一刀両段して、更に偏頗有るも管わず。且道、南泉は什麼なる令にか拠る。

一 あごで使われる従者の立場になることに甘んぜず。二 手玉に取ってあやつる。三 ケリをつける。始末する。四 前へ進んでも村にはたどり着けず、引き返しても旅籠には行き着けぬ。行きもならず戻りもならず。

第六四則　南泉問趙州

【本則】挙。南泉復挙前話、問趙州[一]。〔也須是同心同意始得*。同道者方[二]知。〕州便脱草鞋、於頭上戴出。〔不[三]免拖泥帯水。〕南泉云、子若在、恰救得猫児。〔[四]唱拍相随。知音者少。[五]将錯就錯。〕

＊得　福本はこの下に「不消更斬」と有り。

一 趙州従諗(七七八―八九七)。二 同じ道を歩むものだけが分る。三 べとべとの泥まみれ。四 歌とひょうしとが調和する。五 自分の過ちをうまく丸めあげる。

〔評唱〕趙州乃南泉的子、道頭会尾、挙著便知落処。南泉晩間復挙前話問趙州。州是老作家、便脱草鞋、於頭上戴出。泉云、子若在、却救得猫児。且道、真箇恁麼不恁麼。南泉云、道

第六四則　南泉、趙州に問う

【本則】挙す。南泉復た前話を挙して趙州に問う。〔也た須是らく同心同意にして始めて得し。同道の者にして方めて知る。〕州便ち草鞋を脱ぎ、頭上に戴せて出づ。〔免れず拖泥帯水なることを。〕南泉云く、「子若し在らば、恰に猫児を救い得てんに」。〔唱拍相随う。知音の者少なし。錯を将て錯を就す。〕

〔評唱〕趙州は乃ち南泉の的子なり、頭を道えば尾を会し、挙著するや便ち落処を知る。南泉晩間に、復た前話を挙して趙州に問う。州は是れ老作家、便ち草鞋を脱ぎ、頭上に戴せて出づ。泉云く、「子若し在らば却って猫児を救い得てんに」と。且道、真箇に恁麼か

得即不斬。如撃石火、似閃電光。趙州便脱草鞋、於頭上戴出。佗参活句、不参死句。日日新、時時新。千聖移易一糸毫不得。須是[一]運出自己家珍、方見他全機大用。*他道、[二]我為法王、於法自在。人多錯会道、趙州権将草鞋作猫児。有者道、待他云、道得即不斬、便戴草鞋出去。自是你斬猫児、不干我事。且得没交渉。只是弄精魂。殊不知、古人意、如天普蓋、似地普擎。他父子相投、機鋒相合。[三]那箇挙頭、他便会尾。如今学者、不識古人[四]転処、空去意路上卜度。若要見、但去他南泉・趙州転処便見好。頌云、

恁麼ならざるか。南泉云く、「道い得ば即ち斬らじ」と。撃石火の如く、閃電光の似し。趙州便ち草鞋を脱ぎ、頭上に戴せて出づ。佗活句に参じて死句に参ぜず。日日に新たに、時時に新たなり。千聖すら一糸毫も移易ることを得ず。須是らく自己の家珍を運出して、方めて他の全機大用を見るべし。他道う、「我法王為りて、法に於て自在なり」と。人多く錯り会して道う、「趙州は権に草鞋を将て猫児と作す」と。有る者は道う、「他の『道い得ば即ち斬らじ』と云うを待って、便ち草鞋を戴せて出で去る。自是より你が猫児を斬るのみ、我が事に干らず」と。且得没交渉。只だ是れ精魂を弄すのみ。殊に知らず、古人の意は天の普く蓋うが如く、地の普く擎ぐるが似きを。他の父子は相投じ、機鋒相合う。那箇頭を挙せば、他便ち尾を会す。如今の学者、古人の転処を識らず、空しく意路上に去いて卜度る。若し見んと要せば、但だ他の南泉・趙州の転処に去いて便ち見れば好し。頌に云く、

＊他道　福本は「不見道」。

一 己れに本来そなわっている持ち前を発揮する。 二 第六一則・本則の著語に既出。 三 かれ。南泉を指す。 四 坐標軸の転換。転換された視点の勘どころ。

【頌】[一]公案円来問趙州、〔言猶在耳。不消更斬。[二]喪車背後懸薬袋。〕[三]長安城裏任閑遊。〔[四]得恁麼快活。得恁麼自在。〕[五]信手拈来草。不可不教你恁麼去也。〕草鞋頭戴無人会、〔也有一箇半箇。〕[六]別是一家風。[七]明頭也合、暗頭也合。〕[八]帰到家山即便休。〔脚跟下好与三十棒。且道、過在什麼処。只為你無風起浪。彼此放下。只恐不恁麼。恁麼也大奇。〕

【頌】公案円かになり来たって趙州に問い、〔言猶お耳に在り。更に斬ることを消いず。喪車の背後に薬袋を懸く。〕長安城裏、閑遊するに任す。〔恁麼の快活なるを得たり。恁麼の自在なるを得たり。〕手に信せて草を拈み来たる。〔你をして恁麼去らしめざるべからず。〕草鞋を頭に戴す、人の会するもの無し、〔也た一箇半箇あり。〕別に是れ一家風。〔明頭も也た合し暗頭も也た合す。〕家山に帰り到って即便ち休す。〔脚跟下好し三十棒を与えん。且道、過は什麼処にか在る。只だ你が風無きに浪を起すが為なり。彼も此も放下せ。只だ恐らくは恁麼ならず。恁麼ならば也た大いに奇なり。〕

一 一件落着して。 二 手おくれなのに未練がましい。 三「長安」は、趙州のいる世界。「任閑遊」は、趙州が飄々として我が天下を気ままに遊び回っていたこと(外出していた趙州の在りようをいう)。 四「得恁麼〻」は、よくもそのように〻することができたものだ。 五 文殊が善財童子に薬草を採りに

行かせた。童子は手当り次第に草を採ったが、どれもみな薬草だったという故事。六 また別格の在り方だ。七 ことばで言えるところでもぴたり、ことばのとどかぬところでもぴたり。七三則・本則の評唱を参照。八 ふるさと（本来の家郷）に戻ってそのまま安息。

〔評唱〕　公案円来問趙州、慶蔵主道、如人結案相似。八棒是八棒、十三是十三。已断了也。却拈来問趙州、州是他屋裏人、会南泉意旨。他是透徹底人、塹著磕著便転、具本分作家眼脳、纔聞挙著、剔起便行。雪竇道、長安城裏任閑遊、漏逗不少。古人道、長安雖楽、不是久居。又云、長安甚閙、我国晏然。也須是識機宜、別休咎始得。草鞋頭戴無人会、戴草鞋処、這些子、雖無許多事、所以道、唯我能知、唯我能証、方見得南泉・趙州・雪竇同得同用処。且道、而今作麼生会。帰到家山即便休、什麼処是

〔評唱〕「公案円かになり来たって趙州に問う」につき、慶蔵主道く、「人の案を結すが如くに相似たり。八棒には是れ八棒、十三には是れ十三。已に断じ了れり」と。却に拈げ来たりて趙州に問うに、州は是れ他の屋裏の人にして、南泉の意旨を会す。他は是れ透徹底の人なれば、塹著磕著するや便ち転じ、本分の作家の眼脳を具して、挙著するを聞くや纔や剔起して便ち行く。雪竇道く、「長安城裏、閑遊するに任す」とは、漏逗少なからず。古人道く、「長安楽しと雖も、是れ久しく居るところにあらず」。又た云く、「長安甚だ閙し、我が国晏然なり」と。也た須是らく機宜を識り、休咎を別ちて始めて得し。「草鞋を頭に戴す、人の会するもの無し」とは、草鞋を戴する処、這の些子、許多しき事無しと雖も、所以に道う、唯だ我のみ能く

家山。他若不会、必不恁麼道。他既会、且道、家山在什麼処。便打。

知り、唯だ我のみ能く証して方めて南泉・趙州・雪竇の同得同用の処を見得せん。且道、而今作麼生か会せん。「家山に帰り到って即便ち休す」とは、什麼処か是れ家山。他若し会せずんば、必ず恁麼には道わじ。他既に会せば、且道、家山は什麼処にか在る。便ち打つ。

一 圜悟の同学。蔵主は経蔵を管理する役名。二 罪状に従って八棒あるいは十三棒の判決を下した。三 突つかれるや、自在に身を転ずる。四 地を蹴ってさっと行ってしまう。五 瑯琊慧覚。雪竇と同時代の人。六『伝灯録』一四・高沙弥章に「(薬山)問師曰、見説長安甚閙。師曰、我国晏然」と。七「所以道」の三字は衍文か。八 同じように体得し、作用する。

第六五則　外道問仏有無

垂示云、[一]無相而形、充十虚而方広。無心而応、[二]偏刹海而不煩。[三]挙一明三、目機銖両。直得棒如雨点、喝似雷奔、也[四]未当得[五]向上人行履在。且道、作麼生是向上人事。試挙看。

第六五則　外道、仏に有無を問う

垂示に云く、無相にして形れ、十虚に充ちて方広たり。無心にして応じ、刹海に偏くして煩しからず。挙一明三、目機銖両。直得棒は雨の如く点り、喝は雷の如く奔るも、也た未だ向上の人の行履に当得せざる在。且道、作麼生か是れ向上の人の事。試みに挙し看ん。

一　固定された形相が無く、無限の空間に充満する。　二　宇宙いっぱいに行きわたったそれが、胸もたれすることはない。　三　一を挙げれば直ちに三を了解し、一目でわずかな軽重も見抜く。　四　ぴたりと核心に当る。　五　悟りを超えた境地の人のあり方。

【本則】　挙。[一]外道問仏、不問有言、不問無言。〔雖然不*是[二]屋裏人、也有些子香気。〕[三]双剣倚空飛。〔[四]頼是不問。〕世尊良[五]久。〔莫謗世尊。其声如雷。坐者立者、皆動他不得。〕外道讃歎云、世尊大慈大悲、開我迷雲、令我

【本則】　挙す。外道、仏に問う、「有言を問わず、無言を問わず」。〔是れ屋裏の人ならずと雖然も、也た些子の香気有り。〕双剣、空に倚りて飛ぶ。〔頼是に問わず。〕世尊良久す。〔世尊を謗ること莫れ。其の声雷の如し。坐者も立者も皆な他を動かし得ず。〕外道讃歎して云く、「世尊の大慈大悲、我が迷雲を開いて、我をして

得入。〔伶俐漢一撥便転。盤裏明珠。〕外道去後、阿難問仏。外道有何所証而言得入。〔不妨令人疑著。也要大家知、錮鑄著生鉄。〕仏云、如世良馬見鞭影而行。〔且道、喚什麼作鞭影。打一払子。棒頭有眼明如日、要識真金火裏看。拾得口喫飯。〕

得入せしむ」。〔伶俐の漢は一撥すれば便ち転ず。盤裏の明珠。〕外道去りし後、阿難、仏に問う、「外道は何の所証有りてか、得入すと言える」。〔不妨に人をして疑著せしむ。也た大家知るを要するも、錮鑄して生鉄を著く。〕仏云く、「世の良馬の、鞭影を見て行くが如し」。〔且道、什麼を喚んでか鞭影と作す。打つこと一払子。棒頭に眼有り明るきこと日の如し、真金を識らんと要せば火裏に看よ。口の飯を喫するを拾い得たり。〕

＊不是　底本は「如是」だが、福本に従って改める。

一 仏教以外の教えを信奉する人。二 仏教の世界の人ではないが、いささか高邁な風格が有る。三 「有言」と「無言」という二本の剣が空を飛ぶ。四 問われなくてよかった(もし問われたら、その剣で命を断たれただろう)。五 しばらく無言でいる。六 悟入への手がかりをつかむ。七 打てば響く。八 盤の中を転がる珠。俊敏さ自在さの喩え。九 仏の十大弟子の一人。一〇 頑丈な生鉄を鋳かけようとする。とても不可能なことの喩え。一一 第二〇則・本則の評唱にも。一二 食う飯にありついた。

〔評唱〕此事若在言句上、三乗十二分教、豈是無言句。或道無言便是、

〔評唱〕此の事若し言句の上に在らば、三乗十二分教、豈に是れ言句無からんや。或し無言便ち是と道わば、

＊又何消祖師西来作什麽。只如従上来許多公案、畢竟如何見其下落。這一則公案、話会者不少。有底喚作良久、有底喚作拠坐、有底喚作黙然不対。且喜没交渉。幾曾摸索得著来。此事其実不在言句上、亦不離言句中。若稍有擬議、則千里万里去也。看他外道省悟後、方知亦不在此、亦不在彼、亦不在是、亦不在不是。且道、是箇什麽。

又た祖師の西来を消いて什麽か作ん。只だ従上来の許多の公案の如きは、畢竟如何か其の下落を見ん。這の一則の公案、話会する者少なからず。有る底は喚んで良久と作し、有る底は喚んで拠坐と作し、有る底は喚んで黙然として対えずと作す。且喜たくも没交渉。幾ぞ曾て摸索り得著て来たらん。此の事は其実に言句の上に在らず、亦た言句の中を離れず。若し稍かに擬議有らば、則ち千里万里にし去らん。看よ他の外道省悟の後、方めて知る、亦た此に在らず、亦た彼に在らず、亦た是に在らず、亦た不是に在らざることを。且道、是れ箇の什麽ぞ。

＊何　衍字として削る。
一　雲門の語。第九則・本則の評唱に既出。　二　話の筋を追って理解する。　三　腰をどっしりと据える。
四　ぴたりとさぐり当てられたためしがない。

一 天衣懐和尚頌云、維摩不黙不良久、拠坐商量成過咎。吹毛匣裏冷光寒、外道天魔皆拱手。百丈常和尚参法眼。

天衣の懐和尚頌して云く、「維摩黙せず良久せず、拠坐して商量せば過咎を成す。吹毛は匣の裏にて冷光寒じ、外道も天魔も皆な手を拱く」と。百丈の常和尚、

眼令看此話。法眼一日問、你看什麼因縁[五]。常云、外道問仏話。眼云、你試挙看。常擬開口。眼云、住住。你擬向良久処会那[六]。常於言下、忽然大悟。後示衆云、百丈有三訣、喫茶・珍重・歇。擬議更思量、知君猶未徹。翠巌真[七]点胸拈云、六合[八]九有[九]、青黄赤白[一〇]、一一交羅[一一]。

法眼に参ず。眼、此の話を看せしむ。法眼、一日問う、「你什麼なる因縁をか看る」。常云く、「外道問仏の話」。眼云く、「你試みに挙し看よ」。常、口を開かんと擬す。眼云く、「住みね住みね。你良久の処に向いて会せんと擬するか」。常、言下に於て忽然と大悟す。後に衆に示して云く、「百丈に三訣有り、喫茶と珍重と歇。擬議して更に思量せば、君の猶お未だ徹せざるを知る」と。翠巌の真、点胸し拈げて云く、「六合九有、青黄赤白、一一交羅す」と。

外道会四維陁典論、自云、我是一切智人。在処索人論議。他致問端、要坐断釈迦老子舌頭。世尊不費繊毫気力。他便省去。讃歎云、世尊大慈

外道は四維陀の典論を会して、自ら云く、「我は是れ一切智の人なり」と。在ゆる処に人の論議を索む。他問端を致して、釈迦老子の舌頭を坐断せんと要す。世尊、繊毫の気力すら費さず。他便ち省り去る。讃

一 天衣義懐（九九三—一〇六四）。雪竇の法嗣。 二 名剣の名。吹毛剣。 三 百丈道常（?—九九一）。道恒とも。 四 法眼文益（八八五—九五八）。 五 悟入への契機となる公案。 六 軽くなじるような語気。 七 翠巌可真（?—一〇六四）。「点胸」は自分の胸を指で突く自信たっぷりのしぐさ。 八 天地と四方。 九 中国全土。 一〇 さまざまな色。転じて、一切の個別存在の多様性。 一一 交雑羅列。網羅。

大悲、開我迷雲、令我得入。且道、作麼生是大慈大悲処。世尊隻眼通三世、外道双眸貫五天。潙山真如拈云、外道懐蔵至宝、世尊親為高提。森羅顕現、万象歴然。且畢竟外道悟箇什麼。如趁狗逼墻。至極則無路処、他須回来便乃活鱍鱍地。若計較是非、一時放下、情尽見除、自然徹底分明。

歎して云く、「世尊の大慈大悲、我が迷雲を開いて、我をして得入せしむ」と。且道、作麼生か是れ大慈大悲の処。世尊の隻眼は三世に通じ、外道の双眸は五天を貫く。潙山の真如拈げて云く、「外道 懐に至宝を蔵し、世尊親しく為に高く提ぐ。森羅顕現し、万象歴然たり」と。且て畢竟して外道箇の什麼をか悟る。狗を趁って墻に逼らしむるが如し。極則の路無き処に至って、他須らく回り来たりて便乃ち活鱍鱍地なるべし。若し計較是非、一時に放下して、情尽き見除かば、自然に徹底分明ならん。

一 リグ、サーマ、ヤジュル、アタルヴァの四ヴェーダ。バラモン教の根本聖典。 二 翠巌と同窓の道吾悟真の拈語。「三世」は過去・現在・未来。「五天」は五天竺、古代インドを東・西・南・北・中の五つに区分した呼称。 三 翠巌の法嗣、大潙慕喆(?—一〇九五)。大潙山に住し、真如禅師の勅号を受く。

外道去後、阿難問仏云、外道有何所証、而言得入。仏云、如世良馬見鞭影而行。後来諸方便道、又被風吹

外道去りし後、阿難、仏に問うて云く、「外道は何の所証有りてか、得入すと言える」。仏云く、「世の良馬の、鞭影を見て行くが如し」と。後来に諸方便ち道

別調中。又云、龍頭蛇尾。什麼処是世尊鞭影、什麼処是見鞭影処。雪竇云、邪正不分、過由鞭影。真如云、阿難金鐘再撃、四衆共聞。雖然如是、大似二龍争珠、長他智者威獰。雪竇頌云、

う、「又た風に別の調べの中に吹かる」と。又た云く、「龍頭蛇尾なり」と。什麼処か是れ世尊の鞭影、什麼処か是れ鞭影を見る処。雪竇云く、「邪正分たず、過は鞭影に由る」。真如云く、「阿難、金鐘再び撃ち、四衆共に聞く。是の如くなりと雖然も、二龍の珠を争い、他の智者の威獰を長ずるに大いに似たり」と。雪竇の頌に云く、

一 瑯琊慧覚の拈語。もとは高駢(?—八八七)の詩の一句。第七則・頌の著語に既出。(なんとなく楽の調べのようで聞き惚れていたら)たちまち風に吹かれて別の調べに変わっていった。二 これも瑯琊慧覚の語に見える。三『洞庭録』に見える。良久という邪正分別を超えたところが、「鞭影」という説明で分別に堕ちた。四 大潙慕喆。五 阿難が再び質問して世尊の答えを引き出し四衆がいっしょに聞いた。六 世尊と阿難。七 外道のすさまじい怜悧ぶり。

【頌】 機輪曾未転、〔在這裏。果然不動一糸毫。〕転必両頭走。〔不落有、必落無。不東則西。左眼半斤、右眼八両。〕明鏡忽臨台、〔還見釈迦老子麼。一撥便転。破也破也、敗也敗

【頌】 機輪曾て未だ転ぜず、〔這裏に在り。果然して一糸毫も動かず。〕転ずれば必ず両頭に走らん。〔有に落ちざれば必ず無に落つ。東せざれば則ち西す。左眼半斤、右眼八両。〕明鏡忽に台に臨むや、〔還た釈迦老子を見るや。一撥すれば便ち転ず。破れたり破れた

也。〕当下分妍醜。〔尽大地是箇解脱門。好与三十棒。還見釈迦老子麼。〕妍醜分兮迷雲開、〔放一線道。許你有箇転身処。争奈只是箇外道。〕慈門何処生塵埃。〔偏界不曾蔵。退後退後、達磨来也。〕因思良馬窺鞭影、〔我有拄杖子、不消你与我。且道、什麼処是鞭影処、什麼処是良馬処。〕千里追風喚得回。〔騎仏殿出三門去也。転身即錯、放過即不可。便打。〕喚得回、鳴指三下。〔前不搆村、後不迭店。拗折拄杖子、向什麼処去。雪竇雷声甚大、雨点全無。〕

り、敗れたり敗れたり。〕当下に妍醜を分つ。〔尽大地是れ箇の解脱門。好し三十棒を与うるに。還た釈迦老子を見るや。〕妍醜分れて迷雲開く、〔一線の道を放つ。你に許む箇の転身の処有るを。争奈せん只だ是れ箇の外道なり。〕慈門何処にか塵埃を生ぜん。〔偏界曾て蔵さず。退後、退後、達磨来たれり。〕因って思う、良馬の鞭影を窺い、〔我に拄杖子有り、你が我に与うることを消いず。且道、什麼処か是れ鞭影の処、什麼処か是れ良馬の処。〕千里の追風喚び得て回ることを。〔仏殿に騎って三門を出で去る。身を転ぜば即ち錯り、放過せば即ち不可。便ち打つ。〕喚び得て回らば、指を鳴らすこと三下す。〔前むも村に搆らず、後るも店に迭ばず。拄杖子を拗折って什麼処に向ってか去る。雪竇は雷声甚大なるも雨点全く無し。〕

一「機輪」は禅機の展開を車輪の回転になぞらえたもの。ここは、外道の霊機。 二 有と無と。 三「半斤」と「八両」とは同じ目方。第五六則・頌の著語に既出。 四「繳」に同じ。 五 それとないヒントを与える。 六 一日に千里を走る名馬。「追風」は名馬の名。また、馬の走る速さの喩え。 七 仏をも

超出した達道者の自在力の顕示。もとは雲門禅師の語。へ「よくやった！」と、世尊にかわって良馬の外道を三度ほめる。

〔評唱〕　機輪曾未転、転必両頭走。機乃千聖霊機、輪是従本已来諸人命脈。不見古人道、千聖霊機不易親、龍生龍子莫因循。趙州奪得連城璧、秦王・相如総喪身。外道却是把得住、作得主、未嘗動著。何故。他道、不問有言、不問無言。豈不是全機処。世尊会看風使帆、応病与薬、所以良久、全機提起。外道全体会去、機輪便阿轆轆地転、亦不転向有、亦不転向無、不落得失、不拘凡聖、二辺一時坐断。世尊纔良久、他便礼拝。如今人多落在無、不然落在有、只管在有無処両頭走。

〔評唱〕「機輪曾て未だ転ぜず、転ずれば必ず両頭に走らん」と。「機」は乃ち千聖の霊機、「輪」は是れ従本已来諸人の命脈なり。見ずや古人道く、「千聖の霊機親しみ易からず、龍は龍の子を生みて因循すること莫し。趙州奪い得たり連城の璧、秦王も相如も総て身を喪う」と。外道却って是れ把得住り、主と作得りて、未だ嘗て動著かず。何故ぞ。他道う、「有言を問わず、無言を問わず」と。豈に是れ全機の処にあらずや。世尊は風を看て帆を使い、病に応じて薬を与うるを会す。所以に良久し、全機提起す。外道全体会し去って、機輪便ち阿轆轆地に転じ、亦た転じて有に向わず、亦た転じて無に向わず、得失に落ちず、凡聖に拘らず、二辺一時に坐断す。世尊良久するや纔や、他便ち礼拝す。如今の人は多く無に落在し、然らずんば有に落在して、只管有無の処に在いて両頭に走る。

＊古人　福本は「雪竇」。＊＊二辺　福本は「二辺不立」。
一『祖英集』上に見える。「趙州柏樹子」の公案に対する頌。二 龍の子の生まれ方はもたつきがない。
三 戦国時代の趙の宝玉「和氏の璧」。秦の昭王が十五の城と交換しようと申し出た。四 趙の使者、藺相如。五 あらゆるものを自在にこなして行くさま。第五三則・本則の評唱に既出。

雪竇道、明鏡忽臨台、当下分妍醜。這箇不曾動著、只消箇良久。如明鏡臨台相似、万象不能逃其形質。外道云、世尊大慈大悲、開我迷雲、令我得入。且道、是什麼処是外道入処。到這裏、須是箇箇自参自究、自悟自会始得。便於一切処、行住坐臥、不問高低、一時現成、更不移易一糸毫。纔作計較、有一糸毫道理、即礙塞殺人、更無入作分也。

雪竇道く、「明鏡忽かに台に臨むや、当下に妍醜を分つ」と。這箇曾て動著かず、只だ箇の良久を消うるのみ。明鏡の台に臨むが如くに相似て、万象其の形質を逃るること能わず。外道云く、「世尊の大慈大悲、我が迷雲を開いて、我をして得入せしむ」と。且道、是れ什麼処か是れ外道の入処。這裏に到っては、須是らく箇箇自ら参じ自ら究め、自ら悟り自ら会して始めて得し。便ち一切処に於て、行住坐臥、高低を問わず、一時に現成して、更に一糸毫も移易ざれ。計較を作し、一糸毫も道理有るや纔や、即ち入を礙塞殺して、更に入作の分無からん。

一 悟りの世界へ一歩踏み入った所。二 自分自身を窒息させる。三 取りこんで活力にする。

後面頌、世尊大慈大悲、開我迷雲、令我得入。当下忽然分妍醜。妍醜分分迷雲開、慈門何処生塵埃。尽大地是世尊大慈大悲門戸。你若透得、不消一捏。此亦是放開底門戸。不見世尊於三七日中、思惟如是事。我寧不説法、疾入於涅槃。因思良馬窺鞭影、千里追風喚得回、追風之馬、見鞭影而便過千里、教回即回。雪竇意賞他道、若得俊流方可。一撥便転、一喚便回。若喚得回、便鳴指三下。且道、是点破、是撒沙。

後面に「世尊の大慈大悲、我が迷雲を開いて、我をして得入せしむ」というを頌す。当下に忽然として妍醜を分つ。「妍醜分れて迷雲開く、慈門何処にか塵埃を生ぜん」と。尽大地是れ世尊の大慈大悲の門戸。你若し透得せば、一捏すら消いず。此れ亦た是れ放開底門戸なり。見ずや世尊三七日の中に於て、是の如き事を思惟す。「我寧ろ説法せずして、疾かに涅槃に入らん」と。「因って思う良馬の鞭影を窺い、千里の追風喚び得て回ることを」とは、追風の馬は鞭影を見て便ち千里を過ぎ、回らしむれば即ち回る。雪竇の意は他を賞して道う、「若し俊流を得ば方めて可し。一撥すれば便ち転じ、一喚すれば便ち回る。若し喚び得て回らば、便ち指を鳴らすこと三下す」と。且道、是れ点破か、是れ沙を撒くか。

一 成道の後二十一日間、説法しなかった。 二 確定的に核心を提示する。 三 確定した価値の否定。

第六六則　巌頭什麼処来

垂示云、当機覿面[一]、提陥虎之機[二]、正按傍提[三]、布擒賊之略。明合暗合[四]、双放双収。解弄死蛇[五]、還佗作者。

第六六則　巌頭、什麼処よりか来たる

垂示に云く、当機覿面、陥虎の機を提げ、正按傍提、擒賊の略を布く。明に合し暗に合し、双に放ち双に収め、解く死蛇を弄するは、佗の作者に還す。

一 問題の核心を正面切ってずばりと突いて。二 虎を穽におとしいれるような見事な放れわざ。三 真正面からおさえつけたり、側面的に引き立ててやったり。修行者を導く手だて。四 明暗いずれの世界でもぴたりと合致し、放収いずれのはたらきもする。五 練達した禅匠でこそ死蛇をあやつって生き返らせることができる。第六七則・本則の評唱を見よ。

【本則】挙。巌頭[一]問僧、什麼処来。〔未開口時、納敗欠了也。穿過髑髏[二]。要知来処也不難[三]。〕僧云、西京来[四]。〔果然一箇小賊。〕頭云、黄巣過後[五]、還収得剣麼[六]。〔平生不曾做草賊。不懼頭落、便恁麼問。好大胆。〕僧云、収得。〔敗也。未識転身処[七]。茅広漢[八]

【本則】挙す。巌頭、僧に問う、「什麼処よりか来たる」。〔未だ口を開かざる時、敗欠を納れ了れり。髑髏を穿過す。来処を知らんと要するも也た難からず。〕僧云く、「西京より来たる」。〔果然して一箇の小賊。〕頭云く、「黄巣過ぎし後、還た剣を収得せしや」。〔平生曾て草賊と做らず。頭の落つるを懼れずして、便ち恁麼に問う。好だ大胆。〕僧云く、「収得せり」。〔敗れ

如麻似粟。〕巌頭引頸近前云、囮。〔也須識機宜始得。陥虎之機。是什麼心行。〕僧云、師頭落也。〔只見錐頭利、不見鑿頭方。識甚好悪。著也。〕巌頭呵呵大笑。〔尽天下衲僧不奈何。欺殺天下人。尋這老漢頭落処不得。〕僧後到雪峰。〔依前顢頇懞憧。這僧往往十分納敗欠去。〕峰問、什麼処来。〔不可不説来処。也要勘過。〕僧云、巌頭来。〔果然納敗欠。〕峰云、有何言句。〔挙得、不免喫棒。〕僧挙前話。〔便好趕出。〕雪峰打三十棒趕出。〔雖然斬釘截鉄、因甚只打三十棒。拄杖子也未到折在。且未是本分。何故。朝打三千、暮打八百。若不是同参、争辨端的。雖然如是、且道、雪峰・巌頭落在什麼

たり。未だ転身の処を識らず。茅広の漢、麻の如く粟の似し。〕巌頭、頸を引し近前きて云く、「囮」。〔也た須らく機宜を識りて始めて得し。陥虎の機。是れ什麼たる心行ぞ。〕僧云く、「師の頭落ちたり」。〔只だ錐頭の利なるを見て、鑿頭の方なるを見ず。甚の好悪をか識らん。著れり。〕巌頭、呵呵大笑す。〔尽天下の衲僧奈何ともせじ。天下の人を欺殺る。這の老漢の頭の落処を尋ぬるに得ず。〕僧、後に雪峰に到る。〔依然として顢頇懞憧。這の僧往往十分と敗欠を納れ去る。〕峰問う、「什麼処より来たる」。〔来処を説わざるべからず。也た勘過を要す。〕僧云く、「巌頭より来たる」。〔果然して敗欠を納る。〕峰云く、「何の言句か有りし」。〔挙し得るも棒を喫するを免れず。〕僧、前話を挙す。〔便ち好し趕い出すに。〕雪峰、打つこと三十棒して趕い出す。〔釘を斬り鉄を截つと雖然も、甚に因ってか只だ打つこと三十棒のみなる。拄杖子すら也未だ折るに到らざる在。且も未だ是れ本分にあらず。何故ぞ。

処。」

＊茅広漢　福本は「謀広漢」。

一 巌頭全奯（八二八―八八七）。 二 死人同然の奴をグサリと突き通す。 三 第七六則・本則の著語にも。 四 長安。 五 黄巣は唐朝崩壊の契機をなした大農民反乱（八七五―八八四）の指導者。「天賜黄巣」の銘をもつ剣が天から落ちてきたという伝説があった。 六 手に入れる。 七 一段上の次元への脱皮。 八 まぬけな、ぼさっとした奴。 九 首が落ちた音を口で発する。ストン。 一〇 錐の先端の尖りを唯一の鋭利とし、鑿の方形の刃先にも別の鋭利があることに気づかない。 一一 雪峰義存（八二二―九〇八）のところ。 一二 そのものずばりを見て取る。

朝打三千、暮打八百。若し是れ同参にあらずんば争か端的を辨ぜん。是の如しと雖然も、且道、雪峰・巌頭什麼処にか落在く。」

【評唱】大凡挑嚢負鉢、撥草瞻風[一]、也須是具行脚眼[二]始得。這僧眼似流星、也被巌頭勘破了、一串穿却。当時若是箇漢、或殺或活、挙著便用。這僧[三]研郎当、却道収得。似恁麼行脚、閻[四]羅老子、問你索飯銭在。知[五]他踏破多少草鞋、直到雪峰。当時若[六]有些子眼

【評唱】大凡そ嚢を挑ぎ鉢を負いて、撥草瞻風せんには、也た須是らく行脚の眼を具して始めて得し。這の僧は眼は流星に似たるも、也た巌頭に勘破き了せられ、一串に穿却かる。当時、若是箇の漢ならば、或は殺し或は活し、挙著せば便ち用いん。這の僧研郎当として、却って道う「収得せり」と。恁麼の似く行脚せば、閻羅老子、你を問めて飯銭を索むる在。多少の草鞋を踏

筋、便解瞥地去、豈不快哉。這箇因縁、有節角誵訛処。此事雖然無得失、得失甚大。雖然無揀択、到這裏、却要具眼揀択。

破して直に雪峰に到るかを知他んや。当時若し些子の眼筋有りて、便ち解く瞥地にし去らば、豈に快ならざらんや。這箇の因縁、節角誵訛の処有り。此の事、得失無しと雖然も、得失甚だ大なり。揀択無しと雖然も、這裏に到っては、却って眼を具して揀択するを要す。

一 草をはらい、風向きを見る。修行の旅に出て、名師の家風に接すること。二 ひとかどの雲水の見識。修行者としての根源的な覚悟。三 だらしないさま。たるんださま。四 閻魔の敬称。五「知他」は反語的な疑問表現。「分からぬ」という含み。「他」は意味のない助詞。六 力量ある眼で見抜くことができたならば。

看他龍牙行脚時、致箇問端問徳山、学人仗鏌鎁剣、擬取師頭時如何。徳山引頸近前云、㘞。龍牙云、師頭落也。山便帰方丈。牙後挙似洞山。洞山云、徳山当時道什麼。牙云、他無語。洞山云、佗無語則且置、借我徳山落底頭来看。牙於言下大悟、遂焚香遥望徳山礼拝懺悔。有僧伝到徳山

看よ他の龍牙は行脚の時、箇の問端を致して徳山に問う、「学人鏌鎁の剣に仗って、師の頭を取らんと擬する時如何」。徳山頸を引し近前きて云く、「㘞」。龍牙云く、「師の頭落ちたり」と。山、便ち方丈に帰る。牙、後に洞山に挙似す。洞山云く、「徳山当時什麼とか道いし」。牙云く、「他語無し」。洞山云く、「佗の語無きことは則ち且て置き、我に徳山の落つる底の頭を借し来たり看よ」と。牙、言下に大悟し、遂に香を焚

処。徳山云、洞山老漢、不識好悪。這漢死来多少時也。救得有什麼用処。這箇公案、与龍牙底一般。徳山帰方丈、則暗中最妙。巌頭大笑、他笑中有毒。若有人辨得、天下横行。這僧当時若辨得出、千古之下、免得検責。於巌頭門下、已是一場蹉過。看他雪峰老人、是同参便知落処、也不与他説破、只打三十棒趕出院、可*以光前[四]絶後。這箇是拈作家衲僧鼻孔、為人底手段、更不与他如之若何、教他自悟去。

いて遥かに徳山を望んで礼拝懺悔す。僧有り徳山の処に伝え到る。徳山云く、「洞山老漢、好悪を識らず。這の漢死し来たること多少時ぞ。救い得るも什麼の用処か有らん」と。這箇の公案、龍牙の底と一般なり。徳山の方丈に帰るは、則ち暗中最も妙なり。巌頭大笑するは、他の笑中に毒有り。若し人の辨得するもの有らば、天下に横行せん。這の僧当時若し辨得し出だせば、千古の下、検責を免れ得ん。巌頭門下に於て、已に是れ一場の蹉過。看よ他の雪峰老人、是れ同参にして便ち落処を知り、也た他の与に説破せず、只だ打つこと三十棒して院を趕い出すは、以て光前絶後とすべし。這箇は是れ作家の衲僧の鼻孔を拈んで、人に為うる底の手段にして、更に他の与に如之若何ともせず、他をして自ら悟り去らしむ。

＊可以　福本は「可謂」。

一 龍牙居遁(八三五―九二三)。以下、第二〇則・本則の評唱を参照。　二 徳山宣鑑(七八二―八六五)。
三 洞山良价(八〇七―八六九)。　四 「空前絶後」に同じ。

本分宗師為人、有時籠罩、不教伊出頭、有時放令死郎当地、却須有出身処。大小大巖頭・雪峰、倒被箇喫飯禅和勘破。只如巖頭道、黄巣過後、還収得剣麼、諸人且道、這裏合下得什麼語、免得他笑、又免得雪峰行棒趕出。這裏誵訛。若不曾親証親悟、縦使口頭快利至究竟、透脱生死不得。山僧尋常教人覰這機関転処。若擬議、則遠之遠矣。

本分の宗師は人に為うるに、有る時は籠罩み、伊をして出頭せしめず、有る時は死郎当地ならしめ、却って須ず出身の処有り。大小大の巖頭・雪峰も、倒に箇の喫飯の禅和に勘破せらる。只だ巖頭の「黄巣過ぎし後、還た剣を収得せしや」と道うが如きは、諸人、且く道え、這裏合た什麼なる語を下し得てか、他に笑わるるを免れ得、又た雪峰に棒を行じて趕い出さるるを免れ得ん。這裏誵訛なり。若し曾て親しく証し親しく悟るにあらずんば、縦使口頭快利にして究竟に至るとも、生死を透脱ることを得ず。山僧は尋常、人をして這の機関の転処を覰しむ。若し擬議すれば則ち遠くして遠し。

一 枠にはめこむ。二 自己を呈示する。三 そのままにさせる。「放教」とも。四 全く生気を失ってだらしないさま。「死」は堕落の極の形容、「地」は副詞語尾。五 無駄飯食いの坊主。六 疑問の語気を表す副詞。七 すらすらと淀みなく。口達者。「口快」。八 勘どころ。九 問題のポイントへの転換点。

*不見投子問塩平僧云、黄巣過後、収得剣麼。僧以手指地。投子云、三

見ずや投子、塩平の僧に問うて云く、「黄巣過ぎし後、剣を収得せしや」。僧、手を以て地を指す。投子

十年弄馬騎、今日却被驢子撲。看這僧也不妨是箇作家。也不道収得、也不道収不得。与西京僧、如隔海在。[五]真如拈云、他古人、一箇做頭、一箇做尾、[六]定也。雪竇頌云、

＊不見～海在〔六七字〕　福本に無し。

一 投子大同（八一九―九一四）。二「塩」は「延」の誤で、疏山証のこと。『伝灯録』二〇。三 以下八字、『伝灯録』では「還将得剣来麼」。四 この歳まで馬をのりこなす手なみを誇って来たが、今日は見事にロバにほうり出された。三十年は一芸に熟達するのに必要な最低限の年月。五 真如禅師、大潙慕喆（?―一〇九五）。六 それでぴたり決まった。

【頌】　黄巣過後曾収剣[一]、〔孟八郎漢[二]有什麼用処。只是錫刀子一口。〕大笑還応作者知。〔[三]一子親得。能有幾箇。不是渠儂、争得自由。[四]〕三十山[五]藤且軽恕、〔[六]同条生、同条死。〕朝三千、暮八百。東家人死、西家人助哀。

云く、「三十年馬騎を弄せしに、今日却って驢子に撲せらる」と。看よ這の僧也た不妨に是れ箇の作家なり。也た「収得す」と道わず、也た「収し得ず」と道わず。西京の僧と、海を隔つるが如くなる在。真如拈げて云く、「他の古人、一箇は頭と做り、一箇は尾と做りて定れり」と。雪竇の頌に云く、

【頌】　黄巣過ぎし後曾て剣を収む、〔孟八郎の漢什麼の用処か有らん。只だ是れ錫の刀子一口。〕大笑するは還って応に作者のみ知るべし。〔一子のみ親しく得たり。能く幾箇か有る。是れ渠儂にあらずんば争か自由なるを得ん。〕三十の山藤且く軽恕す、〔同じ条に生れ、同じ条に死す。朝三千、暮八百。東家の人死して、

却与救得活。〕[七]得便宜是落便宜。〔拠款結案。悔不慎当初。也有些子。[八]〕

西家の人哀を助く。却って与に救い得て活せしむ。〕便宜を得るは是れ便宜に落つるなり。〔款に拠って案を結す。悔むらくは当初を慎まざりき。也た些子有り。〕

一 錫の刀。やわで役に立たぬ。二 巌頭の笑いは手練の者にしか分からない。三 一人の子だけがものにしている。四 完全な主体性を確立すること。五 拄杖のこと。六 東隣の家の不幸に西隣の人が悔みを述べる。第三二則・本則の著語にも。七 してやったと僧は思っているが実はしてやられたのだ。八 だが、少しは見所がある。

〔評唱〕 黄巣過後曾収剣、大笑還応作者知。雪竇便頌這僧与巌頭大笑処。這箇些子、天下人摸索不著。且道、他笑箇什麼。須是作家方知、這笑中有権有実、有照有用、有殺有活。三十山藤且軽恕、頌這僧後到雪峰面前、這僧依旧莽鹵、峰便拠令而行、打三十棒趕出。且道、為什麼却如此。你要尽情会這話麼。得便宜是落便宜。

〔評唱〕「黄巣過ぎし後曾て剣を収む、大笑するは還って応に作者のみ知るべし」と。雪竇便ち這の僧と巌頭大笑の処とを頌す。這箇の些子、天下の人摸索不著。且道、他箇の什麼をか笑う。須是らく作家にして方めて知るべし、這の笑中に権有り実有り、照有り用有り、殺有り活有ることを。「三十の山藤且く軽恕す」とは、這の僧、後に雪峰の面前に到るも、這の僧依旧に莽鹵なれば、峰便ち令に拠って行じ、打つこと三十棒して趕い出せるを頌す。且道、為什麼にか却って此の

如くなる。你、情を尽して這の話を会せんと要すや。便宜を得るは是れ便宜に落つるなり。

第六七則　梁武帝請講経

【本則】挙。梁武帝請傅大士、講金剛経。〔達磨兄弟来也。魚行酒肆即不無、衲僧門下即不可。這老漢老老大大、作這般去就。〕大士便於座上揮案一下、便下座。〔直得火星迸散。似則似、是則未是。不煩打葛藤。〕武帝愕然。〔両回三度被人瞞。也教他摸索不著。〕誌公問、陛下還会麼。〔覚理不覚情。肐膊不向外。也好与三十棒。〕帝云、不会。〔可惜許。〕誌公云、大士講経竟。〔也須逐出国始得。当時和誌公一時与趕出国、始是作家。両箇漢、同坑無異土。〕

第六七則　梁の武帝、請じて経を講ぜしむ

【本則】挙す。梁の武帝、傅大士を請じて『金剛経』を講ぜしむ。〔達磨の兄弟来たる。魚行酒肆は即ち無きにあらず、衲僧門下は即ち不可。這の老漢、老老大大にして這般る去就を作す。〕大士便ち座上に於て、案を揮うこと一下して、便ち座を下る。〔直得に火星迸散。似たることは則ち似たるも、是なることは則ち未だ是ならず。葛藤を打するを煩わさず。〕武帝愕然たり。〔両回三度人に瞞さる。也た他をして摸索不著ならしむ。〕誌公問う、「陛下還た会すや」。〔理に覚して情に覚せず。肐膊は外に向かず。也た好し三十棒を与うるに。〕帝云く、「会せず」。〔可惜許。〕誌公云く、「大士講経し竟んぬ」。〔也た須らく国を逐い出して始めて得し。当時、誌公 和に一時に国を趕い出だし与れば始めて是れ作家。両箇の漢、同坑に異土無し。〕

＊情　福本は「親」。　＊＊肐膊　福本は「膊股」。

一 梁の初代皇帝蕭衍（四六四—五四九）。 二 傅翕（四九七—五六九）。善慧大士と号した。 三 魚屋や酒場に出入りしたという傅大士の行状を踏まえて、その講経のさまを皮肉る。 四 年がいもなく。 五 火の粉が飛び散る。火花を散らす。 六 宝誌（四一八または四二五—五一四）。 七 腕は外がわには曲らない。出来ない相談。

〔評唱〕　梁高祖武帝、蕭氏諱衍、字叔達。立功業、以至受斉禅。即位後、別註五経講議、奉黄老甚篤、而性至孝。一日思得出世之法、以報劬労。於是捨道事仏、廼受菩薩戒於婁約法師処。披仏袈裟、自講放光般若経、以報父母。時誌公大士、以顕異惑衆、繫於獄中。誌公乃分身、遊化城邑。帝一日知之感悟、極推重之。誌公数行遮護、隠顕逮不可測。時婺州有大士者、居雲黄山。手栽二樹、謂之双林、自称当来善慧大士。一日修書、

〔評唱〕　梁の高祖武帝は、蕭氏諱は衍、字は叔達。功業を立て、以て斉の禅を受くるに至る。即位の後、別に五経を註して講議し、黄老を奉ずること甚だ篤く而も性至って孝なり。一日、出世の法を得て、以て劬労に報いんと思う。是に於て道を捨てて仏に事え、廼ち菩薩戒を婁約法師の処に受く。仏の袈裟を披て、自ら『放光般若経』を講じ、以て父母に報ゆ。時に誌公大士、異を顕し衆を惑わすを以て、獄中に繫がる。誌公乃ち身を分ちて、城邑に遊化す。帝、一日、之を知って感悟し、極めて之を推重す。誌公数しば遮護を行じて、隠顕測るべからざるに逮ぶ。時に、婺州に大士なる者有り、雲黄山に居る。手ずから二樹を栽えて、

命弟子上表聞於帝。時朝廷以其無君臣之礼不受。傅大士将入[10]金陵城中売魚。時武帝或請誌公講金剛経。誌公曰、[11]貧道不能講、市中有傅大士者、能講此経。帝下詔、召之入禁中。

之を双林と謂い、自ら当来の善慧大士と称す。一日、書を修めて弟子に命じ、表を上りて帝に聞こゆ。時に朝廷、其の君臣の礼無きを以て受けず。傅大士将に金陵の城中に入りて魚を売らんとす。時に武帝、或るとき誌公を請じて『金剛経』を講ぜしめんとす。誌公曰く、「貧道講ずる能わず、市中に傅大士という者有り、能く此の経を講ず」と。帝詔を下して、之を召して禁中に入らしむ。

一 禅譲。　二『易経』『書経』『詩経』『礼記』『春秋』の五つ。　三 黄帝と老子、また、その説。道教。
四 世間の道理を超えた教え、仏法。　五 父母の恩。　六 梁の慧約。　七 出かけて行って衆生を教化する。
八 悪をさえぎり、善をまもること。　九 隠れたり、現れたり。　一〇 今の南京。　一一 僧の謙遜した自称。

傅大士既至、於講座上、揮案一下、便下座。当時便与推転、免見一場狼藉、却被誌公云、陛下還会麼。帝云、不会。誌公云、大士講経竟。也是一人作頭、一人作尾。誌公恁麼道、還夢見傅大士麼。一等是弄精魂、這箇

傅大士既に至り、講座の上に於て、案を揮うこと一下し、便ち座を下る。当時便ち与に推し転ばさば、一場の狼藉を見るを免れんに、却って誌公に「陛下還た会すや」と云わる。帝云く、「会せず」。誌公云く、「大士、講経し竟んぬ」と。也た是れ一人頭と作れば、一人尾と作る。誌公恁麼に道うに、還た夢にも傅大士

就中奇特。雖是死蛇、解弄也活。既是講経、為甚却不大分為二。＊一如尋常[二]座主道、金剛之体堅固、物物不能壊、利用故能＊＊摧万物、如此講説、方喚作講経。雖然如是、諸人殊不知、傅大士、只拈[三]向上関捩子、略露鋒鋩、教人知落処、直截与你壁立万仞。[四]恰好被誌公不識好悪、却云大士講経竟。正是[五]好心不得好報。如美酒一盞却被誌公以水[六]攙過、如一釜羹被誌公将一顆鼠糞汚了。且道、既不是講経、畢竟喚作什麼。頌云、

を見るや。一等く是れ精魂を弄するも、這箇は就中奇特たり。是れ死蛇なりと雖も、解く弄すれば也た活す。既是に講経せば、為甚にか却って大いに分ちて二と為さざる。一に尋常の座主の道うが如くに、「金剛の体は堅固にして、物物壊する能わず、利用なるが故に能く万物を摧く」と、此の如く講説して、方めて喚んで講経と作す。是の如くなりと雖然も、諸人殊に知らず、傅大士は只だ向上の関捩子を拈りて、略鋒鋩を露し、人をして落処を知らしめ、直截に你が与に壁立万仞なることを。恰好に誌公に好悪を識らざるまま却って「大士、講経し竟んぬ」と云わる。正に是れ好心好報を得ず。美酒一盞、却って誌公に水を以て攙過らるるが如く、一釜の羹、誌公に一顆の鼠の糞を将て汚し了らるるが如し。且道、既に是れ講経にあらずんば、畢竟喚んで什麼とか作さん。頌に云く、

＊一如～主道〔七字〕　福本は「説」。＊＊能摧万物　福本はさらに「般若亦然」と有り。

一 滅茶苦茶の一幕。二 経典の講義をする僧。三 一段上の次元へ眼を開かせる心機のはたらき。四

ちょうどタイミングよく。うまうまと。五 善意が報われない。せっかくの大士の意図が誌公にはぐらかされてしまった。六 混ぜる。水などで割る。

【頌】不向双林寄此身、〔只為他把不住。嚢裏豈可蔵錐。〕却於梁土惹埃塵。〔若不入草、争見端的。不風流処也風流。〕当時不得誌公老、〔作賊不須本。有牽伴底癩児。〕也是栖栖去国人。〔正好一状領過。便打。〕

【頌】双林に此の身を寄せず、〔只だ他の把不住るが為なり。嚢裏に豈に錐を蔵すべけんや。〕却って梁土に於て埃塵を惹く。〔若し草に入らずんば、争か端的を見ん。風流ならざる処も也た風流。〕当時、誌公老を得ずんば、〔賊と作るに本を須いず。伴を牽く底の癩児有り。〕也た是れ栖栖と国を去る人ならん。〔正に好し一状に領過するに。便ち打つ。〕

一 傅大士の道場。二 一騒ぎやらかした。三 凡俗の地に下り立つ。四 徹底した殺風景が実はめでたい風景の現成である。五 盗人を働くには元手はいらぬ。六 傅大士も達磨と同じようにあたふたと梁から去ったであろう。「栖栖」は「恓恓」と同じ。

〔評唱〕不向双林寄此身、却於梁土惹埃塵。傅大士与没板歯老漢一般相逢。達磨初到金陵、見武帝。帝問、如何是聖諦第一義。磨云、廓然無聖。帝云、対朕者誰。磨云、不識。帝不

〔評唱〕「双林に此の身を寄せず、却って梁土に於て埃塵を惹く」と。傅大士は没板歯の老漢と一般く相逢う。達磨初め金陵に到って武帝に見ゆ。帝問う、「如何なるか是れ聖諦第一義」。磨云く、「廓然無聖」。帝云く、「朕に対する者は誰ぞ」。磨云く、「識らず」。帝

契。遂渡江至魏。武帝挙問誌公。公云、陛下還識此人否。帝云、不識。誌公云、此是観音大士、伝仏心印。帝悔遂遣使去取。誌公云、莫道陛下発使去取、合国人去、他亦不回。所以雪竇道、当時不得誌公老、也是栖栖去国人。当時若不是誌公、為傅大士出気、也須是趕出国去。誌公既饒舌、武帝却被他[三]熱瞞一上。雪竇大意道、不須他来梁土、講経揮案。所以道、何不向双林寄此身、喫粥喫飯、随分過時、却来梁土、恁麼指注、揮案一下、便下座。便是他惹埃塵処。既是要[四]殊勝、則目視雲霄、上不見有仏、下不見有衆生。若論[五]出世辺事、不免[六]灰頭土面、将無作有、将有作無、将是作非、将麤作細、魚行酒肆、横[七]

契わず。遂に江を渡って魏に至る。武帝挙して誌公に問う。公云く、「陛下還た此の人を識る否」。帝云く、「識らず」。誌公云く、「此れは是れ観音大士、仏心印を伝う」。帝悔いて、遂に使いを遣わし去きて取えしめんとす。誌公云く、「陛下、使いを発し去きて取えしめんとするは莫道、合国の人去くも、他は亦た回らず」と。所以に雪竇道く、「当時、誌公老を得ずんば、也た是れ栖栖と国を去る人ならん」と。当時若し是れ誌公、傅大士の為に気を出だすにあらずんば、也た須是ずや国を趕い出され去るべし。誌公既に饒舌、武帝却って他に熱瞞一上せらる。雪竇の大意に道く、「他梁土に来たり、講経して案を揮うを須いず」と。所以に道く、「何ぞ双林に此の身を寄せ、喫粥喫飯、分に随って時を過ごさずして、却って梁土に来たり、恁麼に指注し、案を揮うこと一下して、便ち座を下る」と。便ち是れ他の埃塵を惹く処なり。既是に殊勝を要せば、則ち目に雲霄を視るも、上に仏有るを見ず、

拈倒用、教一切人明此[八]箇事。若不恁麼放行、直到弥勒下生、也無一*箇半箇。傅大士既是[九]拖泥帯水、頼是有知音。若不得誌公老、幾乎趕出国了。且道、**即今在什麼処。

下に衆生有るを見ず。若し出世辺の事を論ぜば、免れず、灰頭土面にして、無を将て有と作し、有を将て無と作し、是を将て非と作し、麤を将て細と作し、魚行酒肆、横拈倒用し、一切の人をして此箇の事を明めしむることを。若し恁麼に放行せずんば、直に弥勒下生に到るも也た一箇半箇も無けん。傅大士既是に拖泥帯水するに、頼是に知音有り。若し誌公老を得ずんば、幾乎ど国を趕い出され了らん。且道、即今什麼処にか在る。

＊一箇半箇　福本は「人会」。＊＊即今　福本は「過」。

一 達磨のこと。二 以下、第一則・本則を参照。三 コケにする。四 至高の境地。五 寺院に住しての教化。六 頭は灰だらけ、顔は泥だらけ。汚濁にまみれての教化のさま。七 横にしたり倒さにしたり、自在にひねり返す。八 禅の極則。九 べとべとの泥まみれになる。老婆心切のさま。

第六八則　仰山問三聖

垂示云、掀天関、翻地軸、擒虎兕、辨龍蛇、須是箇活鱍鱍漢、始得[一]句句相投、機機相応。且従上来什麼人合恁麼。請挙看。

一 相互のやりとりがピタリと呼応する。

【本則】挙。仰山[一]問三聖[二]、汝名什麼。〔名実相奪。[三]勾賊破家。〕聖云、慧寂。〔坐断舌頭。[四]攙旗奪鼓。〕仰山云、慧寂是我。〔各自守封疆。〕聖云、我名慧然。〔[五]鬧市裏奪去。彼此却守本分。〕仰山呵呵大笑。〔可謂是箇時節。錦上鋪花。天下人不知落処。何故。土曠人稀、相逢者少。[六]一似巌頭笑、

第六八則　仰山、三聖に問う

垂示に云く、天関を掀げ地軸を翻し、虎兕を擒え龍蛇を辨るは、須是らく箇の活鱍鱍の漢にして、始めて句句相投じ、機機相応ずるを得べし。且て従上来什麼なる人か合た恁麼なる。請う挙し看ん。

【本則】挙す。仰山、三聖に問う、「汝の名は什麼ぞ」。〔名実相奪う。賊に勾りて家を破らる。〕聖云く、「慧寂」。〔舌頭を坐断す。旗を攙り鼓を奪う。〕仰山云く、「慧寂は是れ我なり」。〔各自に封疆を守る。〕聖云く、「我が名は慧然」。〔鬧市裏に奪い去る。彼此却って本分を守る。〕仰山、呵呵大笑す。〔是れ箇の時節と謂うべし。錦上に花を鋪く。天下の人落処を知らず。何故ぞ。土曠く人稀にして、相逢う者少なし。一に巌頭の

又非巌頭笑。一等是笑、為什麼却作両段。具眼者始〔七〕定当看。」

笑うに似て、又た巌頭の笑うに非ず。一等く是れ笑うに、為什麼にか却って両段と作る。具眼の者は始みに定当し看よ。」

一 仰山慧寂(八〇七―八八三)。二 三聖慧然。三 泥棒を引き込んで家財をごっそりやられる。第四二則・本則の著語に既出。四 敵軍の旗と鼓とを奪い取る。第三八則・本則の著語に既出。五 人ごみの市場で堂々とひったくり。六 第六六則参照。七「始」は「試」の誤りか。第四九則・頌の評唱に「試定当看」、第九七則・頌の評唱に「具眼者、試定当看」と。「定当」は勘どころをつかむ。

〔評唱〕三聖是臨済〔一〕下尊宿。少具出群作略、有大機、有大用。在衆中昂〔二〕昂蔵蔵、名聞諸方。後辞臨済、偏遊淮〔三〕海。到処叢林、皆以高賓待之。自向北至南方、先造雪峰〔四〕便問、透網金鱗、未審以何為食。峰云、待汝出網来、即向汝道。聖云、一千五百人善知識、話頭也不識。峰云、老僧住持事繁。峰往寺荘〔五〕、路逢獼猴乃云、這獼猴各各佩一面古〔六〕鏡。聖云、歴劫無

〔評唱〕三聖は是れ臨済下の尊宿なり。少きより出群の作略を具して、大機有り大用有り。衆中に在って、昂昂蔵蔵、名は諸方に聞ゆ。後に臨済を辞して、偏く淮海に遊ぶ。到る処の叢林、皆な高賓を以て之を待す。向北より南方に至るに、先ず雪峰に造って便ち問う、「網を透る金鱗、未審、何を以てか食と為す」。峰云わく、「汝が網を出で来たるを待って、即ち汝に道わん」。聖云く、「一千五百人の善知識、話頭も也た識らず」。峰云く、「老僧住持、事繁し」と。峰、寺荘に往くに、路に獼猴に逢い、乃ち云く、「這の獼猴各各一面の古

名、何以彰為古鏡。峰云、瑕生也。聖云、一千五百人善知識、話頭也不識。峰云、罪過[7]、老僧住持事繁。後至仰山。山極愛其俊利、待之於明窓[8]下。一日有官人、来参仰山。山問、官居何位。云、推官[9]。山竪起払子云、還推得這箇麼。官人無語、衆人下語、倶不契仰山意。時三聖病在延寿堂[10]。仰山令侍者持此語問之。聖云、和尚有事也。再令侍者問、未審有什麼事。聖云、再犯[11]不容。仰山深肯之。百丈[12]当時以禅板蒲団付黄檗[13]、拄杖払子付潙山[14]。潙山後付仰山。仰山既大肯三聖。聖一日辞去。仰山以拄杖払子付三聖。聖云、某甲已有師。仰山詰其由、乃臨済的子也。

鏡を佩ぶ」。聖云く、「歴劫に名無し、何を以てか彰かに古鏡と為す」。峰云く、「瑕生ぜり」。聖云く、「一千五百人の善知識、話頭も也た識らず」。峰云く、「罪過、老僧住持、事繁し」と。後に仰山に至る。山、其の俊利なるを極く愛でて、之を明窓下に待す。一日、官人有り、来たりて仰山に参ず。山問う、「官何の位にか居る」。云く、「推官なり」。山、払子を竪起てて云く、「還た這箇を推べ得るや」と。官人、語無く、衆人下語すれども、倶に仰山の意に契わず。時に三聖病んで延寿堂に在り。仰山、侍者をして此の語を持して之を問わしむ。聖云く、「和尚、事有り」と。再び侍者をして「未審、什麼の事か有る」と問わしむ。聖云く、「再犯容さず」と。仰山深く之を肯う。百丈、当時、禅板蒲団を以て黄檗に付し、拄杖払子を潙山に付す。潙山、後に仰山に付す。仰山、既に大いに三聖を肯う。聖、一日、辞し去る。仰山、拄杖払子を以て三聖に付せんとす。聖云く、「某甲は已に師有り」と。

仰山其の由を詰すに、乃ち臨済の的子なり。

一 臨済義玄(?—八七六)の門下。 二 意気の盛んなさま。 三 淮水の北(安徽省北部)から海州(江蘇省連雲港市西南)にかけての一帯。 四 雪峰義存(八二二—九〇八)。以下、第四九則・本則に見える。 五 寺の荘園。 六 本来具わっている知慧の喩え。 七 わびる言葉。 八 個室の方丈をいう。 九 司法担当の属官。 一〇 病僧を療養するところ。 一一 過ちを知って改めない者を断罪する語。 一二 百丈懐海(七四九—八一四)。 一三 黄檗希運(?—八五〇?)。 一四 潙山霊祐(七七一—八五三)。

只如仰山問三聖、汝名什麼、佗不可不知其名。何故更恁麼問。所以作家要験人得*知子細。只似等閑問云、汝名什麼。更道**無計較。何故三聖不云慧然、却道慧寂。看佗具眼漢、自然不同。三聖恁麼、又不是顚。一向攙旗奪鼓、意在仰山語外。此語不堕常情、難為摸索。這般漢手段、却活得人。所以道、佗参活句、不参死句。若順常情、則歇人不得。看佗古人念道如此、用尽精神、始能大悟。既悟

只だ仰山、三聖に「汝の名は什麼ぞ」と問うが如きは、佗其の名を知らざる可からず。何故ぞ更に恁麼に問う。作家、人を験しては子細を知るを得んと要するが所以なり。只だ等閑の似くに問うて云く、「汝の名は什麼ぞ」と。更に道うに計較無し。何故ぞ三聖は「慧然」と云わずして、却って「慧寂」と道う。看よ佗の具眼の漢、自然に同じからず。三聖恁麼なるは、又た是れ顚なるにあらず。一向に旗を攙り鼓を奪い、意は仰山の語の外に在り。此の語、常情に堕ちず、摸索を為し難し。這般る漢の手段、却って人を活得す。所以に道う、「佗活句に参じて死句に参ぜず」と。若

了用時、還同未悟時人相似。随分一言半句、不得落常情。三聖知佗仰山落処、便向佗道、我名慧寂。仰山要収三聖、三聖倒収仰山。仰山只得就身打劫道、慧寂是我。是放行処。三聖云、我名慧然、亦是放行。所以雪竇後面頌云、双収双放若為宗。只一句内、一時頌了。仰山呵呵大笑、也有権有実、也有照有用。為佗八面玲瓏、所以用処得大自在。這箇笑、与巌頭笑不同。巌頭笑有毒薬、這箇笑、千古万古、清風凛凛地。雪竇頌云、

し常情に順わば、則ち人を歇むるを得じ。看よ佗の古人は道を念うこと此の如く、精神を用い尽して、始めて能く大悟す。既に悟り了りて用うる時、還って未だ悟らざる時の人に同じきが相似し。分に随いて一言半句も常情に落つるを得ず。三聖は佗の仰山の落処を知り、便ち佗に向って道う、「我が名は慧寂」と。仰山は三聖を収まんと要し、三聖は倒に仰山を収む。仰山は只得だ身に就いて打劫して道く、「慧寂は是れ我」と。是れ放行の処なり。三聖云く、「我が名は慧然」とは、亦た是れ放行す。所以に雪竇後面に頌して云く、「双収し双放する若為の宗ぞ」と。只だ一句の内に、一時に頌し了る。仰山、呵呵大笑するは、也た権有り実有り、也た照有り用有り。佗の八面玲瓏たるが為に、所以に用処大自在を得たり。這箇の笑いは巌頭の笑いと同じからず。巌頭の笑いは毒薬有り、這箇の笑いは、千古万古、清風凛凛地なり。雪竇の頌に云く、

＊得知　福本に無し。　＊＊更道無計較　福本は「亦無道理計較」。この方が分り易い。

一 正しくは「作家所以……」とすべきところ。 二 正気でない。 三 自らを身ぐるみはぐ。 四 相手の機にまかせてやらせておくこと。 五 からりと透明で、澄みきった心境。

【頌】 双収双放若為宗、〔知他有幾人、八面玲瓏。将謂真箇有恁麼事。〕騎虎由来要絶功。〔若不是頂門上有眼、肘臂下有符、争得到這裏。騎則不妨、只恐你下不得。不是恁麼人、争明恁麼事。〕笑罷不知何処去、〔尽四百軍州覓恁麼人、也難得。言猶在耳。千古万古有清風。〕只応千古動悲風。〔如今在什麼処。咄。既是大笑、為什麼却動悲風。大地黒漫漫。〕

【頌】 双収し双放する若為の宗ぞ、〔幾人の八面玲瓏たる有るか知他らん。真箇に恁麼なる事有りと将謂いしに。〕虎に騎るは由来絶功なるを要す。〔若し是れ頂門上に眼有り肘臂下に符有るにあらずんば、争か這裏に到るを得ん。騎ることは則ち妨げず、只だ恐らくは你下り得ざらん。是れ恁麼なる人にあらずんば、争か恁麼なる事を明めん。〕笑い罷んで知らず何処にか去る、〔尽四百軍州に恁麼なる人を覓むるも也た得難し。言猶お耳に在り。千古万古、清風有り。〕只だ応に千古悲風を動かすのみなるべし。〔如今什麼処にか在る。咄。既是に大いに笑うに、為什麼にか却って悲風を動かす。大地黒漫漫。〕

一 慧寂と慧然とで互いに押さえこんだり、相手の出方にまかせたり。 二 ～とばかり思っていたが、そうではなかった。 三 仰山が臨済を「非但騎虎頭、亦解把虎尾」と評したことをふまえる。また、第一〇則・頌および第五四則・頌を参照。「絶功」は絶大の手腕。 四 第三五則の垂示に既出。 五 第

五四則・頌の「四百州」と同じく天下の意。　六 千年の後まで悲しげな風を起こし続けるだろう。

〔評唱〕　双収双放若為宗、放行互為賓主。仰山云、汝名什麼。聖云、我名慧寂。是双放。* 仰山云、慧寂是我。聖云、我名慧然。是双収。** 其実是互換之機、収則大家収、放則大家放。雪竇一時頌尽了也。佗意道、若不放収、若不互換、你是你、我是我。都来只四箇字、因甚却於裏頭出没巻舒。古人道、你若立、我便坐、你若坐、我便立。若也同坐同立、二倶瞎漢。此是双収双放、可以為宗要。騎虎由来要絶功、有如此之高風、最上之機要。要騎便騎、要下便下。拠虎頭亦得、収虎尾亦得。三聖・仰山、二倶有此之風。笑罷不知何処去。且道、

〔評唱〕「双収し双放する若為の宗ぞ」とは、放行して互いに賓主と為る。仰山云く、「汝の名は什麼ぞ」。聖云く、「我が名は慧寂」と。是れ双放なり。仰山云く、「慧寂は是れ我」。聖云く、「我が名は慧然」と。是れ双収なり。其の実は是れ互換の機、収むるときは則ち大家収め、放つときは則ち大家放つ。雪竇一時に頌し尽し了れり。佗の意に道く、「若し放収せず、若し互換せずんば、你は是れ你、我は是れ我ならん」と。都来只だ四箇の字、甚に因ってか却って裏頭に於て出没巻舒す。古人道く、「你若し立てば我便ち坐り、你若し坐らば我便ち立たん。若也同に坐り同に立たば、二り倶に瞎漢」と。此れは是れ双収双放、以て宗要と為すべし。「虎に騎るは由来絶功なるを要す」とは、此の如き高風、最上の機要有り。騎らんと要すれば便ち騎り、下りんと要すれば便ち下る。虎の頭に拠るも

佗笑箇什麼。直得清風凜凜。為什麼末後却道、只応千古動悲風。也是死而不弔、一時与你注解了也。争奈天下人啗[三]啄不入、不知落処。縦是山僧、也不知落処。諸人還知麼。

亦た得く、虎の尾を収むるも亦た得し。三聖・仰山、二り倶に此の風有り。「笑い罷んで知らず何処にか去る」。且道、佗は箇の什麼をか笑う。直得は清風凜凜たり。為什麼にか末後に却って道う、「只だ応に千古悲風を動かすのみなるべし」と。也た是れ死して弔まず、一時に你が与に注解し了れり。争奈せん天下の人啗啄すれども入らず、落処を知らず。縦い是れ山僧も、也た落処を知らず。諸人還た知るや。

＊放　福本は「収」。　＊＊収　福本は「放」。

一 第二四則・本則の評唱に「放則双放、収則双収」というのと同意。　二 首山省念(九二六—九九三)。

三 嘴を入れようとしても入らない。

第六九則　南泉拝忠国師

垂示云、無啗啄処祖師心印、状似鉄牛之機。透荆棘林衲僧家、如紅炉上一点雪。平地上七穿八穴則且止、不落夤縁、又作麼生。試挙看。

一 第三八則・本則を参照。 二 雲門禅師の語に「平地の上には死人無数。荊棘の林を過ぎ得たるもの是れ好手なり」と。 三 紅焔を上げる炉のほとりの一点の雪。なんの痕跡も残さないものの喩え。 四 「夤縁」は因縁と同じ。ここは、修行上の一切の他律的条件のこと。その枠組みから自由であること。

【本則】挙。南泉・帰宗・麻谷、同去礼拝忠国師。至中路、〔三人同行、必有我師。有什麼奇特。也要辨端的。〕南泉於地上画一円相云、道得即去。〔無風起浪。也要人知。擲却陸沈船。若不験過、争辨端的。〕帰宗於円相中坐。〔一人打鑼、同道方

第六九則　南泉、忠国師を拝す

垂示に云く、啗啄の処無き祖師の心印、鉄牛の機に状似たり。荊棘の林を透る衲僧家、紅炉上の一点の雪の如し。平地上に七穿八穴なることは則ち且て止き、夤縁に落ちざるは、又た作麼生。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。南泉・帰宗・麻谷、同に去きて忠国師を礼拝せんとす。中路に至り、〔三人同に行かば必ず我が師有り。什麼の奇特か有る。也た端的を辨ずるを要す。〕南泉、地上に一つの円相を画いて云く、「道い得ば即ち去かん」。〔風無きに浪を起す。也た人の知らんことを要す。陸沈の船を擲却ぐ。若し験過さずんば争か端的を辨ぜん。〕帰宗、円相の中に坐す。〔一人鑼

知。」麻谷便作女人拜。〔一人打鼓、三箇也得。」泉云、恁麼則不去也。〔半路抽身是好人。好一場曲調。作家作家。」帰宗云、是什麼心行。〔頼得識破。当時好与一掌。孟八郎漢。」

を打てば同道にして方めて知る。」麻谷、便ち女人拝を作す。〔一人鼓を打てば三箇也た得し。」泉云く、「恁麼ならば則ち去かじ」。〔半路にして身を抽くは是れ好人。好き一場の曲調。作家なり作家なり。」帰宗云く、「是れ什麼たる心行ぞ」。〔頼に識破するを得たり。当時好し一掌を与うるに。孟八郎漢。」

一 南泉普願(七四八—八三四)。 二 帰宗智常。 三 麻谷宝徹。 四 南陽慧忠(?—七七五)。 五『論語』述而の「三人行、必有我師焉」にもとづく。 六 わざわざ大仰なことをする、ということか。 七 跪かず立ったままでの拝礼。 八 途中で身を引くのは気立てのいい人だ。

〔評唱〕 当時馬祖盛化於江西、石頭道行於湖湘、忠国師道化於長安。他親見六祖来。是時南方擎頭帯角者、無有不欲升其堂入其室。若不爾、為人所恥。這老漢三箇、欲去礼拝忠国師。至中路、做這一場敗欠。南泉云、恁麼則不去也。既是一一道得、為什麼却道不去。且道、古人意作麼生。

〔評唱〕 当時馬祖は化を江西に盛んにし、石頭の道は湖湘に行われ、忠国師の道は長安を化す。他は親しく六祖に見え来たる。是の時南方に頭を擎げ角を帯ぶる者、其の堂に升り其の室に入らんと欲せざるもの有ること無し。若し爾らざれば人の恥かしむる所と為る。這の老漢三箇、去きて忠国師を礼拝せんと欲す。中路に至って、這の一場の敗欠を做す。南泉云く、「恁麼ならば則ち去かじ」と。既是に一一道い得たるに、

当時待他道、恁麼則不去也、劈耳便掌、看他作什麼伎倆。万古振綱宗[五]、只是這些子機要。

所以慈明道、要牽[六]只在索頭辺撥著。点著便転、如水上捺葫蘆子相似。人多喚作不相肯語。殊不知、此事到極則処、須離泥離水、[七]抜楔抽釘。你若作心行会、則没交渉。古人転変得好。到這裏、不得不恁麼、須是有殺有活。看他一人去円相中坐、一人作女人拝。也甚好。南泉云、恁麼則不去也。帰宗云、是什麼心行。孟八郎漢、又恁麼去也。他恁麼道、大意要験南泉。

一 馬祖道一（七〇九―七八八）。二 石頭希遷（七〇〇―七九〇）。三 六祖慧能（六三八―七一三）。四 頭にすっくと角が生えている。一人前の禅僧。五 根本の精神。

為什麼に却って道う、「去かじ」と。且道、古人の意作麼生。当時他の「恁麼ならば則ち去かじ」と道うを待ち、劈耳て便ち掌して、他が什麼なる伎倆を作すかを看ん。万古綱宗を振うは、只だ是れ這の些子の機要なり。

所以に慈明道く、「牽かんと要すれば只だ索頭辺に撥著す」と。点著けば便ち転じ、水上に葫蘆子を捺すが如くに相似たり。人多く喚んで相肯わざるの語と作す。殊に知らず、此の事極則の処に到れば、須ず泥を離れ水を離れ、楔を抜き釘を抽くを。你若し心行の会を作さば、則ち没交渉。古人、転変し得て好し。這裏に到っては恁麼ならざるを得ず、須是らく殺有り活有るべし。看よ他の一人は円相の中に坐し、一人は女人拝を作す。也た甚だ好し。南泉云く、「恁麼ならば則ち去かじ」。帰宗云く、「是れ什麼たる心行ぞ」と。孟

南泉尋常道、喚作如如[四]、早是変了也。南泉・帰宗・麻谷、却是[五]一家裏人、一擒一縦、一殺一活、不妨奇特。雪竇頌云、

八郎漢、又た恁麼にし去るや。他恁麼に道うは、大意南泉を験せんと要す。南泉尋常道う、「喚んで如如と作すも、早是に変じ了れり」と。南泉・帰宗・麻谷は却って是れ一家裏の人、一擒一縦、一殺一活、不妨に奇特たり。雪竇の頌に云く、

＊要牽只在索頭辺　福本は「牽牛只在鼻頭辺」。

一 石霜楚円(九八六—一〇三九)。二 牛を牽くには手綱を操ればよい。牧童歌に「回首看、平田濶、四方放去休攔遏。八面無拘任意遊、要収只在索頭撥」と。三 本来の眼の障りを取り除く。「抽釘抜楔」(第六則・本則の評唱)に同じ。四 真如。真理そのもの。五 同じ門下の人。

【頌】由基[一]箭射猿、〔当頭[二]一路、誰敢向前。触処得妙。未発先中。〕遶樹何太直。〔若不承当、争敢恁麼。東西南北一家風。[三]已周遮多時也。〕千箇与万箇、〔如麻似粟。野狐精一隊、争奈得南泉何。〕是誰曾中的。〔一箇半箇。更没一箇。一箇也用不得。〕相呼相喚帰去来、〔一隊弄泥団

【頌】由基、箭もて猿を射る、〔当頭の一路、誰か敢て向前わん。触処に妙を得たり。未だ発せざるに先ず中る。〕樹を遶ること何ぞ太だ直なる。〔若し承当せずんば争か敢て恁麼ならん。東西南北一家風。已に周遮しきこと多時。〕千箇と万箇と、〔麻の如く粟の似し。野狐精の一隊、南泉を争奈何し得ん。〕是れ誰か曾て的に中てたる。〔一箇半箇。更に一箇没し。一箇も也た用い得ず。〕相呼び相喚んで帰去来、〔一隊の泥団

漢、不如帰去好。却較些子。〕曹渓路上休登陟。〔太労生。想料不是曹渓門下客。低低処平之有餘、高高処観之不足。〕復云、曹渓路坦平、為什麼休登陟。〔不唯南泉半路抽身、雪竇亦乃半路抽身。好事不如無。雪竇也患這般病痛。〕

を弄する漢、如かじ帰り去るの好からんには。却って些子く較れり。〕曹渓の路上、登陟るを休めん。〔太だ労生。想い料るに是れ曹渓門下の客にあらず。低低の処は之を平ぐるも餘り有り、高高の処は之を観るも足らず。〕復た云く、「曹渓の路は坦平なるに為什麼にか登陟るを休むる」。〔唯だ南泉のみ半路にして身を抽くにあらず、雪竇も亦た乃ち半路にして身を抽く。好事は無きに如かず。雪竇も也た這般る病痛を患う。〕

一 楚の弓の名人、養由基。二 目の前に飛んで来る矢が一本。三 もう随分まわりくどいぞ。四「曹渓」は六祖慧能(六三八―七一三)の住持の地。五 なんともご苦労なこと。六 低い所は均してもくぼ地が残り、高い所は視野に入り切らない。七 平坦な道を歩む安易さがかえって命とりになるということを念頭においた問題提起。「曹渓路」は六祖慧能以来の禅の伝統。八 雲門の語。第八六則を見よ。

〔評唱〕由基箭射猿、遶樹何太直。由基乃是楚時人、姓養、名叔、字由基。時楚荘王出猟。見一白猿、使人射之。其猿捉箭而戯。勅群臣射之、

〔評唱〕「由基、箭もて猿を射る、樹を遶ること何ぞ太だ直なる」と。由基は乃ち是れ楚の時の人、姓は養、名は叔、字は由基。時に楚の荘王出でて猟す。一の白猿を見て、人をして之を射しむ。其の猿、箭を捉え

莫有中者。王遂問群臣。群臣奏曰、由基者善射。遂令射之。由基方彎弓、猿乃抱樹悲号。至箭発時、猿遶樹避之、其箭亦遶樹中殺。此乃神箭也。雪竇何故、却言太直。若是太直則不中。既是遶樹、何故却云太直。雪竇借其意、不妨用得好。此事出春秋[二]。有者道、遶樹是円相。若真箇如此、蓋不識語之宗旨、不知太直処。三箇老漢[三]、殊途而同帰[四]、一揆一斉太直。若是識得他去処、七縦八横、不離方寸、百川異流、同帰大海。所以南泉道、恁麼則不去也。

て戯る。群臣に勅して之を射しむるに、中つる者有ること莫し。王、遂に群臣に問う。群臣奏して曰く、「由基なる者、射を善くす」と。遂に之を射しむ。由基、方に弓を彎くに、猿乃ち樹を抱いて悲号ぶ。箭の発する時に至って、猿は樹を遶って之を避くるも、其の箭も亦た樹を遶って中り殺す。此れ乃ち神箭なり。雪竇何故ぞ却って言う「太だ直なり」と。若是太だ直ならば則ち中らじ。既是に樹を遶るに、何故ぞ却って云う「太だ直なり」と。雪竇其の意を借るに、不妨に用い得て好し。此の事は『春秋』に出づ。有る者は道う、「樹を遶るは是れ円相」と。若し真箇に此の如くならば、蓋し語の宗旨を識らず、太だ直なる処を知らず。三箇の老漢、途を殊にして帰を同じくし、一揆一斉く太だ直なり。若是他の去く処を識得せば、七縦八横にして方寸も離れず、百川流れを異にして同じく大海に帰す。所以に南泉道く、「恁麼ならば則ち去かじ」と。

一 在位、前六一三—前五九一。一説に共王（在位、前五九〇—前五六〇）とする。二 この故事は『呂

氏春秋』博志および『淮南子』説山に見える。ただし、箭が樹を遶って中るという話は無い。三『周易』繋辞下伝の「天下同帰而殊塗」による。四『孟子』離婁下の「先聖後聖、其揆一也」による。

若是衲僧正眼覷著、只是弄精魂。若喚作弄精魂、却不是弄精魂。五祖先師道、他三人是慧炬三昧、荘厳王三昧。雖然如此作女人拝、他終不作女人拝会。雖画円相、他終不作円相会。既不恁麼会、又作麼生会。雪竇道、千箇与万箇、是誰曾中的。能有幾箇百発百中。相呼相喚帰去来、頌南泉道恁麼則不去也。南泉従此不去。故云、曹渓路上休登陟。滅却荊棘林。雪竇把不定復云、曹渓路坦平、為什麼休登陟。曹渓路、絶塵絶迹、露裸裸、赤灑灑、平坦坦、翛然地。為什麼却休登陟。各自看脚下。

若是衲僧正眼に覷著れば、只だ是れ精魂を弄するのみ。若し喚んで精魂を弄すと作さば、却って是れ精魂を弄するにあらず。五祖先師道く、「他の三人は是れ慧炬三昧、荘厳王三昧」と。此の如く女人拝を作すと雖然も、他終に女人拝の会を作さず。円相を画くと雖も、他終に円相の会を作さず。既に恁麼に会せずんば、又た作麼生か会せん。雪竇道く、「千箇と万箇と、是れ誰か曾て的に中てたる」と。能く幾箇か百発百中するもの有る。「相呼び相喚んで帰去来」とは、南泉の「恁麼ならば則ち去かじ」と道うを頌す。南泉此より去かず。故に云く、「曹渓の路上登陟るを休む」と。荊棘の林を滅却す。雪竇把不定して復た云く、「曹渓の路は坦平なるに、為什麼にか登陟るを休むる」と。曹渓の路は塵を絶し迹を絶し、露裸裸赤灑灑、平坦坦翛然地なり。為什麼にか却って登陟るを休む。各自

に脚下を看よ。

＊滅却　福本は「却除」。

一 圜悟の師、五祖法演(?―一一〇四)。二「慧炬」は智慧のたいまつ。「荘厳王」は福徳や智慧によって飾られた王者。「三昧」は精神統一して得られた境地。『法華経』妙音菩薩品に見える。三 ここは、事上練磨の困難をいうか。四 きれいさっぱり。「浄躶躶赤洒洒」に同じ。五 ゆったりと、さっぱりと。

第七〇則　潙山侍立百丈

垂示云、快人一言、快馬一鞭。万年一念、一念万年。要知直截、未挙已前。且道、未挙已前、作麼生摸索。請挙看。

【本則】挙。潙山・五峰・雲巌、同侍立百丈。〔阿呵呵。終始諸訛。君向西秦、我之東魯。〕百丈問潙山、併却咽喉唇吻、作麼生道。〔一将難求。〕潙山云、却請和尚道。〔借路経過。〕丈云、我不辞向汝道、恐已後喪我児孫。〔不免老婆心切。面皮厚

第七〇則　潙山、百丈に侍立す

垂示に云く、快人は一言、快馬は一鞭。万年一念、一念万年。直截を知らんと要せば、未だ挙せざる已前。且て道え、未だ挙せざる已前、作麼生か摸索せん。請う挙し看ん。

一　第三八則の垂示に既出。二　一万年が一瞬に収まり、一瞬が一万年を包む。三　そのものずばり。端的。

【本則】挙す。潙山・五峰・雲巌、同に百丈に侍立す。〔阿呵呵。終始諸訛なり。君は西秦に向い、我は東魯に之く。〕百丈、潙山に問う、「咽喉と唇吻を併却いで、作麼生か道わん」。〔一将は求め難し。〕潙山云く、「却って請う、和尚道え」。〔路を借りて経過す。〕丈云く、「我は汝に道うを辞せざるも、已後我が児孫を喪わんことを恐る」。〔老婆心切なるを免れず。面の皮厚きこ

三寸。和泥合水、就身打劫。」

と三寸。泥に和し水に合し、身に就いて打劫す。」

＊之東魯　福本は「向秦」。

一 潙山霊祐(七七一―八五三)。 二 五峰常観。 三 雲巌曇晟(七八二―八四一)。 四 そばに立って控えている。 五 百丈懐海(七四九―八一四)。 六 笑い声。 七 君の行く道と我が行く道とは永久に相会うことはない。唐末の鄭谷の詩句「君向瀟湘我向秦」に基づく。 八 力量ある者は得がたい。 九 人が作ってくれた道に便乗する。 一〇 べとべとの泥まみれになる。

【評唱】潙山・五峰・雲巌、同侍立百丈。百丈問潙山、併却咽喉唇吻、作麼生道。山云、却請和尚道。丈云、＊我不辞向汝道、恐已後喪我児孫。百丈雖然如此、鍋子已被別人奪去了也。丈復問五峰。峰云、和尚也須併却。丈云、無人処斫額望汝。又問雲巌。巌云、和尚有也未。丈云、喪我児孫。三人各是一家。古人道、平地上死人無数、過得荊棘林者是好手。所以宗師家、以荊棘林験人。何故。若於常

【評唱】潙山・五峰・雲巌、同に百丈に侍立す。百丈、潙山に問う、「咽喉と唇吻を併却いで、作麼生か道わん」。山云く、「却って請う和尚道え」。丈云く、「我は汝に道うを辞せざるも、已後我が児孫を喪わんことを恐る」と。百丈此の如くなりと雖然も、鍋子は已に別人に奪い去らる。丈、復た五峰に問う。峰云く、「和尚也た須らく併却ぐべし」。丈云く、「人無き処に斫額して汝を望まん」。又た雲巌に問う。巌云く、「和尚有り也未」。丈云く、「我が児孫を喪わん」と。三人各是れ一家。古人道く、「平地上に死人無数、荊棘の林を過得る者は是れ好手」と。所以に宗師家は荊棘の林

情句下、験人不得。衲僧家須是句裏呈機、言中辨的。若是担板漢、多向句中死却、便道、併却咽喉唇吻、更無下口処。若是変通底人、有逆水之波、只向問頭上有一条路、不傷鋒犯手。潙山云、却請和尚道。且道、他意作麼生。向箇裏如撃石火、似閃電光相似。拶他問処便答、自有出身之路、不費繊毫気力。所以道、他参活句、不参死句。百丈却不采他、只云、不辞向汝道、恐已後喪我児孫。大凡宗師為人、抽釘抜楔。若是如今人、便道、此答不肯他不領話。殊不知、箇裏一路生機処、壁立千仞、賓主互換、活鱍鱍地。雪竇愛他此語風措宛転自在、又能把定封疆。所以頌云、

を以て人を験す。何故ぞ。若し常情の句下に於てせば、人を験することを得ざればなり。衲僧家は須是らく句裏に機を呈し、言中に的を辨ずべし。若是担板漢ならば、多く句中に死却して、便ち道わん、「咽喉と唇吻を併却がば、更に口を下す処無し」と。若是変通底の人ならば、逆水の波有って、只だ問頭の上に一条の路を有け、鋒に傷つき手を犯すということなし。潙山云く、「却って請う和尚道え」と。且道、他の意作麼生。箇裏に向いて撃石火の如く、閃電光の似くに相似たり。他の問処を拶いて便ち答うるは、自ずから出身の路有って、繊毫の気力も費さず。所以に道う、「他活句に参じて死句に参ぜず」と。百丈却って他に采わず、只だ云う、「汝に道うを辞せざるも、已後我が児孫を喪わんことを恐る」と。大凡そ宗師の人に為うるは、釘を抽き楔を抜く。若是如今の人ならば、便ち道わん、「此の答は他が話を領せざるを肯めざるなり」と。殊に知らず、箇裏の一路生機の処は壁立千仞、賓主互換

して活鱍鱍地なることを。雪竇は他の此の語の風措の宛転自在にして、又た能く封疆を把定するを愛ず。所以に頌して云く、

＊丈云～百丈〔一七字〕　福本に無し。

一 日常不可欠なもの。二 手で額を斫るようにして遠望するしぐさ。三 雲門文偃（八六四―九四九）。語は第四一則・本則の評唱に既出。四 板をかついだ男。自分が作った枠に左右される。五 臨機応変の対処ができる人物。六 常識や教条を逆転させる機鋒の喩え。七 百丈の答えは、潙山が理解できなかったことを肯じなかったのだ。八 生命力に満ちたところ。九 第三六則・本則の評唱に既出。一〇 自分の世界をしかと守る。第四九則・本則の評唱に既出。

【頌】　却請和尚道。〔函蓋乾坤。已是傷鋒犯手。〕虎頭生角出荒草。〔可煞驚群。不妨奇特。〕十洲春尽花凋残、〔触処清涼。讃歎也不及。〕珊瑚樹林日杲杲。〔千重百匝。争奈百草頭上尋他不得。答処蓋天蓋地。〕

【頌】　却って請う、和尚道え。〔函蓋乾坤。已是に鋒に傷つき手を犯す。〕虎頭に角を生じて荒草を出づ。〔可煞だ群を驚かす。不妨に奇特たり。〕十洲春尽きて花凋残み、〔触る処清涼。讃歎するに也た及ばず。〕珊瑚樹林に日は杲杲たり。〔千重百匝。争奈せん百草頭上に他を尋ね得ず。答処、天を蓋い地を蓋う。〕

一 天地をすっぽりとおおう。雲門三句の一。二 潙山の出方をほめる。三 海中の仙境。評唱を参照。四 太陽が白く輝くさま。五 珊瑚が千重百重にとり巻いている。

【評唱】此三人答処、各各不同。也有壁立千仞、也有照用同時、也有自救不了。却請和尚道、雪竇便向此一句中呈機了也。更就中軽軽撥、令人易見云、虎頭生角出荒草。潙山答処、一似猛虎頭上安角。有什麼近傍処。不見僧問羅山、同生不同死時如何。山云、如牛無角。僧云、同生亦同死時如何。山云、如虎戴角。雪竇只一句頌了也。佗有転変餘才、更云、十洲春尽花凋残。海上有三山十洲、以百年為一春。雪竇語帯風措宛転盤礴。春尽之際、百千万株花一時凋残、独有珊瑚樹林、不解凋落、与太陽相奪其光交映。正当恁麼時、不妨奇特。雪竇用此、明佗却請和尚道。

【評唱】此の三人の答処、各各同じからず。也た壁立千仞なる有り、也た照用同時なる有り、也た自らを救い了れざる有り。「却って請う。和尚道え」とは、雪竇便ち此の一句の中に機を呈し了れり。更に就中軽軽と撥み、人をして見易からしめて云く、「虎頭に角を生じて荒草を出づ」と。潙山の答処、一に猛虎の頭上に角を安くが似し。什麼の近傍る処か有らん。見ずや僧、羅山に問う、「同生不同死の時如何」。山云く、「牛の角無きが如し」。僧云く、「同生亦た同死の時如何」。山云く、「虎の角を戴くが如し」と。雪竇は只だ一句もて頌し了れり。佗は転変の餘才有って、更に云う「十洲春尽きて花凋残む」と。海上に三山十洲有り、百年を以て一春と為す。雪竇の語、風措を帯びて宛転盤礴す。春尽くるの際、百千万株の花一時に凋残むも、独り珊瑚樹林のみ解く凋落まず、太陽と其の光を相奪って交ごも映ゆる有り。正当恁麼なる時、不妨に奇特なり。雪竇此れを用いて、佗の「却って請う、和尚道

十洲、皆海外諸国之所附。一祖洲、出反魂香。[五] 二瀛洲、生芝草・玉石、[六] 泉如酒味。三玄洲、出仙薬、服之長生。四長洲、出木瓜・玉英。[七] 五炎洲、出火浣布。[八] 六元洲、出霊泉如蜜。七生洲、有山川、無寒暑。八鳳麟洲、人取鳳喙麟角、煎続弦膠。[九] 九聚窟洲、出獅子銅頭鉄額之獣。十檀洲〈一作流洲〉、出琨吾石、[一〇] 作剣切玉如泥。

珊瑚、外国雑伝云、[一一] 大秦西南漲海[一二][一三] 中、可七八百里、到珊瑚洲。洲底盤石、珊瑚生其石上。人以鉄網取之。又十洲記云、[一四] 珊瑚生南海底。如樹高三二尺、有枝無皮、似玉而紅潤、感月而生、凡枝頭皆有月暈。〈此一則、

え」というを明す。

十洲は皆な海外諸国の附する所なり。一は祖洲、反魂香を出だす。二は瀛洲、芝草・玉石、泉の酒の如き味なるを生ず。三は玄洲、仙薬を出だし、之を服すれば長生す。四は長洲、木瓜・玉英を出だす。五は炎洲、火浣布を出だす。六は元洲、霊泉の蜜の如くなるを出だす。七は生洲、山川有って寒暑無し。八は鳳麟洲、人、鳳の喙と麟の角を取って、続弦膠を煎ず。九は聚窟洲、獅子、銅頭鉄額の獣を出だす。十は檀洲〈一に「流洲」に作る〉、琨吾石を出だし、剣を作れば玉を切るに泥の如し。

珊瑚は外国雑伝に云く、「大秦の西南、漲海の中、七八百里可りにして、珊瑚洲に到る。洲底に盤石あり、珊瑚は其の石の上に生ず。人、鉄の網を以て之を取る」と。又た『十洲記』に云く、「珊瑚は南海の底に生ず。樹の如くにして高さ三二尺、枝有りて皮無く、玉に似て紅く潤み、月に感じて生じ、凡そ枝頭に皆な

与[一五]八巻首公案同看。〉

月暈(つきがさ)有り」と。〈此の一則は八巻の首(はじめ)の公案と同(あわ)せ看よ。〉

一 羅山道閑。 二 三つの仙山。蓬萊・方丈・瀛洲。 三 仙人の住む十の島。 四 のびやかに繰り広がる。 五 香料の名。これを焚けば死んだ人の霊魂を呼びもどすという。返魂香とも。 六 ひじりだけ。霊芝。 七 食べれば不老長寿になるという玉の花びら。一説に、宝玉。 八 火に燃えない布。 九 弦をつなげるにかわ。 一〇「琨吾」は昆吾で、美玉の名。 一一 未詳。 一二 古くはローマ帝国を指すが、南北朝時代にはほとんど空想の国となった。 一三 南海の別称。 一四 東方朔の撰とされる『海内十洲記』には、以下の文は見えない。なお、『漢書』五七上・司馬相如伝の注に引く郭璞に「珊瑚生水底石辺、大者樹高三尺餘、枝格交錯無有葉」と。 一五 第七一則・第七二則と本則とは一連のもの。

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第七

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第七

碧巌録(へきがんろく)（中）〔全3冊〕

1994年5月16日　第1刷発行
2000年5月8日　第5刷発行

訳注者　入矢義高(いりやよしたか)　溝口雄三(みぞぐちゆうぞう)
末木文美士(すえきふみひこ)　伊藤文生(いとうふみお)

発行者　大塚信一

発行所　株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電　話　案内 03-5210-4000　営業部 03-5210-4111
文庫編集部 03-5210-4051

印刷・理想社　カバー・精興社　製本・中永製本

ISBN4-00-333112-5　　Printed in Japan